
女神の憂鬱

灯星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

女神の憂鬱

【Nコード】

N4408M

【作者名】

灯星

【あらすじ】

橘風香、三十路の誕生日に帰宅するとありえないことに部屋にブラックホールが現れた。逃げるものの捕まって気がつけば森林の中。なんとか人を見つけるといきなり大きな神殿の中に連れられて男性に記憶を消されそうになる。え？私が女神？どんどん恋愛して子供産め？そこは異世界の神の国だった。日本人としての記憶を残したまま女神としてまったり過ごしています。神として恋愛も動き出しました。

1 はじまり（前書き）

はじめまして、灯星と書いてあかりです。初めての小説なので読みづらいたところもあると思います。

誤字など見つけましたらぜひ教えてください。一応R15にしています。がそういうのがでるのはたぶんわずかですw

1．はじまり

なぜこんなことになっているのだろうか？

そりゃあ、学生時代はそういう小説を見まくったよ。

主人公になってみたいなあって思ったさ。

でもね。あくまでも昔であって今は超現実社会に揉まれて、長い社会人生活を送っているんだよ。

周りが三十路を目前に結婚ラッシュが起こり寿貧乏になりましたよ。

で、自分自身は結局今日でとうとう30台の大台にのっちゃいましたよ。

そんな私がなんで、こんな山奥で人里探して彷徨わないといけないんだ！

それになんてか着ていた服が胸のあたりだけぴちぴちになっている。張りすぎて服のボタンがはじけそうだ。

いきなりふとってしまったのか???

と、言っても鏡もないので自分がどうなっているのか見ることもできない。

それでもこんなに胸がでかくなかったはず。もともとあるほうではあったけどこんなブラジャーからはみ出しているスイカみたいな形ではなかった。

暗くて見えないが、髪の毛もなぜか伸びている。肩にかかる程度しかなかったのに腰あたりまであって重いし邪魔だ。切ってしま

たい。

夢としか思えない状態であるが周りに生えている樹木に引つかかった足のかすり傷の痛みが現実を物語っている。

靴でなくスリッパしかはいていないので足はどろどろだし、傷だらけだ。

「やっぱりこれは現実なのよね？このまま私、野垂れ死にするしかないのぉ・・・???それとも獣に襲われるのぉ・・・？」

日本の現代社会でこんな死に方する人は、私しかないのではないだろうか。体力的にはだいふ限界値に近づいてきていたが、あきらめることが死に直結するのでわからないなりに滝の音がする方向に足をすすめる。

滝があるということは水分補給ができるはず。そしたら人間に出会うことができるかもしれない。それにここで彷徨ってから2回暗くなったところなので、飲まず食わずで2日経ってしまったと考えられる。さすがにのどが渴きすぎて声がかがら声になっている。明るくなつて長くなつた髪が黒から白髪になつてしまっていることに気が付き、ショックでそうなったのだと思った。だが、それを悲観しているばあいではない。生命の危機にあるわけだから・・・。

そもそもなんでこんな状態になつてしまったのだろうか。

いまの現実逃避もかねて 2日前のことを考えてみた。

「たっただいま」

夜の10時。だれもいない部屋であつてもつい言つてしまつこの

言葉。

仕事もサービス残業当たり前の状態なのでいつもこの時間に帰宅となる。でも、今日は大好きな金曜日。そう。明日と明後日は休みだ。

と、言っても彼氏もない自分にとって一日は趣味の弓道場通いところ寝、一日は掃除と買い物になるのが毎週の週末。

「ご飯も桐生さんにおごってもらったし後お風呂入ってゆっくりやすんじゃあー」

桐生さんとは上司。4つ年上の男性だがお互い恋愛感情もなく相手もないので、たまに夕飯を相伴させていただいている。二人のときもあれば数人のときもある。

「あれ？」

そんなとき、だれもないはずなのにかすかに物音がしてその方を振り返る。

「えー！なんなの？」

そこにはありえない空間があった。

ブラックホールと言う名が一番ふさわしいだろうか？ゴゴゴゴ・と渦を巻いている。大きさは32型のテレビぐらいだろうか？それがゆっくりだがこちらに近づいてくる。
・・・・・。

逃げよう。

10代であれば探究心からそれに手を出してみるかもしれないが、

こっちは30代の大台にのったばかりのリアリスト。そんなこわいものからは逃げるのみ。

とは、言ってもここは自分の家の部屋。逃げる場所といえば玄関しかない。

財布の入ったかばんをすばやく持ち、玄関に向かうためにその渦に背を向ける。

その瞬間。

渦は一気に巨大になって襲ってくる。

「む・・・むり！逃げられない！でもいやだあ~~~~」

叫びはむなしく、彼女はブラックホールに飲み込まれていった。残されたのは散らばった彼女のかばんとその中身だけだった。

2・人、発見

で、そのまま2日間さまよい続けています。
それでも滝の音にすこし気持ちが浮上する。

水が飲める！こんな田舎ならきれいなはず。 水！水！水！

どんどん近くなる滝の音。

おそらくこの茂みの先だ。

生い茂る草木を払いのけて前に進んだ瞬間、思わず息を飲んだ。

なんてうつくしい景色だ。

樹木や苔や石の間から何本もの白い降り注ぐ水。そこに小さな虹が架かっている。

昔に旅行した白糸の滝を思い出す。

とりあえず飲もう。

なんとか滝に近づきがむしゃらに水をすくって飲む。

ふう。なんとか一息つけた。

と、波紋の落ち着いてきた水面に何気なく顔を近づける。

「えー！」

そこに映された顔は見慣れた自分の顔のはずなのに、どうみても見違える色彩をしていた。

両方の眼とも黒だったはずなのに右は金色で、左は薄い紫色。いくら水面で見えにくくても明らかに違っている。それに先のほうが

白髪になったのはわかっていたが、頭皮からも混じり気のない真っ白になっている。

一連のショックですべて白髪になってしまったのか・・・。
よくみると自分の顔も違う感じがする。

「こんなにまつげ長くなかったし、たれ眼でもなかったし、唇もふっくらしたような・・・」

元の造りはそのままだが、かなり整形したような感じだ。
もともと整った顔立ちだと言われたこともあったが地味な印象がつよいはずなのに、この顔立ちはどう考えても派手になっているし、かなり美女になっている。

「つていうより美少女？」

どうみても10代にしかみえない顔立ち。それなりにしみが出てきてあせていたのが嘘のように、しみやしわひとつないような肌になっている。

顔だけではない。

水面からでもありえないほど豊かな胸が見える。

「なんで？ここはどこなの？」

水面を両手で叩き水しぶきをあげる。

これ以上水面に移る自分の顔を見なくなかった。触れる水の冷たさが夢でなく現実だと物語っている。それでも信じたくない。

と、そのとき。いきなり声が聞こえてきた。

「君はだれ？」

それは滝の中から聞こえてきたのだ。
修行僧が行水修行でもしていたのか???と人だ。ようやく人に会えた。

「うれしいよお・・・人だあ・・・」

これでこの山奥から出れる。

しかし、次の瞬間思いもよらないことが起こった。

「僕は質問しているんだけど？君はだれ？なんで僕の領域にいるの？」
「！」

あまりにも近い声にびつくりして思わず息を飲み込む。

そりゃあだれでも驚くだろう。目の前にいきなり人の顔があるのだ。手のひらひとつ分ぐらいしか距離はない。

青年と少年の間ぐらいの男性の顔。

透明がかった水色の長い髪をいくくりにしぼっている。すこしたれ眼がちな眼は青色をしている。派手な色彩だ。

かなり整っている顔立ちだが今はそんなことより、日本人ではないことに落胆を隠せない。

「えーと。すみません。ここがどこなのかもわからないのです・・・。
。なんでここににいるのかも・・・」

目の前の彼は興味深そうにこちらを上から下まで観察する。

「もしかして、生まれたところ？その気配はどうみても女神っぽいけど・・・。でもそれならなんでそんなに汚れているんだ？」

何一つわからないことを彼はぶつぶつ言っている。こちらに話しかけている感じはまったくない。

「とりあえず、レイヤのところに連れて行けばいいか？えっと、君ちよつとこつちおいで？」

んー。さっぱりわからないけど、とりあえずここから連れ出してもらえるみたいだ。餓死と獣の食料になることだけは免れたようだ。手を差し出されたので、それに自分の手を添えると一気に引っ張られて、身体ごと抱きかかえられることになる。

「えー！」

羞恥心を覚える前に周りの景色が一瞬にてぼやけて、気がつけばどこかの建物の中にいた。

テレポートだ。ドラクエで言えばルーラだ。

やはりここは異次元なのか、異世界なのか……。

いやだぁ……。寝たら日本っておちにして。

疲れた身体のまま瞬間テレポートしたせいか、体力に限界がきてだんだん視界が暗くなってきた。よく考えたらここにきてからほとんど睡眠とってなかった。

3・美形兄ちゃん

真っ白い天井。明るい日差し。

・・・・・・ここは病院？？

私はものすごく低血圧だ。実家にいたときは弟にぶつぶついわれつつ、よく起こされたものだ。10分ぐらいぼーとしていると、勝手に「しゃあねえなあ」って布団をたたんでくれたものだ。

っと、動かない思考回路のかわりに首を振ってあたりを見渡す。病院にしては広すぎる。20畳ぐらいはありそうだ。ベッドに机にチェストに白で統一される。よく見ると優雅なデザインの彫刻が施され品格の漂うお部屋を演出していた。

そもそも自分が寝ているベッドも2、3人は寝れそうな大きさでおそらくキングかクイーンサイズだ。

・・・・・・ここはどこ？

なんでこの場所にいるのか寝ぼけた状態の頭をなんとか動かして気絶する前の状態を思い出す。

「あー。連れてこられてそのまま倒れちゃったんだ・・・・。ってかやっぱり夢おちでないのね」

感覚的におそらくそうではないだろうなと思っていたけど、心のどこかで期待していただけに落ち込む。しかし、やはりまだ現実味ないだけに涙はでない。それよりもようやく身の危険から回避できた安堵感のほうに勝っていた

とりあえずベッドの中から立つ。

「あれ？なに？この服」

服装がかわっていた。ぱつっんぱつっんになってたシャツとスーツのスカートだったのに、真っ白いワンピースになっている。

正直だれが着替えさせたんだか気になるが、こんな高級そうなベツドに寝かすのに2日も森林の中をさまよい続けた泥と汗でどろどろの服ではシャツがかわいそうだ。女性がかえてくれたと信じよう。

「ん？あれ？傷がない・・・」

服の丈などをみていて、自分の足がつるつるで傷どころか古傷やしミ、毛までなくなっている。

まるで高級な永久脱毛してエステで磨き上げたような足。

ますますこの世界が現実味なくなってきた。本当に夢でないのかなあ。

いろいろ考えていても結論がでないので情報収集をしに部屋をでようとノブに手をかける。

「よし。だれか捕まえて話を聞こう。とりあえず連れてきてくれた青くんを探すか」

初めて会うことの出来た18ぐらいの少年を色彩からとりあえず青くんと呼ぶ。名前を聞く暇もなかった。ジャニーズにいいそうなくらい顔整っていたな。やさしそうな少年だったから悪いようにはしないでくれるだろう。

するならすくなくてもこの部屋でなく牢屋とかに入れられるだろう。なにより言葉が通じてよかった。

「青くんってだれですか？」

「!」

なんでこの世界の人は思いもよらない声かけをするのだ。部屋の外にもでてないのにさっき部屋を見渡したときだれもいなかったのになぜ部屋の中から声がするのだ。

つばを飲み込みながら後ろを振り返ると、青年が自分の真後ろに立っていた。黒髪に黒い眼。日本人の色彩なのに顔立ちはどう見ても日本人ではない。ギリシャの彫刻のように計算された顔立ち。さっきの青の少年も美形だと思ったがそれをはるかに超える造詣をしていた。

肩まである長髪をしていたがよく似合っている。

「えっと……。つれてきてくれた青い髪と眼をしてくれた少年です。勝手にそう呼んでみただけですけど……」

そう言った瞬間、彼は意表をつかれたのか眼をすこし大きくしたあとこらえ切れないという肩をゆらしながら噴出している。

「クツクツク。会ったばかりであのエダにあだ名をつけるとは……」

「

「だって名前も知らないし……。とりあえずつけただけです……」

そんなに笑われると恥ずかしくなってしまう。心の中であだ名をつけてしまうのは私のくせだ。そうしたほうが覚えやすいのでだれにたいしてもつけてしまう。

しかし、この美形の兄ちゃんはどうやってこの部屋に入ってきたのだろう。あ、そうだ。別に青くんでなくてもいいのだ。とりあえず情報収集しないと。

「あの……。それよりここってどこなのか教えていただけません

か？あ、その前に私は橘風香といいます」

やはり先に名乗っておくのが日本人としての礼儀だろう。しかし、それに彼はありえないほど吃驚した。

「え？タチバカフウカ？」

「あ、私個人は風香といいます。どうされました？」

そんなに変わった名前だろうか？それとも知り合いにいるのか？こちらの世界ではありえないか。

「それ以前になぜ名前があるんですか？もうすでにレイヤにいました？」

「レイヤってだれですか？」

会話が成り立っていない。そんなに驚くことなのか？名前があるのが当然だと思いますが……。

「ちよつと失礼」

彼はすつと私の頭に手をのせる。何をしているのかわからないけど、彼の暖かい体温を感じてじつとしておいた。いやってほどのことではないし、ちよつとなでなでされている感じでもちがいい。

「フウカ？あなたは日本と言う国で30年間生きてきたのですね？で、いきなりこちらに連れられてきた。違いますか？」

おお。テレポートの次はテレパシーか。すごいサイコな国だなあ。

「はい、そうです」

説明が省けた。ありがたいけど、やはり恥ずかしい。私のへんな過去まで見られていたらいやだなあ。小学校の身体測定のときのトラウマとか・・・。

そんなことを考えているのも聞こえたのかいいタイミングで彼は頭からすつと手を退けた。

「とりあえずレイヤのと言ってから説明しますよ」

なるほど。説明はそのレイヤって人でないとだめなのかな？何度もでてきた名前なのでさすがに覚える。というよりその名前しかほとんど出てないけど。と、目の前の美形の兄ちゃんの名前も聞いてないことを思い出す。

このままだと美形兄ちゃんがあだ名になってしまふ。これまた、いいタイミングで彼は名を教えてくれた。

「ちなみに私の名前はゼノン。よろしくね」

美形兄ちゃんもといゼノンはにつこりとこちらに笑みを浮かべながら手招きする。さすがに美形の微笑みだけに破壊力抜群だ。三十路の女にも効果絶大。紅くなりながらもごまかすように顔をさわりながら彼について部屋を出た。

3・美形兄ちゃん（後書き）

ようやく、主人公の名前が出てきました。

ちなみに小学校の身体測定の際のトラウマは作者のトラウマです。

4・双子の最古神

ゼノンに連れられて、歩くことすぐ。

気がつけば数人の男性に囲まれて、動物園の動物のように上から下まで見られています。なんでだ！。

誰一人、いやらしい目つきもなくただ可愛いペットをみるような穏やかな視線なので、そこまдейやな気分にはなりません、この状態にはちよつと困惑してしまいます。ゼノンは隣で彼らの反応を楽しんでいるご様子。

お兄さん、たすけてくださいな。

しかし、救いはゼノンではなかった。

「おまえたち。彼女は生まれたばかりなんだから、あまり大人数で近寄るんじゃないよ。とりあえず、ゼノンとエダと俺で話してからにしないさ」

救いの声が聞こえてそちらのほうを振り向くと、私はその姿にあつと驚く。

ゼノンさん、双子なんだ。

そこには先ほどまで見ていた、隣で笑っているゼノンとまったく同じ造りをした男性がいた。いや、色彩がちがう。黒髪黒目のゼノンと正反対で金髪金目の彼。それに肩まで届く長髪のゼノンに対して彼は短髪だ。

「迎えにわざわざきたのですか、レイヤ」

隣でゼノンがそう言う間に回りに取り囲んでいた男性たちは消えていた。不思議だ。なんで一瞬で消えたり現れたりするんだろ。

「そういうゼノンこそいきなり部屋から瞬間移動して、彼女のところにいったではないか。というか、なんでさっきのやつらに見世物にしているんだ？」

うん。それは言うてください。やはり嫌がらせですか？

「いや。ちょっとだけ優越感が……。散らそうとしたときにお前が来たんですよ」

やはり見世物だったのか。まあいいけど……。やめてもらうつもりはあったらしいし。

「じゃあ、とりあえずエダの部屋に行くか。あいつが拾ってきたんだから説明も聞かないと納得しないだろう」

レイヤと呼ばれた金髪兄ちゃんは話題を切り上げてこちらを見てきた。色が変わっても美形は美形だ。こんな人が日本にいたらみんな振り返るだろうなあ。

「フウカ。青くんのところに行きましょう」

ゼノンがすこし笑いながら手を差し出してくる。

エダって青くんのことが。そうだ。はやく事情を知りたい。帰れるなら帰りたい。

「青くん？それにフウカって・・・」

レイヤは怪訝な表情でゼノンをみる。

「事情はあっちでね」

そういうとふたたび手を合わせていた私の腕をひっぱって身体を密着してきた。

と、同時に周りの景色が一転する。今度は青に統一された部屋だった。

部屋のいすに腰掛けながら書類をみていた少年がこちらを振り返る。

青くんこと、エダだ。

「ゼノン！レイヤまで。ああ、彼女をつれてきたのか・・・。僕が連れて行こうと思っていたのに・・・」

すこし、くやしそうにしながらこちらに近寄ってくる。

「きみ、もう大丈夫？いきなり倒れるからびっくりしたよ」

長身のふたりには眼もくれずに、こっちを覗き込むようにみなが話かけてきた。

「すみません。いろいろ迷惑かけちゃって」

心配かけてしまったようだ。申し訳ない。

「いやいや。いいんだよ。生まれたばかりだもんね」

「え？生まれた??？」

彼の言葉に頭の中でクエッションマークが踊る。生まれたのは30年前だ。そういえばさつきレイヤって人も生まれたと言ってたか……。

「いや。彼女は日本って国で生まれて30歳ですよ。すくなくとも今はね」

ゼノンがさつき私の頭から知りえた情報を出す。それにはエダだけでなくレイヤまで面食らったような表情をする。

「そういえば、フウカって呼んでいたな。どういうことだ？」

「さつき頭の中を見たんですけど、人としての記憶があるみたいなんですよね。魂に刻まれたまま生まれてきた感じです」

ゼノンがそういうと二人はますます怪訝そうにこちらを見る。

「どういうこと？なんかおかしいの？？」

「それは、たいへんだな。よし、記憶を消してやろう。そっちのほうがすごしやすいだろうしな」

レイヤはポンと手を叩いてこちらにますます近寄ってくる。

記憶を消す？

「どういうことかはつきりわからないけどこのままでは最高にまじい気がする。記憶喪失にされちゃう。」

「いや！！ぜったいやだ！！」

少しでもレイヤから離れるように隣にいたゼノンの背中に隠れる。

「こわくないよ。ゼロからはじめたほうが女神としてやりやすいはずなのだから」

まったく言っている意味わからないけど、冗談じゃあない。風香としての人生人格を消されてたまるものですか。私は私よ。

「まで、レイヤ。フウカが嫌がつているのを強制はできないでしょう。とりあえず、説明してからにしましょ」

そうだ！説明もなしにそちらの都合で消されてやるものですか。

「っ。そうだな。フウカっていうのか？ここがどこかわかるか？自分自身のことは？」

頭を大きく振る。それがわからないからここに着たんだ。

「難しく言ってもわからないだろうから簡潔に言えば、ここは神の国だ。といってもまだできたただけだな」

神の国。日本で言えば八百万の神さま。ギリシャ神話でいえばゼウス神。中国で言えば西王母とか？

まあここは地球でもないようだし、そもそも宇宙ですらないのかも。

ってなんで私がそんなところにいるんだろう……。

「で、一応俺とゼノンが最古の神で、所属は光と闇だ。ちなみにエダは水」

おっと、めっちゃ人間くさい方々なのに神なんだ。どうりで美形だ。と現実逃避を図る。だってこれを現実だとだれが受け止めれるんだ。すくなくとも私には無理。

「さらにお前も女神だな。精霊や妖精にしては気が大きすぎるし、おそらく癒しの女神っぽいが……。人間の記憶がなんで残っているせいで、力がごちゃごちゃになっている。だから気が不安定になっっているんだよ」

さすが最古の神。わかりやすい説明だ。だから記憶を消しちゃえば安定するだろうってことね。

でも、理解は出来ても納得は出来ない。

だって自分を消されるのだよ。消されて日本に帰れるならいいけど、そんなご都合なことはないだろう。が、とりあえず聞いてみた。

「じゃあ橘風香の人格は日本に帰してくれるのですか？」

神ならやってみてよって挑戦的に聞く。いい加減、むかついてきた。

「あ、それは無理です。ここまで同化してるのだから消すと言っても眠らせる程度ですね」

ゼノンが飄々を述べる。やはり、無理か。

ゼノンが言うのをレイヤが舌打ちをしながらこっちを見る。

なんぼその美形スマイルで見てもこれだけは譲れません。

「あーあ。消しちゃったほうが君も楽なのに。まあつらくなったら言えよ。ぱぱっと消してやるから。名前は普通俺かゼノンが決める

けどそのままフウカでいいだろう」

いっこうにあきらめない私の表情をみて、折れたのはレイヤのほうだった。はあっとため息をつきながらそう言う。

「ありがとうございます！」

心からの笑みでレイヤに礼を言う。そうすると、なぜか顔を背けながら早口で吐き捨てる。

「そのかわり、気の安定の練習をすること。そのままだと、やばいから」

なにがやばいかわからないけど、なんとか助かったらしい。

「あー。くわしい話はあとでな。俺かゼノンかエダから徐々に聞く事。しばらくはこのさつき寝てた部屋を使ったらいいから。精霊を数人つけとくから、そいつらからも常識とかをきけがいい」

精霊までいるのか。よくわからないけど、とりあえずしばらくここで生活することになりそうだ。

4・双子の最古神（後書き）

エダくん、ほとんどしゃべっていません。人数多いとしゃべらせるの難しいですね。

次はエダくんと話すことにしましょう。

あ、作者も関西人なのでフウカも関西人です。よろしく。

5・恋愛、子供、大歓迎

「レイヤにゼノン。もうあっちにいかなくていいの？ 奴さんたち探しまくってない？」

おおまかな説明をレイヤがし終わると、いままで黙っていたエダが長身の二人に向かって話しかけている。

二人は顔を見合わせて仕方ないと思っていると、私でもわかるようなしぐさでため息をつく。双子だから息びったりだ。

「じゃあ、名残惜しいですが、我々は業務に戻ってフウカは青くんに任せるとしますか」

ゼノンがレイヤに向かってそう言う。あ、またゼノン青くんと言った。それも本人の目の前で。この人いじめっ子だ。

「青くん？もしかしてエダのことか？」

「え？なんで僕が青くんなの？」

ふたりそろって、ゼノンに質問する。

「ご・ごめんなさい。私が名前知らなくてつい青くんって言ったから……。きれいな青色の髪と眼をしてるからで……。悪気あったわけではないの……」

なんとか弁解しようとするが、恥ずかしくなって下を見ながらぼそぼそとしゃべってしまう。

だって本人に言うのはさすがに恥ずかしい。

「あ、フウカが付けてくれたんだ。べつにいいよ。それより僕の色彩を褒めてくれてありがとう」

零れ落ちそうなほどの笑顔を向けられて、もっと赤面してしまう。ジャニーズの満面の笑みを正面から受け止められませんが、三十路には。

「じゃあ、エダ。彼女にいろいろな事おしえといて。時間作れればまた顔だすから。特に男女比のことはきちんと注意しとくように」

それだけ言うと、レイヤは一瞬で姿をけす。続いて、ゼノンもこつちに笑みだけを投げかけてすぐに姿を消した。

だからその笑みはやばいですって。ここの住人はほんと美形ばかりでお姉さんは困ります。あ、神だから仕方ないか。

と、ここで思い出す。

そういえば、私の姿!!

部屋の中を見渡すと、ちょうどエダの後ろに姿鏡がある。

「ちょっとすみません」

と断りを入れながら、その鏡に近づいた。

.....

水面に写ったとおりの色彩。右眼は黄色で、左眼は薄い紫色。それに髪の毛の色は白髪……いや、よく見ると金色が混じっている。で白金色ってやつか。なんでこんなでたらめな色彩に……。顔も10代の美少女。そのくせ体つきは出るとは出てウエストはきゅっとしまっている。日本人には峰不二子並みと言ったとえがわかりやすいだろう。

太くはなかったけど、こんなすばらしいボディーでなかった。顔も元が一緒と言うだけで数倍以上整っている。ここまでくるといっそのこと別の顔のほうがよかった。なまじ素が自分の顔だけに誰かの身体をのっとっているだけと現実逃避ができないのだ。

「・・・ああ・・・。なに。この身体に顔・・・。」

「すごい綺麗だね。たぶん、愛の女神のビュースと同じくらいだよ。なに？元々その容姿でなかったの？」

呆然としながら自分の姿を見ていると鏡ごしにエダが横からひよいつと顔を出す。よりいっそう鏡上の色彩が豊かになる。

「色はゼノンみたいな色だったし、もつと年齢上だったし、こんなくねくねした体つきでなかったんだけど・・・。」

若返ったのはうれしいが、これだとエダよりよっぽど若そうに見える。１５歳ぐらいってどこか。そのくせ身体が峰不二子だからへんにエロい。

「そうなんだ。でも生まれたばかりだからそんなものでしょ。」

「私は３０歳よ。もうおばさんなんだから・・・。」

自分を卑下するわけではないけど、やはり精神的には三十路だ。しかし、次の言葉で愕然とする。

「え？３０歳って言うてもずいぶん若いよ。ぼくなんて１８０歳なんだからね。」

・・・。。。

目の前の少年が１８０歳・・・。ありえないでしょ。

自分の6倍は生きているの？

「一年は何日？1000日くらい？」

それならありえる。ってかそうでありますように。

「500日だけど？フウカのところは違うの？」

500日。つまり $500 \times 180 \div 365 \dots$ ざっと240歳

！！

えー。

「レイヤたちなんか、250歳は超えてるけどね。それにここでは容姿なんか関係ないよ。生まれたときからおじいさんの姿の神もいるし。年なんかほとんどとらないんだから」

生まれたときからおじいさんってかわいそう。それを思うと若返ったのは感謝しないとだめってことね。ゼノンたちはもっと年上なんだ。そりゃあ最古の神なんだから……。

あ、なるほど。それにしては若すぎる。さっきレイヤがこの世界はできたてと言ったのはそういうことなんだ。

「と言ってもまだまだ神が少なすぎるんだけどね。なんせ30人ほどしかまだいないから……」

30人。たしかに少ないかも。日本の八百万の神とは言わないけど、光や闇、水とくれば風、土、火とか他にもいろいろな神が必要はずだ。それを考えると本当にまだまだ少ないんだ。

「さらに、女神ってなると君を含めても6人しかいないからね」

え？ たったの6人？ 5分の1しかないのか。

「だから余計に君が降臨してきて周りが色めきだっているんだよ」

なるほど。 だからさっき男性たちに囲まれていたんだ。 それにレイヤが去るときに男女比とか言ってたのはそういう意味か。

女性の少ないクラスに入ってしまった感じなんだね。

「さらに、君は気が不安定で本来神が生まれながらに備わっている能力の抑え方とか扱い方とかができないから、その大きな神気が垂れ流しなんだよね。 最初僕がみたときもそれにびっくりしたもん」
エダは昨日の出会いを思い出してかクスツと笑いながらそう言う。

「え？ 大きいの？」

私自身はまったくそんなものを感じることができない。 そりゃあそうだ。 30年間も人間として平凡に過ごしてきたのだ。 気を感じるなんてできるわけがない。

「あ、やっぱり自覚ないんだ。 そっから練習しないといけないね。 神の中でもけっこうでかいほうだよ。 女神の中では間違いなく1番だね」

へえー。 そうなんだ。 もしかしてだから寝ているだけで傷が全快したのかな？ なんか癒しとか言ってたし。

「レイヤを弁解するわけではないけど、おそらく記憶をデリートすることで、そのあたりが自然に身につくからさっき消そうとしたんだよ」

なるほど。でも、できればこのままでなんとかしたい。わけがわからないまま連れて来られて女神と言われても自覚もさっぱりないけど、記憶を消されるということは橘風香の存在自体消されるような感じがする。

日本に戻れるとは思えないけど、それでも30年間の人生を嫌いだったわけではない。父も母もそして弟も好きだった。恋人はいなかったからまだ未練は少ないかもしれないけど、やはり帰れるものなら帰りたい。

「いろいろ説明ありがとう。拾ってもらったばかりに迷惑かけちゃってごめんね」

さつきまで書類を広げていたところを見ると、彼は彼なりに仕事かなにかあったのだろう。しかし、うれしいことにエダはすぐに否定してくれた。

「とんでもない。逆に役得だったと思っているよ」

リップサービス満点だなあ。やはりこの子はいいい子だ。実年齢を聞いてもどうしても年下の少年としか思えない。話し方もゼノンやレイヤに比べて幼いからだろうか。

日本人得意の愛想笑いで返すと、エダはわかってないなあつと軽く肩をすくめながら言う。

「言っとくけど、これからフウカはいろんな男性神からアプローチされると思うよ。今、神が少ないからどんどん増やせて風潮だし、だれでも子供ほしいからね。ただでさえ少ない女神の中で一番力が強いし、容姿もビュアス並みだしね」

・・・

え？

「そのビュアスも5人の恋人と3人の子供神がいるんだからね」

恋人が5人？

「ひ、1人でないの？一夫一婦制でないの？それに結婚してないの？」

どんな世界だ。ここは。確かギリシャ神話のゼウスも浮気性でほとんど子供作ってたけど、嫁さんいたよね。

そんな世界なの？？

「基本的にあまりにも女神の数が少ないので夫婦になるケースがすくないね。今はジューンとダリヤしかないから」

そういえば私入れて6人しか女神いないって言ってたっけ？

「ジューンは火の神で、ダリヤは大地の女神ね。ジューンが嫉妬深いから、ダリヤにはほとんど誰も近寄れないんだよ」

なるほど。

できるなら私も一対一がうれしいかも。と、いつてもまだそんなことまで考える余裕ないけどね。

「なに？フウカは1人だけにしほりたいの？それなら余計に僕もがんばらないとね」

エダはいたずらっぽく笑いなら笑顔をこっちにむける。「冗談だろ

うけどそんなこと言われてもお姉さん、対応に困ります。

すこし困惑した表情を浮かべてると彼は余計に面白そうにこつちを見る。

「まあ、まだこの世界のことよく分かってないだろうしこれ以上は突っ込まないよ。でもよく分かっていたら僕も遠慮しないよ。とりあえず、ここでは恋愛歓迎、子供はもつと大歓迎だからそれは頭に入れてね」

つまり、どんどん産んで増やせ方針なわけか。

できたての神の世界ってこんな状態なんだ・・・。

「そういえばこの世界に名前はあるの？神の国ってぐらいだから人の世界とかもあるの？」

「んー。あえて名称はつけてないけど、人間たちはレーヤゼンと呼んでいるよ。レイヤとゼノンから作られたって言うことで二人の名前をつなげてみたいね。人間は下界に住んでいるよ。今は生誕5千年ぐらいかな？」

5千年？あれ？なんで？

「あ、人間の流れとここの流れが大幅に違うからね」

なるほどなるほど。わかりやすい説明ありがとう、エダ先生。

「こんな感じでしばらくはこういう常識と力の使い方の練習を僕ら三人でみるからね」

エダは自分の髪の毛をなでながらそう言う。会ったときは気づかなかったけど、一くくりにした髪はかるくウェーブがかかっている。

ほんとうに綺麗な色だなあ。

「ありがとう！これからもよろしくおねがいね」

ほんとうに感謝しないといけないね。だって彼はたまたま自分を拾っただけなのにここまで面倒をみてくれる。

そういう気持ちで自分ができる最大の笑顔でお礼を言うと、彼も優しそうに眼を細めて笑顔を返してくれた。

ちよつとまだわからないことだらけだけど、がんばるしかないみたいだし前向きに勉強しよう。それしか自分にできることはないのだから・・・。

5・恋愛、子供、大歓迎（後書き）

ようやくあらずじに書いたところまで、かけました。
ちよつとエダに説明をおねがいしてしまいました。

顔が幼くて身体はエロって可愛いですよ。ってまるでオタクの
男性みたいですけど・・・。

一応作者はメスです。

6・神は究極のエコ

エダに連れられて、自分に当てられた部屋に戻る。

さつきゼノンに連れられて普通に廊下を歩いたとき、人がつきつきと寄ってきたので瞬間移動をお願いする。3回目になると慣れてきた。と言っても毎回抱きしめられながら移動するので、照れてしまうのだけど。

自分でできるようになるのかしら・・・。

「ねえ、エダ。私も自分で瞬間移動できるようになるのかなあ？」

毎回、抱きしめられてはちょっと嫌かも。そういうとエダはすこしうーんと考えてから教えてくれた。

「そうだね。たぶん今すぐでもできるだろうけど、場所をもつこし把握してからにしないと知らない場所に行っちゃって、迷子になってしまうからやめといった方がいいね」

その時にたちが悪い神や妖精に捕まったら大変だしね。やっぱり、まずは勉強ですか・・・。

「あ、精霊たちが君に挨拶したくてうずうずしてるから僕は今日は退散するよ。今日はご飯を食べてゆっくりお休み。また明日、神殿の中を案内するよ」

そついうとさわやかに消えていった。

ありがとう、エダ先生。

そついえばレイヤが精霊をつけてくれるっていったっけ？

エダが消えたすぐ後ろに2人の女の子の姿が見える。一人は濃い蒼色の髪と眼ですこし年配の女性。20歳ぐらいかな？細身でおだやかそうな顔立ちをしている。美人さんだ。

「フウカ様ですね。わたくし、セレーナと申します。状況はレイヤ様よりうかがっております。なんでも申しつけください」

そういつて軽くお辞儀する。

すると、すかさずもう1人も前に出てきた。

「私はノアです！よろしくおねがいします！」

そう言うのは明るい栗色の髪と黒の眼の女の子。15歳ぐらいに見える。こちらで細身で活発そうな子だ。眼が大きいからそう見えるのかな。もちろん、可愛らしい美少女だ。
言い終わると大きくお辞儀をする。

ほんとうにこの世界は美形ぞろいだな。こつちの世界に来たときに整形加工してくれて本当によかったのかも。

「私はフウカです。本当になにも分からないことばかりなのでいろいろ教えてください」

そういつて私もお辞儀をする。礼儀正しい精霊さんでよかった。それに女性なのかなによりうれしい。友達みたいになりたいな。

「フ、フウカ様。私どもに頭を下げるなどもつたいないです。どうか頭を上げてください」

セレーナは意表をつかれたと言う感じであわてて手をあげる。

「え？礼儀にもつたいないなんかないよ。だってこれからお世話になっちゃうだろうしね」

日本人はお辞儀するなど言われてもしてしまう人種なのです。なんせ電話口でもしてしまいうぐらいなんだから。

そう思いながら言うと、ノアが本当にうれしそうな笑顔を浮かべて私を見る。

「お仕えできる女神さまがこんなにすばらしい方ですってもううれしいです！競争率高かったけど、がんばってよかった！！」

競争率???

「はい。フウカ様の侍女や小使になりたい精霊。いっぱいだったのですから・・・。その中で私とセレーナが勝ち取ったのです」

ノアは誇らしげに胸を張りながら言う。

昨日来たばかりなのにすごい情報の伝達。

よくわからない。なんで、私の侍女にそんなになりたいものなのだろう。

「なんで、競争率たかいの？新米の女神見習いのようなものなのに・・・」

私がつい本音を言うと二人は即座に首を振りながら否定した。

「見習いだなんて！」

ありえないです。って言葉がつきそうな口調なのはノア。

それとは対照的にセレーナは冷静に私を諭すように言う。

「フウカ様。私たち精霊には神格と言うものが見えます。あなたの気は本当に素晴らしいもののなのです。おそらくレイヤ様やゼノン様など自然を司る方々と同格でしょう」

んー。そんなにすごいのか、わたしの気とやらは。自覚はまったくないんだけどね・・・。

ともかく、二人はいやいやでなくなりたくて私の世話係になってくれたってことだけは分かった。
それだけでも感謝しておこう。

「ほんとうによくわからないけど、世話係を買ってでてくれてありがとう」

笑顔で私がそう言うと、二人はその笑顔に笑顔で返してくれた。

「とりあえず、お食事の用意をいたします。本来でしたらフウカ様の嗜好と量に合わせてお出しするのですが、分かりませんでしたので一般的なものをそろえました」

セレーナはそういうと軽く手を振る。

一瞬にてテーブルの上に様々な食材が並んでいた。

魔法のランプの精霊みたい！あっけにとられながら私は昔大好きだった童話を思い出す。

便利だなあ。本当に。

席に案内されておとなしく座る。目の前に1人ではとうてい食べ切れそうに無いごちそうが・・・。

そつえば、よく考えたら森林にさまよってた2日と眠ってた1

日で丸3日は何もご飯を食べていなかった。それなのに、さまよってた時の空腹感がいままったく感じないや。

のどの渇きもない。過ぎると感じなくなるって言うがそういうのとはまるつきし違う。

いくらあの滝で水をたくさん飲んだからといって、ありえない話だろう。

「わたし3日も食事してないのに、なんで大丈夫なの？」

その質問にはノアが答えてくれる。

「あら？フウカ様。神は少なくとも基本この神殿では食物摂取は必要ないです。だって神々が集まっているのでエネルギーが飽和状態になっているから自然にそれを身体が吸収しているらしいです」

そんなもののなの？

神が集まればお食事さえ必要なくなるとは、究極のエコだ。

「じゃあ、このお食事は？」

と、なると食事は必要なくなるわけだからこの盛られたお食事の意味がわからない。セレーナが飲み物を注ぎながら答えてくれる。

「フウカ様はお食事をされる環境にいらっしゃったとお聞きいたしましたので、ご用意しました。神様方の中でもお食事される方は大勢いらっしゃいますよ。特にお酒や果実やデザートなどは人気ですね」

つまりは嗜好品ってわけね。

なるほど、よく見ると肉や魚はほとんど無く果実やデザートが主

だ。

偏食全然オツケーって感じた。

セレーナが注いでくれた紅いグラスを受け取る。なんの飲み物だろう。お酒かな？

一口飲んでみる。

あ、おいしい。甘いお酒だ。カシスオレンジみたいな味。

「太ったりしないの？甘いものばかり食べてたら・・・」

さすがにこれだけは気になる。

「人間とちがってほとんど体型や容姿はかわりませんわ。ご安心してどんどん食べちゃってください」

そういいながらノアはどんつとでっかい果実の山を近づけてくれた。全て一口大に切られているので食べやすそうだ。

「あ、ありがとう」

さすがにこの量は無理。でも少しは食べちゃおっと。

そう思って果実の中からりんごっぱいものを取り出し口にいれる。

「お。おいしいー!!」

りんごの味ではなかったけどどちらかと言えば完熟した桃の味。果物の中で一番好きな味だ。

「セラと言う果物だよ。へえ、フウカはセラが好きなんだ」

それは聞き覚えがある声。

ちょっと、だからなんでこの人はいきなり現れて声かけるの！
兄弟そろって同じ行動しないほしい。

案の定、果実の山の向こうからレイヤがおもしろそうにこっちを
見ている。

「驚かせないください。あ、せっかくなんで、ご一緒しません？
私はこんなにたべれませんし・・・」

と言いながらさつきノアの発言を思い出して途中でやめる。そう
いえば神に食事は必要なかったっけ？

しかし、レイヤはうれしそうにさつさと目の前の席に座ってしま
った。

「それはありがたい誘いだな。ゼノンを出し抜いてきてよかったぜ。
セレーナ、俺にはタタンの酒を頼む」

そう言つと、次から次へと食べ物を手に取り口に掘り込む。

神はお食事いらないつてのがうそのように思える速さだ。

「神ってお食事いらなかったのではないですか？」

そういうとレイヤは少し不機嫌そうにしながら口の中に入ってた
ものを飲み込んでから言う。

「おい。なんで、エダには普通で俺には敬語なんだよ。別に俺は食
事好きだから食べてるだけだ。ゼノンだって酒には目がないぜ」

「だって最古の神だって言うし、それなら最高神ってことですよね
？」

エダは少年っぽい容姿だしつい弟を思い出して普通に話してしま

う。それも失礼になって思ったけど彼が嫌な顔しなかったのものでそのままにしたのだ。

「別にそんな関係ねえよ。これから敬語禁止な」

一方的に言われてしまった。まあ本人が良いって言うならそちらのほうがいいのだろう。

「わかりま・・・わかったわ。普通でいいのね」

そういうとようやく、不機嫌そうな表情が消えた。この人って表情がすぐでるんだなあ。

「よし。じゃあ明日からだけど、お前他の神や女神とどんどん会いたいかな？このままだと次から次へとここにいろんな奴がやってきそうだけど・・・」

・・・。

今朝のゼノンやさっきのレイヤみたいに、いきなり部屋にどんどん来るのはやめてほしいかも。

「女神は会ってみたいけど、まだまだこの世界が分からないからもっと先にしてほしいかも・・・」

これ以上は名前覚えるのすらきついかも。それより先にもっとしらないといけないことあるだろうし。

「そういうと思ったよ。ただ、1人だけ紹介させてくれ。あいつだけは禁止令だしても出し抜いてきそうだし・・・。とりあえず俺とゼノンとエダともう1人以外はこの部屋にくることを当分禁止する

から安心しとけ」

4人は直接部屋にくるんだ……。一応レディの部屋なんだからせめてドアの向こうに移動してノックしてほしいよー。

そんなことを考えていると、その考えを読んだかのような声がかかる。

「レイヤ様！フウカ様は女神です。いきなり部屋に飛び込むのではなく、外からお伺いするのが礼儀だとノアは思います！」

ありがとう、ノアちゃん。心から感謝します。

「ちっ。わかったよ。こんなうるさい侍女つけたのは失敗だったな」

せっかくいきなり声かけたときのびっくりする顔が面白くてくせになりそうだったのに……。

すこし不貞腐れたようにぶつぶつ呟く。

うう、やっぱりゼノンと兄弟だよ。ふたりともいじめっ子だ。

「ああ。うまかった。またいつでも呼んでくれ。じゃあな！」

ほとんどのメニューが彼の胃袋におさまったところ、そう言って再び一瞬で姿を消した。

まあこっちもご飯終わったとこだけど、礼儀がなってないな。また教えないと……。

「ご馳走様でした。セレーナさん、ノアちゃん。ありがとう」

手を合わせて礼を言うと、動いてた手を止めてはじめて見るような表情でこっちを見ている。ないのかな？この習慣。

「私のところでの礼儀でさつきはちょっとできなかったけど、頂く前はいただきますって言って終わったらご馳走様って言うのがあたりまえなんだ。これからもするから慣れてね」

そういつて片付けの手伝いをしようとするが二人に止められる。

結局その後、お風呂に連行されてそこでも辞退も聞き入れられず、二人に身体の間から端まで念入りに洗われてしまう。

お風呂で抵抗した分、もう体力が残ってないのですこし早い気がするが、今日は昨日寝たベットに倒れこむように入ってすぐに寝てしまった。

その端で侍女たちがこんな話をしていたのを私は知らない。

「レイヤ様が男の小使禁止にしたの、よくわかるね。セレーナ」

「ふふ。ゼノン様もこのわたくしに立候補するように言うぐらいですもの。ぜったい男を近寄せたくないんだわ」

「さっきのだってフウ力様が他の神に会うのを断るって、分かっているから聞いた感じですものね」

「フウ力様って本当に無垢でまさに癒しの女神ね」

「だれがその恋人となるのか楽しみ」

うわさの本人はすっかり夢の中。

6・神は究極のエコ（後書き）

サブタイトル難しいです。話とはあんま関係ないのつけてますけど。

誤字やへんな文章あつたらどしどし指摘してください。

自分では気づかないもので助かります。

たまーに前の文章をいじっている場合があります。話しの流れ変えるほどではないので読み返す必要はないです。分からない程度の変化なので。

7・女神一日目の朝。色は大切です。

朝。心地よい日差しが大きな出窓から入ってきてベッドで寝ていた私の頬をやさしくなでる。

いい天気。今日は仕事だっけ？えーと……。

「!」

がばつと起き上がる。案の定、白い天井に白い壁に白に統一された家具。

やはり夢でなかったんだ……。なんか、昨日の話聞いている限り日本に帰れる感じまつたくないよ……。と、なるとやはりこのままよくわからない神の世界で女神となつてすごさないといけないのかなあ。そもそも女神つて何するかもわからないし……。

現実味ないけど、2回も起きるたびに夢でなかったと思つてしまふとすこしづつ、やはりこれは現実なのだろうかと思つてきてしまふ。

考えても仕方ないか。どうやって日本に戻るのかもわからないし、別に命に別状あるわけでもないし……。昨日必死に前向きに勉強しようと決意してたんだからがんばるしかないや。

「おはようございます！フウカ様。朝早いですね」

ノアがちょうどいいタイミングで部屋に入ってくる。よくわかるなあ。私起きたこと。

不思議そうにノアを見ると、その後ろからセレーナがワゴンを運びながら入ってくる。私の表情を見て考えてることがわかったのか、すぐに回答をくれた。

「昨日お話した神気で眠られているか目覚められているかわかるのですよ。特に今のフウカ様の気はとっても大きいので、精霊にはとても魅力的で感じやすいものになっていますわ」

あー、不安定だとか言われたっけ。それはさっさとセーブできるようにならないとだめなんだろうね。

ワゴンを私の前に設置する。

そこにはすこし大き目の洗面器とふわふわそうなタオルが用意されている。洗面器の中にはすこしピンクがかった液体が入っていて花のいい香りがしている。

「これで顔と手を洗ってください」

ほんとうにいい香り。そう言うとローラの花のエキスをたらししているからだと教えてくれる。贅沢な香りだなあ。さすが神の国。

「フウカ様！服も用意してます！」

そういつてノアが薄い水色の衣装を広げてこっちに見せる。

何枚も布が重ねられていて胴体部分は身体のラインにフィットしたワンピースだ。とても可愛いとは思うけど自分が着るにはちよつと若すぎるような・・・と思ってしまうたがよく考えると今の外見は15歳ほどだった。

フリルがないしロングでよかったと思い直す。

着替えて鏡の前で見るとぴったりではあるが、腰でしぼられているためにすこしスイカのような胸が強調されている感じになる。みえているわけではないけどすこし恥ずかしいかも。しかし、こんなにでかければ、どんな服きてもそうになってしまうのだろうから仕方ない。

「まあ。なんてお似合いなんでしょう。さすがエダ様ですわ」

ノアもセレーナも私の姿を見て感心するように何度もうなずく。
若々しい外見にはなるほど、自分で言うのもどうかもしれないけど似合っている。

「え？なんでエダ？」

エダくんはなんで関係あるのか分からないので素直に聞くと、セレーナが答えてくれる。

「昨日にエダ様がその衣装をフウカ様にと届けてくださったのですわ。まだ衣装はそれほど揃っていませんし素敵な衣装なのでさっそく今日持つてきました」

なんと素早い仕事をするんだ、エダくん。

おといですよ。私が来たのは。

サイズもぴったりだし。センスはかなりいい。

やはり少年なのは見た目だけかもっと思ってしまう。女性に衣装を贈るなんて少年にはできることでもない。

後でお礼を言わないとね。遠慮したくても自分自身の服はボロボロで何もないのでから好意に甘えるしかない。

「髪の毛もセツトいたしますわ。あげられますか？どのような髪型がよろしいですか？」

「こんなに長い髪をあげるのもたいへんだと思うし、くるるだけでいいんだけど……。あ、それより重いし肩ぐらいまでばっさり切ってほしいなあ」

そういうとノアだけでなくセレーナまで一緒に猛反対される。

「こんなに美しいのに缺を入れるなどわたくしたちにはできませんわ。毎日セツトいたしますのでどうかこのままできて下さい」

結局ふたりに押されて切ることは断念した。セツトについては、編みこみをいれたり、飾りをつけたりしないかとかだいぶ勧められたけど、それは遠慮させてもらいました。時間かかるし、結婚式みたいにするのもどうかなって思う。

最終的にノアがサイドにいくりにしてくれた。不本意だったとばかりに数本細い三つ編みにした上でだけど。

髪型も服装もなんとか整えると、そのままテーブルに案内されて席に座る。

「さあ。朝はお食事どうされます？よろしければ軽い飲み物と果実を用意いたしますが」

セレーナが聞いてきてくれるので少しうーんと考える。

今までだと朝はがつり食べるほうだったけど、なるほどまったくお腹すいている感じはない。でもやはり習慣としてすこしは食べたいな。

「ありがとうございます。じゃあ少しだけ。できれば朝はお酒でないものでお願いね」

わかりましたとの声かけと同時に、昨日同様テーブルに一瞬でグラスと果物の大皿が盛られる。

便利だけとどういう仕組みなんだろう。またいつかおしえてもらおうと。

昨日おいしく思った桃の味の果物を取る。たしかセラというんだっけ？

やっぱりおいしー。

「本当にセラがお気に入りみたいです。今度はセラでデザート作っていただきますわ」

それはうれしい！ノアちゃん。

軽く頭を下げてお礼を言うとまた二人が慌ててこっちをみた。そんなに大層なことかなあ？だって常識で無意識にやってしまう行動だし・・・。

「お食事終わりましたら、ゼノン様が部屋に来られるとのことです」
セレーナが食事の後片付けをしながらそう告げる。

え？それなら食事せずにすぐ行ったのに・・・。待たせてしまった申し訳なかったな。

その気持ちが顔に出てしまったようです。すぐにセレーナがフォローしてくれる。

「いえ。今、伝言されただけです。大丈夫ですよ。フウカ様」

へへ。テレパシーでお話できるんだ。便利だな、ほんとこの国は。

「そうです。いきなり訪問するとだめだとレイヤに言われてしまったので、セレーナに伝言をおねがいましたのですよ」

いきなり、扉の前からそういう声が聞こえる。

本当に伝達早いなあ。

「おはようございます、フウカ。朝早くからの訪問しつれいしますよ」

声のほうを振り返るとゼノンにこやかにこちらに笑いかけている。日変わっても美形は美形だなあ。

昨日いろいろありすぎてそこまで気にかけることができなかったけど、ゼノンの今の服装は長い黒の上着に白のズボンをはいている。ブーツも履いている。詳しくはわからないけど中世のヨーロッパの衣装に同じような衣装があったと思う。

昨日は黒1色のローブだったから感じが全然違う。今日はどこか外出するのかな？

「おや、本日は本当に可愛らしいお姿をされていますね。お似合いですよ」

私がゼノンを見ているように、彼も私の姿を見ていてそう褒めてくれる。

美形に褒められるとうれしいを通り越して恥ずかしく思ってしまったう三十路であった。

「ありがとうございます。え、エダがこの衣装くれたらしくて……」

そういうとゼノンはおもしろそうに眼を輝かせて、私の服装を上から下までみる。

「おやおや、なるほど。だからその色ですか。エダもやりますね。私も自分の色で贈りたいけどさすがに黒は女性には避けられますしね……」

水色の衣装はやはりエダの色って認識になるんだ。ゼノンは黒で、レイヤは金なのかな？

「そうですか？私、日本人で元々は黒髪黒目だったし、服も好んで黒色着てましたよ？」

黒は女性を美しく見せるって言葉があるくらいだ。
こちらの世界ではそうではないのかな？

「くっくっ。うれしいことを言ってくれますね、フウカ。そう言われてしまうと何が何でも黒のドレスを贈って着ていただかないと思うってしまいますね」

あ……催促する形になってしまった。

「あ、そういうわけでは……。ただ、黒もいって話だけですよ」

どうやったら服装が手に入るのかわからないけど、贈って貰ってばかりでは申し訳ない。しばらくはこの服と昨日きてた白いワンピースでいいくらいだし……。

遠慮しますと言おうとすると、先手で遮られる。

「断らないでください。エダからの贈り物は受け取って私のは拒否するのですか？ほら、セレーナが着てほしそうにしていますよ」

「おねがいします。ぜひとも黒のドレスを着てみてください。絶対お似合いですわ。ゼノン様ぜひたくしに手配させていただきます。評判のいい針子を知ってますのですぐにご用意できますわ」

侍女ふたりの中で冷静なセレーナがすこし興奮気味だ。そんなに黒の服って不人気なのだろうか？

そう思っていたけど、となりでノアが抗議する。

「それはずるい！フウカ様。ぜひぜひ金の入った服も着てください！レイヤ様に言うとは絶対贈ってくださいますわ。その姿は・・・」

うつとり。頭で想像しているようで少し頬を染めながら空を見ている。

いやいや、催促なんかしませんよ。でもなんでそんなに色にこだわるんだろう。

「フウカ。精霊にとって、好きな神が自分の系統の色を纏っているのは嬉しいことなんですよ。今、フウカは精霊に大人気だから、おそらくその衣装を見ると水系の精霊が喜ぶでしょうね」

んー。すごいなあ。

嫌われるより好かれる方が良いに決まっているけどここまで好かれるなんて、ちょっと怖い。

だって自分自身を見られているわけではなく、自分の外見とかだけ見られている感じがするから・・・。

仲良くなっても自分を知らなくてもわないとこの違和感は外れないだろうな。ちょっと私を知られて落胆されたりするかもと思うと怖いけど・・・。

「だから贈らせてくださいね」

微笑みながらそう言われると断る手段が無い。結局おねがいしますと言ってしまったよ。

7・女神一日目の朝。色は大切です。（後書き）

気が付いたらエダが服を贈っていました。

小説書くって不思議ですね。自分で書いているのに気が付いたら話がない方向に行っていました。

12000ヒットありがとうございます。いままで書いても中々続かなかったけど、見てくれているんだなって思うと書くこうという気になります。これからもがんばりますの、お付き合いいただけたらうれしいです。

8・女神の授業開始です。

「ひひひひひひー」

その後、では行きましようかと抱きかかえられる。
そして次の瞬間、ありえない体験をしてしまう。

「ここは・・・空の上じゃあないのお・・・」

ゼノンと自分が空に浮いているのだ。恥ずかしいとか言っている場合ではない。目の前のゼノンにこれでもかっとばかりに抱きつく。高所恐怖症ではないけど、さすがに怖い。目の前の兄さんが浮く動力になっているのだから離れまいと必死になるのは仕方ないだろう。

「落ち着いてください。私が貴方を投げ出すってことはありませんし、おそらく自分でも飛べるはずですよ」

そう言ってくれるけど、普通人間は飛べません。あ、神だった。

「今は説明の時間なので、その練習はまた後でしましょう」

しばらくしがみついているが、ゼノンはそのままポンポンツと背中を叩き落ち着くまで待つてくれる。おかげでしばらくするとすこしずつだが周りを見渡す余裕が出てきた。

自然が一杯だ。青々と茂った森林というか樹海が見渡す限り続いている。その中に大きな湖があつてそのそばにひとつの大きな建物が見える。

「もしかしてあれが私たちが住んでいるところ」

指差して聞くとゼノンが軽く頷く。

あれが神殿なんだ。しかし、それ以外にどこにも建物が見当たらない。

「そうです。ここが神の国。人間はレーヤゼンと呼んでいます。まだ、できたばかりなんで、人数も限られているからあの神殿ひとつで事足りているですよ。あ、でもたしか、ジューンとダリヤが自分たちの住処を作るとか言っていましたっけ？」

聞いたことある名前がでた。たしか、火と神と大地の女神で夫婦って聞いたっけ。

「夫婦なんですよ。神ではじめての夫婦って聞きました」

「エダから聞いたのかな？」

よく出来ましたってばかりに頭をなでながら言われる。どうも外見が幼いから扱いもそれに準じてしまうのだろう。まあ昨日のエダみたいに口説くようなこと言われるのは対処方法に困ってしまうけど、これはこれで心の中でおばさんですーって考えてしまう。

いつかこのおばさん根性なくなる日くるかなあ。いまのところ自信ないけど。

「一度お会いしてみたいですね。ジューンさんはダリヤさんのことすごく愛されているって聞いたんで」

一夫一婦制でなく多夫多婦制なのにお互いに唯一って決めているところが二人の愛を感じる。

「おや、フウカはジューンのように情熱的に愛されたいのですか？あの男はなかなか暑苦しいですよ。ダリヤもいまでこそあきらめますが、100年ほどは逃げ回っていましたから」

す、すごい愛だ。ダリヤさん、あきらめで夫婦なんだ。

「と、言っても結局はダリヤもダリヤでジューンを想ってるのはみえみえですけどね」

そう話を聞いてますます会ってみたくなる。しばらくして慣れたら一番に会いに行かせてもらおう。

「だいぶ慣れてきたみたいですね。では次の場所に移動しましょう」

再び抱きかかえられた。

景色が一転する。

同じように空の上だけど、さっきよりずいぶん高く昇ったところだ。

「あれ？？町が見える」

よく見ると樹海ではなく、いくつかの町や都市が見えている。

上空写真をみているような感じだ。まさか身一つでみることになるとは思いもしなかったけど。

「そうです。こちらは人間の世界です。神の国からは見下ろせばすぐにこちらに来れます。1人で飛べるようになってもしばらくは1人で来ない様におねがいします」

はい。神の国もろくにわからないのに、人間のところに来るな

んて在りえません。

「もうしばらくするとあなたを信仰する人々で溢れることになるでしょう。癒しは誰に対しても必要ですからね」

どういつことなのか分からないと頭をひねると、神と人間の関係についてすこし説明してくれた。

神と人。

レイヤとゼノンが何も無い空間に自然に生まれたことから世界創造が始まる。

その後、大地、水、風、火、太陽、月など様々な神が現れ、神の国ができる。その下界に大地が創造される。

神々が思い思いにそのキャンパスのような大地に触れ、海や湖、火山などができる。

そのころには樹木や花の神も現れ、その神々も下界に降りては思い思いに木や花の種をばら蒔き、森や樹海ができる。

レイヤとゼノンが力を合わせてその自然を守る生命体を作り出し、下界に住まわせる。

その後、知恵の神が現れその生命体のひとつに知恵を授け、人間

が誕生する。

その後、戦、酒、眠り、商売などの神も現れる。

それにより、人間たちはさまざまな信仰を持ち、自分たちの文化から国家まで創っていく。

今では新しい神が生まれ人間界にすこしでも降り立つと、信仰が生まれてるようになる。

神によってはその力のかけらを人間に授けたりする場合もある。

「今回、フウカはこうして来たので人間たちもそれを感じ取ることができるでしょう」

あ、こうやって浮いててもこれだけで大丈夫なんだ。

徐々にこの浮遊感も気持ちよくなってきた。最初怖かったのがうそみたいだ。頬にあたる風が心地よい。ゼノンに抱きしめられているかっただけは恥ずかしいけど、かんがえないようにする。だって自分で浮く自信ないもん。

しばらく景色を眺めていると、いきなりゼノンが舌打ちをしながらぼそぼそと言葉を発する。

「ああ……。わかりましたよ。そろそろ戻ります」

え？

後ろから軽く抱きしめてくれているゼノンを振り返ると、かるく苦笑しながら

「レイヤがそろそろ代われって言うてきているんですよ。昨日夕方一緒にいたくせにね。ほんとうはもうすこしこうしてひつついておきたかったですけど・・・」

後半はすこし抱きしめる力を強めて言う。

こら！これ以上するとセクハラになります。

そういいたいけど、落ちたくないのおとなしくする。

「そういえば、ゼノンはお酒が好きと聞きました」

「そうですね。お食事也喜欢ですけど、やはりお酒のほうを好みます。今日もお食事するのですか？」

そう聞かれて本当にお食事って嗜好品なんだなっと思う。

「はい。やはり、食べなくてもいいって言われてもそういう生活を送ってきてたのでいますぐには辞めることはできないです」

そついうと本当におかしそつに口元を緩ませる。

「べつに、やめる必要ないですよ。レイヤなんか毎日山ほど食べますから。私もお酒飲みながらすこし頂いたりしてますよ」

言われてみれば、昨日のレイヤの食欲はすごかった。ほとんどの料理を食べられてしまったのを思い出す。

「よかつたら、今日は私がご相伴にあずかりたいです」

それはうれしい誘い。昨日、レイヤが来る前にセレーナとノアに同席を勧めたけど、二人はさすがに一緒には食べられないと断られてしまったから寂しいと思っていたのだ。やはり誰かと一緒のほうがいい。

「じゃあお願いします」

そういつと本当にうれしそうに微笑んでくれた。すこし、彼の微笑みに免疫がついてきたかな？

「あー。レイヤが本格的にうるさくなってきましたね。なごりおいですが、戻りましょう」

そういつと再び瞬間移動され景色が一転する。白に統一された部屋。私の部屋だ。

8・女神の授業開始です。（後書き）

神話書くの難しいです。

小説でもめんどくるとばしてしまっ方なんで^^;
そんな人が神の話書くなって思わんといってください。

9・先生交代

部屋に戻ると、レイヤが腕を組んで仁王立ちしていた。彼は昨日と同じような衣装で、白い長めの上着に黒いズボンだ。上着にはほどよく金の刺繍が施されている。同じ顔の作りでも色が違うし性格も違うので全然印象がちがう。

「こら！いつまでくっ付いてんだよ。まったく」

舌打ちしながら、こっちに近寄ってくる。

そう言われてまだ私がゼノンに抱きしめられたままにいることに気がついた。

放してもらおうと声をかける前にゼノンが手を緩めてくれた。

「天空の案内のために、ずっとひっついてもらってたから・・・」

照れ隠しにそう言い訳すると、レイヤが呆れたようにため息混じりにこう言う。

「手に触れているだけで大丈夫だろうが・・・ゼノン、お前黙っていたな」

ゼノンはレイヤを無視して私を見ながら謝る。

「役得だったよ。ごめんね、フウカ。怖がってたのでつい、言いそびれました」

言いそびれたのではなく確信犯でしょ。やはりセクハラですか？
兄さん。

「まったく・・・ゼノン。ワトンたちが今か今かと待っているぜ。さっさと行ってやれよ」

レイヤはゼノンに向かって手を追い払うように振る。い、犬じゃあないんだから・・・。

「しかたないですね。じゃあフウカ。夕食のご招待ありがとうございます。セレーナに言ってくれたらすぐ伺いますよ」

しかしそんなレイヤの行動に何も感じないようで、気にせず私に微笑みながらこう言って瞬間移動した。彼がいた場所をついて見えます。

となりのレイヤから出る不穏な気配が怖いからだ。

「今日は夕食、ゼノンと食うのかよ」

どうやら今日も一緒に食べるつもりだったようだ。

「さっき誘ってくれたんだよ。あ、せっかくだし3人で食べよう。人数多いほうがいいもんね」

そういつとますますため息をつかれる。

「遠慮しとくよ。ゼノンと仕事以外で一緒にいるのは苦痛だ。それより、その服エダからの贈り物だって？」

本当に情報が早い。ノア経由かな？

嘘つくわけにもいかずにうなづくと、レイヤはもっと大きなため息をつく。同時に部屋の雰囲気も重くなる。

「まったく……。どいつもこいつも油断も隙もない」

やっぱり他の奴ら出入り禁止しといて正解だな。
ぶつぶつぶやいている。

「フウカ。お前、二人から恋愛の話は聞いているか？」

多夫多婦制で、女が少ないってことかな？
そういつとレイヤは大きく頷く。

「お前はこういう考えをもっているんだ？」

恋愛についてだね。うーんと考えながら答える。

「私のところでは一対一が当たり前だったので、今のところそういう関係しか考えられないよ。どんどん恋愛して子供産んだほうがこの国にはいいのかもしれないけど、来たばかりだから恋愛すらまだ考えられないなあ」

まだ、自分自身の存在を認識することもできてないのだから。

そういつと、不機嫌だったレイヤの表情も徐々に元に戻る。私のほうに近寄り、頭の上に手をぽんつと置かれる。

160cmはあったのにおそらく数センチは減っている感じた。
レイヤもゼノンも軽く180cmは越えている感じなので身長差がかなりあるので頭をなでやすいのだろうか？

「そうだな。とりあえず恋愛に否定的でないのだけ分かってよかった。管理者の立場からはどんどん産んでくれと思うが、個人的にはゆっくり相手を分かってから恋人なり夫婦になってもらいたい」

レイヤは口は悪いけど、やはりやさしい。
うれしくてつい口元が緩んでしまう。

「ありがとう。そう言ってもらえると助かるわ」

さっさと記憶消したほうが楽だろうに、そうしないでこうやって
気にかけてくれているのだ。

「べつに礼言われるようなこと言ってねえよ。あ、そうだ。ノアに
言われて服贈つといたから、またそれ着てこいよな」

え！今朝のやり取りレイヤに言っちゃったんだ。

「ごめんね。催促しちゃう感じになっちゃって」

ノアには言つとかなないと。まだ働いてもないんだから贅沢もいけ
ないんだから。

「いや、その服ばかり着られるのも胸くそ悪いからな。ノア以外の
精霊からもぶーぶー言われるだろうし……。どうせ贈る形になつて
いたと思うから気にするな」

すこし照れながらそう呟く。そういうば、精霊にとってその色の
服を着ると喜ばれるって言ってたか。じゃあありがたく受け取るし
かないね。

「ありがとう。楽しみにしてるね」

心を込めてそういうと「おうっ」とだけ短く言う。

本当に最古の最高神だというのに人間臭い。ゼノンもエダもそうだが。逆に威厳いっぱいだの神様だったからこそして気安く話しできないのでよかったけど。

9 ・先生交代（後書き）

少な目の文章ですが次回とのバランスでここで区切らせてもらいました。ごめんね。

10・実技開始です。

「さて、今からは気の感じ方と制御を教えよう」

実技の授業だ！。

「まずは人間としての固定観念を捨てろ」

最初から無理を言いますねー、先生。でも跳べないと思っていたらいつまでも跳べないってのと一緒だもんね。

よし。私は気を感じるー。感じるー。感じるー。

・
・
・
・
・
・

やっぱり無理か。

「いきなり感じるって思うな。まず、俺が軽く気をお前に放つから肌で感じてみる。視界をふさいだ方が感じやすいから眼をとじてみな」

わかりました。先生。

眼を閉じてみる。

・
・
・
・
・
・

え？

光が近づいてくるのがわかる。

小さなボールぐらいの大きさだけど、淡く光っている。触れるのかな？

手が届く範囲までくるとおそろおそろ手で包み込むように触ってみた。

暖かい。

日向ぼっこしているときに感じる暖かさだ。

「お！思ったより早いな。それを感じながらゆっくり眼を開いてみな」

そーっと視界を広げていく。ぼんやりと見えていた光が透明ではあるがたしかにそこに存在を感じる事ができた。すごい。本当にできちゃったよ。そう思ってレイヤに顔を向けた瞬間、視界に映る膨大な気を一瞬で感じ取ってしまい立ってられなくなる。

え？何？

今までなんともなく見ていたレイヤが気の塊に見える。

これが気なの？

なんで雄大で神々しい気なんだろう。どうしても直視できない。それでもその塊は私の崩れた身体を両手で支えてくれた。

「おい、大丈夫か？一気に見えるようになって気に酔ってしまったみたいだな。良いから眼をもう一度つぶって深呼吸だ」

言われた通りすると、いくらか楽になった。

「悪い。まさか一気に開花するとは思わなかったから……。自分の気のコントロールができれば眼を開けても大丈夫になるからそこまで進めるぞ」

自分の気。

レイヤのようなものが私の中にもあるのだろうか？

「眼とじたままでいいから両手をかざして、さっき俺が作ったみたいな小さな珠をイメージするんだ。へそから胸、腕を通して手のひらに気持ちを集めて……」

言われた通りにする。弓道の胴作りのようなものだろうか。しばらくの間その形を保ち、手のひらに集中する。

その次の瞬間、かけらしかなかった白い塊が卓球のボールから野球のボールを超えて、サッカーボールぐらいまで一気に膨れ上がる。

うわ……。できちゃったよ……。

「次にそれと同様の気を自分の中から感じ取るんだ。今は全身からあふれ出ているだろう」

……。

言われてみれば全身からその気を感じる。いや、全身よりおおきくはみ出している。分厚いスモークに包まれている感じだ。

「次に全身よりはみ出している気を自分の中に仕舞い込むんだ……。そう」

やり方を聞くだけで無意識で出ている気を減らすことができた。

「このまま俺に捕まっていながらゆっくり眼を開けてみな」

さっきのことがあるので、ゆっくりゆっくりと目をあけていく。レイヤの顔がすぐ近くにあったけど、身体から放たれる気は大きさは一緒でも先ほどのように攻撃的なものでなく、一番最初に触ったボールとおなじぐらい優しい光となっていた。

「思ったよりすんなりできるもんだな。やはり記憶があっても無くても神は神ってことだな」

そう言われて初めて人間外になったのだと実感した。

私、本当に神になっちゃったんだ……。

早くできたことはうれしいけど、これですますます橘風香としての人生の終焉をつよく意識することになる。

「つつ」

そう言いながらいきなりレイヤは私の頭を抱き寄せる。

え？なに？

「声も出さずに泣くなよ、癒しの女神が」

言われて初めて自分の眼から涙が出ていることに気が付いた。

「心の中でたまっているものを吐き出せ。気が分かったことがいやだったのか？」

私の顔を自分の胸に埋めながらそう優しく聞いてくる。
顔を見ながらでないことに本当に感謝する。

「ち、ちがうの……。できちゃったことで、自分は言われるように女神になって、今までの橘風香としての人生は終わったのだと思うといういろいろな気持ちが一気にあふれちゃって……」

ここに来てしまった事は不思議と運命だったのだと思うことができた。だからといって、今までの人生に未練がないわけではない。嫌でこちらに來たわけでもないのだから……。

そう胸のうちを言ってしまうと、レイヤは悔いるように低い声で謝ってくる。

「すまなかった。気楽に記憶を消そうとして……。だが、もし辛くなる様であればすぐに言ってくれ。俺としてはこのままのフウ力でいてほしいが、人としての意識を持ったまま永久の時間を過ごすのは苦痛かもしれないからな」

謝ることないのに……。最初もその気持ちで消そうとしてくれたのは分かった。

「たぶん、大丈夫。正直癒しの女神が何をするのか分かってないよ。でももしかしたらこの記憶が、人間の世界に関わっていくためには必要なのかも。さっきゼノンに連れて行ってもらったときにそう感じたんだ」

今度はレイヤの胸から自分で顔を上げてしっかりと彼の顔を見てそう言う。

すこしは虚勢あるけど、前向きにやっていくってことを彼に見せるところと思った。

涙を拭こうと手を持っていくと、その手を取られてぐっとうひっばられる。

「!」

気が付いたときには彼の唇が自分の眼から離れていった時だった。涙を舐められた！

それも両方の眼とも……。

言葉にもならない言葉であうつとか言ってる私を面白そうに見ながら、身体を離してくれた。

「早めにできたけど、フウカの気力もだいぶ使っただろうしすこし部屋で休むといい。今日はここまでにしよう」

結局彼が部屋から出て行ってしまうまで、私は意味のある言葉を発することができなかった。

ゆ、油断した……。この……。セクハラ兄弟め!!

10・実技開始です。（後書き）

本当はゼノンといい雰囲気になろうと思っていたのに、レイヤが出しゃばってきました。

小説は本当に生き物です。

弓道やったことない人にはすこし分からない文章はいますが、打つ前の体制や呼吸法のようなもので気にしないでください。

って弓道経験者にこの説明はだめって言われそうだけど（汗）

フウ力はすぐに能力を開花しています。なかなかできなくて困る設定にしようか迷いましたが、すぐ出来ちゃって戸惑う彼女を書きたくてこうなりました。早く女神として活躍させたいです。

11・光神の回想（前書き）

サブタイトル・・・レイヤが落ちた瞬間

11・光神の回想

最初、エダが大切な宝物のように抱きかかえて彼女を連れてきたとき、息をのんでその姿を見た。

服装は見たこともない姿。普通生まれたての神や女神であつてもそれを象徴したような色の布を身にまとっている。自分なら金でゼノンなら黒だった。

しかし彼女は最初から白い上着に身体にフィットしたスカート。上着はサイズが合っていないのか今にもボタンがはじけそうだ。

手や足、顔まで無数の小さな傷を負っている。

彼女の気さえ感じなかったら、人間が紛れ込んだとは思えないだろう。

そう感じなかったからだ。

眠っているにもかかわらず、彼女のまわりには神独特の神気があふれ出ていた。

連れてきた本人にこの状況の説明を聞くしかないだろう。となりのゼノンもそう思ったようで先に質問してくれる。

「エダ。どこで彼女を保護したのですか？」

エダは彼女をそばにあつた大きな長いすに寝かせながら答える。

その後もこちらをまったく見ず、彼女の髪の毛をなでながら寝顔をじつと見つめていた。

「ぼくの滝だよ。2日ほどあの樹海をさまよっていたみたい」

エダの滝の周りは深い樹海に囲まれている。しかし、神なら生まれたらすぐにこの神殿に飛んできて自分とゼノンに面会を願うはずだ。

ますますわからない。

「レイヤ。彼女の手足をみてください」

そう言われて彼女の手足を見て驚く。もうすでに先ほどまであった傷が全く無くなっているのだ。

「まさか・・・彼女は癒しの女神か・・・」

いくらこの神殿が神の力を強化させるとはいえ、数分でここまで傷を治すことは無い。あるとしたら、それは本人の力によるものだと、なると癒しの力を持つ神となる。

人間界が戦に明け暮れるようになってから、レイヤもゼノンも癒しの神を待ち望んでいた。

癒しができないので、けが人が人間界に溢れかえっていたからだ。自分たちが作りしわが子たちである生物の多くが、けがで苦しんでいる姿に心を痛めていた。戦争をやめさせるべきだと思うが、戦神や自分たちができることはその制御をするぐらいであり、無駄な戦争はいつまでたってもなくならない。

だから、せめて癒しを望んでいた。

その神がとうとう現れたのだ。それも女神として。これで30人目の神だが、女神は彼女を合わせて6人しかない。今まで5人を争うように男神が求愛してきた。1人は火神が独占している形だが・・・。

レイヤもゼノンも彼女たちにはそれほど興味なく女性も多い精霊で満足していた。子供はほしいが、やはりそれなりに興味持てる相手がよい。

「これはまた、男神が色めきそうな女神だな・・・」

そつつぶやきながら、彼女を見る。眼は閉じられていてわからないが、髪は白金で腰までまっすぐにのびている。顔はずいぶん幼いが、愛の女神に張る美貌だろう。そのくせ身体つきはうつくしい女性のラインを描いている。

彼女の寝顔を見ていると起きている状態をきちんとみてみたいと思わずにいられない。

「眼は右は金で左は薄い紫のオッドアイだったよ。ほんと、綺麗だったよ」

エダが横から説明してくれるが、その表情がいままで見せたことないような笑みを浮かべている。その様子を見るとつい、最初に見たかったなと思ってしまう。オッドアイはそんなにあるわけではないが、別にめずらしいってほどではない。現に戦神もそうだ。なにより自分の象徴である金を帯びているのなら、なおさら見てみたい。

「とりあえず、侍女を選出して着替えさせて部屋で休ませるか。話は起きてからだな」

侍女は2人ほどでいいだろう。俺の系統の精霊の数人に声をかける。

半刻もしないうちに30人近くの精霊が集まってきた。

女しか就けるつもりなかったのに半数が男の精霊。種類も様々だ。さすが、精霊は気を敏感に感じるな。

おそらく彼女の膨大に溢れる神気に惹かれて呼んでもないのに、侍女を募集するという話をきいてやってきたのだろう。

よく見ると、ゼノンの側近中の側近のセレーナまでいる。精霊にも格があってセレーナは間違いなく上位の力と格を持っている。ここに集まった中で飛びぬけているだろう。

「たくさん集まってもらったけど、とりあえず女性を2人つけるつもりだ。時間がないしこちらで選ばせてもらうぞ」

セレーナを選ばなければ、ゼノンは文句言うだろう。実際、選ばないと角がたつ。まあ彼女なら安心だが。

となるともう1人は当然自分の系統の精霊だ。最初に声かけた4人に眼を配り、最終的に栗色の髪と黒の眼の女の精霊に視線を落とす。最近力をぐんぐん付けてきている成長株であるノアだ。すこし騒がしいところもあるが、セレーナとならバランスがいいだろう。

「じゃあセレーナとノアに頼む」

ノアが飛び跳ねて喜ぶ。残念そうにしている他の精霊には退出を命じて、2人に彼女の世話を頼む。

「白の間が空いていただろうから、そちらで休ませるぞ」

レイヤはそう言つて、長いすで寝ている彼女の肩と腰の下に手を入れてそつと抱きかかえる。

豊満な身体つきに反して軽い。

後ろでエダとゼノンが驚きの顔でこっちを見ていたが、気にせず彼女を抱いたまま瞬間移動した。

それにセレーナとノアもついてくる。

「じゃあ後は2人に任せる」

セレーナに彼女を渡してから先ほどまでいた執務室に戻る。よく考えたらその場で任せればよかった。しかし、あの時はなぜか彼女を抱きかかえて連れて行かなければと思ったのだ。

「おかえり。さあ彼女が眼覚めるまで、業務を少しでも進ませたいので自分の部屋に戻りますよ」

部屋に戻るとゼノンがそう言う。たしかに、眼を覚ましたあとが大変だろうから今の間にできることはやっておくのが得策だ。

「そうだな。じゃあまたあとで」

エダとゼノンが部屋から退出し、その代わりに金色の髪、朱金の眼の身体つきの大きな男が入ってくる。側近であるライだ。

「レイヤ様。よかったですね。待ち望んでいた癒しの女神が現れて」
笑いかけながらそう言う。

「ああ。ただ今の姿がよくわからないがな。しかし、あれはみんな騒ぎ出すだろうな」

今までいた彼女の姿を思い起こしながらそう言う。

「そうですね。精霊たちにとってあの神気は、どこにいても感じれるほど魅力のものですから。神々の間でも、おそらく電光石火で情報が流れているようだし、先ほど来た精霊たちが、おのおの自分の神に報告していると思いますよ」

その様子もすぐに想像つく。自分とてあの神気に強く惹かれるものがあるのだ。精霊たちには甘い蜜のように見えるだろう。

「これでレイヤ様の恋人か妻になってくださればよいのですが・・・」

ライがからかうように笑いながら言う。それに言い返そうとするが、その前に話を続けられる。

「でも、エダ様もゼノン様も興味持たれているようなので、中々手ごわそうですね。もっとも他の神々も見たら興味持たれるでしょうけど」

たしかに。今まであまり女神との恋愛に興味なさそうだった二人が、眠っている彼女を食い入るように見つめていた。

「まあそれはなるようにしかならないさ。子供はほしいけど、気の合わないやつとそういう関係になるつもりはないからな」

話はここまでとばかりに机に積まれていた書類に手をのばした。

！！

しばらく書類の処理に追われていると、突如、気が一瞬大きくゆれた。

彼女が眼をさましたようだ。

しかし、なんでここまで気が不安定なんだろう。いくら神気が強くても普通はここまで垂れ流してはいはずだ。

「悪いがすこし休憩だ。彼女が目覚めた」

早々にライにそう言い、彼女の寝ている部屋に移動する。中は空だった。おそらくエダかゼノンが連れていったのだろう。気を探すとすぐに見つかる。廊下だ。歩いていつているのか。

再び瞬間移動すると、彼女の周りに男の神や精霊が集まっていた。困った表情を浮かべる彼女をゼノンが楽しそうに見ている。

あいつ、この状況を楽しんでやがる。

「おまえたち。彼女は生まれたばかりなんだから、あまり大人数で近寄るんじゃないよ。とりあえず、ゼノンとエダと俺で話してからにしないさ」

思わずそう言ったとたん、すべての視線が自分に集中する。

！！

そのとき初めて彼女の眼をみた。

エダが言ってた通り、オッドアイだ。右眼は鮮やかな金、左は薄い紫。すこしたれ眼がちなために眠っていたときより幼い顔つきになる。だが驚いたのは色でなくその眼光だ。

優しい顔だちなみに眼ははつきりとした意思を持った輝きをしている。寝ていたときと印象がまったく異なっていた。

やはり彼女は癒しの女神だ。それは神としての感覚で感じ取った。エダの部屋で事情をゼノンから聞き納得する。

人間の記憶がある？

それも異次元の人間だ。

この不安定な気はそのせいだ。

これから永久に近い生活を神として送らなければならない。神はただ施しを与えたら良いってものではない。時として無慈悲に罰せ

なければならぬのだ。異次元とはいえ限りある生を送っていた彼女には酷なはなしだろう。

それなら記憶を封印してしまったほうがいいだろう。

彼女は今まで素直に話を聞いていたのに、それに対しては断固拒否という形をとる。30年人間として生きてきていたら仕方がないか。またすぐに封印してくれと言うはずだから、それまでは好きにさせておこう。

そのときはそう思っていた。

しかし翌日その考えは大きくかわる。

女神として生まれると同時にできる気の感じ方と気の制御を教えると、一瞬でできるようになった。やはりいくら人間としての記憶が邪魔していても神は神だ。

そう言うとな彼女は大きく眼を開き、しばらくこちらを見る。そして、両目から一筋の涙をこぼす。自分でも泣いているのが分かってない様子だ。

なんで泣くのかわからないが、気が付いたら彼女を抱きしめていた。涙をとめてやりたいと強く思う。

理由を聞くと人間としての人生の終わりを感じたのだと言う。簡単に神の能力を使ったことで女神としての自覚がでてきた反面、橘風香がいなくなると。

本来であればこんな悲しみを彼女は背負う必要なかったのだ。

そう思っていたが彼女は否定する。

「大丈夫。正直癒しの女神が何をするのか分かってないよ。でももしかしたらこの記憶が、人間の世界に関わっていくためには必要なのかも。さつきゼノンに人間の天空に連れて行ってもらったときにそう感じたんだ」

彼女のこの言葉に衝撃を受けた。

そのような考え方をしたことがなかった。

この時、自分にとって彼女が癒しの女神からフウカという特別な存在へと変貌を遂げたのだ。

辛かったら記憶を消してやるといったが、本当にそんな時がくれば自分は迷うことなくしてやれるだろうか。なぜなら人間としての記憶を持ち合わせたフウカに、自分はどんどん惹かれていつているのだから・・・。

11・光神の回想（後書き）

レイヤが一番乗りで落ちました。まだ積極的に行動するほどではありませんけど。

エダとゼノンは口説いてますけど、まだ落ちていません。気になる程度です。

タイトルをレイヤから光神に変えました。

しかし、おもった以上にあまったるい話になってきたなあって感じます。人数も増えてきたし。もっと増えてきたら私が今使っているメモの登場人物をアップします。

日々評価があがったりお気に登録が増えたりするのがうれしいです。ありがとうー！

12・4人目の神（前書き）

サブサブタイトル・・・ぬれぬれフウカ

12・4人目の神

思っていたより疲れていたのか、ベッドに少し横になろうとしただけなのに気が付いたら寝てしまっていた。

ご飯前にエダにお礼を言わないといけなかったのに……。

起き上がった部屋を出ようとして、ふと気が付く。

そういえば、部屋どこか知らない……。

結局瞬間移動で連れていかれたし、勝手に出てこの大きな神殿を迷わない自信がないっていうより迷う自信がある。

「……どうしよう。まだレポートのやり方知らないし。ノアかセレーナに聞くのが一番かな……」

でも彼女たちはそばにいないしわざわざ呼ぶのもどうかと思う。

一回やってみるか。

眼を閉じて青色の少年を頭に浮かべて集中する。

エダくんのところに行きたい！。行きたい！。

そう考えた瞬間、ふわっと身体が浮く。

やった！できた！

しかし、次の瞬間一気に身体が下降する。いや、下降と言うより落下だ。

「きゃああああー」

落ちる！落ちちゃうよー。

ばしゃん！！

水しぶきが顔にかかる。水の中に落ちちゃったよ。でも、派手に落ちたのに痛くない。下が柔らかく暖かいからだ。

ん？暖かい？
さすりさすり。

「すまないが、俺の上から退いてもらえないだろうか」

触りまくっていた下のクッションは人だった。びっくりしてそこから飛びのく。水の中から男性が現れた。

「あ・・・オッドアイ」

彼の瞳は深紅と青の色違いだった。髪は黒で短く刈り上げられている。レイヤたちも均整のとれた身体つきだったが、こちらは一回りも大きくなったような大柄の男性だ。大柄というのは言いすぎかもしれないが、服の上から見ても硬い筋肉に覆われた身体つきなのは分かる。顔つきは少し強面だが十分整っているだろう。どこか軍人を思わせる風貌だ。外見年齢的にはレイヤやゼノンの数年年上という感じだ。実際は違うだろうけど。

「ふ。おかしいことを言う。自分もそうであろうに」

言われて自分の容姿を思い出す。そういえばそうだった。

「とりあえず、この噴水から出よう。いきなり落ちてきたからびっくりしたぞ」

よく見るとそこは大きな噴水だった。そのまわりは公園のように

整備された木や花が並んでいる。

この人が飛び込んで下敷きになってくれたのかな？

「危ないところ助けくださってありがとうございます」

神だから死なないかもしれないけど、怪我は免れなかっただろうと、よく見ると彼の左の腕にかすり傷ができています。

うわあ。もしかしてあわてて飛び込んでくれたときにできたのだろうか。申し訳ないなあ。

自分でも無意識にその腕に触れる。なでた瞬間、傷が跡形もなく消える。

「例の評判になっている癒しの女神か」

男性はこちらを凝視しながら言う。顔つきが先ほどまでより真剣なものになっていた。

できちゃったよ。なにも意識してないのに傷治してしまいました。

「俺はオリセント。戦を司っている。癒しの神の光臨を何よりも待ち望んでいた。歓迎するよ」

噴水の中から出て、私にも手を伸ばしてくれながらそう言う。

ありがとうと言いながらその手に自分の手を添える。歓迎してくれているのはうれしいことだ。実際彼の目つきはひどく優しいのである。

「すみません、名乗り遅れました。フウカといいます」
「フウカ！」

そのとき、いきなり私を呼ぶ声が降ってきたと同時にその姿を現

す。青い髪が空を舞う。

「エダ」

かなり切羽詰った表情をしていたが、私の姿を見つけてほっと表情がぬるむ。

「いきなり、瞬間移動しようとしてはだめだと言ったのに・・・」

そう言えばそう言われていた。

「ごめんなさい。エダを探そうとしてて・・・」

私が謝ろうとしてる最中に、となりで遮るようにオリセントが肩を揺らしながら笑いながらエダに言う。

「なかなか珍しいものを見た。エダがそんな慌てる顔初めてみたよ」

その声に初めて私の隣の人を見てわずかに顔を歪ませる。

「オリセント。なぜ君がフウカといえるんだい？」

「彼女が空から降ってきたのを助けたんだよ。だからほら、二人ともぬれているだろ。せっかくだから乾かしてくれ」

私たちがびしょびしょに濡れているのを見て納得したのだろう。

ため息を一回吐き、手を大きくかざす。服がふわっと浮いたかと思うと、今まで水浸しだったはずの服から水気がなくなった。同時に髪の毛からも水気が飛ぶ。

エダがいれば乾燥機いらずだ・・・。

「では、フウカ。今度じっくり話ししよう。今日は水も滴る状態を見て役得だったよ」

軽く手をかざし笑いながらオリセントがその場から立ち去った。言われた意味を噛み砕いてはつとずる。

今気がついたけど、水で濡れてて服が透けた上にぴったり身体に張り付いていたから、ひどくやらしい姿になっていたのでは？今は乾燥してくれているから大丈夫だけど・・・。

は、はずかしい！

今度会ったら絶対平常心で会話できないよ。

顔を紅くしながらあれこれ考えていると、エダが大きなため息を
はく。

「フウカ。これから用事があれば誰かに伝言頼むかと呼んでくれたら、すぐに行くからそうしてくれない？またこんなことあったら僕の心臓が止まってしまっようよ」

呆れた口調でエダが言う。神って心臓止まるのだろうかと思うが、とりあえず反省が先だろう。

「ごめんなさい」

はい、しばらくはレポートしません。また空を飛んだらこわいです。

「いいよ。僕を探してくれてたのはうれしいから。それより、その服装着てくれたんだね。精霊たちが喜んでいたからはやく見たいって思ってたんだ」

そう言われてそもその目的を思い出す。そうだ。お礼を言わないと。

「すてきな服ありがとう。来たばかりだし服がないのでとっても助かったよ」

うれしそうに私の姿をもう一度見ながらうんうんとうなずいている。

「どういたしまして。やはり思ったとおりよく似合うね。気に入ってくれた？」

正直に感想を言う。

「もちろん。私さすがにフリル多い服には抵抗あるんで、こういう形の服は大好き。すそも長いのも気に入っているよ。いいセンスしてるね、エダ」

「それはどうも。レイヤとゼノンに嫌味言われたよ。2人も贈るって言ってたから今頃クローゼットの中が大変なことになっているね」

え？一着でないの？

「さあ？それはわからないけど、ずいぶん悔しそうにしていたから、数着おくるのだと踏んでいるけどね。まわりの精霊たちがだまっけないだろうし」

そういえばセレーナもノアもずいぶん喜んでいた。

「僕もちよくちよく贈るから着てね。水の精霊たちのためにもよろ

しく」

そう言われてしまうと今朝と一緒に断れなくなる。まあ好意は素直に受け取っておこう。好意を返せるときがくれば返せばいいのだから。いつできるかまったく見当もつかないけど。

「そろそろ夕焼けも沈んできたころだし、部屋に戻ったほうがいいね。乾燥したとはいえ、身体は冷えているだろうし」

手を差し出されたので、素直に手を添える。次の瞬間また周りが一転した。

12・4人目の神（後書き）

とうとう四人目です。

戦神はこの世界の神の中で一番、癒しの神を求めています。だからレイヤも彼だけはフウカに紹介するつもりでいたのです。紹介する前に逢ってしまいましたけど。

服や外見の説明はむずかしい。

13・怖いです、兄さん。

「なるほど。それでオリセントと先に会ったのですね」

あれからエダに送ってもらって、すぐに夕食が始まる。ゼノンはちよつどのタイミングで部屋へ飛んできた。おそらくセレーナが呼んだのだろう。

そして楽しい夕食タイム。話題としてさっき会った戦神のことを聞くと、逆になぜ彼を知っているのかと詰問されて正直に話すはめになる。

だって目の前の兄さん、笑顔で怖いんだもん。真っ黒いオーラが漂ってますよ。

「しかし、感心しませんね。やり方もしらなくて瞬間移動を試すなんて」

ゼノンは説教しながら眉をわずかに吊り上げている。はい。目の前の最古神さんが怖いです。さすが、闇の神。

まあ、たしかにあの落下は怖かった。オリセントが助けてくれなかったら絶対怪我してただろう。

「わかってないですね。会ったのが紹介する予定だったオリセントだったからよかったものの、いくら神の世界でも気のいい奴ばかりとは限らないですよ。エダから聞いたと思いますが女神が少ない分、会った途端に君を閉じ込めて自分のものにしようと実力行使する奴が出てきてもおかしくないですよ」

え……そっちの心配？たしかにそれはこわい！

そんなにみんな飢えているの？夜道は一人で歩けないな……。

「わかって頂けました？」

そう声だけやさしく訊ねてくるのに言葉にもできずにただ肯定の意味で頭を上下に振る。

「それはよかった。もし、理解してくれなかったら実践で私がフウ力を閉じ込めて自分のものにしてしまおうと思っていましたから。すこし残念ですけど・・・」

ひえー。怖いです。

あなたが一番怖い。

私の怯えるような表情を堪能して、クスクス笑い出す。

冗談か。よかった！

これでゼノンも機嫌直ったのか、黒いもやのかかったような笑顔から普通の笑顔に戻る。

「明日、さっそく瞬間移動の練習をしましょう。4人の部屋だけは確実にいけるようにすればこんなこと起きないでしょうから」

「え？4人？そういえばオリセントさん紹介していただける予定だったって・・・」

レイヤももう一人だけ紹介すると言ってたっけ？それがオリセントだったんだ。

「そうです。彼はだれよりも癒しの神を待ち望んでいたのです、さすがに会わせないわけにいかないのですよ」

さつき会った彼も待っていたと言ってくれたっけ？そのあたりは本人に聞いたほうがいいのかな？

「分かりました。じゃあ明日お願いします」

「ああ、すみません。残念ですけど明日は私でなくエダが来る予定なので伝えときますね」

順番があるんだ。そりゃあそうか。業務あるのに時間を私に割いて先生をしてくれているのだから。

「ありがとうございます。仕事があるのに手を煩わせちゃってごめんなさい。早くある程度のことできるようになりたいのですけど・・・」

そうつと彼の笑みがより一層深いものになる。

「私としては一人で手取り足取り教えたいものですね。仕事は別に支障ありませんよ」

ここまで言ってからすこし沈黙し、ふたたび口を開く。

「それより。なぜ、レイヤには親しい口調で私にはいつまでも敬語なのですか？」

え？ゼノンまでそう言うの？

「でも、ゼノンも敬語ですよ？だから同じ言葉がいいと思いますけど・・・」

敬語を使われるとつられるのだ。と言いつく。しかし通用しな

かった。

「私は誰に対してもそうなのでいいのです。でも貴女は違う。わたしだけ敬語だと一線おかれたように感じてしまうのです。普通に話してもらってる二人に妬けます」

妬くって……。

おそらく社交辞令だろうけどそう言われるとこっちが照れてしまう。

「わかり……わかったわ。普通にしゃべる。これでいい？」

がんばって敬語をはずす。急に外すのはちょっと違和感がでてしまうのは仕方ないだろう。

「私のわがままを受け入れてくれてありがとうございます」

本当にうれしそうに笑いかけられて、今度はべつの意味で固まってしまった。本当にゼノンの笑顔って破壊的だわ。自分の年齢と一緒でこれにも慣れる時がくるのかしら……。

ゼノンはその後、私が食べている姿をみながらグラスに口付けていた。本当においしそうにお酒を飲む。レイヤと同じでタタンと言う酒だ。一口飲ませてもらったけどだいぶきつい。私には無理だ。諦めて私は軽くて甘い果実酒を頂いた。

14・ルーラするには最初歩いていかなければいけません。

なにもかも違う朝の風景。広々とした白い空間が今の私のへやだった。そして橘風香ではなく私はフウカだった。

昨日ゼノンと夕食後、お風呂をなんとか一人で入るとノアとセレーナに言い切って、のんびり入らせてもらった。

その後すぐに寝たのだが、朝起きたら日本と間違ってしまったようだ。

「やっぱ、すぐには切り替えられないよね・・・」

特に目覚めは30年間積み上げてきた生活と混乱してしまう。

もうすこし時間かかるよね。だってまだこっち来て1週間経ってないもん。

「「おはようございます、フウカ様」」

本当にいいタイミングで侍女の二人がやってくる。昨日と同じでセレーナはワゴン、ノアは衣装を持ってきている。

あれ？黒の服と白に金の入った服2つだ。

「フウカ様！今日は金の服きてくださりますよね！」

ノアが身を乗り出して聞いてくる。負けじとセレーナまで、口をはさんできた。

「いえ！黒の服ですわ。とってもステキなんですよ、フウカ様」

もうすでに贈られてきたんだ……。本当に早い。
でもそんな選択肢貰っても……。どっちもいっぺんに着られないから困る。

んー。

「えっと、どちらが先に贈られてきたの？先に贈られたものを今日着るわ」

これしかないだろう。これなら言い訳として正当だ。

「やったー！！レイヤ様からのほうが早かったですわ。だから今日はこれです」

そう言っただけでもらって、正直見てから答えればよかったと思っってしまった。

白くサテンの光沢を活かしたギャザー使いのロングドレスだ。おもいっきり身体のラインが出る形だ。さらに深めのスリットが入っているために動くたびに足が見える。とても上品な金の花刺繍が胸からすそに向かって施されている。

確かにすごくステキだけど、自分が着るには勇気が必要だ。かなりセクシードレスだからだ。

贈ってもらった以上着なければ失礼だと言いつつ聞かせながら着替える。

「本当にステキです。フウカ様。レイヤ様が見たら絶対見蕩れますわ」

.....

さすが不二子ちゃんスタイル。自分でもよく似合っていると思う。しかし唯でさえでかい胸がもっと強調された感じで恥ずかしい。っ

くづくこの幼い顔にこのスタイルってエロいって思い知らされる。
化粧とかばつちりしたほうがいいのかな・・・。

でもないらないほど肌もつやつやだしまつげもクリクリだし、唇も
グロスを塗ったように輝いている。

せめてスイカ胸は隠そう。

「コレに合うカーデガンかストールないかしら。ちょっとさすがに
恥ずかしいから・・・」

そういうとノアがたいそう残念そうにしながらも、何度もおねがい
する私に負けてと大きな金の糸で編まれたレース柄のストール
をくれた。

「すてきな胸が隠れてしまってもったいないです」

いや、胸隠すためにするんです。これでなんとか人前にたてる。

足は気にしないでおこう。隠しようないし・・・。できることはお
しとやかに歩くことぐらいだ。

今日も髪型は昨日とおなじく細い三つ編みが数本入ったサイドに
一くくりの髪型にしてもらう。これもゆずれません。

お食事もすこしもらってセレーナにエダを呼んでもらった。

今日はたしかテレポートの勉強だったよね。昨日見当ちがいのと
こ飛んだけど飛べたしすぐ出来たらしいなあ。

「おはよう！フウカ」

しばらく待っていると部屋の空間がぐらつとゆがみ、次の瞬間水
色の髪をした少年が立っていた。エダだ。

昨日まで見れなかった気が今日ははっきりと見える。

彼の周りに青色の気の繭のようなものが覆っている。
これが昨日教わった気なんだ。

「今日は光の衣装なんだね。やっぱりセクシー系か。レイヤだから
そうなると思っただよ」

彼の好みか！

まあこの身体ならなんでも似合うだろうけど……。前の身体だと
ぜったい着られない種類だ。

「とっても似合っているよ。あまり他の人には見せたくないほどね」

そう言われて瞬時に赤くなってしまう。日本人は褒められるのが
苦手です。

「あ、ありがとう・・・」

エダはそんな私をたのしそうな目つきで見ている。

「さて！昨日ゼノンにも言われたけど、今日は瞬間移動をマスター
しようね。少なくとも僕の部屋だけは完璧にね」

こうして今日の授業は始まった。

「あんまり歩きたくないけど、まずは飛ぶ部屋を普通に歩いて案内
するよ。そのほうが覚えやすいだろうから」

そう言つと部屋から出るために扉を開けてくれる。
なるほど、ドラクエのルーラと一緒にまず歩いていってみたいと

だめってことなのね。

エダが歩くのに私も後から続く。

ひさびさに歩くかも。また囲まれたら怖いけど、散歩できるのはうれしいな。

廊下はしっかりした作りの石壁で天井近くにたくさんの窓があるので、明るい光が差し込んでいる。ヨーロッパの昔のお城みたいだ。数分歩くも思ったとおり、数人とすれ違うたびに見られて話しかけられようとしたがエダがやんわりと断ってくれた。

よかった。本当にたよりになります！エダくん！

「まず、一番近いオリセントの部屋から行くね」

あ、昨日の大柄な戦神さんか。ちょっと顔こわい感じだったけど、歓迎してくれてたし仲良くなれるよね。

2つほど曲がったところにある大きな扉で止まる。ほんとうに近い。

「ここだよ。戦と癒しはつながりが必要なのでうらやましいことに部屋が近いんだよ」

あ、そうか。だから歓迎してくれたんだ。戦いのときに傷ついたら癒しが必要だから・・・。

なるほど、そういうことかな？

とんとんとノックするが返事がない。留守なんだろう。

「あー留守か。入らなくても大丈夫だからいつか。この場所を覚えておいてね。じゃあ次は僕の部屋ね」

そういつて数分歩くとまた立ち止まる。

「ここだよ」

そういつて開けてくれる。2日前にみた青で統一された部屋だ。なるほど。ここなのね。

「じゃあ最後はレイヤとゼノンのところね。ちょっと遠いからがんばってね」

はい。日ごろの運動不足を解消します。

そういつて彼の後を追った。

14・ルーラするには最初歩いていかなければいけません。(後書き)

ドラクエなつかしいです。いくつかはしました。PS2までの分で終わりましたけど・・・。ハード持っていないのであきらめました。テレポートはきちんと言えばルーラではありませんが、フウ力はそう感じたことでルーラと呼んでいます。

15・ラスボスの階（前書き）

サブタイトルへんなの付けるのが好きです。

作者が楽しんでるだけなので、みなさんはうっとうしいと感じるなら番号だけ見といてくださいね。

15・ラスボスの階

最古神の部屋は階段を昇らないとダメみたいだ。なるほど、ラスボスが最上階にいるのと同じ原理かな？

かなり細い螺旋階段を昇っていく。聞くと、階段をわざわざ使って行く神も精霊も少ないから狭いのだと言う。

ちなみに私たちの階が四階でここが七階だそうだ。昇った感触のわりに階段が少ない。一階一階の天井が高いからだろう。

廊下を歩くがさすがにここはだれも人が歩いてなかった。

「この階は2人の執務室と部屋しかないんだよ。こちらがゼノンの部屋ね」

しばらく歩くと大きな扉が見えてくる。そこでエダは軽くノックするが返事がない。留守のようだ。

「僕としてはうれしいけど、オリセントもゼノンもこんな時に留守するなんてついてないな。このままレイヤも留守かな？」

返事がないのでこっちを振り返る。すごく楽しそうな表情をしている。

できればレイヤはいてほしいけど。服のお礼も言いたいしね。あと、できればセクシー系控えめをおねがいしたい。貰っというてずうずうしいけど……。

レイヤの部屋はゼノンの部屋にすごく近かった。一つ角を曲がったらもう着いたのだから。

とんとん

エダが同じようにノックする。すると、中からがちゃつと開く音がした。

「ああ、エダ様ですか。レイヤ様なら中で書類と格闘していますよ」

そう答えてくれたのは随分大柄な男性だ。少し長めの金髪に朱金の眼をしている。

「やっぱいたか。ありがとう、ライ。彼女は・・・」

「フウカ様ですね。精霊で貴女を分らない者はいませんよ。ご光臨おめでとうございます」

後半はわたしのほうを見て軽く頭を下げながら言う。

慌てて私もお辞儀をしながら、

「あ、ありがとうございます」

と言うと、ライと呼ばれた彼はその行動に意表を突かれたような表情をした後、慌てて逆にもっと頭を下げた。そういえばセレーナにお辞儀したときも慌てられたっけ。

その様子を見てエダがおもしろそうに口元に手を持っていく。と同時にライの背中から盛大な笑い声が聞える。

「あはははは。おもしろいものを見た。ライが慌ててる姿なんか初めてみたぜ」

その口調と声で、姿をみえなくてもだれか分かる。案の定、部屋に促されて入るとお腹をかかえて笑っているレイヤの姿があった。

「よく来たな、フウカ。その服を着ているお前を見せに来てくれたのか？」

違います。ルーラのためです。まあ後でお礼はする予定だったからいいんだけど・・・。

「だがなんでストールなんか着ているんだ。もったいない。外してみろよ」

・・・。

やっぱりそれ目的ですか。

「スケベ神!!」

思わず本音が飛び出す。それにびっくりしたような顔をするのが言われた当の本人。鳩が豆鉄砲を食らった様な表情をしている。それに反して部屋にいた他のふたりは耐え切れないうように噴出している。

「いや、せつかくすばらしい姿なんだからあえて隠さなくてもって俺は思うだけで・・・」

レイヤは気まずそうにぶつぶつ言い訳のようなことを言っている。悪気ないのは分かるけど、セクハラになるよ、日本では。

「ちよつと露出の多い服は着慣れてないのよ。次、これ以上にそんな服くれても筆笥の肥やしにしちゃうからね!」

これだけは言つとかないと言う。あ、やばい。お礼言つつもりが文句になっちゃった。

「あ、ごめん。この服は露出多いけど金の柄とか触りごちとか、とても気に入っているの。ただ、じろじろ見られそうな服はさすが

に恥ずかしいから・・・」

なんとか機嫌を取るように優しく言うと、拗ねていた様な顔をしていたレイヤがすぐに機嫌よくする。

やっぱレイヤは顔にすぐ表情でるよね。純粹なんだなあ。

「エダ様も一緒に来られているとなると、他にも用事があったのではないのでしょうか？フウカ様」

一通り笑いを収めたライが聞いてくる。

「瞬間移動のためにとりあえず4人の部屋を案内しているだけだよ」

エダも笑いを収めたようにで私よりさきに答えてくれた。それでも表情は笑ってる。エダくん、笑い上戸なんだな。

「なんだ。そうなんだ。後の二人にも会いに行ったのか？」

レイヤがわずかに顔をゆがめてエダに聞く。

「いえ、行っただけど留守で会えなかったよ。二人はおいしいことしたね」

そう聞いてレイヤは同意するように大きく頷く。その後、思い出したように私のほうを見て怪訝そうに聞いてくる。

「っと。そういえば、オリセントからもう挨拶すんだと言ってたけど、昨日会ったのか??？」

昨日。そう聞いて考えるより早く顔に血が上ってくる。水で濡れ

た姿を見られたのを思い出したのだ。

下を向きながら顔を手で覆ってしまう。

「う、うん。助けてもらったから・・・」

その横でエダが軽く昨日のことを説明してくれた。聞き終わって昨日のゼノンと同じく不機嫌そうだ。ゼノンと違って顔に大きく不機嫌と書いている。こわいよ・・・。

「今日はみつちり教えておいてくれ、エダ。最低でも俺の部屋だけはきちんと頼んだぞ。気を感じるのはすぐ出来たからおそらく簡単にできるだろう」

レイヤはフウ力を凝視しながらエダに強くそう言っていると、横でエダも任せるとばかりに大きく首を振る。

今日はスパルタっばいです。

「フウ力。次そんなことやったらこの階に引越させるからな」

この階？

ゼノンとレイヤの部屋しかないのでは・・・。あ、使っている部屋がないだけか・・・。でもなんかそれはそれで怖い気がする。ラスボスの階は嫌だ。

「は、はい！がんばります」

優等生の返事をしてエダの服をひっぱりながらレイヤの部屋を出て行った。

これ以上いたら、なに説教されるかわからない。逃げるが勝ちだ。

15・ラスボスの階（後書き）

セクシー系ファッション。お水の服を参考にネットでしらべてしました。

ネットってなんでも調べれていいですね。

私はとても着れません。

次はいよいよルーラ実践です。ここまでへんに長かった。

16・ル―ラは能力あっても使えない場合があるのです。

「さあ。さっそく練習しよう。まずはここからゼノンの部屋の前の扉に行こう。昨日の跳んだ感覚わかるね？その感覚のままゼノンの部屋の扉と道をイメージするんだ」

レイヤの部屋の扉を閉じたところで言われる。なるほど。確かに近いから練習にぴったりだ。

「目を閉じて集中してね」

たしか、この道を曲がったところだよ。扉はすこし黒がかった・
・
・

次の瞬間、その場の気がぐにゅと音がするほど歪み景色が一転する。

できた！！

簡単、簡単！これでラスボスの階ひっこしは無くなるぞ！

「上出来、上出来！本当に飲み込み早いね。さすが、女神一の気の持ち主だね」

すぐにエダが追ってきてくれた。

「じゃあ次は僕の部屋かな。できる？」

階段を3階まで降りて廊下を・
・
・そう考えているうちに再び景色が一転した。

「え？どこどこ？」

周りを見渡せば、扉がたくさんある廊下にいることが分かった。えー。こんなものではなかったよね。エダの部屋。ってか自分の部屋ともちがう。

「貴女は！もしかして癒しの女神さま！」

一人の栗色の目と髪少年がいきなり声かけて近寄ってくる。

「えっと・・・」

ここの場所を聞こうと口を開くが少年は興奮して自分の話をどんどんしていく。

「とってもお会いしたかったです！本当にうわさ通り美しい方で、すばらしい気をお持ちなんです。ああ。俺もお仕えしたかったです。でも男はだめだってレイヤさまが・・・」

あ、圧倒される・・・。

まるで憧れのアイドルを見るような目つきで私に近づいてきている。その声を聞き、数人が扉を開けて私の姿を確認するとおなじように興奮して話しかけようとしていた。

こ、こわい。追っかけに見つかったような気持ちだ・・・。

「そこまで！気持ちは分かるけど、今日はもう連れて帰るよ」

救世主！

振り返ると、エダ先生が仁王立ちしている。

よく見ると、だいぶ顔つきが怖い。

救世主が怒ってます……。

有無も言わずに私の腕をひっぱり、抱いたと同時に瞬間移動する。

その場にいた者たちはしかたないとばかりに落胆するものの数人が興奮しながら会話をしていた。

「かつわいいゝ癒しの女神様なんだよね？なんてすばらしい神気なんだ……」

「話できたんだろ、お前！いいよな」

「男はだめなんてずっこいよな！。ノアやセレーナがうらやましいぜ」

精霊たちには所詮、女神は高嶺の花である。それでも彼らは思いかけずに見ることのできた、今は上位神たちがこぞって隠している深窓の女神に会えた僥倖に胸を躍らせていた。

気が付けばエダの部屋にいた。しかし何時まで経っても身体を離してくれない。

そんなに怒ってるの？

「まったく……。君は僕を本当に冷や冷やさせてばかりだね」

えっと……。

「さっきの所はどこ？」

おそろおそろ聞くと耳元で大きいため息と付きながら答えてくれる。

「1階の精霊たちの部屋だよ。あんなところに跳んだら瞬間に精霊たちに取り囲まれてしまうよ」

たしかにどんどん近寄ってきていた。エダがこなければ絶対そうなっていただろう。それは怖いかも……。

「なんで僕の部屋があそこになったんだい？」

いろいろ説明してて根本的に道が違っていることが判明した。そういえば私って一本道で迷うほど方向音痴だった……。駅の地下も標示が頼りで通ってたし、地上ではよく迷っていたのだ。

……。

その説明で気がぬけたようで私の身体に巻きついてた腕が解かれる。

すこし離れて彼の表情を窺うと思いつきり疲れたような顔色になっていた。

「ご、ごめんなさい……」

「いや……。仕方ないよ……。でも僕は最上階に君を送りたくないし、絶対瞬間移動は誰かがいるとこでしかしないほしい。呼んだらおそらく4人ともすぐ君の部屋に跳んで行くからね」

すこし苦笑しながら私の頭をなでくる。私には彼を弟のように感じてしまっているのだが、彼には逆に私が手のかかる妹のように感じるのだろうか。そんな扱いに思う。

その撫で方がやさしくてついそのまま甘んじて受ける。

「君を拾ってから毎日が刺激的だよ。ほんとうに」

うつ。たしかにエダにはしょっぱなからお世話になりまくっている。

「今度よかったら僕たちが出会った滝に連れていくよ」

喉の渴きを救ってくれたあの美しい滝を思い浮かべる。行きたい！きちんとあの景色を堪能したい。あの時は必死だったから楽しむこともできなかったし。

うれしそうにエダの顔を見ると、肯定の意を汲み取ってくれたよううでなでていた頭を自分の身体に引き寄せる。

え？なに？

暖かいものが頭の上に一瞬乗った。

頭に軽く口付けされたのだと気付いたのはしばらく彼の顔を見た後だった。

親愛のキスだろうけど、日本人には照れますってば！

「さあ。君の部屋に戻ろう。これから僕との時間のときは何回も廊下を歩いて早く道を覚えてもらおうよ。それまではがんばろうね」

こうして能力以前の問題で瞬間移動はお預けになってしまった。

後日他の3人にもこのことが伝わり、何度も部屋を往復するはめになる。

方向音痴と言う壁は神になっても越えれなかった。しかたないの
で体力でカバーすることとなる。

16・ル―ラは能力あっても使えない場合があるのです。（後書き）

実は作者がものすごい方向音痴です。1本道で迷う女です。

17・戦神の初授業（前書き）

サブタイトル・・・大柄な男性って変にかわいらしい時ってありませんよね？

17・戦神の初授業

今はエダに自分の部屋まで送ってもらって部屋で待機中だ。

次はオリセントが来てくれるらしい。

初対面で水浸しで会ってから顔を合わすのは初めてだ。どんな顔で迎え入れたらいいか困惑してしまう。

「気にしすぎたらだめだね。やっぱ最初にお礼を言って終わっておこつ」

そう考えていたときにちょうど、部屋の扉からトントンッとノックが聞こえる。

「はい！どうぞ」

返事をするに扉が開き、昨日会った戦神が部屋に入ってきた。今まで3人の神はいきなり部屋に入ってきたので、当然のことなのに彼がとても礼儀正しく感じた。

「あ、昨日はありがとうございました」

いろいろ聞きたいことあったが、質問より先にやはり礼を言う。オリセントは手を振りながら許してくれた。

「気にするな。助けることができてよかったよ。それより、3人にだいぶ怒られたらしいな。瞬間移動もなかなか難しいと聞いたが・・・」

「はい。特にゼノンに怒られました。あと、移動は・・・」

今日の練習のことを言うと、口元を押さえながらぷつと吹き出される。つい、笑われたことに軽く睨むと慌てて彼が謝ってきた。

「す、すまない。つい、その慌てる姿を想像してしまつて・・・」

オリセントのほうこそ、その慌てる姿が強面で身体の大きい彼に似合わず、変にかわいらしかった。こちらもつい笑つてしまう。私の笑い声を聞いて彼もつられて笑い出した。これでお互い様だ。

改めて彼の姿をみる。昨日はどちらかと言えば軍服のような服装だったが、今日はずいぶんラフだ。首のつまつた灰色の袖のない上着に白いズボン。そう言えば、彼は何色なんだろうか？そもそも私もそういう色つてあるのだろうか？

そう聞くと意外な答えが返ってきた。

「俺たちには色はないぞ。有るのは自然の神ぐらいだな。それに精霊もほとんどが自然でそれ以外の神は精霊との間の子になるくらいだぞ」

あ、なるほど。たしかに戦とか癒しとか言つても色はピンとこない。精霊もそうだ。

「酒の神には3人の子が生まれているがすべて酒の精霊になつたな」

お酒の精霊つてなんかおもしろいかも。ふと、自分ならどうなのだろうと考えて聞いてみる。

「じゃあ私が精霊と子供作つたら、癒しの精霊になるのですか？」

すると、オリセントはすこし意表をつかれたような表情をした後、すこし口元を歪ませて笑いながら答える。

「まあそうなるだろうが、神たちがそんな隙を作らせないだろう。俺もそれは阻止したいな」

え？

わからないと言うように顔を見上げるともつと説明してくれる。

「女神が少ないと聞いているだろう。それにフウカの神気が一番つよいとも。話した感じではレイヤやゼノン、エダまでこぞって興味持っているし、他の神も見られないだけに余計に興味津々だ。俺もできるなら立候補したいと思っているからな。精霊が近づく隙など作らせないさ」

あ、そういうことですか……。

女神は少ないから神が相手でないとして話なんだ。

しかし、4人とも気楽に口説いてくるなあ。子供がほしただけだろうし、あまり本気にしないように気をつけないと。彼らもそんなに本気ではないみたいだし。自分だけが本気になるのは悲しいしね。しばらくオリセントが私の姿をじつと見ていると、照れたように頭を掻きながらぼそつと言う。

「今日は光の服なんだな。似合っているが、そのストールはとらないようしたほうがいいな」

そう言われて思わず胸のストールを強く握る。やっぱり、そうだよな。さっきレイヤには脱げと言われましたけど。やはり彼はスケベ神だ。

「ただでさえ狙われやすいのに、一目みるだけで攫われてもおかしくないぐらいの姿するのは感心しないぞ」

.....

だからレイヤのせいです。慣れたらやはり自分で服は調達しよう。しかしゼノンにも同じようなこと言われたっけ。本当にここって貞操の危機を感じるなあ。

しばらくは4人と行動するみたいだから大丈夫だろうけど。

「と、与太話はこれぐらいにしといて。今日はこれから何を覚えない？ 知りたいことをなんでも聞きな」

オリセントは腰に手を当てながら聞いてくる。

「ん」。神としての役割かなあ。これから私は何をしていけばいいの？」

いつまでもみんなにおんぶに抱っこで相手してもらっているわけにはいかないだろう。今はまだ覚えることで精一杯だけど、癒しの神を待っていたと言ってくれているのだから、しなければいけない使命はあるのではないかとおもっていたのだ。

そついうと眼の前の強面の青年は、すこし目元を和らげしながら大きくうなづく。

「そいつは感心。ゼノンが人間界に連れて行ったと聞いたが、それでフウカの存在は人間に広く伝わっただろう」

それはゼノンに聞いた話と同じだ。

「もうすこし女神としての自覚と力の加減などが分かったら、辛いだろつが今の人間社会を知ってもらっつ」

人間社会……。これを戦神が言うのだ。辛いつてことはもしかして……。

不安そうに彼を見上げると眼を閉じながらこくりとうなずく。

「そうだ。今、人間どもは戦いに明け暮れている。大地と言う大地を占領しようと同じ人間同士で武器を持って争っているんだ」

戦争。

いままでの私の人生には話しだけで直接関わることの無かった言葉だ。

テレビや映画で見るだけで、実際人が亡くなる姿をみたこともない。

「癒しがなかったせいで、怪我人だらけでそれでも争いをやめない」

正直怖い。

なぜ私がと思ってしまう。

しばらくその場に沈黙が漂う。彼も私の言葉を根気良く待つてくれた。

怖いけどどこかで、この恐れが力の源になって大きな癒しを作ることができないかと感じているのだ。

「……分りました。正直、見たくない。でも見なければって感じています。次、オリセントが担当になってくれたときにぜひ連れて行ってください」

これだけ宣言するのにだいぶ時間がかかったが、それを告げた途端、腕をひっぱられ気が付いたら大きな胸に頬が当たっていた。抱き寄せられたのだ。

「すまない。正直女性に見せるものではないと分かっている。でも見ないことには癒しを施すこともできないだろう」

感極まったという感じでぎゅっと抱きしめる腕に力が入る。それに私を心配してくれているのすごく感じる事ができた。

「戦と癒し。切っても切れない間柄の神系だ。これからもそういう意味で仕事から一緒に行動することも増えるだろう。だから同じ同志として敬語でなく普通に話してくれ」

少し、抱きしめる力を緩ませ私の顔を覗き込んでくる。その表情がどちらかというと強面なのに色違いの目元がとても優しくなんだか可愛らしい表情になっていた。それを見るとこちらの気持ちも落ち着いてくる。

「うん。これから迷惑かけるだろうけど、できることはがんばるわ。だから隠さずなんでも教えてね」

「まだ会ったばかりだが、癒しがフウカってのは納得できるな。本当に俺は癒しの神を待っていたんだ。生まれてきてくれてありがとう」

その言葉にどれほど彼が癒しを待っていたか痛感した。

宣言したからにはがんばろう。彼のためにも。そしてまだ見ない私と同じ人間のためにも。

それがいまの私の存在価値なのだから。

17・戦神の初授業（後書き）

フウカは4人にかっちりガードされているので、精霊は近寄れません。エダの時は本当にイレギュラーです。

18・牽制・・・もとのお披露目の企画（前書き）

前半がレイヤの部屋で後半がフウカの部屋になっています。視点がころころ変わってごめんね。

18・牽制・・・もといお披露目の企画

ところ変わって最上階にフウカと関わった4人が集まっていた。

「そろそろ隠し通すのも限界か・・・」

ふつと聞こえるほど大きなため息をついてそう言うのは部屋の主のレイヤ。

「そうですね。あちらこちらから要望が出ています。神はもちろん、精霊たちからものです」

となりでは同じ顔をしたゼノンが書類に眼を通しながら答える。

「今日、瞬間移動したときに1階に跳んでしまったからだろうね・・・」

その様子を思い出したのか、すこし楽しそうにエダも後に続く。

その話をレイヤとゼノンが聞き、二人の表情もすこし柔らかくなる。

3人の会話を少し離れたところで、さきほどまでフウカと居たオリセントが何か考えるように腕を組みながら沈黙を守っていた。

レイヤはぶつぶつと考えを口にする。

「しかし、跳ぶのにまったく問題ないのに違う方向に跳んでしまうのは頭が痛いな。一応脅しているがもしへんな場所に跳ばれたら困るしな・・・」

フウカに脅した内容は何も脅しすぎではないのだ。十分考えうることだ。本人はまだ自覚がないがそれほどまでに彼女の存在は神や

精霊にとって、魅力的でなんとしても手に入れたいと思わせるものなのだ。

「しかたないから、牽制も込めて3日後ぐらいにお披露目をするしかないか・・・」

レイヤはそう言いながら面白くなさそうに他の3人をみる。

ゼノンとエダはそれにうなずいていたが、いままで黙っていた戦神が口を出す。

「すまないが、俺が彼女に教えるのはその後にしてももらえないだろうか？」

その言葉に他の3人ともが怪訝そうな表情をする。

いくら一緒にいる時間が少なくとも、彼が癒しの神を待ち望んでいたのはよく分かっていた。だからこそ、彼女との時間をもっと要望するはずだと考えていた。

「実は、さつき話したときに今度人間界の戦場に連れて行くと言うことになった」

その言葉にみな驚く。レイヤとゼノンだけでなく、エダも抑制させるために大雨を降らせに戦場に行ったことがある。血しぶきが飛び、人間だけでなく無数の生き物が悲鳴をあげて死んでいく地獄のような場所。とても女性に見せるものではないのだ。それを彼女は見るという。

「まだ女神になったばかりで、しかも人としての記憶があると言う。せめて数日は時間を彼女に与えたいが、俺が会いに行くとどうしても来てくれと言ってしまいそうになるんだ。3日後にお披露目ある

ならせめてそれ以降にしてやりたい」

彼自身、会ったばかりのフウカに対しての気遣いと、本来の神としての役割に挟まれて苦悩している。

「わかったよ。しばらくは僕たち3人でなんとかするしかないね。こればかりは彼女には酷だけど避けて通れる道ではないから・・・」

絶句して何も言えないレイヤに代わってエダ答える。レイヤとしてもゼノンとしても異論はなかった。

「頼む。そうそう。彼女にお披露目では今日みたいな服を着るなど言っておいてくれ」

オリセントは自分が言ったことで重苦しくなった部屋の空気をかえようと、わざとちゃかしたように伝言を頼む。それにゼノンがぴくつと眉を上げて反応する。今日会ってないのは閻神である彼ひとりだ。

「ほお。どのような服装でしたか？」

「光のなかなか官能的な服装だったぞ。レイヤ、お前の趣味だろう？」

そう言われて三人の眼が光の神に集中する。慌てて、レイヤは反論した。

「どんな服を着てもあの体つきは隠せないだろう。だったら別に問題ないじゃないか」

たしかに、どちらかと言えば大人しい形であった先日の水の衣装であっても、胸が強調されていてどこか色気を感じる服装になって

いた。

だが、だからと言ってあれは眼に毒だ。特に手を出すことのできない下位神や精霊たちを変に煽るのはよくないだろう。

「当日はおそらくどの系統にも入らない、白主体の衣装で少しでも身体のアインが隠れる服にするのが無難でしょう。侍女たちにそう伝えておきますよ」

ゼノンがそう言ってレイヤを見ると、最高神である光の神はわーったよと、すこし不貞腐れたように返事した。

そうして短い会議は終わった。

「と、言うわけで3日後にお披露目することになりました」

夕食食べようとしたところに、やはりいきなりゼノンがやって来て爆弾をかましてくれる。

と言っても、その前にセレーナが来ることを知らせてくれたりはしたけど。やはりあくまでもドアにノックはしない主義のようだ。

失礼。とだけ言って、すでに目の前の席に座ってお酒のグラスを片手に持っている。

「お披露目と言ってもたかが30人の神と数百人の精霊に姿を見せて、一言言っただけでこり笑えば良いだけなのでご安心ください」

安心できるかー！

知らない人・・・いや、神と精霊か・・・の前で何を話せばいいのか見当もつかない。

「私もレイヤもエダもオリセントもついてます」

うん。4人がいてくれないと、足が震えて絶対立つこともできないと思う。

「もちろん、私たちもついてますよ、フウカ様」

ゼノンと隣で給仕していたセレーナが、にこやかに笑いながらそう言ってくれる。

「当たり前です！おそばを絶対離れませんわ！でもフウカ様のお披露目なんて素晴らしいです。当日がたのしみですわ」

飛び跳ねそうなほど楽しそうにノアが言う。二人の気持ちは心強いが到底まだ楽しみだなんて思えない。

「で、衣装なんだけど、この時ばかりは偏った系統の服を着るのもどうかと思うので、白の衣装にしてほしいのですよ。セレーナとノア、手配おねがいできますか？」

ゼノンが二人にそう言うと言息を合わせたかのように即答で、

「お任せください」

と見事にはもる。すごい。息ぴったりだ。

でも、白でないとだめなんだ。ウエディングドレスみたいなものになるのかな？今日みたいにセクシー系はやめてほしいな。

「できるだけ身体のラインを出さないものにしたほうがいいですよ。今日のフウカの姿は3人が言うようにとても艶やかですが、他の神にまで見せる必要ないですからね」

よくみるとゼノンの視線が私の胸元に留まっている。ストールで隠れているはずなのに視姦されているよう感じてしまうのはなんだろう。恥ずかしくてつい、目の前の盛られた果実を動かして隠す。

「明日には数着ご用意できますので、フウ力様に選んでいただきませう。フフフ。ほんとう楽しみです」

ノアがかなり気合をいれて返事をしていた。まあ選ばせてもらえるのはうれしいや。ラインでないのも望むとこだし。

「服はいいとして、本当に何をしたらいいの？その場で」

そう。服装なんかより問題はあいさつだ。絶対あがって何も話せなくなるよ。

「普通に癒しの女神であると言うことと名を名乗るだけで大丈夫ですよ。後は私やレイヤがフォローしますから」

フウ力ですと言っただけでいいのか。それならなんとかなるかな。

「会うたびに自己紹介するのも大変でしょうし、それを一回で済ますためだと考えてみれば楽ですよ」

ゼノンはなんとか尻込みしている私に行く気にさせようとフォローしてくれる。

まあいつかは挨拶しなければいけないのだから仕方ないか。

「それにそのときに女神たちとも会えますよ？」

あ、それはうれしいかも。やはり同性の友達がほしいし、この世界のことを女神さんたちにも聞きたい。

「ダリヤさんだっけ？大地の女神さんには会って話したいな」

そういうと、おかしそうに笑いながら、

「じゃあ必然的にジューンとも話すことになりますよ」

と、火の神のことをちやかす。

そんなにべったりなんだ。

それを楽しみにするしかないね。がんばって念のため挨拶を考えておこつと。

こうして結局今日の夕食もゼノンと一緒に食べることになった。

1人より2人のほうが楽しいから私はうれしかったけどね。

18・牽制・・・もといお披露目の企画（後書き）

ちよつとだらだらした文章になってきちゃったなあって思っています。

そろそろ動きを書きたいよ。

関係ないけど。だんながレバニラを食べたいと言ってきました。

わたしはレバー好きでないけど妊婦なんで必要だしがんばって今日挑戦しようと思います！うまくできるかな。

19・当日の衣装合わせ。主役は人形です。(前書き)

サブタイトル・・・ほっぺにチュウチュウ

19・当日の衣装合わせ。主役は人形です。

それからの二日間、衣装合わせが大変だったな。

当日ノアに化粧してもらいながら思い出す。

日々の授業が午前中だけになり、午後からはノアとセレーナがはりきって何枚ものドレスを持ってくる。私だつてきれいな物好きだけど、自分が着せ替え人形になるのは1時間が限度だ。しかし侍女たちは妥協をゆるさない。結局二日間かかってしまった。

結婚式の衣装合わせもこんな感じなんだろうなあ。結局まったく縁なかったけど・・・。

「でも、正直フウカ様に化粧は必要ないですわね。ごくごく薄く塗る程度で十分ですわ」

ノアはそういって、本当に軽くファンデーションをぬってくれる。確かに今の顔は十分派手なのでいらなくとも。癒しの力のせいかもしれないし。

「できましたわ」

艶やかなピンクの口紅を筆で塗りあげ、私の顔のできばえに満足そうにうなづく。

つづいてセレーナが髪を結ってくれる。

はい。今日はお二人のお人形と化します。

サイドの髪を編みこみにして、一部を流す感じにしてもらう。髪にはスミレのような花が散りばめられている。

そつえば衣装合わせの時にセレーナが、

「ドレスは真っ白なので当日は頭飾りや胸元にフウカ様の眼の色のスマイレをつけようと思っています」

とか言ってたっけ？

今さらだけど、自分の髪も眼も黒でないことを思い出した。言われて鏡をみると腰まである白金の髪を綺麗に編まれサイドにたらし、紫と金のオッドアイの美少女が真っ白のドレスを着ていた。化粧はほんとうにうつすらとだけど普段より口元が濡れてて色っぽくなっている。

2日かけて結局選んだのは、上品なすそ広がりロングドレスだ。両肩はでているが、前が首から胸までレースで覆われている。胸元には紫の花のブローチ。前の飾りはそれだけではかなりシンプルだが後ろは腰のあたりで大きなリボンがあり、そこから何重にもレースがすそに向かって広がっている形だ。

もちろん、色はオフホワイトだ。まさにウエディングドレスのような感じ。前が開いてないので大きな胸はだいぶ目立たなくなっている。

しかしこの女の子腰ほそ！コルセットもまったくつけてないのだ。

私にはそう感じるぐらい、まだこれが自分の姿だと認識できていない。

隣でノアがうつとりと私の姿を眼を潤ませながら、惜しみないばかりの賞賛をくれる。

「普段から素敵だと感じていましたけど、本当に今日のお姿は美しいです！皆様の視線はフウカ様に集中すること間違いないです！」

え！それはやめて。唯でさえ緊張しているのに……。

「本当にすばらしいですね。わたくしが男だったらって思っていますもの。でもそれならお側によることもできなかったでしょうけど」

セレーナまでどこか夢んでいるような表情でこちらを見ている。

と、そのとき部屋の空間がぐにやりと歪む。

私はそれをなぜ分かるようになっていた。だれかが瞬間移動したときに起こるものだ。しかし今日は二つのそのゆがみがある。

そう思った次の瞬間には二人の同じ顔をした青年がこちらを凝視していた。予想通りレイヤとゼノンだ。おそらく同じ系統のこの侍女たちが声かけたのだろう。

「これは、これは……。想像以上の出来栄ですね」

ゼノンが腕組をしながら軽く頭を上下してうなずいている。

「かー！他の奴等の反応が予想できて怖いぜ、まったく！」

レイヤはレイヤで頭を掻きながら言っている。

「ああ、失礼。とてもお似合いですよ。惚れ直しました」

ゼノンがにこやかに笑いかけながら褒めてくれた。しかし、惚れ直すって……。惚れてもないくせによく言うよ。

日本にいればホストが天職だなあ。

そう考えることかわず。

「あ、ありがとう。えっと今日はよろしくおねがいします」

今日は私のお披露目だと言う。だからお礼とお願いをする。どん

な流れなのかわからないから二人が全て手配してくれたのだろう。
つくづく自分は4人に助けられているのだなあって実感する。

「言ったと思うが、最初に挨拶するだけで後は声かけられたら適当に流していたらいいし、しんどくなったら俺らでもエダやオリセントでもいいから振ったらいい。そんなに硬くなるな」

レイヤが優しい眼でこちらを見ながらそう言う。それで自分が緊張で硬くなっているのに気がついた。

硬くなるなって言われても無理です！でも、がんばるしかないもんね。

「今日終われば後は楽ですからね」

ゼノンもフォローしてくれる。

しばらく深呼吸したりと気持ちを落ち着かしているとセレーナが声をかけてくる。

「フウカ様。そろそろお時間です。会場では今か今かと皆が待っている」とワトンが申しております」

「仕方ないですね。じゃあそろそろ、移動しましょう」

そう言うとともにゼノンは姿を消す。移動したようだ。今回はレイヤが連れて行ってくれるようですね。すぐに私に近づいてくる。

「よし、フウカ。俺につかまれ」

伸ばされた腕に手を乗せると、もう片方の手を肩に回される。しかしすぐには移動しないでその状態で私の顔を見つめている。

「その姿、ほんとうに似合っている。見せるのが惜しい位だ」

そう言ったと同時に私の頬に一瞬だが暖かいものが当たる。

「え！」

「緊張ほぐしだ」

びつくりして犯人である金色の青年を見るがわざとこっちを見ずに横を向いている。

いまのは……。

まさか……。

ほっぺにキスされた！

目の前の青年も照れているみたいだけど、そうされるとやられた私のほうがもつと照れてしまうよ。

「じゃあ行くぞ！」

何かを言う前にとっとと移動されてしまった。

前も同じようなことがあったよね……。

レイヤのキス魔め！

と実際に怒る暇もなく、結局心の中で思うしかなかった。

19・当日の衣装合わせ。主役は人形です。（後書き）

すこし短くなつてすみません。話の都合こうなりました。

しかし、ほつぺにチュー……。

いやーん。作者も書いてて照れてしまいます。どうせならきちんとしたキスにしたほうが照れなかったかもって思っちゃいました。小説を書いていると実の姉にだけ言ってるのですが、見たよって言われるとちよつと照れますね。特にこんなシーンを見られると余計に照れちゃいます。ちなみに学生のころから小説の設定考えたり書いたりしたのは、この姉の影響です。

20・挨拶&姉さん登場（前書き）

20・挨拶&姉さん登場

周りの景色が一転する。

その瞬間、いきなり大きなざわめきが聞こえていた。辺りを見渡せば……

人！人！人！！

そこは大きな会場。

私はレイヤに支えられる形でその場の上段にいた。そのすぐ下では25人ほどのとても優雅な服装をした人々がこちらを見ている。さらにそれからだいぶ下った所には軽く200人は越える人がやっぱりこちらを見ている。

は、恥ずかしいし、足が震えるよ！

人といつても神が精霊なんだろうけど、何百という眼が自分に集中する経験なんかそうそうしてないもん。

でも抱えられているこの姿はもっと恥ずかしいと思出し、そつとレイヤの腕から離れて震える足を叱咤しながら1人で立つ。

「みんな、よく集まってくれた。いまから新しい神の紹介をするから、すこし静粛に」

隣でレイヤ軽く腕を上げて言うとい瞬でざわめきが消える。

あ、ここで自己紹介すればいいのね。眼で確かめるとレイヤが軽くうなづいてくれる。

まずは軽く深呼吸する。よし！

「本日は私のためにお集まりくださりありがとうございます。癒しを司っております。名前をフウカと申します」

まるで小学生の紹介みたいだけど、これでも必死に考えた紹介だよし、ここまで言えた。問題はここからだ。

「私は皆様と違って人間としての記憶があります。レイヤにもつらにならずに消すと言って頂いていますが、できればこのまま神としての役目を果たしたいと思っています。だからこそ神として足りない部分が出てくるかもしれません」

実際ルーラできないし・・・。

隣ではレイヤもゼノンも固唾を飲んでこちらの話を聞いている。この話を私からするとは思ってなかったのだろう。それでも私はするべきだと思った。それがけじめだ。ゴクンと唾を飲み込んで話を続ける。

「それでも今はこの記憶が不必要なものと思いたくないのです。それによって今後、皆様方に何かとご迷惑おかけするかもしれません。ご指導のほど宜しくお願いします」

そこで大きく頭を下げる。

しばらく沈黙が漂う。

やっぱこの話するのは変なことだったかな？

そう後悔しかけた瞬間、割れんばかりの拍手が会場を埋め尽くす。ああ・・・なんとか言い切れた！顔を上げると近くでエダもオリセントもよくやったとばかりに微笑みながら拍手してくれている。

「6人目の女神の誕生です。それも待ち望んでいた癒しの女神です。みんな歓迎してくださいね」

レイヤと反対側の隣でゼノンが言う。決して大きな声ではないのによく通る声で止みそうになった拍手がもう一度復活した。

歓迎してくれていると感じる。それは純粹にうれしかった。

自然に口元が緩む。気がついたら笑顔になっていた。

「じゃあしばらくはこの場で立食会とするからおのおの好きなようにしてくれ」

ここで、曲が流れ始め立食パーティーになる。

ふゝお役目ごめんかゝ。助かった！

「がんばったな、フウカ。立派な挨拶だったぞ」

一番にそう話かけてくれたのはオリセントだ。

「すごく緊張したんだよー。みんなの眼がこっち向いてるからちよつと足が震えちゃった」

「そんな感じまったくなかったよ。かまずにすらすら言ってたし」

横からエダも来てくれて労ってくれた。しかし二人と話できたのはここまでだった。隣にいたレイヤが二人に何やら耳打ちすると私の腕を掴んできたからだ。

「フウカ。すこし悪いけど来てくれ。ここにいたら絶対いろんな奴が近寄ってくるからな」

そう言って有無の言わさずレイヤに引っ張られたと思うと景色が一転した。

強引だなあ。

そう思ったのが伝わったように彼は軽く金色の頭を下げる。

「すまない。予想以上にみんなの関心を引いてしまったから、あれ以上あの場にいたらやばかったんだよ」

えー。人を1人1人見る余裕なかったけど、そんな雰囲気まったくなかったけど・・・。

まあ知らない人に囲まれて質問攻めは遠慮したいからよかったのかな？

「1111はどう？」

気を取り直して辺りを見渡すが、レイヤの部屋でもエダの部屋でも私の部屋でもない小部屋だった。長いすが2つとそれと同じ高さの丸テーブルがあるだけで殺風景な部屋だ。

「さっきの会場の隣の控え部屋だ」

レイヤが長いすに座るように促してくれる。素直に座る。人の眼が無くなり座った途端、思い出したかのように疲れが出てきた。

「あの挨拶は素直な気持ちが出ていてよかった。格式ばった言い方でなく自分の考えを正直に言ってたな」

そう言いながら、彼は私の頭を撫でながら褒めてくれる。

記憶のこと言ったらだめでなくてよかった。だめって言われても言ってたかもしれないけど。

「あらー。レイヤのそんな顔はじめてみたわー」

そこにいきなり女性の声が響く。

気がつくと、3人もの人が私とレイヤをたのしそうに見ていた。

1人はゼノンだ。そしてあとは知らない男性と女性。

さきほど声をかけてきた女性はずいぶん背の高いスレンダーな美女だった。栗色の短い髪に同じく栗色の瞳。ダークブラウンのマーメイドドレスを着ている。

うわぁーすごい迫力ある人だ。

眼は切れ長だが、今は優しい輝きを見せてくれている。薄いが大きめの唇は真紅の口紅を塗っていて本当にきれいだ。

お姐さんと呼ばれるのが似合いそうな容貌。

その彼女の隣には真っ赤なウルフカットの少年がいた。瞳も燃え上がるような真紅だ。

もしかして……。

「はじめまして、フウカ。私は大地の女神のダリヤよ。さっきのスピーチはすばしかったわ」

やっぱり！とっても想像通りの方だ。

「よう！俺はジューン。ダリヤの伴侶で火の神だ。よろしく」

えー！彼が熱烈にダリヤさんに求愛して、彼女が根負けして夫婦になった火の神？？？オリセントのような大人の男性をイメージしていただけに思わずびっくりしてしまう。

だって若いと思っていたエダより若く見える。人間で言うところの16才ぐらいに？20代後半ぐらいの外見の彼女とはどうしても禁じられた恋の雰囲気になってしまう。

「フフ。正直な子ね。ジューンの姿にびっくりしているのね？」

あ……。何も言わずにじつと見つめてしまつてかなり失礼なこ
としちゃった。あわてて椅子から立ち上がる。

「ご、ごめんなさい。夫婦と聞いて、お二人にとてもお会いしたか
つたです。フウカと言います。よろしくおねがいします」

真っ赤になりながら大きくお辞儀する。

「貴方たちが今まで隠していたの分かるわ。ねね、フウカ。私の
ことお姉さんって呼んでくれないかしら？」

えー。姉妹ごっこ？

確かに目の前の美女に姉さんってのはよく似合う。正直姉御のほ
うが良く似合っているけど。

中身は三十歳のわたしにはすこしきついけど、たしかにこの外見
で生まれたてとなればそう言っても普通なんだろう。

「えっと……。ダリヤ姉さん……」

恥ずかしながらもがんばってそう言つたとたんに、がばつと音が
出るほど勢いよく美女に抱きしめられる。

「いやあゝん。かつわいい！私が男だったら絶対離さないわ」

あ……。良い匂い。

彼女からほのかに香水の匂いがする。きつくもなくさっぱりした
シトラス系の香りだ。

「こら。ダリヤ。フウカが困つた顔しているから離してやれ！」

レイヤが私の腕をひっぱってダリヤから離す。
いや、べつに女性に引っ付かれるのは大丈夫ですけど……。

「ふふ。独占欲丸出しにしちゃって……。ごめんね、フウカ。あまりにも可愛くて。会いたいと言ってくれてうれしいわ。他の神たちは悔しがるでしょうけどね」

あー。もしかして会いたいと私が言ってたから、ゼノンがわざわざ連れてきてくれたのかな？感謝をこめてすこし離れたところにいる黒髪の青年に微笑むと、彼も同じように返してくれる。

ダリヤが楽しそうにそう言うのに、今まで黙っていた隣の紅い髪の少年がうなずきながら同意する。

「そうだな。ベルやアトラスが一番に話かけようと気合入れていたからな。レイヤにとっとと掻っ攫われてかなりくやしがつてたぞ」
「あのままだと、フウカがいろんな奴に囲まれてえらい事になるのが眼に見えていたからな。ここに連れてきて、せめて順番に挨拶する形にしないとかわいそうだろう」

そうだったんだ。たしかにここで少しずつ話させてもらえるのはうれしいかも。一気にいろんな人に囲まれてお話するのは難しいもんね。

と、そこである異変に気がついた。

気を見えるようになってからゼノンやレイヤの気を、自然に感じ取ることができるようになっていた。現に今日初めて会ったジューンの気も真っ赤な気を感じる。でも、ダリヤの気は少し違っていた。茶色と黄色の間のような大きな気の中に、マールのように茶色と赤の混ざり合った気を感じる。今までどこまでいろんな色が混ざった気ははじめてみた。色がないと言ってたオリセントでも灰色があった気で一色だったし、私の気もクリーム色のような白一色だ。

「あ……。あの。ダリヤさんの気はなぜこのような色になっているのでしょうか？」

どうしても聞かずにいらなくて、直接本人に聞いてしまう。すると、より一層微笑みながら自分の気を優しくなでながら教えてくれる。

「だから、姉さんって言うてね。私は今、妊娠中のよ。あと数日以内に産まれるわ」

え？妊娠中？まったくお腹膨れてないよね？
思わずお腹を見てしまいがくびれもばっちりでまったく膨れていない。

「もしかして、人間の出産と同じように考えている？？私たちはまったく違うわよ」

驚くことに神は1週間ほどで産まれるらしい。妊娠する確率は人間より少ないが、できれば気がいまのダリヤさんのように交じり合い、徐々に自分の色とその子の色に分かれいつて、最後にそれが分離して産まれるという。そしてその姿は赤ちゃんの姿ではなく、大差はあれどそれなりに成人しているらしい。

すごいなあ、それは。私が子供産むときもそうなんだあ。不思議。
「びっくりして言うの遅くなりました。本当におめでとうございませす。ジューンさんと、えっと……。ダリヤ姉さん」

お祝いを口にするとジューンとダリヤはお互いに眼を一瞬合わせ、それからダリヤが軽く私の頭を撫でながら微笑む。

「ウフフ。ありがとう。貴女の次の31番目の神になるから仲良くしてあげてね」

そっか。私の弟か妹のようなものなんだ。ちょっとうれしい！

「ぜひ、産まれたときに会わせてくださいね」

「ありがとよ！癒しの女神から祝福があるのは何より縁起がよさそうだし、俺は大歓迎だ」

ジューンも笑顔満開で言ってくれる。本当に仲いい感じだなあ。もし恋愛するならこんな関係が憧れる。まだ相手の見当もつかないけど。

「あーうぜえ。次から次へと会わせる会わせると・・・」

今まで端で黙っていたレイヤがいきなり声を発する。

「こっちにも来てますね。どうします??気分わるくなったって部屋に隠れてしまいます?」

ゼノンがなかなか黒い案を述べる。

さすがにそれはまずいのではないかと・・・。

「ダリヤ姉さん、ジューンさん。今日はありがとうございました。またぜひ会ってじっくり話させてください」

とりあえず、二人にはお礼を言う。もっともっとお話したいけど無理そうだ。次にレイヤとゼノンを見る。

「レイヤ、ゼノン。よかつたらその方たちとも会わせて。私もそんなにいっぺんに会っても覚えられないけど、会いたいと言っているのにずるするのは失礼だから」

人数が何人かわからないけどなんとかするしかないと思う。

「大人数でいっぺんに来られても困るけど、2、3人ずつ少し挨拶する程度なら二人がそばに居てくれてたら大丈夫だからね」

そういうと、じゃあまた絶対会いに行くわと言い残して、美女と少年の夫婦はその場から退出してくれた。

「じゃあ3人ずつ順番に呼ぶぞ。たしかにいつかは挨拶しないとだめだしな。たいへんだろぅが、がんばれ！」

レイヤが応援してくれると続いてゼノンまで心強い言葉をくれる。

「私たちが付いてますので大丈夫でしょうけど、変なこと言われたりされたときは我慢しないでくださいね」

この二人がいる空間でなにかする者がいるのでしょうか……。気がわかるようになってどんなに格別な存在かわかるようになった私はついそう思ってしまう。

「じゃあお願いします」

こうして神々との初対面は流れるように始まる。

20・挨拶&姉さん登場（後書き）

ようやく姉さんを出せました。このお披露目は正直、姉さんと会わせるためです。

年の差カップルって好きです。かつこいい姐さんと少年の組み合わせってよくないですか？

いつか2人の話も番外編でも書いてみたいです。リクエストがあれば頑張ろうと思います。

21・眠れない夜はご注意を

「今日はお疲れだな。うまい物食ってゆっくり休んでくれ。明日は休みにするから好きなことしてくれていいぞ」

そう言ってレイヤが部屋まで送ってくれた。

いつもどおり、軽いお食事と入浴をすませ、大きなベッドに入りながら今日の出来事を振り返る。

挨拶後に、小部屋でまず大地の女神と火の神様がきてくれたっけ。いい感じの夫婦だったな。ちよつと外見上年の差カップルだけど。

「よし！明日はさっそくダリヤ姉さんに会いに行こう」

もうすこし、妊娠のことやここの恋愛観など教えてほしい。

そしてその後は怒涛のごとく、いろんな人が挨拶にきてくれた。

正直だれがだれか一度で覚えることができそうにないけど、3人の女神たちは覚えることができたぞ。

愛の女神のビュアスは本当に妖艶という言葉が似合いそうな美女だった。完璧な体つきも私より長身なのでもっとボリウムあるように感じる。

知恵の女神イザラは隙がまったくないような才女だった。一見怖そうだったけど、話したら一番分かりやすく説明をしてくれた。

花の女神フローラはこんな小さな子がいるんだと驚くほどの美少女だった。14歳ぐらい。もともと精霊だったけど樹木の神がどの精霊よりも可愛がったためか、ある時いきなり女神に変貌したとか・
・。

そんなこともあるんだと感心してしまった。

あと、月の女神がいるらしいけど、会うことはできなかった。残

念。

神たちはなにやら熱心にこちらに話しかけてくれたけど、さすがに多すぎてもう一度会わないときちんと覚えられませんか。

いろんな種類の神がいるんだなあって思うぐらいかな？

商売や泥棒の神までいるのにはびっくりした。

しかし・・・色々思い出しちゃって眠れない。

身体は疲れたが、やはり人に見られすぎて気が立っているようだ。

「けっこう寝れるほうだと思っていたんだけど・・・」

どうしよう。こんな夜更けに外散歩するのは駄目だね・・・。

だれか起きてないかな・・・。

セレーナが気で起きているかどうか分かってたのを思い出して、ちよつと試してみる。

えっと・・・じゃあまずはゼノンでやってみよう。黒だから分かりやすいよね。

眼を閉じて集中しながら探してみる。

・・・

あ、いた！

「でも、起きているかどうかってどうやって調べるのだろう？」

そうだった。それを知らなかったらわかるはずもない。

と、諦めて目を開けた瞬間、黒い瞳のギリシャの彫刻のように整った顔が視界を塞いでいた。

「っ！」

あまりにもびっくりしすぎて声もでない。

「こんばんは。夜這いしに来てくれるとはうれしいですね」

こぶしぐらいの距離しかなかった彼の顔との距離を、さりげなく空ける。

「あ、あれ？」

それによつて広がった風景が今まで居た自分の居室と、違うことに気が付いた。シンプルだが大きな寝台。
その上に私と彼は寝そべっていたのだ。

「ぜ、ゼノン……。なんで私ここに？」

慌てて起き上がる。何が起こったのかまったくわからない。

「それは私が聞きたいですね。いきなり君が跳んできたのですから笑いながらそう言われて思い出す。そういえば、ゼノンが起きているかなあつて気を探してて見つけたと思つたら……。」

「もしかして、ゼノンの部屋に移動しちゃった？」

よく見ると彼のかつこうは黒が主体のロープだ。寝ようとしていたのだろう。

「じ、ごめん。か、帰るね」

これでは夜這いと言われても仕方ないだろう。なんとか私の部屋を思い出そうとするが、腕をひっぱられて中断させられる。

「いえいえ、歓迎しますよ。夜這いでないなら、どうして来たのか説明して頂けますか？」

黒いオーラを帯びた笑顔でこっちを見る。顔が整っているだけに余計怖い……。

蛇に睨まれた蛙のように硬直しながら正直に話す。

「ね、寝れなくてゼノンまだ起きているかなあって気を探したの。で、気が付いたらここに移動しちゃって……」

ゼノンは説明を聞いてクスクス笑いながら私の肩に手を置いた。

「あいかわらず、無茶しますね。やっぱりこのまま私の物にしちやいましょうか」

そこでいきなり視界が反転する。

気が付いたときには天井と私を見下ろすゼノンの顔のアップが見えていた。

ベッドに押し倒されたのだ。

も、もしかして貞操の危機？

「ちょ……ちょっと……、まってよ。私はそんなつもりで来たのでは……」

必死になんとか思いとどまってもらおうと、言葉を探すが見つからない。

「こんな夜更けに、愛しい女性が自分の部屋に跳んで来てくれて、手を出さないほど腰抜けではないのですよ」

お願い！腰抜けでいてください。」

片手で私の肩を押さえつけながら、もう片方で私の顔をゆっくりと撫でている。

あまりにも優しげに触れるその手が、逆に怖い。私を見下ろしている彼の瞳を見ると、それはそれは楽しそうに輝いている。

「あ……えーと……」

なにか言おうとするが、顔を触る指が私の唇となぞるように触れていく。

そして自然に彼の顔が近づいてきた。

「！」

気が付いたら彼の顔はふたたび遠のいていた。

でも、唇に感じた柔らかく暖かい感触が残っている。

き……キスされちゃった。

呆然していると身体に感じていた重みがなくなる。

「これで許してあげましょう。本来なら遠慮なく頂いてしまいたいのですが、嫌われたくないですしね」

クスクス笑いながら、私がベッドから立ち上がろうとするのに手を差し伸べてくれる。

だ、だれが手を取るか。

その手を無視してがんばって一人で立ち上がる。

「クス。そういう挑発的な態度が余計に煽っているってわからないのですね」

ゼノンが空振りされた手を戻す。

「眠れないって言ってましたね。じゃあキスを頂いたお礼に特別にこれをあげましょう」

キスはあげたのではなく奪われたのだから！

つい本音でそう言ってしまつと余計に楽しそうに笑いながら、何かを差し出してくる。

なんだろう？

手を出して受け取る。

それは小さな濃い緑の巾着袋だった。なんだろうと触っているとふわっと匂いがする。心が落ち着きそうな森林の香りがする。

あ、匂い袋かな？

「それは眠りの匂い袋ですよ。私の気も入ってますので効果は高いと思います」

なるほど。闇の力が入っているとは寝やすそうだ。

「ありがとう。でも、いきなりのキスは駄目だからね」

私も一応数えるほどだけど経験あるからキスぐらいと思うし、第一それなりに好意を持っている相手だから嫌悪感を感じることはないけど、やっぱり好きになってからしたい。

「おやおや。思ったより冷静ですね。人間のときは除外して女神になつてからだれかにされちゃいましたか？初めてを頂きたかったのですが・・・」

顔をふたたび近づけて真剣に聞いてくる。

「や、やってないわよ」

そういうと心のそこからうれしそうな笑顔で見てくる。

だ、だからその笑顔は直視できないのよ。まだ黒い笑顔のほうが
ましだ。

「それはよかったです。もし肯定されたらやはり大人のキスをさせてもらおうと思ってましたから・・・」

ひ、否定できてよかった！

「さあ。部屋まで送りますよ。もっともここで寝たいと言うなら大歓迎ですけど・・・」

帰ります！ぜったい帰ります！

思いつきり首を左右に振って断る。

結局部屋まで送ってもらい、もらった匂い袋を枕元に置いてベッドに入る。

キスされたことを思い出し逆にしばらくは寝れなかったが、気が付いたら朝になっていた。

なかなか威力のある匂い袋だ。

でも・・・これ見るたびに思い出してしまいそう。

結局、眠れないときだけお世話になると、ベッドサイドの机にしまうことにした。

21・眠れない夜はご注意を（後書き）

初キスはゼノンになりました。おかしいなあ、レイヤの予定だったのに……。ゼノンがどんどん黒くなる。優しい闇の神の予定が・・。

前も書いたけど、小説は生き物です。作者の思い通りになりません。そういうところが面白いと開き直っています。

22・弟の誕生！（前書き）

サブタイトル・・・男たちにとってはライバル誕生ww

22・弟の誕生！

次の朝、セレーナとノアにひとつ思いついたことを頼んでみる。あつさりと肯かれて昼前にはそれをたくさん用意してくれた。その中から私好みの奴を選ぶ。

それから昨日あったダリヤの部屋を教えてもらった。

ふむふむ。意外と近いんだ。よかったよかった。

部屋をでて人に見つからないようにこそそと廊下を歩く。結局2、3人にはすれ違ってしまったけど逃げるように挨拶のみして通りすぎた。

上出来、上出来。

そしてダリヤの部屋に着く。ノックして名乗るとバタンツと勢いよく扉が開く。次の瞬間にはむぎゅゅと抱きしめられていた。

「フウカちゃん！本当によく来てくれたわ」

部屋の主のダリヤが熱烈な歓迎をしてくれたのだ。

「お話がしたくてきました。よろしいですか？」

ダリヤは無言で抱きついたまま部屋へ入れてくれる。暖かい雰囲気の家具が置かれている。木のぬくもりを感じるようなテーブルに椅子。壁際には長いすがあり、紅い髪の少年が半分寝そべって書類を眺めている。

「よう！さつそくきたんだな」

入ってきたのが分かったのか軽く視線を上げてこっちを見、声をかけてくれた。

「おはようございます、ジューンさん、ダリヤ姉さん」

うわさどおり、一緒にいるんだなあー。さすが夫婦。

「フウカちゃんはお茶とか甘いものとか好きなほう？」

お茶を出してくれるのかな？　そういえば神は必要ないって言うてたっけ？

「大好きです」

「フフ。よかったわ。ジューンはお茶は飲むけど、甘いものは一切食べてくれないのよ。だからって1人で食べてもつまらないしね」

そう言うときの瞬間、テーブルにとっても可愛いティーセットとバウンドケーキのようなものがセットされる。
やっぱりアラジンの魔法のランプだね。

「ささ、座って。わたしのラー茶は好評なんだから」

ラー茶とは知らないお茶だ。やはり人の飲み物とは違うんだなっと思う。といっても異世界だからこちらの人の飲み物もよく知らないけど。

「ラー茶とはラーンという花を乾燥させてから、粉にして湯で溶いたものよ。そのままでもおいしいけど、こうしてシロップをいれるともっとおいしいの」

いれながら教えてくれる。ハーブティーみたいなものかな？
目の前にティーカップを置かれて、思わず可愛いとつぶやいてし

まった。きれいな金平糖のような色の飲み物でその上に2、3枚ピ
ンクの花びらが乗せられている。

「どうぞ、めしあがれ」

自分とジューンの分も用意してから席にすわる。

みんなが座ったのを見てからおそろおそろ口にしてみた。

「お、おいしい！」

ローズヒップティーのようなおいしさ。いや、このお茶はそれ以
上だ。さっぱりとしていて、いままで飲んだこと無いほどおいしか
った。

「ふふ。気に入ってもらってよかったわ。ジューンもこれだけは
好きで毎日飲んでいるのよ」

そう言われて横見るとジューンは書類を見ながらだが、味わうよ
うにゆっくりと飲んでいる。

「あ、なんだ？呼んだ？」

書類に集中してたみたいで、自分の名前が出て初めて顔をあげた。

「いいのよ。女同士の会話だから気にせずに仕事してて」

ダリヤはジューンにやさしくそう言う。

その眼がすごく優しく、こっちがうれしくなってしまう。
円満な夫婦って見るとこちらまで幸せになるよね。

「悪いな。レイヤの奴が緊急の仕事を回してきたから見ないとだめなんだよ」

あーそんなときに来てまずかったかな？そういうとダリヤが笑って否定してくれる。

「ジューンが仕事あるのに子供の誕生を見逃したくないからって、ここにいるだけだからいいのよ」

あーなるほど。ごちそうさまです。

「じゃあなんでも質問してちょうだい。女性同士だから聞きたいことたくさんあるでしょ？」

本当によく分かっていらっしやります、お姉さん。
と、遠慮なくいろんなことを聞いた。

「なるほど。恋愛についてね。私は出不精だしジューン1人でいいと思っっているから夫婦になっただけ、ビュアスやユリーナは数人恋人がいるわね」

ユリーナ？

ビュアスはあの妖艶な美女の愛の女神だったよね。そう聞くと、ああと思ひ出したように説明してくれる。

「ユリーナは月の女神よ。あの子は夜行性だから昨日は来てなかったわね。たしか今は3人ほど恋人いたと思うわ」

へえ。ギリシャ神話のアルテミスはたしか処女神だったはず。全然ちがうんだな。

「まあ女神が少ないし、そもそも全体的に神も女神も絶対的に足りてないから、何人恋人がいてもむしろ歓迎されるわね。自然に産まれる神がいつ産まれるかもわからないし、フウカの前に神が生まれたのは50年前だからね。恋人がいないことには神と神との間に子は生まれないから」

ダリヤはおかわりをみんなに注ぎながら教えてくれる。

「じゃあお二人の子と私がほぼ同じ時に生まれるって珍しいのですね」

なんせ1、2週間しか変わらないわけだ。

「フフ。そうね」

あ、そうだ。今渡してしまおう。

「あゝ。ダリヤ姉さん。これを良かつたらもっててください」

そう言ってクリーム色の小さな巾着袋を渡す。

これこそ、二人の侍女に用意してもらったものだ。

「あら？匂い袋ね。それに、あなたの気をすごく感じるわ」

ゼノンに昨日もらったものを参考にしました。さっぱり系の匂い袋で、この前オリセントの傷を癒したときのように気を送ってみました。

「私の世界では安産祈願としてお守りを贈ったりするのです。癒し

の祝福なら歓迎ってジューンさんも言ってくれてたし、気も付けてみました」

加減は分からなかったけど、なんとか気を匂い袋に移せたと思う。ダリヤがほんとうにうれしそうにその匂い袋を眺めて、それをぎゅっと握って胸元に持っていく。

「本当にうれしいわ。こんな素敵な贈り物はじめてよ」

予想以上に感激されたけど、何はともあれ喜んでもらってよかった。

そう思ったときだった。

ダリヤのマーブル状だった気が一気に膨れ上がる。異変に気が付いたジューンが一目散に書類を放り出して、彼女の肩を両手で抱く。

「ジューン！産まれるわ！」

「ああ。分かっている」

ジューンはそれに大きく肯き、椅子から慎重に彼女をゆっくり立たせて長いすに寝かす。

ど、どうしたらいいのだろうか。

そう思っただけよとした瞬間だった。

ダリヤの気が黄土色と赤茶色に綺麗に分かれて一瞬で分離したのだ。

離れた赤茶の気を中心に、瞬く間に赤茶の布に覆われた少年が現れる。眼もジューンと同じようなウルファットの髪も布と同じで赤茶色だ。

「はじめまして、母上、父上。それに癒しの女神」

外見は17歳ぐらいだ。背はもうすでにダリヤもジューンも越している。おそらくだけど180cmあるかないかぐらいだろう。体つきは少年らしく細めだが均整の取れた筋肉がついている。顔立ちはジューンによく似ているがたれ眼がちな火の神に対して、彼は猫っぽい目をしている。

「おめでとう、わが息子。よく生まれてきてくれたな」

ジューンがそう言うのとダリヤも少しでも自分の子を見たいようで、長いすから上体をゆっくり起こす。

「さあ、私に抱かせて頂戴。実感させて」

座ったまま両手を広げると、ゆっくり少年はダリヤに近づき優しく手をのばして抱擁する。

すごく感動のシーンだ。思わず涙腺が緩みそうになる。

しばらくダリヤやジューンと抱擁していたが、ただ立ちすくんでみていた私のほうを見て、にこやかに笑いかけてきた。

「ありがとう。君からもらった暖かい気に包まれてたから、とてもさわやかな気持ちで誕生することができたよ」

そう言われてうれしくて私も自然に笑顔になる。

「おめでとう！私はフウカよ。私も生まれたてなんで仲良くしてね」

情愛の意味もこめて軽く少年を抱きしめる。本当に弟が生まれた気持ちになってくる。

しばらく抱き合っていると突如、一部の空間が歪む。
あ、だれか来るんだ。

「ああ、きたか。さっそく、レイヤ。名をつけてくれ」

そうジューンが言ったときには私の目の前に光の神が立っていた。

「おめでとう！ダリヤ、ジューン。そして火山の神、ウリュウ。ようこそ神の国へ。歓迎するよ」

火山の神なんだ！なるほど。大地と火の間の子だからぴったりだね。そういえば名前はレイヤかゼノンが付けるって言ってたっけ？

「おめでとう！ウリュウ」

抱きついてた手を離して、少年の顔をじっと見ながら祝福の言葉を言う。もちろん、いま付いたばかりの名前で呼んでみる。

そうするとうれしそうに眼を細めながら一度無言でうなづいてくれた。

「フウカ。本当にありがとう。あなたから頂いた匂い袋のおかげね。こんなに早くスムーズに産まれるとは思わなかったわ」

ダリヤが長いすから立ち上がり、私の両手をにぎってお礼を言う。もう立ち上がれるんだ。人間みたいに産む痛みとかはまったくないみたいだ。

よく見れば彼女の気も黄土色で一点の曇りもなく神々しく輝いている。もともとこんな色だったんだ。

返事のかわりに何度もおめでとうと言いながら頷く。

「じゃあジューン。緊急の仕事だけしたら今日と明日はダリヤやウリュウのそばにいてやってくれ」

そうだね。家族水入らずの時間が必要だね。そう思ってレイヤを見ると彼もわかってくれたようで頷いてこう言う。

「じゃあ俺はフウカと退散するよ。お披露目はまた企画しとくよ」

そう言って私の肩に手をのばす。

「あ、ダリヤ姉さん、ジューンさん、ウリユウ。本当にこの場に立ち会えてうれしかったです。お披露目楽しみにしています」

「こちらこそ。また遊びに来てね。私もいくから」

ダリヤ姉さんが手を振ってくれる。

挨拶が終わると、レイヤがじゃあと小さく言って私を軽く抱きかかえた。

次の瞬間には二人はこの部屋から消えていた。

「フフ。本当にいい子だわ。フウカ。ウリユウ、やっぱり生まれてでも、あの魅力的な気は分かるものなのね」

ダリヤは生まれたばかりのわが子を見ながらおもしろそうに笑っている。ウリユウは癒しの女神が消えた後を惜しむように切なさそうな瞳で見つめていた。

「ああ。ライバルは多いし手ごわいけどな。こればかりは本人ががんばるしかないだろう、俺みたいに」

ジューンはダリヤのつぶやきを拾って返事する。

「貴方みたいに強引に行くとフウカは参ってしまっわ。そこはあま

り似てほしくないけど」

100年間の強引なまでの求愛を思い出しながら、ダリヤはため息をつく。目の前の火の少年神はほぼ生まれたときからダリヤ一直線で、他を牽制しながら毎日毎日あの手この手で口説いていたのだ。

「あの容姿だから当然似るだろうな。もともと火の系統は情熱的なんだよ」

しれっと言う夫を見ながら、これからのフウカの恋愛事情に軽く同情してしまう大地の女神だった。

22・弟の誕生！（後書き）

ちよっぴり長めかな？

またまた新しい神が……。でも誕生シーンを書きたかったので満足です。

最近、メモをみないと名前がわからなくなってきました。短い名前になっているはずなんですけど……。

たくさんアクセスありがとうございます。

23 動き出す恋愛模様（前書き）

23・動き出す恋愛模様

レイヤが瞬間移動で連れてきてくれたのは、私の部屋だった。

「ありがとう。でも本当にすごかったね。神ってあんなふうに産まれるんだ。神秘だね」

彼が身体を離してくれた途端、私はさきほどまでの出来事を口にする。自分が興奮しているのは分かる。

「ウリユウもジューンに似ていてかつこよく生まれたね。31人目の神、誕生おめでとう！」

レイヤに祝福を言うと驚いたようにこっちを見た。レイヤとゼノンが最初の神でこの世界の担い手のようなものだから、神誕生は彼らにとっても必要でうれしいことだと思う。だからあえてそう言ったのだ。

レイヤはその意図をしばらくして理解してくれたようで、眼をすこし和らげながらありがとうと素直に言う。

「しかし、あの気の中に癒しの気もわずかに引っ付いていたようだけれど何かしたか？」

よく分かるな。

贈り物を渡したことを伝えると、レイヤは腕を組みながらすこし考えるようにしている。

「なるほど。だからあんなに安定してすぐ生まれたんだな。フウカできればこれからもだれかが妊娠したら気をすこし与えてやってく

れないか？」

へー。やっぱり私の癒しの力って出産に良いんだ。

「いいよ。そんなに難しくないし。あ、私のはじめての仕事だね」

そう考えるとうれしくなる。だっていままでみんなにおんぶに抱っこで、神のやるべきこともわからず日々過ごしているだけだったもん。役に立つことができる私と私がここにいるのも良いんだと強く実感できた。

「匂い袋でいいの？普通に気を送るだけがいいのかな？」

「へえ」。匂い袋に気を送ったのか。ゼノンみたいなことするなあいつもそんなことしてたっけ？」

そう言われて突如昨日の夜のキスを思い出してします。

唇の感触まで思い出して、思わず下を向いてしまう。レイヤの顔がはずかしくて見られない。だって造りは同じだし……。

顔を真っ赤にして下を向く私にレイヤがすこし眉をひそめながら低い声で聞いてくる。

「なんだ？ゼノンとなにかあったのか？そういえば寝台のよこのテーブルから、あいつの気がわずかに感じられるが……」

ひー。そんなものまで感じることができるんだ。

「き・・昨日もらったの。その匂い袋。眠れないって言ったから・・」

キスのことはなんとしても隠すと強く決心する。

「ふん。それだけでその態度はおかしいな。もしかしてこんな感じで迫られたのか？」

腕をひっぱられたと思うと視界が反転し、気が付いたらベッドに寝かされていた。腕と肩を上から押さえつけられている。

デ、デジャブ！

昨日の晩、まったく同じ状態だったのだ。相手はレイヤでなくゼノンだったけど。

「それとももうあいつに身体を許してしまったか？」

どどん顔が近づいてくる。これまで一緒だ！

「き・・・キスだけだから！」

そう叫んだ途端、唇をふさがれる。

昨日と違って一瞬でなく、私の口の中に彼の舌が入ってくる。ディープキスだあ。

私の舌も吸われ彼の舌に絡ませられる。

うう・・・抵抗するにもがっちり身体抑えられてて無理。それに上手いのだ。

頭がぼーっとなってきたときにようやく離してくれる。

「悪い。ついやり過ぎてしまった」

気が付いたら身体の上から押さえられていた重石がなくなっていた。

「ゼノンとキスしたと聞いて、我慢できなくなってしまった」

私はゆっくりと上体を起こしながら、止まった思考を動かしてみる。

我慢できなくって・・・ゼノンはまだ触れる程度のキスだったのに・・・。

そもそもなんでレイヤがそう言うのだろうか？

「分かってないと思うから言っとくが、俺はお前の夫かせめて恋人になりたいと思っている。それは分かっただけでいい」

え・・・。

言葉を飾らない告白に純粹に嬉しいと思ってしまう。

しかし、ちょっと待て。

人間の恋愛観とは違つとダリヤに聞いたばかりだ。やはり子供がほしいと言う気持ちからであつて私自身を見ているとは限らないわけ・・・。

「そ、それはうれしいけど、私はいくら子供の為でもやっぱり、私自身を好きになつてくれる人でないとまだ相手として見られないの」

そついうと、呆れたとばかりに軽くため息をついて、また顔を近づけてくる。

え・・・また???

今度は一瞬だけ唇が触れる。優しい口付けだ。

「俺はお前自身を見ているが??だから嫉妬したんだろうが!子供がいらないとは言わないが、まずお前も俺自身を見てほしい」

そ、そうなんだ。じゃあレイヤは少しは私のこと想ってくれていいこと?

「あせって悪かった。ライバルが多すぎるからつい・・・」

本当に反省しているようで金色の頭を大きく下げている。

いきなりされたのはびっくりしたし少し怖かったけど、そうされるとどうしても許してしまう。実際されて嫌どころか正直気持ちよかった。言うともっとされそうなので絶対言わないけど。

「もういいよ。レイヤの気持ちはうれしいよ。でも私は女神としてどうすればいいかで、いままで頭が一杯だったし、まだだれにたいしても恋愛してないの。だから今からレイヤ自身を見ながら考えさせて」

ここまで純粹に気持ちをぶつけてくれる彼に、誠実でありたいと想ったままの気持ちを伝える。

すると、彼は口元をあげて笑みを浮かべながら私の頭をこしこし撫でてくる。

「よし。いい返事だ。今はそれで上出来！」

「で、でも、考えるだけだからね。いつまでかかるかわからないし・・・」

あまりにもうれしそうに言うので、慌てて釘をさすように言う。
だって返事をイエスと取られても困る。まだ保留なのだ。

「わーっているって。よし、このままお食事しようぜ。一緒に食ってもいいだろ？」

ここで告白の話は打ち切りになる。すぐにセレーナとノアを呼んで食事の準備をしてもらい、2人の晩餐会がはじまった。

あいかわらず大食らいだ。でも見てて気持ちがいいな。
パンを食べながら、ああ・・・和食が恋しくなってきた。白いご飯がほしい・・・。卵焼きと一緒に食べたい。
レイヤに食べさせてあげたら喜びそうだなあ。
今度、暇があったら食材探しして作ってみようかな。
私はそんなことを考えながらどんどんお皿が空になるのを見ていた。

しかし、本当に今日はいろいろなことがあったなあ〜。
ベッドに寝そべりながら考えてしまう。
ウリュウの誕生にレイヤの告白。

「でも、いきなりあんなキスすること無いのに・・・」
ついその感触を思い出して、唇を触ってしまう。
ゼノンにもキスされたけど一瞬だったし、レイヤのはディープキスだったせいか、気持ちがあるすごくもっていた。

「嫌だと想わないってことはそれなりに好意があるってことだよね・・・」

考えると言っただけで本当にうれしそうに笑ってくれていた。最高神なのに本当に気さくで考えていることがすぐに表情が出る。口は少し悪いけど性格はいいとまだ短いつきあいだけど理解していた。
「でも・・・ゼノンにされても大丈夫だったし、まだ誰とも恋愛し

てないんだと思う・・・」

まだ気持ちがそこまで高ぶっていないのだ。

「だから断ることも了承することもできないのよね」

どちらにしても女神としての修行と同時進行で、恋愛についても前向きに考えていこう！

そう決意したところで、睡魔が襲ってきて小さくあくびをする。

「さあ～寝よう。明日もがんばらないとだめだもんね」

こうして、今日は匂い袋に頼ることなくすぐに夢の国に発つことができた。

23・動き出す恋愛模様（後書き）

キスシーンでこんなに苦労するとは思わなかったです。
こんなんでハグシーン書けるかしら・・・。
頑張りますので応援おねがいします。

24・戦場に降り立つ女神（前書き）

すこし残酷なシーンがあります。ご注意ください。

24・戦場に降り立つ女神

「今日は闇の衣装をお持ちしましたわ」

朝、本当に嬉しそうにセレーナが衣装を持ってきてくれる。いつもノアが衣装持ってきてくれるのに、今日は役割を交代したようだ。広げて見せてくれたのは色は黒一色のホルターネックで、ティアドのロングスカートだ。首元から布に覆われているのでまだ胸が目立たない。すそが何枚もの黒い生地が重なりあっている。

「か、かわいい!」

こういうスカートは結婚式の二次会でよく好んで着ていた形だ。

「気に入ってくださってうれしいですね。それにどちらかといえばシンプルなものですけど、フウカ様が着ると本当に鮮やかになりますわ」

着替えて鏡を覗く。確かに髪と眼の色が派手なので、シンプルなスカートでも飾りひとついらない感じ。

けっこう動きやすそうだし、これはいい。

「今日はオリセント様が来られるそうですよ」

そういえば彼に一回授業してもらってからしばらくはなかった。

確か、次は人の世界に降りるって言ってたっけ。

思わずゴクリと唾を飲み込む。

そっだ。戦場に行かないと言う話だった。

お披露目で考える暇もなかったけど、これは癒しの女神として避

けて通れない道。

がんばらないと・・・。

とんとん。

ちようど扉のほうからノックの音がする。

慎重になりながら開けると予想通りで、大柄な戦神が立っていた。

「おはよう。おとといと昨日と大変だったな。火山の神の誕生に立ち会ったんだって？」

オリセントは部屋へ案内するとそう切り出してきた。

「うん。ウリユウって言うんだよ。すごく感動しちゃったよ」

本当にこの神の出産は不思議だ。でもジューンもダリヤもそして生まれたウリユウも幸せそうだったので、立ち会えてよかったと思う。

「なら、彼のお披露目が近々あるな。人間界に行くのはその後にするか？」

オリセントはすこし切なそうな表情でこちらを見ながらそう言うしてくれる。その表情で、私のためだけに引き伸ばしてくれているのを痛感した。

「あ、ありがとう。でもできれば今日おねがいしたい。もうその覚悟決めたから。人間界と流れが違うって聞いたし私が躊躇すればするだけ、戦争が激しくなると思うし」

自分自身に言い聞かすように宣言する。すると、しばらくオリセントは私の顔を真剣に見つめ、やがて彼自身決意するように大きく

頷きながら私の頭に大きな手をのせる。

「……わかった。しかし、今日は降り立って見るだけにしとくから無理そうならすぐ言え。直ちに連れ戻すから」

そう言ってもう片方の手を差し伸べる。この手を私が取れば戦場に行くことになるんだ。

大きく深呼吸をしてからゆっくりとその手に私の手を添える。

「ずっとこうして肩を抱いておくから安心しろ」

私を落ち着かせるように頭の上から肩に手を移動し、痛くない程度に強く掴む。

いくぞと言う掛け声と共にまわりの風景が一転した。

その後、私の決意がいかに甘かったか思い知ることとなる。

着いた瞬間、思わず耳を手で塞ぎ眼を閉じてしまった。
なに？ あれは……。

真っ赤な血しぶきがあちらこちらで噴いている。聴覚では無数の人の悲鳴と金属がぶつかる鋭い音、馬の蹄の音がその場を支配していた。

「大丈夫か？ フウカ。とりあえず、いったん帰るか？」

自分でも血の気が引いているのがわかる。見ること聞くことを拒絶したかっこをした私に、戦神は帰還することを薦める。

その甘い誘惑に乗ってしまいたい。でも、そんなわけにはいかないと私の中のどこかが告げていた。

「だ・・大丈夫。ただ、少しだけ時間を頂戴」

そう言っ て彼にしがみつ きながらゆつくりと耳を塞いでいた手はずし、眼を開ける。

やはりそこは地獄図のような状態だった。もうすでに無数の死体が転がっており、怪我だらけの兵士がそれでも戦いを続けている。それを私たちはすぐ真上から見下ろしている状態だ。こんなに近いのにこちらにだれも気がついてないので、おそらく姿は見えないのだろう。

「フウカ。なんでたくさんある戦場の中でここに連れてきたか分かるか？」

そう言われて、冷静に答えようと思 考をフル回転させるがわからない。無言で頭を横に振る。

「これは個人の私欲によって引き起こされた戦だ。俺は国を守るため、国民のために国土を広げる戦いであればあまり手を出さない。だが、この戦いはたった1人の強欲な奴が周りに偽りをばらまき、こんな大人数の争いになっ てしまっ た」

なるほど・・・。たしかに戦いにいい、悪いは無いと思うけど、そんなことが理由では戦っている兵士たちがあまりにもかわいそう過ぎる。

「だから俺はそいつに天罰を下した。しかし戦いは止めることができなかった」

そういう彼の表情は今まで見たこと無いほど苦悩に満ちている。
戦神だから彼は誰よりもこんな地獄を見続け、自分の無力に嘆いて
いたんだろう。

「今日を見るだけで帰るが、できれば近いうちに希望として癒しの
力を彼らに与えてほしい」

私も与えたい。今すぐにでも。でも、癒しを与えても再び戦うだ
けだ。

「ねえ、オリセント。彼らに声を届かせることはできないの？ 私た
ちの存在を分からせるのはだめなことなの？」

この場で戦争止めなさいと言えないのだろうか。神の言葉ってこ
とで聴いてもらえるとと思うけど・・・。

「神の世界全体で禁止しているわけでない。レイヤとかビュアスは
よく人間に姿を現したりしている。だが、俺が戦場に出てしまうと
戦いが過熱するだけなんだ」

戦神だからその姿を見ると攻撃力が自然に増してしまうとは・・・
。だから止められないのか。

「だったら私が出るわ！今、止めればそれだけ助かる人や生き物が
いるのだから。癒しなら効果あっても大丈夫でしょ？ どうやったら
声かけたり姿を現したりできるのか教えて！」

こうして私は、初めて人類の前に姿を見せることになった。

「今すぐその無意味な殺生をやめなさい。我が名はフウカ。お前たちの戦いの元である者はもうすでに、戦神オリセントによって天罰を下されています。この戦争に双方とも利はありません」

オリセントは姿を見せられないし、かと言って自分自身で飛ぶ自信はないのでオリセントに頼んで私の顔のみ空中に現れるようにしてもらおう。

いきなり天から現れた声に、あれほど大きかった騒音がぴたりと止む。不思議なものでこちらは普通に話しているのに、その場にいる全ての脳に直接話しかけている感じになっている。だから聞けない人はいないのだ。

私の顔を何万と言う人が指差しながら見上げている。

「私は癒しの女神です。武器を収める全てのものにひとまずの癒しを与えましょう。戦うより前に話し合い、相手を慈しむ心を養ってください。そういう者には私から祝福を授かることになるでしょう」

それだけ言う。こんな感じで大丈夫かな？女神っぽく言えたかな？手を握ってくれているオリセントのほうを振り返るとこちらを凝視し、笑っているのか泣きそうになっているのか微妙で複雑な表情をうかべてうなずいていた。人間に声と姿を現すのをここで止めて貰う。

私の姿が消えたのを人々はまだ呆然と見上げている。

「じゃあ癒しの力を与えるね」

オリセントが同意するのは分かっていたので、そのまま気を天空から送り続ける。匂い袋作ったときの要領なので、できることはわ

かっていた。ただ、対象がひろすぎるけど。薄めに広くと意識すると私の体から大きな気の塊が出て、それが一気に膨大し、今まで地獄図のような戦場だった草原一帯を覆い尽くしていた。

あ、なんとかできた・・・。

そう思った瞬間私の体から一気に力が抜ける。

倒れる。

崩れ落ちた身体を隣にいたオリセントが、離すまいと抱きしめてくれたのがここでの最後の記憶だった。

24・戦場に降り立つ女神（後書き）

残酷なシーンはできるだけ少なめにしました。

戦争って怖いですね。初めて人に姿を現しました。これからフウカ信仰と癒しの術（ドラクエで言うホイミ系ですね）が人間界に浸透していくのです。

次は人間側からとオリセント側からの話にしようかと思っています。

あと、最近フウカの服装を考えるのが好きになってきました。ネットでいろんなサイトを見て参考にしています。どんなのかこの文章で分かるかな？ちよつと心配です。

昨日だけで3000人も見てくれたそうです。ちよつと感動しました。ありがとうございます！

25・フウカ信仰の始まり（前書き）

予告どおり一人間からみたフウカ光臨の話です。
ここも残酷シーンあります。ご注意ください。

25・フウカ信仰の始まり

何のために自分はこの戦いの指揮を執っているのだろうか？

万人の兵士が並んでいるのを馬上で見ながらつい心の中で葛藤が走る。

だが、心とは裏腹に表情は崩さない。

「殿下……」

側近の2、3人が馬に乗ったまま近づいてくる。自分の最後の意向を聞かためだ。

「戦うしかあるまい。こうなったら一人でも多く生き残らす戦にするのが私の役目だ」

不安げに自分を見上げる側近たちに力強く声をかける。彼らもこの無意味な戦争の意味を噛み締めていた。

先ほど、この戦いの元凶であった宰相の突然の変死の急報が入った。

宰相はただ自分の卑劣な悪行を隠すために、王をはじめ周りのものに嘘偽りを吹聴し、なんの非もない小国である隣国に侵略するよう仕向けた。

これがその結果だ。

さらに最後まで反対した自分や数少ない者たちが、彼の陰謀で前線に送られることになった。その彼がいきなり雷に撃たれたかのように、焼かれ見るも無惨な姿で絶命していたのだ。どんな雷の魔術師であっても彼のみを攻撃することは不可能で、何が原因かまだ謎だと言う。

だが、いくら元凶がいなくなったからと言って、ここまで来てし

まっでは話し合いもできず戦いをやめることも不可能だ。

「しかし、この状態では多大な犠牲を出すことは避けられないでしょう」

側近の一人が慎重に告げる。確かにその通りだ。

国境のこの草原に着いたのは敵もほぼ同時だ。さらに兵力や魔術師の数もほぼ同じ。

もう少し優秀な魔術師や兵力を与えてくれたら、犠牲を減らすことができるのに相打ちを狙っているようにほぼ同じ数だ。

「我々の戦略次第だな。そろそろはじめるぞ」

そういつて側近たちに配置につくように言う。

彼らの動きが止まるのを待って無言で手を翳す。次の瞬間、あたり一帯に号音であるドラが鳴り響く。それを合図に万と言う人の掛け声と馬の蹄の音が大地を揺らした。

それからまさに地獄絵図のような光景だ。いくら戦略を立ててもあたり一帯見通しが良すぎるこの草原では、ぶつかって戦うしかないのだ。

人の叫び声が鳴り響く。

三刻以上の時間が経ち、死体と怪我人があたりを埋め尽くす。犠牲が出ているが勝敗が決まるまで、武器を下ろすわけにはいかない。

「どうか。少しでも多く生き残れ。頼む！」

自分自身、返り血と自分の血で真っ赤に染まっているが、愛用の大槍を片手にその死体の山を踏んでさらに死体を作る。その時だった。

今まで聞いたこともないほど澄んでいて、美しい声が耳からではなく頭の中に直接響く。

「今すぐその無意味な殺生をやめなさい。我が名はフウカ」

周りの者たちが見ると指差している方向を見ると、その空一帯に見たこともないほど美しい女性の顔が浮かんでいた。右眼は金色で、左眼は薄い紫色の色違いの瞳が、一点の曇りも無い眼光でこちらを見下ろしている。空に広がる髪の毛は白金色で美しい光のようだ。顔立ちはずいぶん幼い感じはある。しかしこれまで数々の美しい者を見てきたが、間違いなくダントツに整っていると言える。慈悲に満ちたその表情は一目でこの方が人間ではなく、神であるとだれもが気がついただろう。

「お前たちの戦いの元である者はもうすでに、戦神オリセントによって天罰を下されています。この戦争に双方とも利はありません」

そうか。やはり報告に聞いた宰相の死は神によるものか。そして神々は我々を見守り下さっているのだ。

「私は癒しの女神です。武器を収める全てのものにひとまずの癒しを与えましょう。戦うより前に話し合い、相手を慈しむ心を養ってください。そういう者には私から祝福を授かることになるでしょう」

戦わずに話し合う。人を慈しむ。

まさに私が望んでいたことだ。兵士の多くは訳も分からず狩り出され、戦いを強要されている。ただ上の者の欲望を満たすために。そういえば以前に、癒しの神の光臨を神官が伝えてきたのを思い出す。生まれたばかりでこのような戦争に舞い降りて下さったのか。

「感謝します。癒しの女神フウカ様」

思わず感謝の言葉が口に出た。

それを耳にした訳でもないだろうに、天に浮かぶ絶世の美女はこちらに微笑みながら雲が散るように徐々に姿を薄めやがて見えなくなった。

「皆のもの。神からのお知らせである。一先ず武器を収め、後方の我が陣まで撤退！！」

敵も戦意を完全に無くしているようである。先に自分が号令をかけると向こうでも撤退の合図がでる。

その時、再び奇跡が起こる。

空から巨大な淡い光が降り注ぐ。それは戦場であつた草原一帯を覆うほどのものだった。

「・・・・・・・・！！」

戦場の中心部にいた自分にももれなくその光を浴びる。暖かい慈愛に満ちた光。

その瞬間、体についた無数の傷が瞬く間にふさがる。痛みだけでなく疲労感すらなくなった。

あたりを見渡せば、生きている全ての者にその恩恵が行き渡つたようで、死を免れないであろう状態であつたものも血まみれの鎧を纏いながらゆっくりと立ち上がっている。

そうして多くの者が、先ほどまで確かに女神の姿が見えていた天を仰ぎ、頭を垂れて祈りをささげる。

「この身で奇跡を受けることができるとは思いませんでした、殿下」

退却の号令を出し、あらかた後方に進む中で側近の1人が、興奮冷めやらぬ表情でそう言ってくる。

「やはり神は見て下さっているんだ。この戦いを無駄だと思いに
なり、阻止してくださったのですね」

となりにいた別の側近も同じような表情である。

「ああ。だからこそ、あとは我々で始末をつけねばなるまい。向こ
うの総指揮官と話し合いの場所を持てるように手配せよ」

自分のその言葉で半日後という速さで話し合いの場を設けること
となる。

そこで自分の想像以上に虚偽の話によって、この戦争が引き起こ
されたと言うことを知る。こちら側の宰相だけでなく、相手の権力
者も共犯でさらに彼も天罰が下っていると・・・。

その事実と奇跡を国都に知らせがいき、正式に戦の中止を命じら
れる。こうしてお互いに退却することとなった。

死者がよみがえることまではなかったが、それでも3分の2が傷
も癒されて帰還できた。

この戦争はのちに『最古の癒し』として、歴史の書に載ることと
なる。戦場であった草原は『フウ力草原』と名前を変えられ、やが
てそこにフウ力信教の総本山である神殿が作られることとなる。神
殿の一番大きな壁一杯には、女神が戦場で倒れこむ多くの人々に癒
しを施す姿をかかれた絵が、美しく描かれていた。

さらに指揮官であった第2皇太子に人を癒す力が授けられること
となり、その彼が王に任命され善政を敷くと共にフウ力信教を確立
していく。

25・フウカ信仰の始まり（後書き）

書いててちょっと難しかったです。でも人間から見たのも書きたかったもので・・・いつか文章が上達すれば人間界の世界のフアンタジーも書きたいですね。あえて名称は出しませんでした。名前を考えるのが面倒だしこの後でないのでもうしたのでありますが、余計に文章が難しかったです。

短いですがここで区切らせてくださいね。

26・戦神のつぶやき（前書き）

今度はオリセントの番です。

26・戦神のつぶやき

最初に彼女を見たのは、ほんとうに偶然だった。

ある目的で噴水のそばを歩いていると、女性の叫び声と水色の布が真上から降ってきた。

水の精霊か？

そう思ったが声が悲鳴だったので、考えるより先に噴水に飛び込み彼女の下敷きになる。

小さいので子供の精霊かと思ったが、そのときに当たった胸の感触はずいぶん成熟したものである。

「！」

顔を見た瞬間、自分の勘違いを悟った。どう見ても精霊ではない。この強く輝く気は神以外ありえないものだ。自分自身も大きいほうだが、それに負けず劣らずの輝きをしている。さらに眼の色が自分と同じでオッドアイなのだ。金と薄紫色。すこし垂れ眼なためにずいぶん幼くみえる。優しい顔立ちでずいぶん整った顔立ちだ。

こんな女神はいなかったはず。生まれたてか？？？

と、言うことは・・・。

思考に行き着く前に、彼女が自分の左腕をそつと撫でる。自分でも気がついてなかったが小さな傷があったようで、それが瞬く間にふさがり姿を消していく。

「例の評判になっている癒しの女神か」

確信を持って言う。

とうとう現れてくれたのだ！我が同志が！

長かった。自分が生を受けてから人々の間で争いが始まり、それ

を制御しながらも全てを制しきれずにいた。レイヤとゼノンや他の神々も手助けしてくれるが戦争は過激化していくばかり。

せめて守護と癒しがあればと思うが、なかなか生まれることもない。そうして150年が過ぎる。このままではこの下界その物が破壊されるとまで感じていた。

そんな時、癒しが生まれたとレイヤから伝言があり、仕事を大急ぎで終えて神殿に戻ってきたのだ。

女神でも神でも関係ない。どちらでもよかった。

「俺はオリセント。戦を司っている。癒しの神の光臨を何よりも待ち望んでいた。歓迎するよ」

100パーセントの気持ちこめてそう言うと、彼女はうれしそうに微笑んでくれた。水の中から引き上げると、彼女の服装が嫌でも眼についてしまう。いや、正確には服装でなく水に濡れたせいで、豊満な女性特有の体のラインが鮮明に見えている。ひどく官能的な姿だ。

そこで水の神エダがやってくる。いつも嫌味なほど冷静な彼が見たことも無いほど慌てている。

とりあえず、これから彼女と深く関わっていくことになるのは必然なのだから、何もここでこれ以上話する必要もない。そう考えて後から来た少年に彼女を任せた。

しかし、あの顔立ちであの体つきはなんとも言えない色気がある。それになにも分かっていないと思わせる無垢な瞳で見詰められると、自分のモノにしたいと会ったばかりと言うのに誘惑に駆られる。あれは男性神が騒がしくなるな。先ほど見たエダもその気のようにだし・・。

「ともかく、俺は本気にならないよう気をつけよう。仕事でだれよりも傍にいられるのだから」

その後、レイヤとゼノンの二人さえも彼女に執着しているのを知り、その決意を強く持つようにする。

だが、それを彼女はいとも簡単に破ってくれる。

初めて彼女と話す機会。授業と言う形でレイヤとゼノンとエダと、そして今日から自分で時間を持つようにしている。話を聞いてびっくりしたが、彼女は人間としての記憶を持ち合わせているらしい。そのようなもの持っていても、長い生の中辛くなるだけだと思うが、彼女がガンとして消したくないと言う。それで女神としての自覚や能力が不安定なために、このようなことになっている。

他の3人はそれぞれ激務があるだろうに、嬉々として時間を作って授業の講師になっているようだ。今までどちらかといえば、恋愛に興味など見せなかった3人の変貌に啞然とする。

彼女は話の中で色と精霊のことについて聞いてくるから、自分たちは精霊と子を作らないかぎり自分の系統の精霊はできないということ、すこし考えるようにこう聞いてくる。

「じゃあ私が精霊と子供作ったら、癒しの精霊になるのですか？？」

実際にはそれは正解だが、癒しの精霊が生まれることは皆無に近いだろう。

あの上位3人が他の神や精霊の視界から、彼女を隠しているのはあきらかだ。

神であるなら我慢もできるが、精霊に貴重な女神を渡すはずもな

い。

「まあそうなるだろうが、神たちがそんな隙を作らせないだろう。俺もそれは阻止したいな」

そう言うつとわからないと言うように顔を見上げている。あれほどあからさまに他の者から隠されていながら自覚がないのか？

とりあえず忠告しておくことにする。

「女神が少ないと聞いているだろう。それにフウカの神気が一番つよいとも。話した感じではレイヤやゼノン、エダまでこぞって興味持っているし、他の神も見られないだけに余計に興味津々だ。俺もできるなら立候補したいと思っているからな。精霊が近づく隙など作らせないさ」

本気で口説いているわけではないが、彼女が興味を持つてくれるならいくらかでも受け入れると言う意思表示で、最後に自分のことも言う。

実際彼女に魅力を感じている。ただ、ライバルも多いしまだ彼女が恋愛まで頭が回っていないようなので、積極的に口説いたり行動したりしないでおこうと思った。

しかし、今日の衣装は昨日以上に艶かしい。顔に合わない女性特有のラインにぴったりと張り付いた服で、胸はストールで隠しているがスリットが深いために動くたびに足が見えている。

光の衣装だからレイヤの趣味だな。まったく……。最高神のくせになんという趣味だ。

ふたたび忠告だけして本題に入る。

自分としては今すぐにも戦場に連れて行きたいが、まだ女神になつて浅い上に人間として記憶がある彼女には過酷すぎるだろう。

彼女は癒しの神としての役目を聞いてくる。とりあえず、まだ早

いかと思ったがいつかは行くという覚悟を決めてもらうために、戦場に行く必要性を説く。

少しの間。彼女は青い顔をしながら下をみていたが、やがて決意を固めたように顔を上げて、しっかりと自分の眼を見ながら言う。

「次、オリセントが担当になってくれたときにぜひ連れて行ってください」

それを聞いた瞬間、自分の中でなんとも言えないほど、目の前の彼女に対しての気持ちが大きくなる。

気がついたら抱き寄せていた。

「すまない。正直女性に見せるものではないと分かっている。でも見ないことには癒しを施すこともできないだろう」

できればこの瞳にあの地獄を見せたくない。だが、見せなければ彼女の存在価値が無くなるのだ。そのために生まれてきたのだから。

「生まれてきてくれてありがとう」

気持ちが高ぶって思わずそう言くと、彼女は本当に美しい笑顔を浮かべた。

彼女のお披露目があるということを口実に、彼女との授業をその後にしてもらう。少しでも彼女を戦場に連れて行くのを遅らせるためだ。

自分の中でもお披露目が終わったら、一番目の授業をさせてもらうと決めていた。

お披露目の翌々日その日になった。

自分が部屋に入っていくと、彼女はすこし固い表情を浮かべている。

戦場に行くという話を思い出しているのだ。思わず、生まれたというジーンとダリヤの子のことを理由に延期の提案をするが、彼女はそれが彼女だけのためであると見破り頭を左右に振る。

そして彼女を軽く抱きながら連れて行くこととなる。少しでも彼女が帰りたいと言ったら、迷わず連れて帰ろうと決意していた。

戦場に着いた途端、彼女は血の気がなくなるほど真っ青な顔をして自分の腕の中で、目を閉じ両手で頭を抱えるように耳を防いでいた。

見慣れているはずの自分でも気分が悪くなるような光景。何万と言う人が武器で殺し合い、視界が血で真っ赤に染まっていた。今まで見たことも無い残酷な光景に彼女が耐えられないのは当然だ。

抱いているので身体が恐怖で小刻みに揺れているのが伝わってくる。

「大丈夫か？フウカ。とりあえず、いったん帰るか？」

そう言っただけ抱く力を強めるが彼女は大丈夫と言い、ゆっくりだが塞いでいた手を除け、目を開ける。

その瞳はしっかりとこの現実を受け止めていた。

ならばとこの戦いの原因を告げる。

善悪がはっきりしているような戦いであれば、自分が善のほうに手を貸すこともできるが、今回のものはどちらもただの犠牲者だった。だから自分が出ることはできず、彼女を連れてくることとなったのだ。

「今日は見ただけで帰るが、できれば近いうちに希望として癒しの力を彼らに与えてほしい」

今言うには彼女に過酷な願いをしたが、それに対しての彼女の反応は肯定ではなかった。

自分が姿を現して戦いを止めると言うのだ。

神が姿を現すことはタブーではないし、実際自分が現すこともあった。しかし、生まれただで初めてこのような地獄を見てそれ言うのか。女神としての自覚と言うより人としての記憶がそう言わしているようだ。

「今すぐその無意味な殺生をやめなさい。我が名はフウカ。お前たちの戦いの元である者は、もうすでに戦神オリセントによって天罰を下されています。この戦争に双方とも利はありません」

顔だけ天に映して心音で、その場に在る全ての者に伝わるようにする。

確かに自分が少々手伝いはしているのだが、大半が彼女自身の神力を使つて無意識で行っているとは自覚はないようだ。制御はまだにしても自分と同等の力を彼女はなんなく使っている。

地上では戦いは完全に制止し、命あるもの全てが彼女を見上げている。

「私は癒しの女神です。武器を収める全てのものにひとまずの癒しを与えましょう。戦うより前に話し合い、相手を慈しむ心を養ってください。そういう者には私から祝福を授かることになるでしょう」

戦いを止めるだけでなく、諭す。おそらくそれは人としてのフウカの言葉に感じた。

そのとき、なぜ彼女が人の記憶を持ち合わせたまま癒しの女神と

なったのか悟った。おそらく女神として最初から生まれていれば、癒しを与えることしかしなかっただろう。そもそもそれが彼女の役割なのだからそれで正しい。

「じゃあ癒しの力を与えるね」

そう彼女が告げた途端、彼女の体の気が大きく膨れてそのはみ出したものが彼女から離れる。球状になった彼女の気は見る見るうちに巨大になり草原一帯を覆う。

それを見届けた瞬間、彼女は安心したように笑みを浮かべて自分のほうに倒れてきた。

考えるより先に彼女を抱きしめる。

「ゆっくり休むがよい」

そう言いながら彼女の髪に顔をうずめ、唇を頭に当てる。

「俺のそばにお前が来てくれたことを今ほど感謝したことはない。できれば俺をいつか見てくれ」

彼女が意識を失っていることは分かっているが、どうしてもそう告げなかった。

未だ腕の中で眠る彼女を抱きしめながら、ゆっくりと天界にある神殿に昇って行く。瞬間移動も可能だが少しでも彼女に負担をかけたくなかった。それに彼女が腕の中にいるという事を味わいたかった。

「こうなりたくなくてセーブしていたが無駄だったか。ライバルは多いが、かと言ってもう諦められる状態ではないしな。フウカ、悪いが覚悟を決めてくれ」

しかし自分の声を聞く者は誰もいなかった。

26・戦神のつぶやき（後書き）

2人目落ちました。彼らがこれからどうフウカに接していくか作者自身わかりません。キーボードを打つ指しだいです。

少し最近、戦争シーンとかばかりなので書きながらよくつまずきます。

難しいですよね。

27・初めての料理（前書き）

サブタイトル・・・3度目の口付け

どちらをタイトルにするか迷いました。

27・初めての料理

・・・・・・・・

あれ？ここはどこ？

白い天井に白い壁。そして大きなベットに私は寝ていた。一瞬、なぜ私がここにいるのか分からなくなる。

「あ、神の国だった・・・」

すぐその理由を思い出す。ここは自分の部屋だ。次になぜ寝ていたのか思い出そうとするが、頭がぼんやりしてあまり動いてくれない。

「えっと・・・」

「気が付いたようだな、フウカ」

誰もいないと思っていただけに、いきなりの声かけに飛び上がったしまった。振り向くと右は深紅、左は青の色違いの瞳をした大柄な青年が、ベットのそばに置かれた椅子に腰掛けている。

「オリセント・・・」

戦神の顔を見て、さきほどまでの出来事を思い出す。人間界で癒しを与えるだけ与えて倒れちゃったんだった。

「あの戦いはどうなったの？」

がばつと上半身を起こし、彼に近づく。すると私の頭にぽんと大きな手をのせてゆっくりと髪を撫でながら教えてくれる。

「安心しろ。お前の活躍であの後すぐに終戦した。瀕死だった者まで瞬く間に回復してたぞ。まったく無茶をする」

良かった！止めることができたんだ！
死ななかった人が増えたのも嬉しい。

「身体は大丈夫か？一気に気を使ったからだいぶ疲れただろう。癒しだけでなく心音も姿現術も同時に使ったからな」

言われてみれば身体がいつもより重い感じがする。そっか。使すぎるとこうなるんだ。聞きなれない言葉を質問するとすぐに答えてくれる。

心音は人に心に直接話かけることで、姿現術は天に姿を映すことらしい。オリセントがやってくれたと思っていたがその手助け程度で、無意識に自分でしちゃっていたらしい。よく考えたら私にはすべての人の言葉が日本語に聞こえるが、そうではなく無意識に自身で変換しているそうだ。

「だって、どうしても止めたかったの。癒しを与えることはできてもその後、傷が癒えた者同士が戦えば意味が無いから」

思ったより神のお告げを重視してくれる世界のようによかった。
こんな新米神でも聞いてくれるんだって思ってたし。

「ああ。だから戦後に癒しを与えてもらおうと思っていた。おかげでかなりの数の人間が生き延びることができたぞ。本当に感謝する」

戦神はまだ私の頭を撫でながらそう言ってくれる。
役に立てたんだ！よかった！

戦は予想以上に恐ろしいモノだったし、ここ数日は寝るときに思い出してしまうんだけど、それが私の存在価値なんだから避けるわけにはいかなかったんだ。そこで無我夢中だったけど活躍できたんだ。

「ありがとう。ここまで運んでくれたのね」

オリセントがここにいることにお礼を言う。その後、寝ちゃったから運んでくれたんだろうし。

「だから礼を言うのはこっちのほうだ」

なでていた手を止めて私の頭の上にポンッと置く。

「これから止めれる戦争があるならがんばって止めようね。私のできることがあれば何でもするから」

戦場は怖かったけど、止めれることがあるのならぜひ止めたい。その思いを伝えるとオリセントは今までに見たこと無いほど、優しい表情でうすく笑みを浮かべた。

「フウカ。俺は今日、お前が癒しの神でよかったとつくづく思ったぞ」

そついうと頭に置いた手で私を彼のほうに引き寄せる。そして、美しいオッドアイの眼が近づいてきたと思うと、そつとやさしく口付けしてきた。触れるだけのキスで気が付いたら離れていた。

「じゃあ今日はゆっくり休め。お前の考えている以上に身体も気力も疲労しているはずだ。無理して動こうとするなよ」

それだけ言うところらが返事する前に一瞬で姿を消した。

ま、またキスされてしまった！

ゼノンからはじまりレイヤにされ、さらにオリセントまで……。
みんな不意打ちだし。

でも問題はだれも嫌だと思わなかったことだね。

うーん。

と、とりあえず。私に隙がありすぎるってことよね。気をつけよう。

それにしてもレイヤは言ってくれたけど、ゼノンもオリセントも
どういっつもりなのかなあ。

んー。とりあえず女神がいるから口説いとけ、みたいなものかな？

ま、いつか。考えても仕方ないことは考えないに限る。

これが処世術だ。

さて、これからどうしよう。

まだまだ夕食にするには時間がある感じた。

寝てしまいたいような気もするけど、これ以上寝ると夜が寝れなくなるかも。

「なんかなつかしいものが食べたい……」

できれば和食で。

白い炊き立てのご飯。あさりの味噌汁。だし入りの卵焼き……。

食べたい。

でも、そんな食材がここに存在するのかわからない。調理場の位置すらわからない。

なかなか無謀かも。

でも食べられないとなると余計に食べなくなるものだ。

「セレーナに聞いたらわかるかなあ？」

そう口に出したただけですぐに彼女が姿を現す。すごい早い。

「仕事中文のにごめんね。ちょっと教えてほしくて……」

「わたくしにとってフウカ様のお傍にすることが最優先ですから、お気遣いなくなんでも申しつけてください」

本当になんでもないと言うように言ってくれる。

お礼を言つて、お米と卵など存在するのか聞く。

セレーナは少し驚いたように目を大きくしてこちらを見てたが、やがて手を頬にあててしばらくの間考え込んでいる。

「卵はソウ鳥の卵ならすぐにございますわ。ただ、そう言う植物のほうはおそらく人間界の一部の民族に食す習慣があったと思いますが、さすがにすぐに手に入りませんわ」

なるほど。でもあるんだ。

「じゃあ、動物のミルクと甘い粉のようなものない？」

牛乳と砂糖だ。これがあればプリンができる。本当は甘くないものがいいんだけど、ご飯がないならデザートにしたほうがいいよね。聞くと代用できるものがあると言つことで、さっそく調理場を聞く。

「2階に私が普段使用している調理場でよろしければご案内できますけど」

へっやっぱりあの料理はセレーナが用意してくれていたんだ。

「じゃあそこまで連れて行ってくれる？できれば歩いて行きたいんだけど」

そついうと頑なに拒否される。

「そのようにいたしますと、わたくしがゼノン様に消されてしまいますわ。2階は精霊で溢れかえっていますので、廊下を歩きたびに足止めされて調理場までたどり着けなくなりますよ」

なんでゼノンに消されるのかわからないけど、たしかに前みたい
に精霊たちに囲まれるのは遠慮したいかも。

早く道を覚えたかったけど、仕方ない。今回は甘えることにして
セレーナに連れて行ってもらった。

しかし、そこで愕然とする。

調理器具が知っているものとまったく違うのだ。まず、コンロがない。オーブンもない。しいて言うならピザを焼くような石釜か。
でも中に入れる炭もないしスイッチもない。

どうやって火をつけるのだろうか？

「これはここにすこし気を送ったら火の力になって、この空間自体

が高温になるのですわ」

そういつて、石釜に手をかざす。その途端に、石釜の煙突から煙が出て熱気が釜からあふれ出てきた。

すごい仕組みだ。ほんとうに神の国なんだなあって感心する。とりあえずこれで蒸すことはできそうだ。

鍋、器、漉す物、かき混ぜる物に容器に・・・と代用できるようなものを棚の中から物色する。

私が探している間にセレーナは卵に牛乳に砂糖を持ってきてくれる。

卵は鶏より一回り大きかったが割ってみると、同じように黄身と白身に分かれていた。

ミルクは牛乳でなく山羊っぽい生き物の物で、味はすこし濃厚だけれどおいしかった。

砂糖は三温糖のような色で、舐めてみるとおどろくほど上品な甘みがただよっていた。

うん。これならできそう。わからないことをしつこく聞きながらなんとか形になった。

表面は火加減がわからなかったので、少しすがたってしまったているが形にはなっている。

「問題は味ね」

セレーナと同時でくちに作ったばかりのプリンを入れる。

甘いなつかしい味が口の中にひろがる。

これ！これよね。

隣の彼女も幸せそうな表情をしている。かなり甘党のようだ。

「本当においしいですわ。少ない材料でこんなおいしいものができるなんて信じられませんか」

「よかった。成功ね。冷やすとまたちがう味わいになるから半分は冷やしておくね」

そう言つて5つほど氷の保冷庫に入れる。冷蔵のほうがいいけど、冷凍で固まっちゃってもおいしいからいいか。だってこの保冷庫の温度分からないもん。

「そうだ。せつかくだしノアにも1個あげてくれる？」

そう言つてセレーナの分とふたつをかわいく包み渡す。

あと、4つ余った。

全部食べるのはきついでなかになにあげよう。

でも甘い物が好きかわからないし・・・あ、そうだ。

先日お邪魔した大地の女神のことを思い出す。

ダリヤは好きだったね。ジューンは好きでなかったけど、ウリユウはわからないので2個渡しておこう。可愛くリボンもつけて包みちいさな籠に入れる。うん。いい感じ。

あと二つは夕食時に持つてきてもらおうかな。他の人は甘い物が好きなら冷えたものをあげたらいいし、二つなら食べれる。

「じゃあダリヤ姉さんに持つていくことにするね。あ、自分で跳んで行くよ」

ここが2階でダリヤ姉さんの部屋は4階だ。私の部屋からそう遠くなかったから分かるはず。

セレーナはしばらく難色を示していたが、もし間違ったところに行っちゃったら迎えに来てと、お願いするとなんとか許してもらった。

だって練習しないといつまでも跳べないままだもんね。

「今日はありがとうね。セレーナと久しぶりに料理できて楽しかったわ。じゃあ行ってきました」

手を振ってからダリヤ姉さんの顔と部屋の場所を思い浮かべて跳ぶ。

あ、あれ？

部屋の前の扉に跳んだはずなのに、景色が変わった途端ダリヤが目の前にいた。

あー部屋の中まで来ちゃったんだ。

「う、ごめんなさい、姉さん。まだ上手く跳べなくて・・・」

なんとかダリヤの部屋には来れたけど、目の前にいきなり現れたらびつくりするよね。でも姉さんは笑いながら否定してくれる。

「いいのよ。来ることは気配で分かるから。来てくれて私もウリユウもうれしいわ」

そう言われて初めて昨日生まれたばかりの火山の神が、ダリヤの隣でこちらを微笑みながら見ているのに気が付いた。

「こんにちは、フウカ。昨日は生まれるときに傍にいてくれて本当にありがとう」

生まれたてなのに本当に礼儀正しいな。笑顔もすごく可愛いし。

「ううん。立ち会えて私のほうこそ嬉しかった。これから新米の神としてお互いにがんばろうね!」

ウリユウに笑顔でそれだけ言うと、ダリヤのほうを向いて今日の目的の物を差し出す。

「これ、おすそ分けです」

籠を差し出すとダリヤはありがとうと受け取りながら、中身を確かめている。何かわからないようだ。

「甘い匂いがしておいしそうだけど、こんなお菓子初めてみたわ。なんて言うの?」

「プリンと言います。私と精霊で作ったの。ちょっと火加減がわからなくて表面にすがたってしまったけど、味はまあまあいけると思います」

作ったと言うと二人ともが驚いた表情をする。

「まあ。フウカの手作りなの? 素敵だわ」

ラッピングしたプリンを本当にめずらしそうに眺めている。たいした料理でないし表面が美しくないから、そこまで感心されると恥ずかしくなる。

「ウリユウが甘い物食べれるかわからないけど、2個用意しました。できれば今日か明日までに食べてくださいね」

「うふふ。すぐに頂くわ。ウリユウもそこは私に似たようで甘い物食べるわよ」

あ、そうなんだ。よかった。
じゃあと帰ろうとしたとたん、ダリヤに腕を軽く捉まれて引き止められる。

「さつき、火加減がどうって言ってたわね。よかったら今度なにか作るときに、ウリユウに手伝わせて頂けないかしら？」

え……。神さまを厨房の手伝いに？

自分を棚に上げるけど、なんか恐れ多いような……。

「火の系統なので調節はお手の物だわ。そういう微調整も彼の修行になるからお願いしたいの」

あ、なるほど。そう言うことなら理解できる。

「じゃあお願いします。私ほんとうにここの調理器具とかわからな
いから助かるわ！」

ダリヤにお礼を言ってウリユウにお願いすると、二人ともほんとうにうれしそうしてくれる。

「では、そのときお願いね。今日は帰ります」

私はそう言ってこの場から退出する。この距離なら移動できるだろう。白い部屋をイメージするときちゃんと自分の部屋に跳ぶことができた。よし、少しずつマシになってきたぞ。

一方。

「ありがとうございます、母上」

「ウフフ。こうでもしないとライバルのあの4人が、側に寄る事も妨害しそудしね。あとはがんばりなさい」

私がいなくなった部屋で二人がこんな会話をしているとは、私が知るよしもなかった。

27・初めての料理（後書き）

ほとんど書き上げたとたんにパソコンがぶちつと切れましたTT
ひどいよ。半分消えてもつかい書き直しです。すこし内容変わ
っちゃいました。

和食も作らせてあげたいですね。おそらくレイヤのお腹に大部分
納まっちゃうでしょうが・・・。

途中で分ることができなかつたので長いです。

自分もなんかプリンづくりたくなっちゃった。作ろうつと

28・悪夢（前書き）

ここもすこし戦争シーンがありますのでご注意ください。

28・悪夢

気が付いたらそこは広い空の上を飛んでいた。

あら？私1人で飛べるようになったんだわ。

身体もすごく軽い。

でも、なぜかもう飛びたくないとか心が叫んでいる。

こわい。

そちらには行きたくない。

しかし、気ままに空を飛んでいるつもりなのになぜか自分の意思とは別に徐々に地上に近づいていった。

段々地上の騒音が聞こえてくる。

人々の叫び声。金属がぶつかる音。馬が走る音。

「怖い！そちらに行きたくない！やめて！」

身体が向かっているのが戦場だと悟って、必死に逃げるために上に上がるうともがくが、意思とは逆にどんどん下降していく。

やがて視界に赤色が見えてくる。

あたり一面が血しぶきで真っ赤になっているのだ。

「もうやめて！癒しの力ならいくらでも与えるから！」

『ああ。癒しの女神さま』

無数の兵士が私の姿を見つけると戦うのをやめて、血だらけの身体でこちらに寄ってくる。

『来て下さったんですね。でももう私たちには手遅れですよ』

血で染まった無数の手が私に触ろうとしてくる。

「いや！こわい！」

私は少しでも離れるために頭を抱えて身体をよじる。

『あなたがおそかったから私たちは助からなかったのです』

「ごめんなさい！ごめんなさい！」

ただひたすら謝る。本心からなのか、ここから逃れるために言っているのか、正直のところ自分でもわからない。

『それでよく癒しの女神だなんて名乗れますね』

『名乗るなら私たちを生き返らせてください』

とうとう彼らに腕や肩を引っ張られる。それがひどく冷たく感じた。

「ごめんなさい！そんなことまで私にはできないの！」

本能的に彼らの手を振り払いたくなるが、あまりにも数が多くて
どんどん私は囲まれてしまう。

「私だって女神になりたくてなったわけではないの！ただの人間なの！――」

私は橘風香でしかないの！

私なんかが女神だなんてやっぱり無理なんだ。

「フウカ！フウカ！」

男の人の声が必死に私を呼んでいる。
だれ??

その方を振り向くと一瞬にて取り囲んでいた血だらけの手が消えた。

その隙を逃してはだめだと、がむしやらに声がする光の方へと飛んでいく。

光に手を伸ばした瞬間景色が一転した。

「フウカ！フウカ！」

その声に恐る恐るまぶたをあける。

黒い瞳をした整った顔が、見たこともないほど切羽つまった表情でこちらを見ていた。

「ゼノン……」

彼の名前を口にする。このときようやく自分は夢をみていたことに気が付いた。

夢だったんだ……。

自分の身体がひどく汗ばんでいるのを感じる。神殿の空調はどういう仕掛けか、いつも快適でいままで汗などほとんどかかなかった。つまり冷や汗なのだろう。

私が目を覚ましたことに気が付いて閻神はほっと一息つく。

「フウカ……。大丈夫ですか？」

そう言われて大きく深呼吸する。夢だと判ってもまだ冷静にならない。それほど恐ろしく自分の不安を持った心を決るような夢だった。

「……うん。夢だったのね」

身体はいまだに震えたままだったけど、なんとか返事する。

「フウカ。強がるのは止めなさい。私には弱音を吐いてもいいのですよ？」

ベッドの上で彼に上体を抱きかかえられた状態であつたが、そう言いながらやさしく私を抱きしめ私の顔を彼の胸に埋める。

泣いていいの？

先ほどの囲まれた冷たい手と違って、温かい生きた体温を感じて涙が自然にこぼれて来る。

「こ……怖かったの。戦いで助けられなかった人が私を責めるの。お前が癒しの女神だから死んだって！数え切れないほどの手が私に伸びてくるの！」

必死にその体温を離すまいと彼の胸に抱きつき、流れる涙を拭きもせずに夢の内容を言う。

彼は黙って私の頭を何度も無言で撫でる。

「やっぱりこのまま女神でいることがダメなの？記憶を消したら完

壁な女神になれるの？」

いままで黙っていた不安があふれ出る。このままでいいのかといつも考えていた。そのせいで救えない人もいるのではないかと・・・。

「フウカ。完璧な神などいませんよ。私など欠陥だらけです」

いつも冷静で、すべてにおいて超越している閻神が？

「神と言っても人と代わらない感情があるので失敗もするし、逆に力があるので自分勝手な者が多いのですよ」

たしかに今まで付き合った全ての神はとても感情豊かだった。

「オリセントに聞きましたよ。彼は言っていました。フウカでなければもっともつと犠牲が出ていただろうと」

びつくりして顔をあげると、ゼノンは本当に優しい表情でこちらを見てくれている。

「神は万能ではないのです。全ての者を救うなど、だれであつてもできません。逆に全てを救つてはいけないのです。自然の摂理なのですから」

そう言われて、昔聞いた話を思い出す。

食物連鎖は一部は上位の生き物の食料になり、数がほぼ変動しないことで保っている。もし、一部のものがほとんど死なない状態で増え続けたらどうなるか。

餌がなくなり結局、最終的にその増えてた生き物も減少する。

人間にしてもそうだ。神が全てのものを助けたらどうなるか。

やがて住むところ食料が不足し、土地を増やすために戦争が勃発するか、自然を破壊して宅地にする事となるだろう。前者だとふたたびあの地獄を作ることになるし、後者だとそこで生きる生命を奪うことになる。

そういうことなの？

「私はこのまま記憶があってもいいの？許されることなの？」

「君はつらいでしょうが、君に関わった者たちはそのままのフウカでいてほしいと思っていますよ。私もね」

私の頬をそつと両手で包み込む、まだ涙があふれる瞳にそつと口付けしてくれる。

私をなぐさめようとする闇神の唇のあたたかさから、いてもいいんだと言う気持ち伝わってもつと涙があふれる。

「泣きただけ泣きなさい。溜め込んだからそれは良くない闇として、心に染み付いてしまえます。もう怖い夢を見ないように私の氣を与えますので、ゆっくりお休みなさい」

それだけ言うとうっくりと頭を下げながら自分の唇を私の唇に近づけていく。

ゼノンは一瞬触れ合うだけでなく、私の不安を取り除くかのうように、何度も角度を変えながら口付けを続けた。

だが、それは性的なものではなく、闇の神からの安らぎを与える儀式のように感じた。

送られてくる、お母さんに包まれているかのような温かい氣を感じながら、やがて何も考えられなくなつた。

28・悪夢（後書き）

最近、おもしろいタイトルがつけられません。ちょっとシリアスモードなんで・・・。

早くほのぼの系に戻したいです。

起こすのを誰にしようか迷いましたが、闇神になりました。

29・闇神からの安らぎ（前書き）

すこし長いです。延々とゼノンの回想を書いています。

29・闇神からの安らぎ

最初見たときから惹かれていた。

エダが抱いて連れてきた少女。外見も素晴らしいものだがそれ以上に美しい神気。神殿で保護をして彼女が目覚めた途端、その姿を見たくて仕事を放り出して見に行った。

起きた彼女の純粋な眼の輝きを見て、レイヤやエダを出し抜いて会いに来てよかったと思った。彼女の眼には自分しか映ってないからだ。

エダのことを青くんと呼んでいるのをからかうと恥ずかしそうに頬を染める。

そんな彼女を見て今まで恋愛にそれほど興味なかったけど、彼女なら口説いてみてもいいと思った。

話してみてもあり得ない事実を知る。

彼女に名前がもうあるのだ。風変わりな名前。もうすでにレイヤが会って付けてしまったのか？できれば自分が付けたかったのだが・・・。

しかし彼女はレイヤの名前にも無反応だった。

この状態を解明したくあまりよくないことだが、彼女の記憶を読みとる。この力は最古神であるレイヤとゼノンのみに備わった力である。

彼女の中の記憶が自分の中へ一気に流れ出る。

生まれたときから30年間の彼女の歩み。異世界の日本という国で、戦とは無縁な平凡な生活を満喫していたのに、いきなりここに連れてこられたようだ。なぜそのようなことになったのか謎だが、いままで29人が誕生したときとは大きく異なっている。

レイヤもそれを知り、消してしまおうとしたが彼女は断固拒否した。自分たち2人はここに住む者のだれよりも長い生を過ごしていた。だから人としての記憶を持ち合わせたまま神になることが、い

かに苦痛になるか予想できていた。

それでも彼女は記憶を残すことを選択した。自分としても30年の彼女の人生を視てしまっただけに、消したくないと言う気持ちがよく分かる。それに彼女の眼の輝きが違うものになってほしくないと思ったのだ。

とりあえず慣れない彼女に侍女を付けるという話になり、セレーナを呼び出す。自分の側で補助をするワトンに次ぐほど有能な闇の精霊だ。彼女なら選ばれるだろうし安心できる。

「悪いが癒しの女神の侍女に立候補してくれないですか？」

執務室で彼女にそういうと一瞬びっくりしたように顔を上げ、次にうれしそうに微笑みながら頭を下げる。

「ゼノン様からの命令でしたら喜んで立候補いたしますわ。あの神気のおそばにいられるのは、どの精霊にとっても幸せなことですから」

「本当にうらやましいね、セレーナ。僕でもおそばにつけるものならいたいものだよ。男はダメらしいから無理だけどね」

自分の隣で補佐をしているワトンが、本当に残念そうにため息をついている。半分は冗談だが、半分は間違えなく本気で残念がつているのだろう。付き合いが長いだけによく分かる。

「立候補したいならしいたらいですが、どうせレイヤが選ばれませんよ。女神のそばに男の精霊をつけるようなことはできませんからね」

「冗談でそういうとワトンがますます顔をおもしろくなさそうにゆがめる。」

「わかってますよ。だから無駄なことはしませんよ」

幼い顔立ちの精霊を見てクスツと笑ってしまう。

「じゃあ諦めて今までどおり私の右腕でいることですね」

自分がそう言うのと今までの表情をなくし一転して、面白いものをみつけたような顔になって冗談だか本気だかわからないことを言うてくる。

「そうだ。それならゼノン様が恋人か夫になってくださいよ。そして僕らも接する機会がふえますから！」

期待一杯の眼で見上げてくる。

「まあ努力はいたしましょう。ただ、ライバルは多いでしょうからどうなるかわかりませんけどね」

そう控えめに言いながらもそれなりにやる気になっていた。

女神として規格外な彼女に、レイヤとエダと3人でいろいろと教えるということになった。

本来忙しいほうだったが、あまり彼女と接する神を増やしたくないので、なんとか時間を作ることにした。

そしてはじめての授業で飛行術を教えるとともに、人間界に連れて行くことをした。

生まれたら早いうちに人間界に降り、存在を示すのが慣わしになっている。

実際は空を飛んだだけだが、それで十分に神官などの職についているものには伝わっただろう。

飛んでいる最中、彼女が怖そうに自分の身体にしがみついていた。震える姿がなんとも可愛らしく自分の独占欲をひどく満足させていた。それであえて手を掴むだけでいいと言わずに、抱きかかえる形で長い間飛んでいた。

しばらくして彼女も慣れてきたが、この体勢はそう言うものだと思っているようで別に抵抗もしない。

だが、その時間も頭に響く片割れの声で中断せざるをえなくなる。

『おい！いつまで飛んでいるんだよ。次は俺の番なんだからさっさと代わりやがれ』

思わず舌打ちをしてしまう。

びっくりして腕の中でこちらを下からのぞく彼女に説明する。

「レイヤがそろそろ代われって言ってきたいるんですよ。昨日夕方一緒にいたくせにね。ほんとうはもうすこし、こうしてひつついておきたかったですけど・・・」

ついその感触が名残惜しくて抱きしめる力を強めてしまう。

夕食の話になりつい強引に同席を願ったが、すんなりと了承してくれる。

おそらくレイヤが今日も一緒に食べるつもりだっただろうが、先に約束してしまえば自分と一緒に食べようとしないうことはわかっていた。仲悪い兄弟ではないが付き合いが長すぎるので、別に食事まで一緒にしたくないのだ。

そして夕食時、とんでもないことを聞く。

瞬間移動をしようとして失敗して、噴水に飛び込んでオリセントに会ったと言うのだ。

なんと危険なことをするのだろう、この娘は。

自分がどれほど稀有で魅力的な気を放っているか、自覚がなさすぎるのだ。

まだ、あの堅物で紹介する予定だった戦神だったからよかったが、他の神や強い精霊共であれば脅しや冗談でなく監禁されて、無理やりにも自分のものにされてもおかしくないのだ。まだまだ神気はあっても使いこなすことのできない彼女に、抵抗する術はないだろう。

気が付いたらかなり脅してしまったようでかなり彼女の顔が青ざめている。

本当にいい表情しますね。自分の言葉や行動でここまで表情が変わるのが楽しいと思えるとは、考えもしなかったですよ。

申し訳ないと思うより楽しいと思ってしまう自分の性格の悪さに、いまさら気が付いてしまった。

結局、瞬間移動は彼女の性質のためにしばらくお預けとなる。

周りの神が紹介しろとうるさく言ってくるようになって、レイヤやエダ、オリセントと相談し牽制もかねてお披露目をする事となる。正直やりたくないと言う気持ちもあったが、このまま隠し通せるわけもないし、焦れて強行突破に出るやつが出てもおかしくない。そう思っていたのだが、正直彼女の着飾った姿をみて軽く後悔した。

これでは逆に煽ってしまうだけかもしれない。

予感的中して壇上で挨拶する彼女を見て、多くの者たちが見惚れている。このままでは挨拶が終わったと同時に、人が押し寄せてくるのが目に見えていた。

レイヤと目配りして隣の控え室に彼女を連れ出す。

挨拶は必要だが、自分とレイヤが監視しながらすることにしたのだ。そうすれば暴走する者もでないはずだ。とりあえず一番目に彼

女も会いたいと言っていた、唯一の夫婦であるジューンとダリヤを呼び出す。控え室に行く途中で大地の女神にこうからかわれてしまったが……。

「本当に貴方たちは彼女を可愛がっているのね。気持ちは分かるわ。さきほど緊張しながらも挨拶している姿は、本当庇護欲をそえられるものがあつたもの。それに実際彼女に近づきたくてみんなの眼の色が変わっているからね」

夫婦との会話でフウカもずいぶん肩の力が抜け楽しそうにしていたが、そうしている間に様々な神が会わせると自分とレイヤに抗議してくる。

まあそうなるだろうな。

仕方ないので切り上げてもらい、流れるように神たちが3人ぐらいつつ挨拶に来る。

中にはなんとか近づこうと、積極的に話かけたりしている者や贈り物をしようとしている者もいたが、レイヤと自分で無言の睨みを利かせて退散させる。

その成果もあつて挨拶が終わって、彼女が名前を覚えていたのはほとんど女神だけだった。

しかしその夜とんでもないことが起こる。

夜も更け寝ようとしたとたん、ベッドのすぐ近くで誰かが移動するときに発生する空間のゆがみが起こった。

だれだ？

そう思う間もなく自分の隣で、今日お披露目の主役だった癒しの女神が目を開じながらつぶやいている。

「でも、起きているかどうかどうやってどうやって調べるのだろうか？」

そついいながらゆつくりと目を開ける。

「え！」

自分から来たのにこの状態を把握してないようで、驚きを全面に顔に出している。

理由を聞くと寝れなくて自分の気を探ろうとしたら、間違つて跳んできた。まったく、この子はあぶなっかしい。他でもない自分を探してくれたことには純粹にうれしいが、この状態でそう言われてまったく手を出さないほど、男として枯れているわけでも理性的でもない。

趣くまま彼女をベッドに押さえつけるが、慌てふためく彼女を見てすこし冷静になる。

でもこのまま帰してしまうのも嫌なので唇だけ奪う。絡めとるような口付けもできたのだけど自分の理性を保つためと初めてであろう彼女に対して触れるだけで済ました。

自分と親しい者だけに渡す匂い袋を贈り、結局その日は部屋まで送り届けた。

まあ神としての初めての口付けを頂いただけで満足しましょう。

深夜。自分の周りに集まる気の中で異質なものを感じ取る。

なんだ。このひどく不安定で悲しげな気は。

夜になると闇の神である自分の力が増しわずかな気の変動にも過敏になる。

「フウカ？」

集中してその気を探ると癒しの女神から発されていた。彼女のそばに移動すると、寝ながら彼女の搾り取るようなうめき声をあげていた。

「ごめんなさい！そんなことまで私にはできないの！」

日ごろの彼女からは想像できないほど、その彼女の表情は苦悶に満ちていた。眉間に一杯しわを寄せ、辛そうになんども謝っている。彼女の上体を抱き上げる。少し安らぎの気を与えながら何度も彼女の名を呼ぶ。

「私だって女神になりたくなっただけではないの！ただの人間なの！！」

今日オリセントから彼女の活躍を聞いていた。戦場に降り立ち、人に呼びかけ、戦争を止めて、溢れるばかりの癒しを与えたと。あの冷静で沈着な戦神が興奮したように、彼女を絶賛していた。

『それでも彼女ははじめて戦争を目にして、衝撃を受けているはずだ。それがどう彼女が受け止めるか分からないが、できる限り俺は支えになって、彼女の記憶を消すようなことにならないようしたいと思う』

説明し彼女に気遣いを見せる彼が、彼女に対して思いを抱いたというのはすぐに分かった。

やはりオリセントが言うように彼女は大きな傷を隠し持っていたのだ。

「フウカ！フウカ！！」

抱きしめて揺らしながら何度も呼ぶ。

やがて彼女は小さなうめき声をあげるのを最後に、ゆっくりと目を開ける。

「ゼノン……」

弱々しげに自分の名前を呼ぶ彼女に安堵する。

「フウカ……。大丈夫ですか？」

そう言うとしばらく状態を確認してから一度呼吸を整えてから、

「……。うん。夢だったのね」

とまるでなんでもないと言うように、柔らかに微笑みを見せてくる。だが、抱きしめている身体が小刻みに揺れている。彼女がやせ我慢をしているのは明白だった。

「フウカ。強がるのは止めなさい。私には弱音を吐いてもいいのですよ？」

震えを止めたくて慎重に彼女を抱きしめて、彼女の顔を自分の胸に引き寄せる。このまま彼女を放置すると壊れて、記憶を消す羽目になると思った。それは自分が思っていた以上に耐えられないことなのだ。と今更に思い知る。この彼女だから惹かれたのだ。

しばらくそのままにすると、彼女が小さな泣き声をあげる。

「こ……。怖かったの。戦いで助けられなかった人が私を責めるの。お前が癒しの女神だから死んだって！数え切れないほどの手が私に

伸びてくるの！」

それだけ言うと必死にその体温を離すまいと、自分の胸に抱きついてくる。その姿を見て彼女に対しての愛おしいさが溢れるのをとめられない。黙って絹のような触り心地の髪の毛を落ち着かせるように、何度も撫でる。

「やっぱりこのまま女神でいることがダメなの？記憶を消したら完璧な女神になれるの？」

今まで黙っていただけで、やはり彼女もそこに苦悩していたのだ。

「フウカ。完璧な神などいませんよ。私など欠陥だらけです」

自分の感情に任せていろいろな失敗もした。それはレイヤにも言えるし他の神もそうだ。

オリセントが彼女のことを絶賛していたことを告げると、びっくりにしたように顔をあげてくる。涙は拭かれることもなく両目からあふれ出ていた。その表情は憂いに満ちていて、今まで以上に彼女を美しくみせている。

「神は万能ではないのです。全ての者を救うなどだれであってもできません。逆に全てを救ってはいけないのです。自然の摂理なのですから」

そう言うとしばらく考え込むようにしてから、

「私はこのまま記憶があってもいいの？許されることなの？」

と、こちらに問う。彼女はどという意図でこちらが言ったのか正確

に把握したようだ。

「君はつらいでしょうが、君に関わった者たちはそのままのフウカでいてほしいと思っていますよ。私もね」

そう言つて彼女の頬をそつと両手で包み込むと、まだ涙があふれる色違いの瞳にそつと口付けする。そうするとより一層彼女の涙は流れる。

「泣きたいだけ泣きなさい。ずっと溜め込んでいれば、それは良くない闇として心に染み付いてしまいます。もう怖い夢を見ないように私の氣を与えますのでゆっくり休みなさい」

それだけ言つとゆっくりと頭を下げながら彼女に口付けした。できるだけ優しく唇だけを味わいながら安らぎの氣を与える。

しばらくすると腕の中で静かに彼女の瞳が閉じられる。

安定した氣を確認しながらゆっくりと彼女をベッドに寝かす。

まだ乾ききらない涙が彼女の頬を湿らしていた。

人差し指でそれをぬぐい、最後に軽く彼女の唇に口付けをする。

「どうしてここまで惹かれるのでしょうか。おそらくレイヤもエダもオリセントも引き下がれないほど、君に心を奪われることになるのが目に見えてますよ。いえ、もうすでになつているのでしょうか。その危ういまでの人としての魂のせいなのか、癒しの女神の本質なのか分かりませんが。それでもそのままの君を間違はなく、私たちは欲しているのでしょうかね」

自嘲するように聞こえるはずの無い彼女に呟いてから、自分の部屋へ静かに移動した。

29・閻神からの安らぎ（後書き）

あれ？なんかゼノンが一番フウカに惹かれているみたいになっちゃった。

まあいつか。当初は光神は傲慢で嫌な神で双子の閻神が、主人公を庇って保護して彼女も光神に対してトラウマだらけの閻神を癒して、お互いに惹かれると言う設定だったし。

まったく違う形になっていますけどw

すこし文章がおかしかったので改正しています。でも話は変わっていません。

間話：闇の精霊の独り言（前書き）

今回セレーナの回想を間に入れてみました。
いつかはノアも入れるかな？

間話：闇の精霊の独り言

最初に水の神であるエダ様に連れられて、フウカ様が神殿にいらしたとき、すべての精霊の間で衝撃が走りました。

そもそも精霊にとつて、神の気は甘い極上の蜜のようなものでございます。その中でも自分と同じ系統である神のそれは100%純粹な気なので、おそばにいただけで自分たちの気もどんどん高まるものなのです。

もちろん、他の神でも気はその方の神気の大きさや性質にもよりますが、大変魅力的なものでございます。

そんな中で突然現れました、神殿中に感じさせるような光り輝くフウカ様の気は、系統の枠を越えてすべての精霊にとつて、まさに癒しを含んだ暖かく神秘的な気なのです。

「セレーナ。今の気を感じた？」

闇の執務室にて筆頭補佐官であるワトン様が、助手としてそばにいたわたくしに聞いてきます。

もちろん、この甘い極上の気を見逃しようがありません。たとえ寝ていても起きてしまうほど感じるものです。ワトン様に無言で頷きます。

「新しい神の光臨だね。気の気配からして待望の女神かな？今、ゼノン様はレイヤ様のところに行っているからちようど会っていそうだね」

たしかにこの優しい気は女性のもののように感じます。と、なりますと6人目の女神誕生です。

29人神がいても5人しか女神がいないのが、神のただでさえ少

ない出生率を下げています。6人目となりますと、皆様方が興味を持つことになるでしょう。ましてやこの気ですから。

しばらくして闇の執務室の主であるゼノン様が、戻ってこられました。

「ワトン、セレーナ。とうとう癒しの女神が誕生したようですよ」

闇神さまは帰ってきてすぐに面白いものを見つけたようにご機嫌で、そうわたくしたちに教えてくださります。

彼のこのような表情はこしばらく、見たこともないようなモノでした。

でもその理由は彼の言葉で充分すぎるぐらい分かりました。

癒し。女神。この両方のキーワードごとこの世界が待ち望んでいた存在だったからです。

「それは本当によかったですね、ゼノン様」

となりでは少年のような容姿の上司が、本当にうれしそうに神に言っています。

「ワトン。これからは忙しくなりますよ。ああ、ちょうどセレーナを呼び出して居てくれたんですね。いいタイミングです」

前半はワトン様に向かって言い、後半はその後ろに居たわたくしを見つけて手招きで呼びます。

「悪いが癒しの女神の侍女に立候補してくれないですか？」

え？わたくしがですか？

敬愛するゼノン様が自らわたくしに、お願いという形でお伺いを

たてて下さっている。さらにその内容がゼノン様と張るほど、魅力的なあのすばらしい神気のおそばにいられるということなのです。

「ゼノン様からの命令でしたら喜んで立候補いたしますわ。あの神気のおそばにいられるのはどの精霊にとっても幸せなことですから」

頭を下げながら答えますと、ワトン様が本当に残念そうにため息をついています。

「本当にうらやましいね、セレーナ。僕でもおそばにつけるものならいたいものだよ」

そう思う気持ちは良く分かります。それほどまでに魅力的なのですから。

ワトン様は諦めろと言うゼノンに、反撃のつもりで面白おかしく彼女の恋人になってくださいと言いました。

その言葉にますます楽しそうにゼノン様はこう答えます。

「まあ努力はいたしましょう。ただ、ライバルは多いでしょうからどうなるかわかりませんがね」

いつになくやり気な上司に思わず、ワトン様と二人で顔を見合わせてしまいました。

冗談で言ったのに本当にその気が出ているとは……。そう思っているのがワトン様の表情から伝わってきます。

そして初めてフウカ様とお会いして、妙にゼノンさまのやる気に納得してしまつたのです。

なんとこのすばらしい気に一致するような、素晴らしい姿をされた方なのだろう。

初めてお会いできたとき、その愛らしい姿に驚嘆をいたしました。しかしそれ以上にすばらしいのは、フウカ様のお心持ちでありました。

「私はフウカです。本当ににも分からないことばかりなので、いろいろ教えてください」

わたくしとノアが自己紹介すると、フウカ様はそう言いながらただの精霊であるわたくしたちに頭を下げられたのです。

「フ、フウカ様。私どもに頭を下げるなどもつたいないです。どうか頭を上げてください」

わたくしが慌てて手をあげていると、ふつと微笑を深めながらなんてこともないと言う感じで、こう申されました。

「え？礼儀にもつたいないなんかないよ。だってこれからお世話になっちゃうだろうしね」

神と精霊との格の違いが分かっていないからでしょうが、その考え方にフウカ様の性根がよく現れています。

さらに嬉しいことにその性質はどんなに時間を経過しても変わらず、わたくしどもに対してもすぐに感謝の言葉を下さります。

「お仕えできる女神さまがこんなにすばらしい方でとってもうれしいです！」

おなじく侍女となつた光の精霊のノアのこの言葉と、わたくしの気持ちはまったく同じものです。

人としての記憶を持ち合わせているとお聞きし、最初はお仕えするのに戸惑いもありましたが、今は本当にこのままのフウカ様にお仕えできる喜びをかみ締めております。

さらにもう一つの楽しみは、ノアとフウカ様の恋愛を推測することとであります。

ただいま、フウカ様が勉強と称して接するのは4名の神さまに限られております。わが主であるゼノン様も一人です。

4名が他の神とフウカ様が接触するのを嫌って、記憶があつて不安定なのを理由にほぼ軟禁状態であるのはおそばにいるわたくしやノアから見れば明白です。それでもなにも言わないのはわたくしはやはりゼノン様と、結ばれて頂きたいと思つているからなのです。間違えなくノアは光の神であるレイヤ様と、と思つているからでしょう。

4名の神はおそらくこの神の世界では最上神のレイヤ様、ゼノン様はもちろん、水の神のエダ様も戦の神のオリセント様も上位神で在られます。

その4人ともが大なり小なり、フウカ様に興味をお持ちのようなのです。

レイヤ様は一番に気持ちを伝えたご様子です。それにフウカ様は少なからず、心が揺さぶられているご様子です。

エダ様もそれなりに興味を持たれて、今度デートに誘われたとフウカ様が言つてました。

オリセント様はまだ分かりませんが、司るモノの関係が深いので今後フウカ様に一番接されるお方でしょう。

そして、わが主のゼノン様は本当に楽しそうにフウカ様に接されて、間違えなく惹かれています。先日ゼノン様の部屋に深夜にフウカ様が跳ばれたと聞いて、一瞬期待してしまいましたけどさほどの

進展はなかったご様子です。さすがにいくら目の前に据え膳が置かれていても、まだ自分のお膳でないと分かっているので手をつけなかったのでしょう。それは賢明ですが見守るほうには、すこしジレンマを感じます。

しかし当のフウカ様は女神の勉強で頭が一杯で、恋愛に目を向けてないご様子なのです。

「どうすれば、フウカ様がレイヤ様に興味持たれるのか見当もつかないわ」

ノアがわたくしに愚痴をこぼします。やはりなんとか応援しようとしている様子です。実際レイヤ様に興味持たれてもわたくしとしては困るのですが、ゼノン様に関しても同じことでいい案も浮かびません。

「あれほど無自覚で惹かれさせる方は、見たことないですね。ゼノン様たちがフウカ様を囲うのも分かりますわ」

少しずつですが、目に見えて4人の神々が癒しの女神に対しての気持ち、日に日に増していつているのを感じます。まだ積極的に行動に移したりはしてないご様子ですが。

でもそれも時間の問題でしょう。そうなるとフウカ様のお気持ちはどう変化するのか気になります。今はだれに対しても同じだけの気持ちしか持っていないのは、おそばで見てて分かっています。そのような彼女が恋されると、どのように変貌を遂げるのかも気になります。

「どうせもうじきお披露目するでしょうね。いろんな神や大物精霊に、どんどんフウカ様のことが聞かれるようになったし」

ノアがそう言うが、たしかにわたくしのところにも数多くの訪問者が現れては、開口一番フウカ様のことを聞いてきています。おそらくそうなるだろうとわたくしも思います。

彼女の予言どおりその3日後にお披露目することになり、大慌てでしたがたいへん楽しくフウカ様の身なりの手配をさせて頂きました。

ノアと腕によりをかけてフウカ様のお披露目用の姿を整えました。想像以上にすばらしい出来でゼノン様に、

「君が優秀なのは分かっていたけど、ここはすこし手を抜いて頂きたかったですね」

と、こっそり言われてしまいました。わたくしもすべての者を惹きつけてやまない、フウカ様の正装姿にただただ見惚れるばかりです。

この方が今後どなたの恋人になれるのか分かりませんが、おそばでフウカ様の心の変化を楽しく見守らせていただこうとノアと誓い合っています。

もちろん、お仕えるフウカ様の幸せが大前提ですけど。さらにできればゼノン様にがんばっていただきたいものです。

30・滝デート（前書き）

ひさしぶりにエダ登場です。

30・滝デート

ふあゝ。

朝、大きく欠伸をひとつする。

昨日の夢は本当に恐ろしかった。だが、ゼノンがわざわざ深夜に来てくれて安らぎの気を与えてくれて、その後はまったく夢をみることなく寝れたのでだいぶ気分的にも落ち着いたので。

気も嬉しかったけど彼の言葉がなによりも心に響いた。

私にそのままのフウカでいてほしいと思っていると。

一番ほしかった言葉。私のエゴで記憶を消さないのに、それで迷惑かけているのに、そのままがいいと思ってくれていると。

「本当にこのままでいいのかわからないけど、もうしばらくはがんばっていいってことだね？」

考えてみるとレイヤも自分を見ていると言ってくれてたし、オリセントも『フウカでなければ』と言ってくれてたと昨日ゼノンが言ってた。

「でも、夢のことは忘れてはいけないね。癒しの女神としてどうやっていくべきなのかもっともっと勉強していかないと」

ぎゅっと手を握りしめて決意を固める。

ベッドから立ち、カーテンを開けたりしているとノアとセレーナがいつも通り入ってくる。

「おはようございます。昨日本当においしいデザートありがとうございました！」

元氣一杯にノアが言ってくる。

そういえばプリン渡していたっけ？よかった。気に入ってもらえたんだ。

「おはようございます。ゼノン様より本日は休養するようにと伝言を頂きました」

セレーナがすこし控えめに伝えてくるのに軽く頷く。

ゼノンには本当に心配かけちゃったな。あんなに大泣きしたのは久しぶりだったけど、その間ずっと慰めてもらっちゃった。最後はキスされてそのまま寝ちゃったし……。

会うの恥ずかしいけど、きちんとお礼しないとね。

「ゼノンって甘い物食べるほう？」

食べるなら昨日のプリンを持っていこうと聞くけどセレーナは首を横に振る。

「残念ながら、あまり召し上がらないですわ」

そっか。レイヤは食べていたけどゼノンはお酒飲みながらつまむ程度だったもんね。言葉のお礼だけにするかな。

いつものように朝の身支度を整えてご飯を軽く頂く。

終わったのを見計らったかのように部屋の片隅の空間が歪み、青い髪をした少年が現れた。

「おはよう、フウカ。昨日はたいへんだったみたいだね」

手を上げながら挨拶をしてくれる。その表情はいつもと違ってすこし心配そうにこちらを伺っている。

「エダ、おはよう。心配かけてごめんね」

心配いらないと言うアピールをしたくて、できるだけ明るそうな笑顔で元気に答える。エダはそんな私の顔をしばらく眺めていた。

「話は聞いたよ。すごい活躍だったんだってね。あんなに饒舌に語るオリセントは初めて見たよ」

どんな話をしてくれたんだろう？あの強面で大柄だけどすごく愛嬌のある戦神が、熱心に話す姿があまり想像つかない。

「今日はゆっくり休むって聞いたからよかったら、前言ってたように出会った滝に行かないかなって、来てみたんだけどどう？」

それはいいかも。今日休みといわれて、どう過ごそうか迷っていたからわたりに船状態だ。

「それはうれしい！ぜひ連れて行って。あ、そうだ。エダって甘い物食べるほう？」

せっかくだしエダにも食べてもらおう。

「すごく好きなほうだけどどうしたの？」

うれしい返事をもらったので、昨日作ったプリンのお話をするとびっくりしたように、目を大きくしてから喜んでくれた。

「それはぜひ食べたいな。でも料理する女神なんてだよ。楽しみだな」

冷たくしているので、今食べようと言うと力で運ぶことができるから、せっかくだし滝で食べようと言う話になった。

「じゃあ行こうか。僕らの出会いの場所へ」

ちよつとふざけた感じで片目をつぶりながら言い、そつと私を抱きかかえて瞬間移動した。

景色が一転したかと思うと、ゴゴゴと激しく水が流れる音が聞こえる。

やはりそこはうつくしい幻想的な景色だった。

樹木や苔や石の間から何本もの白い降り注ぐ水。そこに小さな虹が架かっている。

「うわぁ。やっぱりここいいね。癒される」

嬉しくなつて滝のほうに近寄る。この滝に救われたんだよね。

「癒しの女神が滝に癒されるの??それ、おもしろいね」

後ろから付いてきながらおもしろそうにそう言う。

だってやはり自然はマイナスイオンがあつて、癒しになるっていうからそう感じるものだ。

エダが手招きをしてくれて、水がかからないぎりぎりのところの岩に二人で腰掛ける。

そこから見える滝は本当に壮大でなんとも言えない美しさがあった。

「最初にここでエダに声かけられて本当にびっくりしたんだよ」

私は出会いを思い出しながらなつかしそうに言う。水の中から声がいきなり聞こえるなんて誰も思わないだろう。

「驚いたのはこっちのほうだよ。どう見ても女神なのに自覚ないし服装はぼろぼろだし、すごくおいしそうに僕の水を飲んでくれているし」

心底楽しそうにこちらを覗き込むように頭を下げながら見ている。あれからまだ10日ほどしか経ってないんだけど、色々ありすぎて懐かしい思い出になっている。

「あの時は本当にこの水に救われたんだよ。だって餓死しちゃうって本気で思っていたから」

本当はそんなに簡単に死なない身体になっていたらしいけど、自覚もなかったしあの喉の渴きは本物だったから飲めたときの水のおいしさは格別だった。

「それに驚きはしたけど、人に初めて会えたってすごく嬉しかったんだよね」

「僕も最初にフウカに会うことができてよかったと思っているよ。だって、他の3人は役目上当然フウカに接することができるけど、僕は違うからね。最初に出会うことができたから、こうして話もできるし教えることもできる。本当に幸運だったな」

そっか。レイヤとゼノンは最高神と言う立場から接するのは必然だし、役目上深い関係にあるオリセントはどうやっても関わっていくことになるだろう。でも水の神であるエダと癒しの女神である自分では今のところそれほど直接関わりがあるわけではない。

「もし会わずに直接神殿に行ってたなら、初めて君と話するのはあのお披露目の日のほんのわずかな時間だけだっただろうね」

すこし苦笑するような笑顔でそう言う。だからそれを否定する。だって実際は大切な先生の1人だから。

「でも、実際はこうしてエダと一緒にこの滝にいられるもんね。私は助けてもらったのがエダでよかったと思っっているよ」

力強く彼の眼を見て言う。と彼は嬉しそうに笑みを深める。苦笑するような笑顔でなく本物の笑顔だ。

「ありがとう。本当に君は癒しにぴったりだね」

その言葉にひどく心を打たれた。

エダが何気なく言ったのは分かっている。でも、昨日からくすぶってた私がこのままでいいのかと言う思いを、すこし消してくれるような言葉なのだ。

「ほ、ほんとうに？私がこのままで癒しの女神でいてもいいと本当に思ってくれているの？」

気が付いたらさすがるように彼に聞いてしまっていた。

いきなり真剣な表情で問いかける私にすこし驚いたようで、一拍間をあけてから答えてくれる。

「当たり前じゃあないか。昨日の活躍を聞いてそう思わない者はいないよ。それ以前に僕はここで君を見つけたときから不思議にも、そのままの君を守りたいと思ってているんだからね」

うれしい。ただ純粹にうれしい。昨日あれほど泣いて枯れてしまったと思っていた涙がふたたび復活して両目を濡らす。

「ありがとう。昨日実は私が女神のせいで助からなかったって、無数の人に責められる夢を見ちゃったの。ゼノンが気を送ってくれてなんとか落ち着いたし彼もそのままで良いと言ってくれてたけど、エダにもそう言ってもらえると本当にうれしいの」

そう言つと涙を指で優しくすくいながら、もう片手で慰めるように背中を撫でてくれる。

「それは怖かっただろうね。僕にもゼノンのような安らぎの力がほしいよ。そうすれば君をもっと助けれるのにね」

すこし悔しそうに言つ彼におもいつきり頭を左右に振る。

「うっん。本当にいまの言葉で十分助けてもらったよ」

何気なくでた言葉だけに、それが彼の本心であると深く感じる事ができたのだ。

「じゃあお礼に昨日作ったというお菓子をもらおうかな？2階の氷の保冷庫にあるって言ったけど、これかな？」

そう言いながら差し出したのはまさに昨日つくったプリンが二つ。

すこし冷えすぎたようで表面が凍っていた。

「うん。これだよ。ちょっと凍っているけど冷凍プリンでもおいしいと思うから食べてみましょう」

話題をここで代えてくれた彼に感謝しながらその話に乗る。匙もいっしょに出してくれて一口、口に入れる。

冷凍と冷蔵の間ぐらいで口に入れた瞬間溶けるような甘みが口に広がる。

あ、これちょうどいいかも。

「へえ」。こんなお菓子初めてだよ。おいしいね」

エダも本当に甘い物好きなので満足そうに食べている。よかった。気に入ってもらえたようだ。

本当に気に入ったようで結局あと残り3個とも出してきて食べていた。今日中に食べないと思うっていたのでよかったけど、本当に甘党なんだなあって感心してしまった。

30・滝デート（後書き）

エダとのラブラブは書けません。もうすこしラブラブにしたかったんですけど・・・。

まあみんなが彼女に積極的に迫るのもどうかと思うので、彼はぼちぼち行くようにします。

31 水神の内緒（前書き）

エダの回想です。

31・水神の内緒

自分の領域である新緑の滝に異変が現れる。

他の神や精霊がこの滝に近寄ることはないだろうし、いるとしたら水の精霊ぐらいだ。でも感じる気はどうみても違っていた。

とりあえず水の中から覗いてみると、1人の少女が懸命に滝の下の川を手で掬って水を飲んでいた。

その姿にあっけをとられる。

あまりにもおいしそうに飲んでいるからだ。

しばらく飲んだ後、急に水しぶきをたたせながら両手で叩き出した。

と、そのとき。いきなり声が聞こえてきた。

「君はだれ？」

思わず、聞いてしまう。

しかし帰ってきたのはその回答ではなかった。

「うれしいよお・・・人だぁ・・・」

そう言いながらこちらを見ながら崩れるようにその場で座り込む。

「僕は質問しているんだけど？君はだれ？なんで僕の領域にいるの？」

もつと近くで彼女を見るために瞬間移動して彼女の目の前に立つ。近くで見て彼女の出で立ちが、予想以上に変わっていることに驚く。

まず目に付いたのはその神気。精霊ではありえなくほぼ間違いな

く女神だろう。だが、5人しかない女神の中で彼女のような者をみたことがない。となると、生まれたての6人目の女神だろう。

白金の流れるような腰まである髪に右は金色で、左は薄い紫色のオッドアイに瞳が大きく開きながらこちらを凝視していた。顔立ちはずいぶん幼いがふくらとした唇がなんとも色気がある。かなり整った顔立ちで愛の女神であるビュアスと並ぶほどの美しさだろう。だが、身なりがみたこともないような物だった。

白い男性物のようなシャツを羽織っているが、サイズが違うのか胸がぱんぱんに張ってて、今にもボタンがはちきれそうだ。その下は身体にフィットしたスカート。

こんな服装は初めてみる。それにかなり汚れており、よくみると彼女の手足には無数の傷ができている。森に迷ったのだろうか？でもなぜ神が？生まれたてでも神殿に赴くものだろう、神としての本能的に。

「とりあえず、レイヤのところ連れて行けばいいか？えっと、君ちよつとこつちおいで？」

自分で考えていてもわからないし、神殿に連れて行く以外の選択肢はないので問答無用で身体ごと抱きかかえて神殿に連れて行く。

「あれ？君！しっかりして！」

神殿に連れて行った途端、彼女はぐったりと自分に身体をあずけて意識を失った。

「どうなっているんだろう。本当こまるなあ」

そついいながら彼女をいったん床に寝かしてから、肩と腰に手を回して抱きかかえる。

豊かな身体つきの割りに思いのほか軽い。

目を閉じている少女の息は、一定のリズムを保っていて疲労によってただ眠ってしまっただけだと告げている。

「うわぁ〜軽！ほんとうかわいい女神が生まれたなぁ〜」

抱きかかえながら眠っている少女を存分に見る。今ならどんなに見てもだれも咎めないだろう。なぜなら彼女と自分しかないのだから。

執務室で仕事をしているであろう光神のところに飛び込んで、勝手に部屋の長いすに彼女をそつと寝かす。

レイヤもその場にいたゼノンも彼女の姿を見てひどく驚いていた。事情を説明すると、さつさと侍女を選出し、レイヤは彼女を抱きかかえて連れ出してしまう。

うわぁ〜。やっぱりあのレイヤも彼女に興味持っちゃったんだ。

よく見るとゼノンまでどこか楽しそうだし・・・。

そう冷静に思っていないながらもどこかおもしろくないと感じている自分がいる。

なぜなら彼女を見つけたのは自分だから。

知らず知らずのうちに彼女に対して独占欲を持ってしまうようである、そんな自分に動揺する。

神殿に連れてきただけで彼女に対してそんな欲を持つことになるとは・・・。

いろいろ考えているうちにレイヤが彼女を白の部屋に寝かしてから戻ってきていた。

「じゃあ彼女が目覚めたら事情を聞くことにしよう」

そんなレイヤの言葉でとりあえずその場は解散する。

しばらくして自分の執務室に最高神の双子に連れられて彼女が来た。よく寝れたのかさきほどよりは顔色がいい。

しかしゼノンから事情を聞いてびっくりする。

人間としての記憶がある????

彼女が森で彷徨っていた理由は分かったが、そんな事例は聞いたこともない。

レイヤが気楽にその記憶を消そうとするが彼女は断固拒否した。

レイヤとしては好意でしているのだけど、彼女には伝わらない。

それはそうだろう。

とりあえずはこのままと言うことになるが、どうせ彼女はしばらくすると自ら希望して記憶を封印するんだろうとそのときは思っていた。

それまではなにかと規格外な彼女をとりあえず3人で面倒を見ることとなる。

とりあえずは自分が話すべきかな？今日はそんなに急ぎの用事ないし。

そう思つて二人に言うのと去り際に神の男女比のことは伝えろと指示してくる。

そりゃあ一番大切なことだ。ひとつは女神としてできるだけ子供を産んでほしいと言うこと。でも、それ以上に周りは男神だらけで彼女自身が身を守る必要があると言う事。

容姿、神気ともにここまで優れていると余計に危険だ。その上、力は不安定なのだから。

彼女は自身の姿も自覚なかったようで鏡を見て驚いている。

それでもいろいろ話していてなかなか聡明であることが分かった。

話していても楽しい。

かなり前向きで、この現実を受け止めようと必死だ。自分でもそれなりに好意を持っていたのは分かっていたが、強くそれを自覚したのはだいぶ経ってからだ。

「ありがとう」

何気なく言った自分の言葉をいきなり涙を流しながら喜んでいる。先日、戦場にオリセントと共に赴き、驚くばかりの活躍をしたと彼から聞いていた。

『それでも彼女ははじめて戦争を目にして衝撃を受けているはずだ。それがどう彼女が受け止めるか分からないが、できる限り俺は支えになって彼女の記憶を消すようなことにならないようしたいと思う』

熱く語った戦神がこう締めくくると聞き、自分も慰めてあげたいと考えて今日気分転換もかねてこの滝に連れてきたのだ。

「昨日実は私が女神のせいで助からなかったって、無数の人に責められる夢を見ちゃったの」

その言葉に元気そうに振舞う影で、想像以上に彼女が傷ついてるのを感じた。人間の記憶を持っている彼女にはどれほど辛いことだろう。

「ゼノンが気を送ってくれてなんとか落ち着いたし彼もそのまま」

良いと言ってくれてたけど、エダにもそう言ってもらえると本当にうれしいの」

闇神は眠りと安らぎを司っている。だから彼が一番彼女を慰めるのに適しているのは分かるが、自分がその立場でないことにどこか憤りを感じていた。

涙を拭きもせず泣いている彼女の背中をゆっくりと撫でてながら、ついその気持ちを口にする。

「それは怖かっただろうね。僕にもゼノンのような安らぎの力がほしいよ。そうすれば君をもっと助けられるのにね」

そういうと彼女はおもいつきり頭を左右に振り、今まで見た中で一番愛らしくうつくしい笑顔で否定してくれる。

「ううん。本当にいまの言葉で十分助けてもらったよ」

正直、彼女と恋人になりたいと言う気持ちはあっても、彼女自身の心がほしいとまで今まで思ってはなかった。しかし、自分が思っている以上に彼女自身に惹かれていることをその笑顔を見て自覚した。

その後、甘いデザートで彼女自ら作ったというプリンと言うものをもらう。素朴な味だがあまりのおいしさに残っているもの全て頂いてしまう。

もちろんおいしかったからなのだが、他の男神にあげてほしくなと言う気持ちはあつたのは彼女には内緒だ。

そしてもう一つ、内緒がある。

水の気を纏っている彼女を見ながら心の中で詫びる。ここに連れてくるということの意味だ。ここは水の聖地であり、そこにいる者すべてが水の気を少なからず帯びることになる。

予想以上に彼女が自分の気を纏っているのが彼女を手に入れたよ
うな錯覚を覚えて、かなり自分の欲を満たしてくれた。

31 水神の内緒（後書き）

ようやく4人とも書けました。回想はむずかしいです。
すごく難産です。

32・神にプライバシーはありません(前書き)

32・神にプライバシーはありません

あの後エダに部屋まで送ってもらった。休憩としてベッドサイドのいすに腰掛ける。

「今日は楽しかったな」

滝に行く前と行った後の自分の気持ちの変化を感じてそうつぶやいた。

もちろん滝もよかったけど、やはりエダからもらった言葉のおかげだ。

本当にいい人たちに支えられているなあと、今の状況に感謝を覚える。

レイヤは口は悪いけど本当は性格よくて、本当に私のことを見てくれていると言ってくれた。

ゼノンもいつも性格真つ黒なのに、あの自分でも壊れてしまいうなときに一番ほしい言葉をくれた。

オリセントは何度も私が癒しでよかったと言ってくれている。

エダもさきほど癒しの女神として認めてくれた。

4人とも自分が記憶があるばかりに、業務以外に私にいろいろと時間を割いてくれているのにそんなことを言ってくれている。

この記憶が癒しの女神として必要なだと私自身が、勝手にそれを免罪符にしているのではないかと常に思ってしまった。

「ありがとう。ほんとうにありがとう。この気持ちはいつかみんなに少しずつでも返していこう」

そのように決心する。

「よし。とりあえずは元気になったってゼノンに見せないとね。昨日のお礼も言いたいし」

とりあえず次の行動を決める。かと言って礼を言うのに呼ぶのもどうかと思うし……。

でもまた勝手に跳んだらだめだろうし……。セレーナに手助けしてもらおう！

そう思っただけを心の中で呼ぶとすぐに跳んできた。本当優秀だなあ。

「まあ。ゼノン様のところですか？ふふ。喜びますわ。そうですね。ぜひ手助けさせてください」

お願いすると本当にうれしそうに即答で了承してくれた。

「ありがとう。もう出来ると思うんだけどやっぱり怖くて。だから私が違うところに跳んだ場合だけ助けに来てくれない？」

うん。この前もすこしずつれたけどダリヤのところまで飛べたし、おそらくできると思う。

「分かりました。気にかけておけばいいですね。あ、例の植物の件ですが、2日後には届くそうですよ」

お米がもう届くんだ。それはうれしいな。精白米ならいいけど玄米だったらどうしようかな？ここに精米機なんかないだろうし……。

まあなんとかなるかな？

手配してくれたセレーナにお礼しなくちゃ。

「ありがとう！無理言っでごめんね。おいしく出来たらおすそ分け

するからね」

そう言うのと微笑んでくれる。美人さんの笑顔ってステキだよ。本来の用事を思い出してじゃあ行くねとだけ、声かけながらゼノンの姿を思い浮かべる。この前目の前に跳んじやったからすこし距離を置く感じで・・・。

景色が一転していきなり身体に重力を感じる。

ま！またか！！

でもこの前とちがつてすぐに柔らかいものに尻餅を打つ形になる。あ、ベッドだ。助かった！

そう思っている上の方からくすくすと笑い声が聞えてくる。その声が誰なのかすぐに分かった。

「そんなに笑うことないじゃない。ゼノン」

振り返ってみるとやはり黒を纏った長身で均整のとれた青年が、肩を震わせながら笑いをこぼしていた。

「いやあ。フウカはよっぽど私のベットがお気に入りなのかと思うとうれしくなりまして・・・」

そう言えば2回目だった。

慌てて上体を起してベッドから立ち退く。前みたいに油断したらダメだ。

「ごめんなさい。やっぱり自力で移動の練習したくて。で、でもゼレーナにサポート頼んだので勝手に跳んでないからね！」

ここは強調する。散々脅されているので予防策を張つてると言わないと、どんな目に合わされるか・・・。

「なるほど。練習でしたか。まあ私のところに来てくれたのでそれは不問としましょう」

あ、ここに来たのも練習だと思われちゃった。それは否定しないと。

「ここに来たのは、お礼を言いたかったからだよ。昨日の晩に来てくれて気を与えてくれて本当にありがとう。おかげでゆっくり寝られし、休みもらえたから気持ちを切り替えることができたよ」

そうお礼を言っているのにどこかゼノンはわずかに不機嫌そうに、私をなにか深層を探るように顔をかなり近づけて凝視してくる。その嫌味なほど整った顔近づけられると、やはり冷静ではいられないから止めて〜。

なに？ なにかへんなこと言った？

「エダの気が感じられます。さきほどまでエダと居ましたね？」

えー。いままでそんなこと聞いたことなかったのにどうしたのだろっ？

そう思いながらも疚しい事なにもないし正直に答える。

「う、うん。さつきエダに初めて会った滝に連れて行ってもらった。な、なにかまずかった？」

その答えにゼノンは納得したのか、すこし顔を遠ざけてくれる。

ふう。悩殺フェイスしているのだから勘弁してくださいよ。

「新緑の滝ですね。道理で今までにないほどエダの気を纏っているわけですね」

え？どういうこと？なんで滝に行っただけでそうなるの？
そう聞くとゆっくりと説明してくれる。

なんでもあの滝は水の系統にとっては、気を補充できる聖地のよ
うなものらしい。とりわけ水の神であるエダの住処の一部だからだ。
そう言えば最初会ったときに僕の領域って言ってたっけ？
そんな大事なところに私が行ってもよかったのだろうか？

「彼にしたらぜひ連れて行きたかったのですね。君が水の気を
それほど帯びるようになるのですから」

自分では気付かないけどそんなに付いているんだ。

「でも私にしたらまるで君を自分の物と主張しているようで、いさ
さか気に食わないですね」

ぎゃー。ブラック光臨だ。

妖しいまでに目を輝かせて笑うその表情は、まさに美しいけどど
こか恐ろしさを感じる。

「二人が深い関係になってもそのような気を纏うことになるのです
よ」

そ、そうなんだ。じゃあもしそういう関係になったら周りに一発
でばれちゃうんだ。

神の世界にプライバシーを下さい！

ついそう思ってしまう。

「フウカがそんな状態で私の前に現れるのは、いささか罪作りだと思うのですがいかがですか？」

そんなこと言われたってよく分かりません。

水の気を帯びているなんて分からなかったし。

どう答えていいか分からずまごまごしていると、ゼノンがくすつと一瞬笑いながらいきなりこう言う。

「そうだ。お礼をと言うのなら今度は私に時間を下さい」

時間ぐらいならいくらでもどうぞと思いつつも何度か頷く。話題を変えてくれてよかったとその話題に飛びつく。

「よかった。闇の聖地である夜の天空は本当に美しいですので、楽しみにしててください」

そう言われてさっき言われたこととまだ話が繋がっていることに気が付き、私は安易に頷いたことにすこし後悔する。

でも、連れて行ってくれるって言うなら純粹に喜ばうと前向きに考えることにする。

別にどんな気になっても私には関係ないし。綺麗な景色好きだし。エダはよくてゼノンがダメだと言う気持ちは今はないのだから。だが、ここで安易に頷いてしまったことで、私の周りとの関係がまたすこし変化する事になるのだが、そのときは私はなにも予測できてなかった。

32・神にプライバシーはありません（後書き）

暑いけどみなさん熱中症には気をつけましょうね。

妊婦にこの暑さはきついです。自分の体温も熱いしお腹重くて腰いたいし……。その上に熱の塊みたいな息子がひつついてくる。

ここの神みたいに一週間でばんと生んじやいたい！

もしかしたらそれが書きたくてこの話書き始めたのかも……。o

r
z

33・神は天然の資源なのです。(前書き)

サブタイトル・・・服を自分で買わせてください・・・。

33・神は天然の資源なのです。

「おはようございます、フウカ様」

翌日の朝、いつもどおりノアとセレーナが起きると共に入ってくる。合図もしないのに本当にすごいタイミングだ。精霊って本当に気に敏感なんだなって感心する。

「おはよう、ノア、セレーナ。ちよつといい？聞きたいことあるんだけど・・・」

私は少し前から聞きたかったことをこの日朝一番に聞く。

「服ってどうやって手に入れたらいいのかなあ？私なにも持ってないから買うこともできないけど、お金の稼ぎ方もわからないし・・・」

お金を持つてないけど、どうやって稼げばいいのか、そもそもお金で買えるものなのか分からない。

そう言うのと驚いたように手を口にあてながらノアが教えてくれる。

「フウカ様！フウカ様が望まれたら、いくらでも私たちが手配いたします。お金など稼ぐ必要ありませんわ」

稼がなくてもいくらでも望んでいいってこと？

それはなんかギブ&テイクではないように思う。そう思っているのが伝わったのか再びノアが話をつづける。

「フウカ様。神や女神はこの神殿にいらっしやるだけでも、無意識

に気を私たち精霊や自然界、人間界に分け与えてくださっているのですよ？それだけで充分なのです」

存在するだけでいいんだ。それはすごいなあ。

今までだまって洗顔の用意をしてくれていたセレーナが、申し訳なさそうにこちらを窺いながら頭を下げてきた。

「申し訳ございません。数多くの贈り物がありましたので、ついフウカ様のご要望を聞きそびれていました」

それにノアもはっと息を一瞬潜めた後、盛大に頭を下げてくる。

「ほんとうだ！すみません！私たちが至りませんでした！」

二人の反応にこっちがびっくりしてしまう。

「ち、ちがうの！二人は本当によくしてくれているよ！そうじゃあなくていつも貰ってばかりだから自分で調達しないとだめかなって思ったら、その方法も知らないことに気が付いたから聞いたただだから」

あわてて否定する。

「わかりました。今度、衣装担当の精霊を呼びますわ。何着でも大丈夫ですのでデザインの中から選んでください」

セレーナがやる気満々でそう告げられてしまった。ここでは既製品はなくデザインで選んで精霊たちが編んだり縫ったりするらしい。それなのによく私の服みんな早くに調達できたなあって思う。

それを聞くとノアがたのしそうにこう教えてくれる。

「神の服を作れるとなると、精霊はみな喜んで数人がかりで争うように作成するので、本当にわずかな時間で作れるのですわ」

特に今、大人気のフウカ様となりますと競争率はすごいでしょうね。

そこまで言われて絶句する。本当に精霊にとって神はすごい大切な存在なのだって感じ取れる。

「じゃあお願いしようかな。でもあまり何人にも会うのは嫌なので、二人ぐらいにしといてもらえるかしら？」

せっかくなのでお願いすることにする。やっぱり自分好みの服も着てみたいしね。ここまで言われるとお願いしたくなるものだ。

「とりあえず本日はどうなさいます？頂いた服も数着ございますが・
・・」

ん。せっかくだし今日会った神からもらったモノにしよう。そう思って本日の予定を聞くとこの後にレイヤが来るということだ。

「じゃあ光のものにしてもらえるかな？あ、でもこの前みたいに露出的なドレスはやめてね」

先手を打つ。結局光の衣装でシフォンワンピースのようなドレスにしてもらった。どちらかと言えばすこし短めのミニドレスで、そのほうはシフォンになっっているが形はすっきりしており白が主体でレースに金がちりばめられている感じだ。

あまり着た事ない形だけど、着て鏡を見てみると幼い顔立ちによく似合っていた。足は見えるが胸元はだいぶ上まで数枚重ねられた

生地があるのでそれほど目立たない。

うん。これならいい。みんなセンスいいな。

髪も簡単にセットしてもらい、お食事もいただき朝の身支度は終了する。

二人がすばやく後片付けをして出て行ってから、突如最後にレイヤに会ったときのことを思い出す。

そういえば、キスされて告白されてから初めての授業なんだ！前向きに考えるとと言っても色々ありすぎて、考える暇もなかったし心構えもまだできていない。

「うわあゝ。どんな顔して会えばいいんだろう」

奪われるようにされたディープキスの感触まで鮮明に思い出して、思わず手で顔を追ってしまう。

「と、とりあえず。深呼吸して。いままで通りなにもなかったように接するのがいいよね」

私は生徒。私は生徒。私は生徒。

この呪文を小さくつぶやく。

それに夢中になって後ろにその本人が現れているのにまったく気が付かなかった。

33・神は天然の資源なのです。（後書き）

まったく話が進まずだらだら書きちゃっています。

次はすこし進むはず！

しょうもない内容まで書きちゃっているせいかしら^^；

34・安易に誘いに乗ってはいけませんね。

「生徒ってなんだ？なにぶつぶつ言ってるんだよ」

いきなり後ろから声かけられて文字通り飛び上がる。

振り向くと金色の髪 of 青年が手を腰に当てながら、おもしろそうにこちらを覗き込んでいた。

「び、びつくりさせないでよ。レイヤ」

「へえー。思ったよりその服いい感じじゃあないか」

光の服だったので、ひどく嬉しそうだ。

「この前みたいに露出度が高くないからいいわ。本当にありがとうね。そうそう、今日ノアたちをお願いして衣装手配してもらった予定なんだ」

「そうか。まあ時々は光の服を着てくれ。俺も精霊たちも喜ぶからな」

そう言われて無言で頷く。前もそう言われてたっけ？

あれ？そう言えばなんで私がこの服を着ているって精霊たちにはわかるんだろう？だって実際会ってるのはノアとセレーナぐらいしかいないのに。

そう思って聞いてみるとすぐに教えてくれた。

「精霊にも格があって人型や獣の姿を取るものと、そこいら大気中に存在しているようなものがあるからな。大気中の存在するものたちが、その姿を見て喜びを俺や上位の精霊に報せてくるんだよ。それほど知能は高くないから喜怒哀楽ぐらいしか伝わってこないけど

な」

へえ。じゃあ大氣中にいろんな種の精霊がいるんだ。感心しながら思わず何度か頷いていると目の前の光神が腕をのばしてきて、私の頭を軽く撫でてきた。

「よかった。思ったより元気そうだな。ゼノンから聞いて心配したぞ」

あ、この前の悪夢のことね。

「ありがとう。なんとか前向きに考えられるようになってきたところなんだ。このままの私でいいって言ってくれている人がいるんだって分かったから」

きちんと向き合ってそう言う。レイヤも私自身を見てくれていると言ってくれたんだから、それに対して自分が否定的ではだめだと思っから。

「そうか。俺もちろんその中に入っているって分かっているよな？」

その問いにはすぐに大きく頷いて肯定する。だって一番最初にそう告げてくれたのは目の前の金色の瞳の青年であつたのだから。

「がんばるのはいいが、あまり無理するなよ。泣きたいことがあつたら俺にも言ってくれ。ゼノンのように感じ取るのは苦手だけど、どんなことでも聞いてやるからな」

撫でていた大きな手をぽんと私の頭の上に置きながらそう言う。

その表情はひどく綺麗で思わず見惚れてしまう。

そういえばレイヤとゼノンっておなじ顔の作りだった。ゼノンはいつも魅惑的な笑みを浮かべているけど、レイヤはさっぱりとしたさわやかな笑顔だったのでつい油断した。

口も悪いし態度もどちらかといえばガサツなので、それに色気のようなものを感じたことはなかったけど、このすこし切なそうに眼を細めてこちらをみていると、そのギャップでゼノン以上にこちらが動揺してしまう。

「あ、ありがとう」

単純なお礼しか言葉にならない。

この顔はちよつと直視できないや。頬が赤くなるのを感じる。

「さて、知りたいことや手に入りたい技とかないか？何でもいいぞ」

そう言われて少し考える。技は気を知るとレポートはだいぶ分かった。テレパシーは分からないなりに心で呼べるようになったから今はいいかな。どんなことができるのかもわからないし、今は知識かな？

知識と思つてふと思ひ出したことを聞いてみる。

「そういえば、エダやゼノンには聖地みたいなものがあるって聞いたけど、私にもあるの？」

エダは新緑の滝でゼノンは夜の天空とか言つてたっけ？

「今はないけど、もうしばらくしたらフウカ自身が創ることになるだろうな。この大地を見たり探索してたら直感的にここつてポイントが出てくるんだ。そこに氣を与えるとそれが聖地になる。まあ大

「抵は産まれた場所になるけどな」

なるほど。創るんだ。神らしいな、それ。じゃあもうすこし行動範囲を広げないとだめね。

「じゃあエダってあの滝の場所で産まれたの？」

そう聞くと今まで上機嫌だったのに思いつきり眉をしかめる。

「お前、エダの滝に行ったのかよ」

そう言われてはつとツバを飲み込んでしまう。そう言えばゼノンにも滝に行ったと言うと、いい顔されなかつたっけ？

「う．．．うん。昨日誘われたから．．．。あと、ゼノンにも誘われたけど．．．」

しどろもどろになながらも事実を言う。なんとなく嘘ついたり黙っていられる雰囲気ではなかったからだ。

「お前、それがどういう意味か分かっているのか？ある意味求愛行動のようなものだぞ」

えええええ〜？そこまで話が飛ぶの？

ゼノンはそこまでは言ってなかった。でもその相手の気を纏うことは、深い関係になった時と同じだと言ってたからそういうことなの？

「それをいくら知らなかったからといって恋人になりたいと言った

俺に教えるなど、妬いてくれって言ってるようなものだな」

そう言いながらゆっくりと私に大きな手を伸ばしてくる。ゆっくりだけど、その口調や雰囲気のにまれてしまってた動けなくなってしまう。

気が付いたら両手首を壁に貼り付けられ、剣呑な目つきでこちらを見下ろされていた。ものすごく整った顔立ちだけにゼノン以上にその表情が恐ろしい。思わず逃げようと身体をひねるがまったく動だにしない。

も、もしかしてかなりやばい？

「本当に嫌なら顔を背ける。そしたら止めてやる」

そう言うつとわざとゆっくりと彼の顔が近づいてくる。

ずるい！そう言われると動きようがないじゃあないか。でも止めないとな、

「まっ！」

待ってと言おうとした言葉はレイヤの唇で塞がれてしまう。

口を開けていただけにすぐに舌が口の中に入ってきて私の舌も絡め取られて、息も吸い取られるような深い口付けを施されてしまう。やばい。またされるがままになってしまう。

あまりにも深すぎて体中がしびれたようになる。力がどんどん抜けていく。

強烈な感覚過ぎて彼がようやく放してくれたのに、どれほど時間が経ったのか分からなかった。

「待てと言われても待てるほど余裕もないんだよ。お前がまだ俺にその気になってないのは分かってるが、だからと言ってそんなこと教えられて黙っていられる状態でもない」

唇に残る彼の感触に手を当ててそんな言葉をぼんやりと聴いている。

「抵抗しなかったところを見ると、まだ望みはあると考えていいか？」

先ほどはかなり強引に唇を奪っておきながら、今度は謙虚に聞いてくる。本当にずるい。こう来られると責められないよ。

「前も言ったけど、まだ恋愛まで頭が付いて行っていないの。聖地の件は良く知らなかったし、レイヤやオリセントに誘われても普通に了承しているよ。実際エダの滝に行ったけど話とデザート食べただけで特になにか合ったわけでないし、ゼノンはその話したら次は夜の天空にと誘われただけだし」

冷静になろうとできるだけゆっくりと説明を続ける。

「もうしばらく時間をちょうだい。たしかにレイヤに対してそれなりの気持ちは育っていると思う。でも、すぐに恋人って考えられない。ここは複数恋人になれると言っても私は夫婦になるのが当たり前の世界に住んでいたから、すぐに割り切れないし、かといってレイヤだけを選ぶことは今はできないの」

そう言つとレイヤは手で頭を掻きながら、すこし私から離れる。

「わかったよ。悪かったな。すぐにかつとなっちまうのは悪い癖な

んだよ。あーかつこわり、俺。まさか恋愛ごときでこんなにな
るとは情けないぜ」

随分、気まずそうに強引に頭を掻いてる。

「情けないとかかつこわるいとかまつたくないよ。だって、レイヤ
がすごい直接気持ちをぶつけてくれているから、私は恋愛にもすこ
し前向きになれたのだよ」

レイヤの告白がなければ正直そういう考えを放り出していただろ
う。

そう言つとレイヤは掻いてた手を止めて、ひとつ大きなため息を
ついた。

「ありがとよ。まあ今日の授業はすこし冷静になるために離れて行
うから、安心してなんでも聞いてくれ」

こうして知りたいことをどんどん質問すると言つ形で授業は再開
した。

そんな誠実なレイヤの気持ちに応えられるようになると、私はこ
のときは思っていた。

しかし思わぬ出来事が起こり、私の気持ちはどんどん分からなく
なっていく。

35・お空を飛ばう

朝、いつもと同じぐらいの時間帯に起きてすこし違和感を感じる。なんだろうと周りを見渡してその理由に気づく。窓が濡れているのだ。ここに来てから初めて雨が降っていた。

へえ。ここでも雨が降るんだ。台風とか雷もあるのかな？

いつもどおり朝の身支度を整えると、遠慮がちに扉を叩く音がする。

ノックを律儀にするのは戦神しかない。返事をして扉を開けると予想通り大柄な黒髪でオッドアイの青年が立っていた。

「よう。おはよう、フウカ。ゼノンから話は聞いたが、すこしは落ち着いたか？」

青年はそう言いながら、こちらを心配そうにのぞきこんでいる。

「おはよう。オリセント。みんなに支えてもらったし話も聞いてもらったからだいぶ前向きになれたよ。オリセントもこんな不完全な私のこと認めてくれてたって、みんなが言ってくれてたから立ち直れたんだ。ほんとうにありがとう」

ゼノンもエダもオリセントが私のことを良いように話してくれてたって言ってた。

「そうか。それはよかった。でも俺は不完全どころか、今の状態のフウカがこの世界には必要であつたと思っているぞ」

部屋に入りながらそう言ってくれている。

オリセントまでそう思ってくれているんだ。それも本人だけでなくこの世界にとってこの記憶が必要だと。

本当にうれしい。癒しの女神といわれているけど、4人に私の心が癒されている。

「本当にありがとう。おかげで前向きに人と関わろうと思えるようになったの。まだ戦は怖いけどそれを防ぎたいしね」

私がそう言うと、オリセントは手を腰に当てながら笑いながら私の決意に応援してくれる。

「ああ。共に励もう。戦は必要ではあるが今の人間界のままだと、人間だけでなく全ての生命が消滅するのは時間の問題だからな」

そのためにも女神として知識も実力もつけないと。

「うん。そうだ！さっそくなんだけど、今日は人間界に行くための飛行術教えてくれる？いつまでもみんなにだっこされながら行くのもわるいし、いざと言うときのために1人で行けるようにならないとだめだと思うから」

こうして今日の授業の内容が決定した。

「神の国はあいにくの雨なのでまずは人間界に跳ぶ方法から行くぞ」

はい！先生。

「瞬間移動するときに意識を地面の下の地上を思い浮かべるんだ。変なところに飛んだり、飛んだ後落下したとしても俺がフォローするから一度やってみろ」

オリセントはすこしおもしろそうな表情をしながらそう言う。

またあの落下を味わっちゃうの？？

助けてくれるって言うけど、あの感覚は正直あまり好きではない。でも、いきなり実践ってなかなかスパルタ教師ですね。

「ぜ、ぜったい助けてくれる？」

つい怖くてそう聞いてしまうと、彼はぶっと吹き出すように笑いながら大きく頷いた。

「俺が信じられないか？どこに跳ぼうがすぐ助けるからがんばってみろ」

・・・・・・よし。がんばるか。

目を閉じて意識を遥か地上より下に向ける。
とたんに、頬に当たる風が外気の物になる。

あれ？落下の感覚がない。でも空を飛んでいる浮遊感もない。足が地についている感じだ。

おそろおそろ目を開けてみてその予想外の風景に思わず息を飲み込む。

え……。ここどこ？

今まで見たこと無いほどの人々が目の前を通り過ぎていた。馬に乗っている人や馬車が溢れかえっている。もちろん歩いている人もいた。みんな埃まみれの服装を纏っていてどうやら旅人が通るようなどこかの路上のようだ。

もしかして人間界？それもどこかの地にそのままテレポートしてしまったのだろうか？

「フウカ」

聞きなれた声を聞いてようやく一息吐く。

「オ……。オリセント」

振り返ると今まで一緒だった青年がそばに立っていた。

よかった。迷子になって連れを見つけた気持ちだ。

「まさかそのまま人間界の地上まで行くとは思わなかったな。まあこれからも慣れるまで一度は降りてから浮くようにするのもいいな」

たしかに。落下を味わいたくないのでそうさせていただきます。

とここで違和感を覚える。私もオリセントも場違いな姿で立っているのに、だれもこちらを見てないのだ。距離的に目に映らないはずはないのに。

そう思って聞くと簡単に教えてくれる。

神は人間にとって力の源みたいなもので、実際には見えないのが普通のようなのだ。

「見えるとしたら神官と言われる特殊な恩恵を受けた者か、こちら

が意図的に見せようとしたときぐらいだな」

なるほど。そういえばこの前の時も最初は姿を人間には見えない状態だったっけ。

「移動がこんなに簡単にできるなら浮くことも簡単だろう。意識して身体を気で持ち上げればいい。やってみろ」

そう言っただの段階のスパルタが開始される。
意識して身体を気で持ち上げる。

あがれあがれって感じ？

そう思った瞬間、一気に身体がフリーフォールのような勢いで浮き上がる。

「ぎゃ~~~~~。いや~~~~~」

その勢いは減速することなくどこまでも上がっていく。

助けて。

そこで強く腕を引っ張られ、気が付いたら頬に温かい熱を感じていた。

「こ・・・こわかった」

空中でオリセントに身体を強く抱きしめられて、ようやく停止できたようだ。感じた熱は彼の胸のようだ。

しばらく抱きしめられたまま落ち着くのを待ってもらっていたが、

冷静になると見た目どおりの厚い胸筋に頬が触れていることを思い出し、恥ずかしさに別の意味で動揺する。

「あ、ありがとう。止めてくれて。落ち着いたからちよつと離れてみて」

できるだけ距離をとろうと、抱きしめてくれていた彼の両方の上腕に手をのせて、頬を胸から外す。

そしてようやく彼の顔を見ることができたのだが、ひどく楽しそうに笑っていた。

「フウ力は力がありすぎて、なかなか制御がむずかしいんだな。やろうと思っていることはできても力を抜いて適度にすることがまだ無理というわけか」

正直、あがれと思ったただけであんなに勢いつけて空を飛ぶとは思いませんでした。だって人間だったし……。

「とりあえず、このまま俺からゆっくり離して空中に浮くことからやろう」

そう言って手をつかんで、私の身体をすこしずつ自分の身体から離していく。直接身体に風を感じていく。

「手を離すのはフウ力が気を整えて自分からやるがいい」

握っていた私の両の甲を上にし、自分の甲を下にした形にしてそのまま停止した。

手を本当に軽くつないでいるだけで楽々と自分が浮いていることに気が付く。

このまま浮いていればいいのね。
まずは左手をはずす。はずしても身体がぶれることなく浮いている。

ならばと残る右手を徐々にずらしていく。最後は彼の人差し指一本の端を軽く持つような形になる。

大きく深呼吸してそ〜っとその指も外した。
う、浮いている！

「できた！！」

風を感じるのが気持ちいい！景色を見ようとして下を覗き込み、あまりに高いところを跳んでいる事実に今更ながら気が付いて血の気が一気にひいた。でも不思議と怖くない。風が私を包み込んでくれているように感じるからだ。

気持ちがいい〜。

このまま飛んでいたって思うほどだ。自分で軽く意識しながら右や左に進んでみる。

本当に簡単だ。まるで自分が風の一部になったよう思える。
気が付いたらオリセントからだいぶん離れていた。

「よくできたな。本当に制御以外はまったくもって優秀だな」

たしかにいつも制御は、テレポートにしても浮くことにしても思った以上のことになっている。でもほとんど一発できているのが我ながらなんでできるの？って疑問に思う。正直できるわけないと思いつつながら念じたりしているのにな。

まあ努力しなくていいのは助かっているけど。

「浮くのって気持ちが良いね」

そう言うときオリセントは近づいてくる。

結局そのままゆっくりと天まで二人で話ししながら昇っていった。地球と違っている一定のところまで上昇すると、いきなり周りの風景がかわる。そのかわりに出てきたのが自然一帯の大地だ。その大地のすぐ上を二人で飛んでいた。

「雨が止んでよかったな」

となりでオリセントが天空を見上げながら言う。
同じ方向を見て思わず歓声をあげてしまった。

「すごい。きれい」

天空におおきな美しい七色の虹が架かっていたのだ。今まで見たどの虹よりうつくしくはつきり見えた。

「役得だな。なかなかここでは雨も降らないし、ましてや虹は俺でも数えるほどしか見たことないぞ」

二人でゆっくりその虹を楽しみながら神殿に戻っていった。

35・お空を飛ばう（後書き）

私はフリーフォールだけは乗れません。
あれを乗る人を尊敬します。

36・洞窟探検（前書き）

36・洞窟探検

「フウカ様。お待ちかねの植物の食料を手に入れましたわ！」

部屋で休んでいると、いきなり扉をボタンとあけて勢いよくノアが駆け寄ってきた。

植物ってお米のこと？

ノアがそれなりに大きな鍋を私の目の前に突き出してくる。

「わお！」

それはまさしくお米だった。それもそれなりに精米されている。

どちらかと言えばタイ米っぽく長細いしすこし茶色がかっているけどそんなのはあまり問題ない。

よかった！！！！

これでご飯を卵で食べれる！味を思い出して思わず唾を飲み込む。

「ありがと！さっそく、調理場に行って作ってもいい？」

やはりさっそく作りたいと思ったのでそう聞くと、ノアもそのつもりだったようですぐに了承してくれる。

と、なると……。そういえば次料理するときはウリュウに手助けしてもらった予定だっけ？時間空いていたらしいけど……。

「ウリュウに声かけないといけなかったわ。ちょっと行ってくるね」

そう言って瞬間移動を試みる。いままでの経験上、場所を思い浮

かべるより本人を思い浮かべたほうがいいのだよね。ウリュウの部屋って知らないしね。

順調に景色が一転する。

あ、あれ?????

気が付いたらまったく知らない暗闇にいた。

え、ここどこ？

あたりを見渡す。よくは見えないけど岩のトンネルもしくは洞窟の中にいる感じだ。地面を触ってみると湿っている。

ま、またへんなとこに来ちゃった……。

最近はどうずれてもいい感じに跳べたのでできるだろうと高をくくっていた。

「もしかしてこの近くにウリュウがいるのかな？少しだけ探してから跳んだらいいよね」

すこし探索してみることにした。もちろん不安もあるのだが、最近いつもだれかと一緒だったし一人で自由に動けることが不謹慎ながらワクワクするのだ。

いざとなったらまた移動すればいいと思っているから、こんなに悠長に構えてられるのだが。

「そもそもここはどこなんだろう？神殿の地下とかかな？」

と自分で言ってみて否定する。神殿の近くであればあの膨大な神

の気をすこしは感じるはずだ。でも、ここはまったく感じない。そう思って予想以上に違うところに来ていることに気が付いてしまった。

「も、もしかして人間界まできちやった??」

いままで神の国であればどこでも感じていたはずの気がまったく感じないのだ。と、なると人間界かもしくはまったくあまり足を踏み入れてはいけない場所ではないか。

「瞬間移動できるとこなのかな? やばい! のん気に歩いている場合でなかった」

移動しようと気を集中する。とりあえず神殿の私の部屋を思い浮かべる。

しかし、なにか巨大な壁に阻まれている感触を覚えてまったく瞬間移動できない。

「えゝ。いやな予感が当たっちゃった。できないの??」

そういえばドラクエでも洞窟内ではルーラできなかつたわけ? たしかリミットと言った別の呪文が必要だったけ。

「ってドラクエ思い出しても仕方ないよゝ」

そもそもなんでここに跳んじやつたんだろう。

「なんの準備もできてないし、私ができるのって回復しかないのよ。へんな生き物とか出てきても一発でやられるわゝ」

やっぱりここはさきほどまで一緒にいたオリセントを呼んでみるべきだね。戦神だから強いだろうし。

心の中で呼んでみるがいつまでたっても返事も姿を現すこともない。

「そんなに簡単にできないか。しかたない、歩いて出口を探すしかないね」

ため息を吐きながら、ふたたび歩き出す。

今度は気を引き締めながらだ。

私はおそろおそろ歩く。ライトもないのだけど、不思議と足元が見えているのでそういう恐ろしさはない。でも、なにが飛び出してくるかわからないのでどうしても足の進みがゆっくりになる。

「お化け屋敷とかもどちらかと言えば苦手なのよね・・・」

それでもしばらく進んでいると、道が二股に分かれていた。

どちらに行くべきか迷う。

「あ、こっちのほうかなぜか暖かいんだ。じゃあ暖かいほうにしよう」

右の道からは温かい風が吹いていた。と言うことは出口に近い？と、簡単に考えてそちらに決める。

そこからもうしばらくゆっくりと歩く。怖いとか言ってる場合ではない。だって神殿にいるわけでもないのとお腹もすくし水分も必要になるよね。つまりはこのままのたれ死ぬ可能性があると言うわけだ。

一応女神なのにこんなわけの分らないところで死ぬの・・・？

それは勘弁して〜〜。

「あ！」

いままで暗かったのに前に紅い光がうつすらと見える。

なにかな？あれ？

そこに徐々に近づく。気持ちは急くけど、もしやばいものだったから逃げないといけないわけだから、体力は温存するべきよね。

「え……」

だんだん大きくなってた光が一瞬で消える。なんだったんだろうと思っていると、こんどはもつと明るい大きな光が洞窟内を照らす。そのおかげで前に赤の髪をした少年と、よく似た赤茶の髪の少年が向かい合わせに立っているのが分かった。

ジューンとウリュウの親子だ。なるほど。一応きちんと移動できたんだ。

「まだまだな、ウリュウ。せめてこのぐらいの火を出せなくてどうする。せつかくフウカが見てくれているのに……」

ジューンがこちらを振り返ることなく、ウリュウに楽しそうに言う。言われたウリュウはびっくりしたようにこちらを振り返った。

「フウカ！なんでここまで？どうやって来れたんだ？」

「ウリュウを目標に跳んだらここに来ちゃったの」

素直に答えるとようやくジューンがこちらを見た。ひどく楽しそ

うだ。

二人の姿を見比べて人間の感覚的に、二人が親子とは到底見えないなと思ってしまう。兄弟にしか見えない。

でも、改めて気を意識するとその気の大きさの違いに嫌でも気づく。やはり生まれたてのウリュウに比べて、ジューンのほうが火の神だけあって燃え上がるように巨大なのだ。

さっき感じなかったのはなんでだろう？

「くつく。レイヤたちが過保護になるわけだな。力は有り余っているのにあまり制御が上手くできないってわけだ」

分からず首を傾けると詳しく教えてくれる。

この洞窟はウリュウの試練のために特別にジューンとダリヤが作ったもので、神のちからが届きにくい造りになっているらしい。だからなかなか移動しにくいし出て行くのも一苦労なのだそうだ。

さっき飛べなかったり声が届かなかったのはその為だとか。

「それなのに、ウリュウを目指しただけで楽々と跳んでくるなんてすっげ〜力だってことだ。でもって出られないって所は笑えるけどな」

ずいぶん楽しそうに言われてしまった。

「ウリュウ。今日はここまでにしとくから送って行ってやれ。じゃあフウカ、またな」

それだけ言うとジューンはさっさと姿を消してしまった。

は、はい。

「ウ、ウリュウ。訓練中にお邪魔しちゃってごめんね。私なら終わるまで待ってただけど・・・」

隣で呆然という感じで突っ立っている少年に謝る。まだ試練の途中だったのに中断させちゃったな。

「いえいえ。父上の厳しい特訓に根を上げそうになってたのでちょうど助かったよ」

ウリュウはようやく気を取り戻したようで、こちらに笑顔を見せながらそう言う。笑うと猫のような目がすこし細められてずいぶん可愛い表情になる。180cmもあるけど私にはかわいい弟にしか見えない。

弟といえば風香のときにもいたけど、この可愛らしさはなかったな。とつい比べてしまった。

「で、なにか俺に用事あったの？もしかして調理のお誘いかな？」

そう言われて大きく頷きながら答える。

「忙しくなければお願いしようと思ってたけど、訓練まだするだろうし遠慮するよ」

ノアに頼めばなんとかできると思うしね。やはり神にそんな炊事の手伝いを頼むのはいかなものかと思う。

「いや。今日はこれで休ませてもらうためにも、手伝わせてほしいな。これ以上されると俺の身体がぼろぼろになるから、逆にそれを理由に匿ってくれない？」

よく見れば、ウリュウの服装はぼろぼろだしでている手足に無数のすり傷やあざが浮かんでいる。なかなかハードな特訓のようだ。せつかなので手をかざして気をウリュウに送る。傷やあざぐらいは治せるだろう。

予想通り、服はぼろぼろのままだけどずっと傷やあざが無くなっている。

「やっぱりフウカは力強いね。ここで楽に力を出せるなんて」

そういえば出しにくいって言ってたっけ？できたから結果オーライとしてもらおう。

「ありがとう。じゃあせつかくだし手伝ってもらえる？初めてなんでしたかに火加減とかみてほしいのね」

お米炊くのに炊飯器なんかないから、たしかに見てもらえるのはうれしい。そう思ってお願いすると、ウリュウはいきなり私の身体を抱きしめる。

え？なんでいきなり？？

びっくりして逃げるように身体を動かしながら彼を見上げると、

「移動するのに抱きかかえるのが一番でしょ？レイヤもそうしてたし」

と楽しそうに言う。

あ、なるほど。いきなりなのでびっくりした。意識しちゃった自分が恥ずかしい。

紅くなる顔を抑えてじっとしている私を見下ろしながら、再び抱

きかえられる。

じゃあ行くねと言つウリュウの掛け声とともに景色が一転した。

36・洞窟探検（後書き）

今回のタイトル特になにもないので難しかったです。

息子の教育とかにしようかとも思ったけど・・・。

なんかテンポのいい文章を書きたいんだけどむずかしいですね。
書いていけば執筆も上手くなれるかな？

37・純粹な質問

「えっと、まずはお米を洗って30分浸けてっと」

ここは前も使用させてもらった調理場。

鍋に入れてごしお米を研いで水に浸していると、後ろから興味津々と言っかんじでノアとウリュウが覗き込んでいる。

あのあと、そのままウリュウに調理場まで連れてきてもらった。その後すぐにノアが抱きついてくる。

「フウカさま。姿も気も感じなくなっって心配してたんです」

かなり心配させちゃったみたいで、目に涙を浮かべている。

謝って事情を説明すると納得してもらったようだけど、あまり無茶なことしないでくださいよっと釘を刺されてしまった。で、気を取り戻して本来の目的である調理を開始する。

「じゃあまた材料をそろえるのと、器具を調べよう」

そう言ってまずは前にももらった卵をお願いする。卵があればなんでもできるもんね。

次は調味料だ。塩っぱい調味料を出してきてもらってかたっぱしから味見する。

ん、これとこれかな？

ひとつは粉で塩っぱい味けどすこしざらざらしている。もう一個はトマト風味の味。

醤油や味噌はさすがにありませんでした。残念。

油があればオムレツになるね。和食ではなくなっちゃうけどお米の出来具合で、卵焼きにするか考えよう。

よし、次の具材探した。

いちいち思い浮かべて出してもらうのもたいへんなので、適当に見せてもらうことにした。

倉庫に連れられてその具材の種類の多さにびっくりする。量はそれほどではないのだがなにしろ大きな両面の棚いっぱい200以上の食材が並べられているのだ。

いやあ、すごい。

でも、やはり果物やお酒類が多いみたいだ。

あまり食事や栄養を重視してないようだ。

まあ天然の気だけで十分だって言ってたもんね。

ノアに説明を聞きながら選んだのは以下の通りだ。

白ねぎっぱい野菜。玉ねぎはなかったたのでそれなんか代用。

味見するとけっこう似てた。

ちよつと毒々しい紫色の玉になった野菜。ノアに強引に薦められていたけど、どんな味が未知だ。

なにかわからない葉っぱ類。これこそ分からないけど、一度茹でてみようと思ったので入れる。

肉類まで手はだせないの、とりあえずこれだけにする。

「あとは鍋ね。できれば土でできた分厚い鍋があればいいんだけど・
・・」

やはりご飯は土鍋でやりたくて聞くとすこし形はちがうけど、ちよつといい感じのものを出してきてくれた。

水に漬けてたご飯を土鍋もどきに移す。えつと水加減はと適当に入れて手のひらで量る。昔、調理場のバイトしてて、手で量るやり方を教えてもらっていたので助かった。

「ウリュウ。おねがいしていいかな？直火でこれを火にかけてほしいんだけど」

そういえばコンロがなかったどうやったらいいのかな？

考えながら言うつと、後ろで黙ってみていたウリュウがひょいっと土鍋もどきを取り上げる。

「了解。火の量はどれぐらいがいいの？」

そう言うといきなり空中に土鍋を浮かしてその下に火を付ける。

えーそのままやるの??

「土鍋が噴いたりするから気をつけてね。えつと、まずはそれぐらいの強火でぐずぐず言ってきたらすこし弱めて、私がいいというまでそのままにしてほしいんだけど、けっこう時間かかるんだけどそのままでも大丈夫？」

すくなくても15分ぐらいはかかるよね。空に浮いていると言うことは力を使っているのだろっし・・・と思って聞いたのだが、

「心外だなあ。それぐらいなんてことないよ。まかせといて」

と、すこし機嫌を損ねた感じで引き受けてくれた。

「ごめん。じゃあ遠慮なくお願いするね」

その間に野菜を一度ゆでてみる。だって味わからないしね。ちなみに湯は水を瞬間で沸騰してもらいました。もちろん、ウリュウに手をかざただけでほこばこと湯で立つんだからすごい。

柔らかくなつたのに塩もどきを振りかけて食べてみる。

「おーおいしい。全部すっごい甘いよ！」

葉っぱも紫の玉も白葱もどきもおいしかった。これだけで食べれそう。でもせっかくなので卵に入れてオムレツにしようと思えるが、ふと基本的なことも思い出す。

そう言えば、コンロもなかったのにどうやってすればいいんだ！これは困ったぞ。

ん〜。

仕方ないので試しにこの前使った石釜を使用することにする。

まずは卵をこれでもかと言うぐらいに巻き混ぜる。さっき茹でた野菜を入れて塩もどきも入れる。

ふわふわにできるかわからないけど、これで卵を固めればいいかな？

器に移して石釜まで持って行く。

石釜の付け方をノアに聞いて教わる。さすがにウリュウにやってもらっているようにはできないけど、この石釜ぐらいできるようにならないとね。

「えつと手をかざして、気を送ればいいのね・・・きや！！！」

聞いたとおり気を送った途端、ものすごい熱気が部屋中に充満する。

「フ、フウカ様。す、すこし加減をしてください」

慌ててノアにそういわれるけど、加減の仕方わからない。だつて気を送ったのも本当に付いてって思った程度だから。

ど、どうすれば・・・。

と、そのとき、隣で土鍋に火をつけてくれてたウリュウがすつと

近寄ってきて、かざした私の手に彼の手を重ねる。途端に、熱気は止みちようどいい温度になった。

「あ、ありがとう」

ほんとうに何から何までお世話になりっぱなしだ。彼がいなかったら料理できなかったかも。

そう思っただけを言うと土鍋の調整をしながらこちらの気の制御もしてるのに、本当に涼しい楽しい表情をしている。

「本当に面白いね。フウカの力って。そんなに制御できないのは人間の記憶があるからなの？」

いきなり自分にとって急所にあたるところを言い当てられて、思わず胸を押さえてしまう。

な、なぜこのタイミングでそれを言うの？

「ねえ。なんで記憶を消さないの？人間の記憶ってそんなに大切なものなの？」

大切なのかな？自分でも分からなくなってきた。レイヤたちがこのままでいいと言ってってくれているから考えることすら封印してしまったけど、そもそも女神としての自分に必要なかと常に疑問持っていたことを思い出す。

私の手を握ったまま、こちらの考えを見通すかのような目つきでウリユウは話を続ける。

「辛くはないの？消してしまえばこんな制御簡単だよ？ただ、必要なところにだけ癒しを与えるだけで済むよ？」

なんとか自分の考えを伝えようと言葉を捜すが見つからない。そうしているうちに、そばにいたノアが見たこともないようなきつい表情で赤茶の青年を責め立てた。

「ウリュウ様！もうおやめください！フウカ様はこのままでいいのです！」

「ノアだっけ？このままでいることがフウカにとって、苦痛でしかないものであってもそう言うのかい？レイヤたちだっけすぐに記憶を消してくれって、フウカが言い出すだろうと思っているから放置しているのに気が付いているのだから？」

しかしそれに対してウリュウは淡々と反論しノアが言葉を失う。言葉を返せないと言うことがノアもそう感じていたのだと、物語っていることを現している。

レイヤたちも私が言い出すのを待っている？
やはりそうなの？4人とも言葉ではこのままでいいと言いながらも、内心では記憶を消すだろうと踏んでいるのか。

つい疑心暗鬼になってしまふ。

「そうね……。たしかに、私が拒んだときすぐに撤回してくれたのはそうなのかも」

思わず、本音が出てしまふ。

「そ、その件はご飯ができてからもう一度じっくり考えてみるわ。そうしている間に米飯もできてきてそうだし……」

とりあえず時間がほしくてこの話を締め括る。いきなりそんな話を出してきたウリュウの意図まで読めないけど、純粹に思ったことを聞いてみただけなのかもしれないし、ここでさっと話できる内容ではない。

私がそう言くと、ウリュウが私の顔を見てなぜか慌てる。

「フ、フウカ。俺は、別にフウカを責めているわけでないからね！」

自覚はなかったけど、かなり悲痛な表情になってしまっていたようだ。

ウリュウが言ってることは事実なだけだ。

「俺はただ疑問に思ったから聞いただけで、消したほうがいいのか思ってるわけでは・・・」

「うん。もういいから料理に専念しよ。土鍋はもう火消してもいいと思うから。ノア、この卵をお皿に入れてから釜でしばらく焼いてみて」

これ以上ウリュウの話を聞きたくなくて途中で打ち切るために、料理の指示を口早に告げる。

結局その後は3人ともすこし気まずい雰囲気ですべての料理を作り終えた。

37・純粋な質問（後書き）

ウリユウは本当に無邪気に聞いてみただけなのですが、フウカの胸にぐさりと刺さってしまいました。

38・恋人候補より弟

「さあ」。気を取り直して料理の味見をしよう！」

私は場の重い雰囲気を一掃したくてわざと明るく声をかけた。卵は途中で何度もかき混ぜるといい感じでふんわりとなった。いくつかに分けてトマト風味の調味料をかける。

ご飯はすこし硬めだったけど、あの独特の匂いは紛れもなく毎日食べていた米飯だ。

三人分を軽めによそって、席に座る。

ノアと一緒に食べることをはじめ遠慮しようとしたけど、強引に座らせた。だってやはり一緒に作ったのだから一緒に味見したい。

「頂きます」

いつものように手を合わせてから食べる。さすがに箸はないようでフォークで刺す。

思ったよりご飯もオムレツもいい感じにできていて思わずその味を口の中で堪能する。

やはりこの味よね。

おいしそうに食べる私をみて、ウリユウもノアもおそろおそろ口にいった。食べたことないものを食べるときってどうしても慎重になってしまうよね。

でも口にいった瞬間、二人とも表情が柔らかくなった。

「へえ」。おいしいもんだ」

ウリユウが口を動かしながら端的に感想を述べる。

「すぐくふわふわでおいしいですわ、フウカ様」

ノアはごくりと最後まで飲み込んでからそう言った。
二人とも気に入ってくれたみたいだ。

「ご飯と一緒に食べるともっとおいしいんだよ」

見本にご飯の上にオムレツを乗せて一緒に口の中に入れる。本当はオムライスにしたほうがおいしいけどフライパンなしだとこれが限界よね。

二人も私を真似て食べる。

無言でもぐもぐと食べているが、その表情は本当においしそうで気に入ってくれているのがすぐにわかった。

「私は人間るとき、このご飯を毎日食べていたんだよ」

食べ終わって飲み物を飲みながら、私はおもむろに話しはじめた。
ウリユウもノアも食べ終わって、同じように飲み物に口をつけている。

「ウリユウ。さっきの話だけだね。私はやはり30年間の人生を封印することはまだできないわ」

二人は私が真剣に話出したのが分かって、飲み物を机に置いてこちらを黙ってみている。

「今までそんなに大したことやってきた訳でないけど、自分で人生に幕を降ろしたくないの。封印することは橘風香という人間の消滅だと思っているの。私が自分からそれを願うことは自殺と同じ」

自殺しようと思ったことはないし、それはしてはいけないことだ
と知っている。

「それにね。勝手な解釈かもしれないけど、私がこのまま女神にな
ったということに意味があるのかもって思うようにしているの。私
に関わってくれているレイヤたちもそう思ってくれているって言っ
てくれたしね」

少なくとも私がこのままで女神になったことに不都合があると分
からないのであれば、このままでがんばると改めて決意を告げる。
料理を完成させながらそのことを考えていた。ご飯を食べてから話
はじめたのは、感情的にウリユウに言うのではなく、冷静に考えを
まとめてから話したかったからだ。

「フウカ。ごめんね。俺が考えなしで言ってしまったせいで悲しま
せてしまったね」

ウリユウが本当に後悔しているって表情で、こちらを痛々しそう
に私を見てそう言った。

「ううん。心配してくれてありがとう。私ね。ウリユウが生まれて
きてくれて本当にうれしいんだ」

私より若い神の初めての誕生。それに立ち会うこともできた。そ
れもこんなに可愛い子が弟なんだからね。

さっきの質問も私が辛いだろうからと、心配してくれてのものだ
と冷静に考えるとわかったのだ。

そう思っ言つと、意表をつかれたというように猫のような眼を
もって大きくしてこちらをのぞきこんでいる。何を言おうか必死で
言葉を搜している感じた。

「ねえ！これからもうこうして料理手伝ってくれる？弟と一緒にこうして料理とかできるって本当に楽しいもん」

もつと仲良くしたくてそう言つと、一瞬だけ絶句と言つように息を止めたあと大きくため息をつく。

オトウトかよ・・・とか小さくつぶやいている。

あれ？やっぱり料理迷惑ばかりかけてたから嫌だったのかな？

「あ、料理が嫌だったら他のことでもいいよ。加熱はすべてウリユウにたよりつきりだったものね。なんなら一緒に神として修行の練習つてのもいいし」

慌ててそう言つと、無言で首を振りながら、

「いや、料理でいいです・・・。なんぼでもお手伝いしますよ・・・」

と、呆れたというような口調で私に言う。

「なんで、いきなり敬語なのよ。ほんとうに嫌ならいいよ？」

そんな口調で言われても嫌々なのかと思つてしまふ。本当に料理はウリユウを誘わずノアやセレーナにお願いしようと思ひ直す。ウリユウは私がそう思ったのが分かったのか慌てて手を振る。

「だめ！料理の時は絶対俺を誘うこと。わかった？」

いままで見たこと無いような真剣な表情でそう言ってくる。

「う、ウリュウが嫌々でないならお願いするけど、いいの？」

ウリュウの声に圧されて小さな声で聞くと大きく頷く。

なにかぶつぶつぶやいているけど、聞こえない。なんか触らぬ神に祟りなしということわざを思い出してしまった。

スルーしとこ……。

「ご飯とオムレツすこし余ったけど、どうしようかな？」

話題を変えようとノアにそう言うとともに返答が返ってきた。

「それなら、レイヤ様にあげたらどうですか？そのぐらいの量軽く召し上がられますし、喜ばれますよ」

につこり微笑みながら、いつのまにか綺麗に残りを装ったお皿を並べたお盆を私に差し出してくる。飲み物まで置かれている。

本当にいつのまに盛り付けたんだろう。

「そうね。たしかにレイヤなら食べてくれそう」

断れない雰囲気で差し出されたお盆を受け取って返事する。

「レイヤ様にはもうお伝えしましたわ。フウカ様の部屋に行くと言われてます。あとかたづけは私がしておくので部屋にそのままお持ちください」

もう伝えたんだ。はやすぎでしょう。後片付けまでしたかったのに……。まあ料理は温かい方がいいからノアの好意に甘えるしかないか。

「うん。わかったわ。ありがとう。じゃあウリュウ。本当にありがとう。でも嫌な時は遠慮なく断ってね」

そう言ってから自分の部屋に瞬間移動することにした。そのおかげで、直後に部屋の雰囲気が一気に険悪なものになってしまったことに、幸いなことに私が気づく事もなかった。

「・・・ノア。わざとフウカを部屋に返しただろ？」

ウリュウは癒しの女神がいなくなった場所を恨めしそうに見詰めながら、光の精霊の少女に話しかける。それに対してノアは本当にたのしそうに否定する。

「あら？ウリュウ様。そんな訳ございませんわ。まさかフウカ様にとって弟同然のたいせつな方に対して意地悪をするなんて・・・」

どこがウリュウの機嫌を損ねたか分かっていながら、その傷をえぐるようなことを言う。これ以上聞いてられないとばかりに火山の神である彼は、手を振りながらその場から消え去った。

「ふふ。さすがにあればウリュウ様には可哀想だったかしら。まあフウカ様にしたら恋人候補より弟がほしいのでしょうね。レイヤ様のためにもこのままのほうがいいから、ウリュウ様には悪いけど理由は教えないでおきますわ」

しかしその弦きを聞く者はだれもいなかった。

39・人間としての記憶

部屋に戻るとすぐにレイヤが来て大喜びでご飯とオムレツを頼張る。

「なかなか味わったこと無い味でおいしかった」

そう言ったところにはもうすでに食べ終わって飲み物を飲んでいた。一緒に付き合って私も同じものを飲んでいる。相変わらず早食いだなあ。

「また何か作ったら食わせろよ。俺は基本的に食えない物なものないから」

そう言われると作るほうとしては嬉しいものだ。了承の意味で頭を上下にする。次作るのはいつかわからないけどね。いつまでも自分のためだけに時間を割いてる場合ではない。そう思って疑問を彼にぶつけてみる。

「ねえ、レイヤ。みんな仕事で書類とかよく読んでいるけど私とかは大丈夫なの？」

できるかわからないけど、そろそろ仕事と言われることをするべきかなって思ってた聞く。

「いまのところ書類で見るような仕事は癒してはないからな。自然の場合は場所や状態把握に精霊たちが調査をしてきて、神に報告しているから書類になってるだけだ。オリセントとかもそれほど書類仕事はないはず」

あーそういえば、書類書く精霊は自然しかないから必然的にそうなるのか。

なるほど、なるほど。

「そんなにさせるな。お前は十分やってくれているぞ。徐々に人間界に足を運んで把握していつてくれたらいい」

現場仕事なわけだ。たしかに人間界のことはまったくわからない。オリセントに跳び方教わったし時間が空いたらちよつとずつ跳んでみよう。

その後レイヤはわるいなと謝りながら、すぐに部屋から退出する。なにやら業務の合間に抜けてきたらしい。わざわざそこまでしなくてもいいのと思ったけど、優先してくれたことに対して嬉しいと言う気持ちもある。

「そうだ。今日はすこし早いけどこれで寝ちゃって、朝早く起きたら跳ぶ練習しようかな。まださすがに人間界まで1人で飛ぶ自信ないけど、ここで跳ぶぐらいならできそうだしね」

予定を決めて、今日は早めに寝ることにした。

そして朝。私はいつもより早めに目が覚めた。

にも関わらず、ノアもセレーナもちょうどいいタイミングで入ってきてくれる。やはり私が起きたらすぐに分かるんだなあと感心してしまう。いつもよりだいぶ早めに朝の身支度ができる。

うん、これなら自主練習ができる。

二人が退出してから窓の外に出てみる。昨日オリセントに教えてもらってかなりコツを覚えたので失敗することもなくすんなりと飛べた。

朝の風が頬にかすつてとても気持ちいい。早起きは三文の徳とはこういうことだね。

少しずつ、上昇していくと見覚えのある噴水が目についた。オリセントと初めて会った噴水である。こんなに近くにあったんだ。近づこうと下を向いたときに、いきなりすぐ側の空間がぐにやりと歪む。次の瞬間、一度だけ会ったことがある青年が現れた。

栗色の短髪にすこし紺が入った黒眼の25歳ぐらいの青年である。眼も口も細いがどこか色気を感じさせる顔立ちをしている。たしか神の一人で……。

「お久しぶり。フウカちゃん」

お披露目の時に挨拶に来てくれたうちの一人だ。必死で名前を思い出す。

「えっと……欲の神の……ナーガさんでした？」

そう言つと細い口に笑みを浮かべながら頷いてくれる。

「『名答！』」

間違えなくてよかった。ふうと安堵の息をつく。

「で？フウカちゃんは何しているの？」

目の前の青年は首をかしげながら聞いてくる。そのしぐさが外見に似合わずどこか幼い。でもそれに無邪気さを感じることはできない。どこか頭で黄色信号が点滅している。この人に隙は見せてはダメだと。

「飛ぶ自主練習をしていただけです。もうすこし遠くに行きますので失礼いたします」

無礼にならない程度に返事して早々とその場から立ち退こうとした。しかしそれは叶わなかった。

行こうと側向いたとたんに、腕をがしっと捕まれたからだ。

「せっかく会うことができたんだからもっと話させてよ、フウカちゃん。レイヤやオリセントたちは良くて俺たちはダメってのはどうかと思うよ?」

ほぼ初対面なのにこの眼の前の青年に対しての警報が、どんどん強く頭に鳴り響く。

なんか、わからないけどこの人から離れたい。

「は、離してください」

腕から逃れようと振ってみるがまったく離れない。

「離したら飛んでいつちゃうでしょ?ゼノンたちが俺らを近づけまいと必死で牽制しているから、こんなチャンス逃すわけにはいかないんだよ」

やはり1人で出てきたのは間違いだったようだ。ここは誰かを呼

んだ方がいいような気がする。

だが呼ぼうとする前に彼は私の身体を引き寄せて、もう片方の手を私の額にかざす。

何するの？と思うころには頭が霞がかかったような状態になってしまふ。思考回路が麻痺したような感じだ。

「フウカちゃんはいつまでも鳥の籠に居たくないでしょ？人間の記憶なんか残しておくからそうなっちゃうんだよ？」

え？どうということ？何をする？

「俺は欲の神だからフウカちゃんが望むことしかないから安心してね」

彼の言葉の意味を考えるより先にどんどん思考回路は奪われていく。私の身体もそれに伴っていきなり糸が切れたように崩れ落ちるのを、ひどく楽しそうな表情で目の前の青年が受け止めたのだが、そのころには意識を完全に手放していた。

「フン。これであいつらに対しての記憶も気持ちも無くなるからな」

欲の神であるナーガは先日お披露目された女神に近づきたくても、上位神が睨みを利かしていてなかなか実行できなかった。

だが、思わぬところで好機が訪れる。彼女の方からのこのこと守りの包囲網から抜けてきてくれたのだ。

もっと話をしたかったが、すぐに奴らが現れる危険があったから

さつさと彼女に術を施した。

人間としての記憶だけでなく、数日間のここで過ごした記憶を封じたのだ。これで女神として真つ新たな状態になる。

あとは欲として自分に対しての肉欲を植え付けるだけだ。額から気を送ろうとした途端にかざした手に痛みが走る。

「つつ！」

「フウ力を渡してもらいましょうか？」

聞いたこと無いほど、その声は低く怒気を含んでいる。

声のほうを振り返ろうとする間もなく全身が鉛のように重くなり、抱いていた少女は腕の中からすつと姿を消す。

「ぜ、ゼノン……」

なんとか振り返ると大切そうに今まで抱いていた少女を抱きかかえながら、見たこともないほど鋭く歪んだ目つきでこちらを睨んでいる闇の神の姿があった。最高神と並ぶ神気をこちらにまともにぶつけて来ている。

「貴方が何をしたのかをじっくり教えてもらいましょうか。返答によつては容赦できませんが……」

そう宣言しながら強制的に動くこともままならないほどの重力を、欲の神にぶつけた。

それは神であつても内臓がつぶされそうになるほどきついものだ。人間であれば一瞬で木っ端微塵になるだろう。

「……ただ、人間としての記憶を……封じただけだ。お、俺の力が働くつてことは……彼女が……どこかで望んでいたことだ

る・・・」

なんとか逃れるために、言い訳も加える。だが、無情にも闇の神は容赦がなかった。

「そうですか。でも彼女の意思ではなかったでしょう。とりあえず、彼女が目覚めますまではそのままいてくださいね」

その場で苦しむ欲の神に一目もくれずに、闇の神は抱きかかえる彼女の顔を心配そうに覗き込みながらその場から姿を消した。

「・・・ま・・・まちやがれ・・・」

だれもいないところで苦しみながら青年はそれだけつぶやいた。

40・幽霊？

あ、あれ？ここはもしかして日本？

目を開けた瞬間に広がる景色にびっくりする。

よく知っている実家近くの駅前。コンビニの点灯が煌々と道を明るくしている。電車が到着する音が聞こえてくる。目の前には流れるような人通り。帰宅時間なのか背広を着た男性やスーツを着た女性だらけだ。

「もしかして夢だったの？」

女神になるなんてよく考えたらファンタジーすぎるし、三十路の女が現実逃避でみちゃったのか。

「……よくわからないけど、とりあえず実家に帰ろう」

よく知った道を歩き出す。

半年以上帰ってなかったのでひどく懐かしい。

「しかし、本当にへんな夢だったな。ロリコンオタクが好きそうな容姿になっちゃってたし……」

そう思って下を向くといやでも胸の谷間が目についた。白いワンピースから見える見事な形をした胸。

え？あれ？

ここで違和感を覚える。おそろおそろ、近くの店のガラス窓をの

ぞいてみる。

「な！なんで映ってないの？」

自分の姿が映るはずなのにそこにはだれもいなかった。
もしかして私死んで幽霊になっちゃった？

「それも死んだ自覚のない自縛霊？」

と、ともかくさつさと帰ろう。

早歩きでよく知っている道を歩く。

そのおかげですぐに家につく。

入ろうと玄関を開けようと手をのばす。

え！！

取ろうとしたノブに触れることもできずに手がノブの中に入り込む。いや、通り抜けているのだ。

慌てて手をそこで振るが空ぶって触れることすらできない。

やはり幽霊決定か！

シヨツクを隠しきれずにしばらくその場で立ち竦む。

なんで？死んだ記憶なんかないよ？あの訳のわからない夢は死後の世界？

そのとき、思いつけない声が後ろから聞こえてきた。

「だれ？うちの家になにか用？」

びっくりして振り返ると、よく知っている青年が怪訝そうな顔してこちらをみていた。

「は、隼人！」

弟である。しかし呼ばれた本人は驚きを顔一杯に出す。仕事がりなのかスーツを着ている。

「え？君はだれ？」

あれほど仲良くしていたのに半年会わないだけで、分からなくなるなんてひどい。

「お姉ちゃんかわからないの？何寝ぼけているのよ」

「え？・・・もしかして姉貴？」

じーとこちらを凝視しながらおそろおそろと言つぷつに聞いている。

「それ以外にありえないでしょ？」

そう私は言つたのだが、その声が聞こえていないように呆然とこちらを見ていたかと思うと、

「やはり、俺に姉貴がいたのか・・・」

と小さくつぶやき、私の身体に触ろうとしてくる。

あ・・・。

思ったとおり、その手は私の身体を通り抜ける。

「ゆ、幽霊になっちゃったのか姿も映らないしドアに触れることもできないのよ……」

「……と、とりあえず入って俺の部屋で話そう」

私が開けなかった玄関の扉を開けて入れてくれた。そこでひどく違和感を覚える。

あれ？だいぶ雰囲気が変わっている。もつと女性らしい雰囲気もあったし、私が作ったオブジェとかも飾ってくれていたのにまったくなくなっている。

「付いてきて。もしお袋たちに姿が見えたら適当に俺が言うから黙っているよ」

頷いてリビングに向かう弟についていく。

「ただいま」

隼人がそう言うとなつかしい母の声が聞こえてくる。

「おかえりなさい、隼人」

「お、お母さん……」

思わず私は呼んでしまったが、母はまったく私の姿を見ない。いや、まったく見えてない様子だ。

「悪いけど、ちょっと部屋で仕事してから夕飯にするから。自分で

温めたりできるからなんなら先に風呂入ったりしてて」

隼人は母に早々とそう言つと目で私に合図を送りながら自分の部屋に戻った。

40・幽霊? (後書き)

少ないけど、一つにすると長すぎるので二つに分けさせてください。

41・唯一おぼえてくれている人

「さて……。お互い情報交換をしよう」

よく知っている弟の部屋。ここはまったく変わっていない。相変わらず几帳面な弟の部屋は綺麗に整頓されている。

私を椅子に座るようあごで伝えたと自分はベットに腰がける。それにいらって私も腰掛ける。

「とりあえず、姉貴から話してくれ」

そう言われて今までのことを話そうとする。よく分からないけど、話できることは夢としか思えないあの出来事だけだ。

話し終わると、隼人は大きなため息を一つつく。

「し、信じられないでしょう。私でも夢だと思えないもん……」

頭がおかしくなったと言われても仕方ない内容だけど、予想に反して隼人は真剣な表情で頭を振る。

「いや、この状態じゃ信じないわけにいかないだろ。姉貴。わかっているか？今のその姿」

そう言われても姿を見ることができないから分からない。もしかしてと自分の髪の毛を一つまみして見る。色素が抜けたような白金色をしている。

も、もしかしてあの夢は現実？

「良く見れば姉貴の面影があるけど、えらい若いし眼も髪もすごい色になっているよな？それなのに身体がなんかエロいし」

やはりあの癒しの神としての姿のままこちらに來ているのだ。

それならやはりだれも見えてないのだろう。こんな目立つ姿でだれも振り返らないわけがないのだから。

「あと、シヨックかもしれないけど俺以外姉貴のこと覚えている人いないから。親父やお袋も風香という娘がいたことすら覚えていない」

え？なにそれ？

あまりにもあり得ないことを言われて頭の中がショートしているところに、隼人が一枚の写真を差し出してきた。家族写真である。3年前に、最後だからと私が頼み込んで4人で一緒に温泉に行き、写真を一枚だけ撮ったものだ。私の部屋には額縁に入れて飾っている。

しかし、そこに映っていたのは3人だけだった。

年配の夫婦と男性1人。私の両親と隼人だ。いたはずの私の姿が見事に消えている。

「1ヶ月前からいきなりそうなったんだ。お袋に姉貴のこと聞いても笑って本気にしてくれないしな。正直、周りがあまりにも普通に姉貴をいないものとしてるから、俺が気が狂ったのかと思っていたぜ」

……こっちでも私の存在を消されてしまった。

1ヶ月前ってことはあちらに行ってからそうだったんだろう。私って何？本当に必要なかった存在なの？

「フフ。そっか。私って消えるしかなかったんだ・・・こっちでもあっちでも・・・」

あまりにも自分が惨めで渴いた笑いしかでない。

「姉貴？」

弟はいきなり笑い出した私に心配そうに覗き込んでくる。

「あのね。あっちでもこっちの記憶を消されそうになったの。てか消されたのに未練がましくこちらに飛んできちゃったのかな？」

もしかしたら消滅するしかないのかも。それなら最後に弟に会えてよかった。そう思い直してできるだけ明るい表情をしながら弟にわらいかけた。

「隼人だけでも覚えてくれていて嬉しかったわ。なんでよりもよって弟の隼人だけなんだろうね」

仲良かったし面倒見のいい自慢の弟。恋人もいなかったし覚えてくれてたのが隼人でよかったと思うけど、あえて軽口をたたく。こうしないと涙があふれそうだからだ。

「それは俺も分からねえよ。でも簡単に、諦めるなよ。まだ姉貴はいるんだろ？触れなくても俺には見えている。姿は違うけど姉貴ってすぐに認めたぞ。だからこちらでもあちらでもいいから、生き永らえる方法考えろよ。向こうで記憶消してくれて言われたわけ

ないんだろ？」

そう言われて思い直す。よく関わった4人の神はみんなやさしくこのままでいいと言ってくれた。だからこのままでがんばろうとしてたはずだ。なのに、すこし術をかけられたぐらいで自分はいらないとすねて、身体から出てこちらにきてしまったのだ。

「うん……。そうね。無理かもしれないけど、一度あちらに帰ってみる」

ものすごく怖いけどどんな感じになっているのか知りたい。できれば帰ってこのまま記憶を持って過ごしたい。まだ諦めたくない。

「ああ。もし無理ならもつかいこちに帰って来て、俺の背後霊にでもなってくれたらいいから。だから消えようと思うなよ？」

隼人は一番ほしい言葉をくれた。幽霊になっても私がそばにいてもいいと。

なんとか止めていた防波堤が簡単に崩れ落ちて、私の両目から涙が溢れ出す。

「フフ。背後霊じゃあなく守護霊でしょ？でもそうになったら恋人作るの邪魔しちゃうかもよ？」

泣いているのを少しでも抑えたくて隼人にそう言うとすぐに反論してくる。

「げ！それは勘弁。姉貴の前でデートやセックスはさすがにどうかと思うからそんなときは遠慮してくれ」

「私のほうがそれはいやよ！」

だれが弟のそう言うのをみたいものか。そう言うと私と隼人はお互いを見ながら笑みを浮かべた。

そう言う言い合いをしたおかげで涙もとまる。手で涙の後をぬぐう。

「ありがとう。はーくん。じゃあどうなるかわからないけど、がんばってくるわ」

なつかしい愛称で弟を呼ぶと、隼人は照れくさそうに鼻の頭を掻きながら手を振ってくる。

「ああ。もう一度会えるかもわからないけど、いつでも来てくれ」

私はそうしてあの白い自分に当てられた部屋を思い浮かべながら瞬間移動を試みた。

なぜかそれができると今に私には感じていた。

このときなぜ隼人だけが私を見ることができたのか、自分のことで精一杯でわかってなかった。

しかし、意外な出来事によりその理由が分かることになるのだが、このときは私も隼人も知りようがなかった。

41・唯一おぼえてくれている人（後書き）

お気に入り登録がとうとう1000人越えました。ありがとうございます！

登場人物 41話までの人物です。 (前書き)

だいぶ増えてきたので変更しました。前のは消しています。

登場人物 41話までの人物です。

世界観

神の国レーヤゼン

一年は500日。人間界は生誕5千年

神の国ができてまだ272年（日本のかぞえでは370年ぐらい）
今のところ、神は30人（うち女神は6人）

神の生まれ方は自然に生まれる場合と、神と神の間に生まれる場合がある。まれに精霊から神になる場合がある。

25人は自然で4人は神の子。花の女神のみ精霊から神に転身。

フウカ・・・橘タチバナ風香フウカ

日本では三十路。神の国では生まれたて。

癒しの女神いししい

日本人としての記憶が残っているために気が不安定

髪・・・白金（腰までのストレート）

眼・・・右は金、左は薄い紫のオッドアイ。すこしたれ眼

外見年齢・・・15歳

自分のこと・・・私

生まれ・・・自然

レイヤ

最古の最高神（今のところ）ゼノンとは双子。

光の神

髪・・・金（短髪）

眼・・・金

外見年齢・・・23歳（実際は272歳）

自分のこと・・・俺

生まれ・・・自然

ライ

レイヤの側近。男の精霊。金髪朱金の眼

ゼノン

最古の次席神（今のところ）レイヤとは双子。

闇の神

髪・・・黒（肩まで届く長髪）

眼・・・黒

外見年齢・・・23歳（実際は272歳）

自分のこと・・・私

生まれ・・・自然

ワトン

ゼノンの側近。

エダ

水の神

髪・・・透明がかった水色（長髪をうしろにーくくり。軽くウエーブ）

眼・・・青 切れ長

外見年齢・・・18歳（実際は180歳）

自分のこと・・・僕

生まれ・・・自然

オリセント

戦神

髪・・・黒（短く刈り上げ）

眼・・・右は深紅、左は青のオッドアイ。

強面でがたいがいい。

外見年齢・・・27歳（実際は150歳）
自分のこと・・・俺
生まれ・・・自然

ビュース

愛の女神。5人の恋人と3人の子どもがいる。
髪・・・金色（ウエーブかった胸にかかるぐらいのロング）
眼・・・緑色（エメラルドグリーン）
外見年齢・・・24歳（実際は146歳）
自分のこと・・・私
生まれ・・・自然
妖艶という言葉が似合いそうな美女

ダリヤ

大地の女神。ジューンと夫婦。
髪・・・栗色（ショートカット）
眼・・・栗色（切れ長）
外見年齢・・・26歳（実際は209歳）
自分のこと・・・私
生まれ・・・自然

ジューン

火の神。ダリヤと夫婦。
髪・・・赤色（ウルフカット）
眼・・・真紅色
外見年齢・・・16歳（実際は198歳）
自分のこと・・・俺
生まれ・・・自然

セレーナ

闇の精霊。ゼノンの系統。

濃い蒼色の髪と眼。細身でおだやかそうな顔立ち

外見年齢・・・20歳

フウカの侍女として派遣される。

ノア

光の精霊。レイヤの系統。

明るい栗色の髪と黒の眼の女の子。細身で活発。眼が大きい

外見年齢・・・15歳

アトラス

稲妻の神

ベル

商売の神

外見年齢・・・23歳（50歳）

イザラ

知恵の女神

隙がまったくなくような才女だった。

フローラ

花の女神

外見年齢・・・14歳

髪・・・ウエーブの赤みを帯びた髪

眼・・・透き通った青い瞳（大きい）

もともと精霊

樹木の神がどの精霊よりも可愛がったためか、ある時いきなり女神に変貌した。

カーディー

樹木の神

外見年齢・・・30歳

髪・・・深い緑。腰まである長髪

眼・・・碧

寡黙

ユリーナ

月の女神

ウリュウ

火山の神

外見年齢・・・18歳

髪・・・赤茶色（ウルフカット）

眼・・・赤茶色（猫目）

自分のこと・・・俺

生まれ・・・ジューンとダリヤの子

ナーガ

欲の神

外見年齢・・・25歳

髪・・・栗色の短髪

眼・・・すこし紺が入った黒眼（細目）

自分のこと・・・俺

生まれ・・・ビュアスとアトラスの子

橘 隼人 ハヤト

風香の弟。

年齢・・・25歳

42・冷めやらぬ怒り（前書き）

レイヤ視点で書いています。すこしだけ残酷なシーンがあります。たいしたことないとはおもいますがご注意ください。

42・冷めやらぬ怒り

執務室で書類と向き合ってたレイヤは、気の変動を大きく感じて思わず手を止める。

なにがあつた？

その気は自分が今一番気にかけている癒しの女神のモノ。
いきなり不安定だが膨大な気が縮小されるように小さくなり、異常なほど安定したものに変貌をとげる。

そのすぐ後に震え上がるほど膨大な気が肌を刺す。それが自分の半身である闇のモノであることも感じ取る。

こうしてはいられないと、彼女の気を探りそこに跳ぶ。

そこでは黒髪の青年が大切そうにまだ幼い容姿の少女をベットに寝かそうとしていた。

少女は気を失っているが、その彼女を見詰める青年の表情はひどく口元を歪ませている。半身のこのような表情はこしばらく見たこともない。

「ゼノン……なにがあつた？」

できるだけ冷静に静かな声で問う。なにかがあつたのは間違いない。だがそれに対して返ってきた返事はそっけないものだった。いつもの口調である敬語もまったくない。

「……外で転がっている奴の仕業だ」

言われて意識をそちらに向けると、欲の神であるナーガが苦しうに地面に蹲っている。神である彼があれほど苦しんでいるのはど

うみても目の前の闇の神の力だろう。それもかなりの力を加えている。

「だから、何があつた？」

ここまで彼が怒りを顕わにしているのだからおそらく今のフウカの気の変化がそうなのだろう。なんとなく検討がつくが当たってほしくなくてももう一度聞く。

「奴はフウカの記憶を封じただけだと言っている」

しかし、ゼノンから出た言葉はいやな予感通りであつた。

やはり、人間としてのフウカの記憶を封じてしまったのか。

眠っている彼女を覗き込む。気を失つたにしては寝息が安らかでただ寝ているだけにしか見えない。

それにしてはなぜ3分の2ほどしか気がないのだ？たしかに綺麗編みこまれた気をしているが、いままで来ていた気よりだいぶ小さく色も黄色がかっている。

「本当にそれだけか？それにしては気の減りがあまりにもおかしいだろう」

レイヤがそう言うと、ゼノンは彼女の額に手を伸ばす。ゼノンから安らぎの気が送られているようだ。

「それはわからない。でもここまで安定しているってことは封印されたままのことです。さっきナーガの術はある程度は分解しました。だが、フウカ自身が本心からもどってくる気にならないと、完全には消滅できないですね」

これ以上はだれも施しようがないのか。

「しばらく様子みるしかないか・・・」

少なくとも意識が戻るまではこのまま寝かしておくしかない。

「で、あのアホはどうするんだ？」

レイヤが窓の外を顎で指して聞くと、ゼノンは一層冷氣漂うようなおそろしい顔つきになりながら舌打ちをした。生まれてからの付き合いだが、自分とはかく半身の闇の神の舌打ちなど初めて聞く。

「そのまま放置でいいだろう。フウカが眼をさますまで、あのままにしておいてあげますよ」

かなり力をかけてナーガに罰を与えているにも関わらず、一切悩みもせずに答えるゼノンに呆れたようにため息をつく。

と言ってもゼノンを咎めるどころか、話を聞いてレイヤ自身も怒りがどんどん湧き上がってきている。少なくとも本当にフウカが記憶を封印することを望んでいれば、自分かゼノンに頼むはずだ。ほとんど会った事のないナーガが行うってことはおそらく不意打ちか強制的にだろう。

なんとかこのままでがんばろうとしていた彼女の努力を一瞬で踏みにじったのだ。

なにより眼を覚ましても女神としてのフウカであって、あの自分が惹かれた彼女に会うことはできないのかと思うと、いまさらながら喪失感でぞつと背中に寒気が走る。

「それでいいが、そんなに力をずっと放出してたらお前でも疲れるだろう。半分は俺が引き受けてやるよ」

というか、俺にもさせると言い加えると、ゼノンは歪んだ口元をもっと吊り上げながら無言で頷いた。

「ここでもうにかするのは彼女に悪いからとっとと奴の部屋でじつくり話を聞くぞ」

レイヤはそつと彼女の頬を名残惜しそうに撫でてから、その場から退出しあまり入ったこともない欲の神の居室に跳んだ。

薄暗い部屋だが壁一面に女性の裸体の絵が掛けられている。芸術的には素晴らしいものであるはずだが、ここまで数多くの裸体が並んでいると気持ち悪くなる。

「あいかわらず悪趣味だな、ナーガ」

そう言つて振り返つた視線の先には栗色の髪をした青年が苦しうに蹲っている。

「れ、レイヤ。たすけてくれ・・・」

搾り取るようにかすれ声をあげながら伸ばしてくる手を汚いもののように払いのける。その後ろで自分と同じ顔をした青年が殺氣立った目つきで、下でもがいている青年を睨みつけている。

「こうなるってわからなかったのかよ？」

情けない顔でこちらに助けを求めているナーガを見ると、レイヤとしてもゼノン同様怒りがどんどんと込み上げて来る。

ゼノンがこれほど怒りを見せる内容を俺が許すと思っているのかよ。

舐められているとしか思えない。

「圧迫がいやなら死なない程度に俺が切り刻んでやるのか？」

そう告げると共に気をナーガにぶつける。とたんに全身に無数の切り傷ができる。と言ってもかすり傷程度だが。こんなのはただの脅しにすぎない。

「うわあゝ！やめてくれ！」

顔中の血が引き蒼白になりながら、欲の神ががたと身体を震わせている。

「いやなら、記憶を封じた以外になにをしたか言うんだな。彼女の気があまりにも減っているのはお前がなにかしたんだろっ？」

レイヤがそう言うと、ナーガは小刻みに頭を振りながら必死に否定してくる。

「な、なにもしてない！しようとしたときにゼノンが来たから、それ以上なにもできなかったんだ・・・」

「ほおゝ。検討は付くが何をしようとしてたんだ？」

できなかったということはしようとしてたと白状しているも同然だ。どうせこんな悪趣味な部屋の主だから、しょうもないことだと思いが聞かずにはいられない。

「べ、別に大したことしてない！」

蹲る青年の胸ぐらをつかんで無理やり上を向かせる。

「どうせ、フウカにいらん欲を植えつけようとしたただけだろ？」

言った瞬間にもっと青くなったその表情を見て確信する。

「う、うわぁ」

持ち上げたレイヤの腕にも伝わるほど後ろから放たれる闇の気が膨れ上がる。

「ゼノン。あほはほっとけ。それ以上やっても無意味だ」

片割れが怒りをぶつけているせいで、こちらがフロアに回らないといけない。いつもはレイヤが切れてゼノンが宥めるのに今回は逆だ。この場を鎮められる唯一の神を呼び出す。これは自分が代わるだけではすまない。

こうなったら彼女しかない。

呼び出すとすぐに空間が歪み姿を現す。妖艶と言ふ言葉がぴったりの美女だ。

「あら？なんでわたくしの息子がこんな床に寝そべっているのかしら？」

真紅の口元に楽しそうな笑みを浮かべながら場違いなのんな口調で聞いてくる。その口調に床で苦しんでいる青年に対しての心配の色はかけらもない。

「ビュアス。これはナーガがフウカにちょっかいをかけたお仕置きだ。後は親の役目だと思うが？」

そう言いながら事情を軽く説明をすると、愛の女神は一気に瞳に怒気を浮かばせる。

「なんですって！彼女の記憶を封じた上に、欲を植えつけようとするなんて・・・」

愛の女神だけ肉欲だけでことを運ぼうとした息子に対して、怒りが爆発する。

「ええ。あとは任せて。ごめんなさいね。馬鹿息子が貴方たちの大切なお姫様にちよっかいをかけて・・・」

その表情は謝りながらもどこか楽しそうだ。愛の女神だけに、いままで誰にも見向きもしなかった最高神ふたりの恋愛を見れるのがうれしいのだ。

「ビュアスに謝られても困る。これでフウカが元に戻らなければ、俺とゼノンが徹底的に痛めつけてやるつもりだからな。とりあえず彼女が眼を覚ますまでは任せるよ。しばらくこの部屋から出さないようにしてくれ」

レイヤがそう言うとその場を支配していた闇の気が、持ち主である黒髪の青年の元に戻っていく。

同時にナーガが大きな息を吐いた。どうやら圧迫がなくなったようだ。それでも今までのダメージなのか頭すら上げようとしなない。

「ビュアス。私の代わりにお願いします」

今まで険しい表情をしていたゼノンは、ここで少しだけ表情を緩めて愛の女神のほうを向きながらそう言う。

「おいたがすぎた息子のしつけなおしは任せておいて。まずはこのお部屋の模様替えからするから」

部屋を軽く見渡しながらビュアスは手を振る。

ここでレイヤもゼノンもすることは終わった。あとは彼女の目覚めを待つだけだ。

しかし、彼女の部屋に戻ろうとした途端、彼女の気配が彼女の部屋でないことに気づく。

どこにいったんだ？

探るとすぐに見つかる。

しかし、それは戦神の部屋だった。とりあえず何故と考えるより先に、二人ともそちらに向かうことにした。

42・冷めやらぬ怒り（後書き）

ゼノンの怒りがすごいです。レイヤはそれに圧されて怒りきれません。

43・女神の誘惑（前書き）

オリセント視点で書いています。

43・女神の誘惑

オリセントは仕事を終えて部屋に付いた途端、漂う気のいびつさに眉をひそめる。

このおびただしい闇の気はなんだ？

それほど気を感じ取るのは得意としていない自分が分かるほど、あまりにもその気は異質だった。

ゼノンが怒っているのか？

確認しようと気に集中したとたんに、部屋の空間が歪み新たな気があふれ出る。

「！！」

良く知っているはずの優しい気であるのに、それもどこかいつもと違っている。

「フ、フウカ？」

今まではみ出すばかりのすこし不安定なクリーム色の気であったのに関わらず、それに比べるとずいぶん整っているが小さく縮小され、黄色がかった気に変貌を遂げている。

なにがあつたんだ？

「あなたは戦神ですね？」

現れた少女はよく知っている姿をしていながらも、オリセントにはまったくの別人であると、すぐに悟る。

眼の輝きが違うのだ。すぐに感情によって揺れる瞳がいまはまったく微動だにしない。

「わたくしは癒しの女神でございます。戦乱の人間界に癒しと守護という希望を与えるために、生まれてまいりました」

オリセントはまるで会った事もないと言うように、自己紹介をはじめ彼女を戸惑いながら見る。

「フウカ。何を言っている？もしかして記憶を封じたのか？」

オリセントは信じたくなくて考えるよりさきに彼女に接近する。不躰だとは思うが彼女の顔を優しく両手で包みこみ、もっと表情が見えるように軽く持ち上げる。その間彼女は抵抗するわけでもなくされるがままになっていた。

「おかしなことをおっしゃるのね。わたくしはさきほど生まれてきたばかりですよ。それにまだ名前は付けられておりませんわ」

オリセントの大きな手で頬を包まれながら微笑を浮かべる。だが、先日虹を見ながらうれしそうに笑みを見せてくれた彼女の微笑みとは、どこかかけ離れていた。同じ顔だというのにその微笑はまったく感情が見えてこない。

「ではなぜレイヤやゼノンのところではなくここに来たのだ？」

生まれたてはとりあえず名前をもらうために彼らに面会を請うの

が普通だろう。いくら系統が近くてもさきに戦神の自分に会うのはおかしい。

オリセントがそう思って聞くと彼女自身とまどいを見せながら返答する。

「一刻も早く守護の神を創らなくてはと、なぜか気が急くのです」

守護の神？どういうことだ？

「わたくしには感じるのです。戦神である貴方とわたくしが結ばれることで守護の神が誕生すると」

その言葉に戦神は一瞬頭が真っ白になる。

たまに自分も直感のようなものを感じることがあるので、彼女が偽りを言っていることはないだろう。

それでもその内容はすぐに信じられないものだった。

「どうか、人間界の平和のためにも一刻も早くわたくしを抱いて下さい」

今まで惹かれていた少女にそう告げられて、男としての欲望が溢れそうになる。その上、あれほど欲していた守護の神を自分で創ることができると知り気持ち揺れる。

彼女が言うように本能をむき出しにして抱いてしまいたい。

しかし、それは本当に彼女の本意なのか？

少なくとも人間の記憶を持ったフウ力であればこんな感じで自分に身を捧げようとは思わないだろう。

「フウ力。それが本当ならたしかに必要なかもしれない。だが、神の出産はそんな単純なものではないだろう。心と心が結ばれないとい

くら肉体的に結ばれてもできるものではないからな」

戦神は頬を包んでいた手を彼女の顔立ちをなぞりながら下ろしていき、フウカの肩を掴むようにする。

「わかっております。でもわたくしには時間がないよう感じるのです」

そう言つと逆にゆっくりと戦神の頬に両手を差し出しながら彼女自身の唇を近づけてくる。それでいてまったく顔は無表情だ。

触れる程度の口付け。

戦神はされるがままにする。だが、決して自分から彼女を抱き寄せて、深く口付けをしようとはしなかった。

「なぜ求めてくださらないのです？どなたか気持ちを通わせた方がいるのでしょうか？」

動かないオリセントに、彼女は一度口付けを離して焦れたように聞いてくる。

「悪いが好いた者はある。だからすぐに気持ちを切り替えることは悪いが無理なんだ」

オリセントはそれだけ言つとゆっくりと彼女の身体から離れる。それに対して気を悪くするわけでもなく、こちらを顔色一つ変えずに見ていた。

「わかりました。ただ守護が必要であることは戦神であるあなたが一番よくご存知だと思いますので、早くわたくしに向かい合うようにしてくださいね」

彼女はそう言うつと媚びるように再び大きな身体の戦神に近づき、触れようと手を伸ばす。

そのとき、大きく空間が歪む。

まただれかが転移してきたのだ。

すぐに2人の同じ顔をした金と黒の青年が姿を現す。

レイヤとゼノンだ。

「フウカ！」

レイヤが現れたと同時に癒しの女神に近づく。だが、彼女の顔を見て怪訝そうな表情になる。

「初めてお目にかかります。わたくしは癒しを司っております。先ほど戦神も呼んでおりましたが、わたくしはフウカと名付けてくださったのですか？」

そう言われて絶句している。やはり記憶がないままなのか。

「素敵な名前ありがとうございます。わたくしは戦乱の人間界に癒しと守護という希望を与えるために生まれてまいりました」

さきほど聞いた言葉をもう一度レイヤとゼノンに告げている。

「守護とはどう言うことですか？」

ゼノンがそう聞くと先ほど見た感情がまったく見えない微笑を浮かべ、こちらを見ながら答える。

「わたくしと戦神で守護神を創るのが使命の一つだと言うことです

わ
」

そう宣言されてさきほどの自分同様、光神と闇神の表情が一瞬で強張った。

動かない二人を見ることもなく、再びオリセントのほうに手を伸ばしてくる。その動きはひどく官能的で先ほど以上に身体を密着させて顎を上げながらキスをせがんでくる。

さすがにそれはまずいだろう。

オリセントは彼女の身体を自分から離そうと腕を上げた時、その部屋の空間が大きく揺れる。少なくとも自分自身は揺れを感じた。

『やめて〜』

若い女性の声。そちらを振り返れば濃厚なクリーム色の気がふわふわと浮いている。

「フウカ?!」

レイヤとゼノンが同時でその正体を見破り呼ぶ。

『元は私の身体なんだから、そんな真似はさせないんだから!』

部屋中にその声は響いたかと思うと、クリーム色の気が目の前の彼女の身体に突進していく。気はぶつかることなく少女の身体を取り囲み、やがて少女の身体が自分のほうに倒れてくる。

近くにいたので、気を失った彼女をなんなく受け止めることができた。

44・感情と使命（前書き）

前半はオリセント視線、後半はレイヤ視線です。ころころ代わって見にくいかもしれません。

44・感情と使命

「何があつたのだ？」

オリセントは彼女を抱きしめたまま、レイヤとゼノンに聞く。
何があつたのかさっぱり分らない。

「ナーガのアホがフウカの記憶を封じたんだ」

レイヤが舌打ちをしながらそう言う。

欲の神か。自分とは考え方が正反对でお互い、そりが合わずにほとんど接したこともない。もうすこし詳しく事情を聞いた。仕掛けた奴の愚かさにあきれてため息が出る。

「それでこうなったのか？」

おそらく帰ってきたときのあのゼノンの気はそのせいだろう。

「ああ。でも、どうやら記憶が戻ってきたようですね」

ゼノンが彼女の周りの気を視ながらそう言う。今までの小さく凝縮された黄色い気がすこし不安定だが、大きく綺麗なクリーム色のものに戻っている。おそらく先ほど記憶を含んだ気が戻ってきて身体に入ったのだろう。

響いた口調も情緒豊かで昨日まで聞いてたモノだった。

そのことに安堵する。先ほどの彼女の変貌を見てしまっただけに例え彼女が望んでも、記憶を封じることには自分は全力で阻止するだろう。あんな無表情の彼女を見たくない。

すやすやと眠っている彼女をいつまでも抱いておくわけにもいか

ず、とりあえず自分の寝台に寝かす。

「オリセント。さきほど彼女が言ってたことは・・・」

彼女を寝かして掛布をかけてから、後ろでこちらの行動をみていたレイヤが一番気がかりであろうことを聞いてくる。それに対して正直に答える。

「ああ。守護の神は俺と彼女の子供だそうだ」

わずかに眉をひそめる彼らたちを見ながら、申し訳ないと思いな
がらも、どこかで優越感を感じてしまう。

自分と彼女と結ばれることが必然であると言われたからだ。
自重しようと思っていたにもかかわらず、惹かれてしまった少女
がたとえ義務的とは言え、自分を欲してくれている。そのことは純
粋にうれしい。しかし、やはり先ほどのフウカに対して情を感じる
ことはできない。たとえ同じ容姿で合っても自分は今まで接してき
た彼女を欲しているのだから。

レイヤもゼノンも守護神がどれほど人間界に必要かも、最古神と
して永らく支え続けていた彼らには言うまでもなく知っているはず
だ。

彼女が戯言で言ってるわけでないと言うことも分かっている。時
々、神としての直感と言うもので様々な事柄が視えることが自分た
ちでもあるからだ。

そうになると、静観するしか二人にはできないだろう。
いくらそれが自分の意に反していても。

二人が同じ女性を見ていることはよく分かっていた。自分が彼ら
と同じ立場だとどうしようもないジレンマを覚えてしまうだろう。

「そうですか。わかりました。ともかくもう一度フウカが目覚ま

してから今後のことを話ししましょう」

そう言うとレイヤの腕を掴みながらゼノンが転移する。二人の姿が見えなくなりその場は再び自分と彼女だけになった。

「戻ってきてくれて感謝する。いくら同じでも先ほどの彼女に気持ちを持つことはできそうになかったからな」

自分の寝台で寝ている彼女を覗き込み、顔にかかった白金の髪を指で整える。

まさか記憶を封じたときのフウ力があのような状態になるとは思ってもしなかった。まったく感情を見せない少女。たいてい笑っていて、照れた顔、怒った顔、喜んだ顔、悲痛な顔、そして癒しを与えたときの慈しみの表情。

次々と表情を変える彼女を見てきただけにどうしても違和感を覚えてしまう。さらにそんな彼女だから惹かれたのだと思い知る。

「もうすでに他のだれかに心を奪われているかもしれんが、まずは俺と結ばれるのが定めらしいから諦めてくれ」

くつと口元に笑みを浮かべながら、今度は自ら寝ている彼女に口付けを施す。

お互いの舌を絡ませて奪い取るような深い口付けをしたいと思うが、さすがに寝ている彼女にそこまでするのは酷だろうし、そうすることで自分の欲望に火がついて暴走してしまわない自信がない。

「神の出産に心と心が結ばれないといくら肉体的に結ばれてもできるものではないと、よく俺が言えたもんだ」

さきほど彼女に自分が言った言葉を思い出して自嘲気味に笑う。

オリセントは彼女から離れて、さすがに同じベットに寝るわけにもいかずに長いすにクッションと掛布を持ち込んで横になる。

一方。衝撃の宣言を聞いた最古神二人は、ゼノンの部屋でなんとも言えないほどの苛立ちを抱え込んでいた。部屋の持ち主である閻神は執務用の大きな机に肘をつき難しい表情をしながら座っている。それに対して光神は落ち着かないとばかりに、机の前を険しい顔をしながらうついついている。

まず怒りを爆発したのはレイヤ。

「くそ！」

足元にあった机を足蹴にする。それに対してゼノンは普段ならすぐに注意するのだが、ただ無言で一瞬睨みつけるに止まった。

「なんでオリセントなんだ！」

激怒を全面に出しているレイヤに対して冷静にゼノンが答える。

「戦神と癒しの女神で守護神を産むのは充分ありえますからね」

癒しと守護。今この神の国で一番望まれている神である。癒しはもう誕生したが、守護が自分が好んでいる女神が他の神と結ばれなければいけないことに、強いジレンマを感じている。

「わかっているぜ、それぐらい！だが、俺はそんな冷静になれない

んだよ」

神としてはそれを歓迎しなければいけない。だが自分の彼女に対しての執着心がそれを邪魔する。なんで自分ではないのだ！と叫びたくなる。

「ただ彼女の唯一の相手になることを諦めただけです。彼女自身を諦める気はさらさらありません」

ゼノンは努めて冷静にそう宣言する。ナーガに対してあれほどの怒りを見せる片割れが、自分より彼女に執着していないわけがない。だが、自分とて初めて欲しいと思えた少女を諦めるつもりはない。

「俺だつて諦めねえよ」

幸いここは多夫多婦なのだから。

さきほど彼女がオリセントに甘えるように抱きつこうとしていたのは、あくまでも使命のための義務感である上に、彼女は自分が惹かれた表情豊かな少女ではない。

「ともかく、彼女は元に戻ったでしょう。今はそれだけでもよかったと思うしかないですね」

ふうとため息を吐きながらゼノンが苦笑する。彼も同じように思っているのだろう。

「ああ。戻ってきてくれてよかった。あんな人形みたいなフウカ見たくもねえよ。とりあえずビュアスには伝えておくか」

あの容赦のない彼女が息子にどうしつけしているのか。それは正

直興味もない。だがビュアスはああ見えても気にしているはずだ。お披露目の日にフウカと少し話してて、それなりにフウカを気に入ってた様子だ。

「じゃあ俺部屋に戻るわ。仕事たまっているしな」

それだけ言つと返事も聞かずにさっさとゼノンの部屋を後にした。

44・感情と使命（後書き）

ようやく次回からフウカ視線に戻ります。

他の視線は書きにくいので作者はほっとしています。

誤字報告のお願いを前回するといろいろな指摘いただきました。
ある人が『読者は校正の一役をになう』と言ってました。本当に
その通りだとだと思います。本当に感謝です。

45・新たな決意（前書き）

ようやくフウカ視線に戻せました。

45・新たな決意

よし！帰るぞ！

そう思っただけで瞬間移動した途端、私は思わず両手で顔を覆ってしまった。

な、なに！あれ。

自分の部屋を目指したはずだけど、そこは違う部屋だった。そこでレイヤとゼノンが見ている前で、自分の身体がオリセントに無表情で近づこうとしていた。

『わたくしと戦神で守護神を創るのが使命の一つだと言うことですわ』

情緒もない声でそう言いながらも、戦神に抱きついてキスをしようとしている。媚びるような表情を浮かべながらも眼はまったく笑っていない。もし私の記憶が完全に封印されたらこんな感じになっちゃうなんて嫌だ。

思わず気が付いたら叫んでいた。

「やめてー！」

いくらなんでも私の知らない間にそういう関係になっちゃうなんて辛すぎる。それも義務感のみで。

せっかく戻ってくる決意をしたのに。

だいぶ様がわりしたとは言っても元は自分の顔なのだ。

「元は私の身体なんだから、そんな真似はさせないんだから！」

そう言いながらオリセントに抱きついた私の身体にぶつかってみる。

あ、これでよかったんだ。

すぐに自分の身体と幽霊のような自分が融合していくのを感じた。こんなに簡単なことだったんだ。自分さえ決意すれば身体は私を受け入れてくれるんだと気づき安堵する。

そのときに頭の中に一つの声が響く。

『癒しの女神として戦神と結ばれて守護神を創りなさい。それが使命です』

融合していく中で、今まで身体を動かしていた者は抵抗する訳でもなくただそれだけを告げて自分の気の中に混ざっていった。

完全に融合するとずんと身体の重みを感じ、それに耐え切れずに意識を失った。

いきなり視界が真っ赤に染まった。

ここは戦場???

この前初めて見た戦い同様人と人が激しくぶつかり合い、そこら中に血が飛び散り次々と人が死んでいっていた。いや、この前は兵

土対兵士であり場所も草原であった。しかし、そこは街中で色々な家に火の手が上がっている。その下では兵士だけでなく老人や女性、子供の死体が見える限りでも数え切れない。

なに？これ・・・。

状態を把握するために地上から天空にゆっくりと昇る。

さきほど見た光景はほんの一部分であったと思い知る。

その城下町中に火の手があがり、無数の死体が転がっていた。

とりあえず見える範囲でも癒しを与えようと手をかざすが、何も起こらない。

「こんなときに・・・」

そう私が悔しそうにつぶやいたと共に同じように苦悩一杯の声が聞こえてくる。

「俺は人を戦わすしかできないのか！なぜ戦神など必要なのだ！」

よく知っている声に振り返る。思ったとおりで黒髪の大柄な青年が赤と青のオッドアイの瞳に涙をにじませながら、私と同じ景色を見下ろしている。

「オリセント・・・」

すぐそばでそう呼びかけたのだが、何も返答がない。それで彼のすぐそばに近寄ったのだが、こちらの姿がまったく見えていないようだ。

「せめて癒しと守護が生まれてそばにいてくれたらこんな惨状にな

らないのに・・・」

え？癒しの女神として私が生まれてきてるのにこの言葉はおかしい。

どういうことだろう？

そう思っていると1人の若い少年が近寄ってくる。レイヤと同種の気なので、彼が光の精霊であることはすぐにわかった。

「オリセント様。レイヤ様から癒しの女神が誕生したと連絡がありました」

その言葉にオリセントは額に手を当てながら答える。よく見ればその手がかすかに震えている。

「分かった。しばらくは戻ることはできないが戻ったらすぐに会いに行くとレイヤに伝えてくれ」

返事を聞いて光の精霊は軽く頭を下げたかと思うとすぐに姿を消した。

「俺の願いが通じたか！ありがたい。癒しがあれば戦に巻き込まれた者を1人でも救う事ができる！」

手で顔を覆いながら大柄な身体を震わせながら喜んでいる。それだけに彼がどれほど癒しの神を望んでいたかわかる。

自分の存在をここまで望んでくれていたのだと分かって嬉しさのあまり、震える身体を思わずそっと抱きしめようとした。

しかし、見事に伸ばした手が彼の身体を通り抜ける。

あ、やっぱりこうなるのね。

ここでさすがに今の状況を把握した。

もしかしてここは私がこつちの世界に来た当初のこと？過去ってこと？

それならいろんなことが納得できる。

癒しが使えなかったこと。

オリセントに声かけても気づいてもらえないこと。

触れることもできないこと。

分からないことはなぜここにいるのかだ。

そのときに頭の中で先ほど聞いたフレーズが響く。

『癒しの女神として戦神と結ばれて守護神を創りなさい。それが使命です』

あ・・・。

それでさきほどまでの出来事を思い出す。もしかしてその為にこの過去を私に見せたのだろうか。

癒しの女神として戦神と結ばれて守護神をつくる。

それってもしかしてオリセントたちが望んでいた守護神を創るには、オリセントと結ばれる必要があるってこと？

信じられないと言う気持ち強いが、どこかでそれが偽りでないことを感じていた。オリセントの事はそれなりに好意を持っているが、そういう眼でみたことはない。

おそらく彼もそうだろう。義務感でお互いに子作りのために結ばれるなんて私にはできないし、彼に強制なんてしたくない。

それでもさきほどあれだけ私の誕生を喜んでくれていた姿に、も

し彼がそれを望んでくれるなら前向きに考えたほうがいいのかとも思う。

これからはやっぱりできるだけオリセントを見ていくようにするべきね。ほんのちよつと戦場を知った私でも守護が必要であると思つたぐらいなんだから、私が産めるなら少しでも早めにその気にならないと。と言つても彼のほうもその気にならないとだめだろうけど。

それはがんばるしかない。

しかしその一方で頭の片隅でレイヤが告白してくれた時の彼の表情や、壊れそうなときに助けてくれたゼノンの優しさがリプレイのように流れている。

申し訳ないけど、これ以上レイヤたちに惹かれないように気をつけないと。

いろいろ考えている間にいつのまにか何も無い空間に移動していた。おそらくここは夢の中なのだろう。

さきほどの戦いの惨状を思い出して、許しを請うように頭を垂れる。

ごめんなさい。今はなにもしてあげることができないけど、眼が覚めたらすこしでも癒しの力を与えるようにがんばるわ。そして守護の神を産める様に努力もするわ。

新たな決意を胸に抱き、夢の中と分かっているながら眼を閉じた。

46・さすがにベッドを奪うわけにはいきません。

あれ？

眼を開けてここがいつもの自分の部屋とは違うことに気が付いた。

もしかしてまだ夢の中？

とりあえず、ベッドから上体を起こす。

あ、ここは・・・。

見渡してここがどこだかすぐに分かる。部屋の端の長いすでこの部屋の持ち主が寝ているからだ。

大柄な身体を丸めてなんとか長いすに横たわっていた。

思わずその姿が可愛らしくてくすくと笑ってしまう。

私がベッドを占領したせいなんだから笑うのは恩知らずね。

身体にかけていただろっ掛布がだいぶずれ落ちてしまっているのを直そうとベッドから立ち上がった瞬間、ひどいめまいにそのままベッドに顔を埋める。

あら？身体が・・・。

「フウカ。大丈夫か？」

先ほどまで寝ていたオリセントが慌てたように私のそばに駆け寄ってきた。

私が派手に動いたせいで眼をさましてしまったようだ。

「ご、ごめんなさい。まさか身体が動かないとは思わず……。せつかく寝てたのに……」

謝りながら、オリセントが差し出してくれた手を取る。
まだ頭がくらくらしている。

「とにかくまだ寝ておくんだな。神の体でそこまで変調なのは、めったにないほど疲労が溜まっているということだからな」

そう言いながら私の身体をベッドに促す。

前に神の身体は人間の身体に比べて頑丈で、めったに体調を崩すことはないと言っていたっけ？

それにこの神殿にいるだけで力が漲ってくるとも聞いた。

それでも回復しないほどひどかったというわけだ。

「あ、それなら私部屋に戻るわ。だってオリセントのベッド占領しちゃっているの申し訳……」

「いいからそのまま休め。俺はあの椅子で充分だ」

オリセントは彼には珍しく最後までこちらの言うことを聞かずに、ばさっと掛布を私の上にかける。

「だって、すごく狭そうだし……」

さきほどの姿を見ただけにどうしても遠慮してしまう。熊さんばかり可愛らしかったけど、あれは窮屈だし身体が痛くなるよね。

「別に構わない。移動は何も無いときは別に負担になるほどでもないが、そんな調子悪いときは止めといった方がいいんだ」

そうなんだ。じゃあ確かに止めといた方がいいのかな？あ、でもここから私の部屋ってそんなに距離なかったよね？ならなんとか帰れるかも。

「じゃあ歩いて帰るわ。近いから別になんとか帰れると思うし・・・」

オリセントはそう言ってふうと大きくため息をついたかと思うと、私の身体の上に身を乗り出してきた。

え？

いきなりのことで声もでない。そうしているうちに自分の身体に私の身体を引き寄せて持ち上げる。

いわゆるお姫さまだっこと言うやつだ。

は、はずかしい！

なぜか掛布ごと抱きかかえられたのでまだマシだけど、このかつこはちよつと・・・

「な、なんで？？重いよ」

「どこが。これぐらいなんてこともないぞ。さすがにそんな状態で歩かせるわけにもいかないからな。連れて行ってやるよ」

たしかに大柄な彼はまったくゆるぎない歩みで私を抱きかかえながら歩いている。

「フウ力は俺が長いすに寝ることに遠慮して譲らないみたいだし、そうなったらフウ力を部屋に運ぶのが一番手っ取り早いからな」

廊下を歩きながら耳元でそう言われる。さすがに深夜なので廊下を歩く者はいない。だから余計に抱きかかえられて彼の体温をじかに感じて恥ずかしくおもってしまう。

「あ、ありがとう。たしかにふらついているので運んでくれたのは助かるわ」

恥ずかしいのをごまかしたくてすこし大きな声でお礼を言つと、目の前のすこし強面の顔がわずかに優しい表情になった。

「やはりフウ力はこうでないと。あの無表情のフウ力には参ったぞ」

そう言われてオリセントに無表情で迫ろうとしていた姿を思い出して、彼の腕の中で思わず動いてしまう。

「あ・・・あれは」

恥ずかしさもあるけど、自分でもあれは怖かった。手で顔を覆っているオリセントが抱きかかえながらも私を見下ろしていた。

「これでわかっただろう？」

そう言われてなんのことだろうと彼の顔を見上げる。見下ろしている彼の顔は強面なのに優しさに溢れていた。

「その人間としての記憶が癒しの女神として必須なんだよ。俺はいくら守護の神が必要であつてもあのフウ力と子供が産めるとは思えないからな」

もしかしてオリセントはその気になってくれているのだろうか？でも神の子供作りにはお互いの情があつてできるものであると言う話を聞いている。義務感ではできないだろう。それにさすがにそれだけのために抱かれるのに抵抗はある。

「それなのに私でいいの？義務感だけで子供はできないって話だね？」

思わず聞いてしまう。オリセントはそんな私の顔をすこし呆れたような表情で見てくる。

「さっきの話聞いていたか？今のフウカがその為には必須だと言っているだろ？少なくとも俺はフウカに対してそういう感情があるぞ？」

そう言われて絶句する。常に先生として接してくれていて、そんな素振りも見せなかったからまったく分からなかった。

「フウカが思っている以上に俺は、俺とフウカが結ばれるのが必要だと言われて喜んでいるぞ？レイヤやゼノンにはわるいかな」

純粹なオリセントの気持ちやぶつけられて、嬉しいと感じる気持ちと戸惑いが私の中で入り交ざっていた。

やはり最後につけられた二人の名前が戸惑いを大きくしている。私は何も答えられずしばらく二人とも無言のまま部屋まで運んでもらうことになった。

47・不器用な恋愛（前書き）

R15もどきが入っています。ご注意ください。
本当どれぐらいがR15になるんだろっ？

47・不器用な恋愛

私の部屋に着き、そのまま私のベットにゆっくりと降ろしてくれる。

人一人抱えていたのにまったく息を乱していない。さすがに戦神だけあって力も強く体力もすごい。

上体を起こした形でベットに座っていると、彼は私の太ももの横に腰掛けて私の頬に大きな手を添えてくる。

あ、キスされる。

ゆっくりと顔が近づいてくるのがわかったけど、そのまま唇が触れ合うのを動かずになされるがままにしていた。

かすかに触れる程度の口付け。すこし顔を離しながらも片手ほどしかない距離でオリセントが聞いてくる。

「フウカ。お前はこう思っているのか正直にこたえてほしい。レイヤやゼノンが好きなのか？」

近くで見える深紅と青の瞳は嘘は見逃さないと語っている。だから慎重に私は答える。

「レイヤもゼノンも好きよ。もちろん、エダもオリセントもね。でもそれはまだ恋愛対象とは呼べないかな？だって1人でないもん。同時に人を好きになるような器用な真似はできない」

そのまま話を続ける。

「レイヤに告白されたし、ゼノンは一番辛いときに支えてくれた。

エダもほしい言葉をくれた。だから気にはなっているかな。でもそれはこうしていつも側で支えてくれているオリセントに対しても感じているの」

だれが恋愛感情で好きと思うには、みんな優しくて私を支えてくれているので選んだりできないのだ。

「実はね。さっきオリセントが人間界の戦場で苦しそうにしている姿を見たのね。夢でなくたぶん過去を見たんだと思う」

私はそつと両手を広げて、彼の大きな身体を包み込むように軽く抱く。先ほど見たときにはできなかったことを今したいと思ったからだ。

オリセントはいきなり抱きついてきた私の身体にそつと腕を回してきた。二人とも後ろに回った手に力はいれずにただ触れている程度である。

「そんな姿を見て私もオリセントを支えたいと思ったの。だから今オリセントと向かい合うのが使命だと言うなら、もつともつとオリセントと触れ合って気持ちを高めて行きたい」

それが私の正直な思いだ。

「ああ。充分な答えだ。俺ももつとフウカに近寄れるように努力しよう」

オリセントはそう言うとはんの少しだけ私を抱きしめる腕に力を入れた。

「うん。これからはオリセントだけを見れるようにするよ」

恋愛として好きとまでいなくても、オリセントに惹かれていつているのだと思う。ただそれは他の三人にたいしても言えることだけど、これから見ないようすれば大丈夫だと思う。

「何も無理して俺１人にしほらなければいけないわけではない。神が神に惹かれるのには、そう言う定めであるとも言われているんだ。だからレイヤたちに惹かれる気持ちまで封印しなくてもいい」

そう言われて私は思わず彼の顔を見るために身体から離れた。少し苦笑するような表情でこちらを見ている。

「花の女神のことを知っているか？」

いきなりそう言われてお披露目の時にあった可憐な少女をなんとなく思い出す。ふわつとしたウェーブの赤みを帯びた髪に小さな花をいくつもつけていた。

それにこぼれおちるような大きな透き通った青い瞳が印象的だった。

「えっとたしかフローラって子だったよね？」

答えると戦神は頷きながら話を続ける。

「カーデイーがもともと精霊であったフローラを一途に可愛がったために、いきなり女神になったのは知っているな？」

そう言われて少女のすぐ側で寡黙そうな青年が愛おしそうに彼女を見ていたのを思い出す。たしか樹木の神だっけ？

その話は聞いたことがある。でも詳しくはしらないと言うと話を

続けてくれた。

「当初そのあまりにもの可愛がり方に、みんな頭をひねっていたんだ。もちろん、精霊を愛する神もないわけではなかったけど、やはり神が精霊にそこまで熱くなるケースは少ないからな」

そういうものなんだ？しかし外見は30ぐらいの樹木の神が14歳ぐらいの少女を可愛がるってすこし犯罪ばく感じてしまう。

まあ実年齢は違うし、そもそもそういう考えがこの神の国にあるのかもわからないけど。

「だが、その可愛がりが続くとフローラはいきなり女神になったんだ。だから樹木の神がフローラを愛するのは、そういう運命であつたと今では考えられているんだよ」

なるほど。そう言われると納得できるような・・・。

「もちろん、俺だけをみてくれと言いたい気持ちもある。だが、気持ちを押さえ込んで無理したらどうしても綻びが出てきてしまうものだ。フウカには今の自然体でいてほしいからな。あ、でもしばらくはできる限り俺との時間を優先してほしい。きれいな事言っているがやはり守護神は、すこしでも早く生まれてきてもらいたいものだからな」

その言葉に考えるより先に何度も頷いていた。

本当にこの青年は優しすぎる。

あれほど今まで私や守護神がいないせいで苦しんできていたのに、第一に私の気持ちを思いやってくれている。自分だけを見る！一刻も早くその気になれ！と本当は言いたいだろう。それなのになんと誠実で不器用な言い方をするんだ。この戦神は。

「ほんとうに。ほんとうにありがとう！使命と言われてとまどいもあつたけど、今は相手がオリセントでよかったと本当に思っているよ」

嬉しくて思わず涙が眼に滲^{にじ}むが構わず彼の顔を見上げる。同じように座っていても彼は長身なので見上げる形になるのだ。

「フウカ。悪いけど少しだけ触れてもいいか？」

オリセントは私の頭を大きな手で包み込み髪をなで、ためらいながら聞いてきた。

ここで許可を求めてくるところが彼らしい。いきなり迫られてもおそらくびっくりして拒んでいるが、わざわざ許可を求めてくるので逆に全面的に断れない。

「す、少しなら・・・」

彼の顔を見てられなくて紅くなっているだろう顔を下に向けながら答えると、その顔を優しくではあるがすばやく持ち上げて口付けをしてくる。すぐに口の中に彼の熱い舌が入り込み私の舌と交じり合うように絡める。まるで喉の渇きを潤すために貪欲に求められて、思わず私の唇から熱い吐息がこぼれた。

その間も彼の大きな手は、一方は私の頭を抱えて自分の顔に引き寄せている。そのために口付けは深くなっているのだ。さらにもう片方は私の背中や腰の辺りをゆっくりと撫でている。

どれぐらい時間がたっただろう。十秒ぐらいとも数分とも感じる。彼は深い口付けを堪能したあと、私の耳にもそつと口付けをしてくる。

「やあ・・・」

その瞬間に私はびくと身体を震わせて思わず声をあげる。耳が弱くどうしてもじっとしてられないのだ。

私の声をあげるのを聞いて彼は我に返ったかのように一瞬身を震わせて、ゆっくりと身体を解放してくれる。

「やばいな。そんな声を聞いているとさすがに止まらなくなってしまいそうだな」

そう言つとベットから立ち上がる。

「悪かった。まだ本調子でもないのについ手を出してしまった」

オリセントはばつが悪そうに頭を抱えながらそう言う。

「き、気にしないで。きちんとやめてくれたし・・・」

それに対して私は思わずフォローになっているかなってないか分からない返事する。

「これ以上いると手を出さない自信がないし、ここで部屋に戻るとしよう。もし用事あれば俺でも精霊でも来るからゆっくり休め」

そう言う彼に私はなんとか手を振りながら彼が姿を消すのを見送る。

その後すぐに顔を掛布に沈めてしまった。先ほどの深いキスや触れる彼の手の暖かいぬくもりの余韻が体中で残っている。特に口付けされた耳は気のせいかもしれないが、熱をいまだに持っているように感じてしまうのはなぜだろう。

「は、はずかしい」

人間の時は仕事忙しかったせいでそういうことには8年以上ご無沙汰だっただけに、久しぶりの感覚に動揺してしまう。

「な、なるようになるのかな……。とりあえず今は止めてくれてよかったかも。あのまま流されるわけにはいかないし……」

自分から止めてくれたオリセントにひとまず感謝し、ベットにもぐりこんで無理やり羊を考えることにする。

幸いなことにやはり身体が睡眠を欲していたようで100匹もいないうちに眠りについていた。

48・そつけない態度

私が起きてからん」と伸びをしたとたんに、部屋の扉のほうからノックの音がしてきた。

すごく早いなと思いいながら返事をする、いつもとは違って乱暴と言ってもいいほど手荒く扉が開けられる。

そして飛び出してきたのが栗色の美少女である。いつも世話してくれる光の精霊のノアだ。

「フウカ様！具合のほうは大丈夫ですか？」

大きい黒眼を潤ませながらこつちを覗き込みながら聞いてくる。どうやら事情を聞いているみたいだ。

昨日みたいに起き上がった瞬間にふらつくことはなかったので、だいぶ体調が戻った。

「う、うん。身体はだいぶ良くなったよ？」

だが、その返事にノアは納得がいかないようで、もっとこちらを窺うようなしぐさで聞いてくる。

「記憶！記憶のほうはいかがですか？」

私はありのままに以前のように人間の記憶があると言っ返事をすると、ノアはあからさまに手を胸に当てながら、

「よかった」

と、安堵のため息をつく。

「レイヤ様もゼノン様もそうおっしゃっていたでしょ？でも本当によかったですわ、フウカ様」

ノアの後ろからセレーナの声が聞えてくる。その方向をみると濃い蒼色の髪と眼の美女が、いつもどおりゆっくりと扉から入ってきていた。

「ありがとう。また女神としては不安定な状態だけど二人とも支えてね」

心から嬉しそうによかったと言ってくれているのが分かって、戻ってきてよかったんだと胸に暖かいものを感じる。

それから身支度を整える。やはりみんなに心配かけているだろうし、今の状態を報せる必要があると思う。

しかし強く勧められて軽く朝ごはんを食べることになる。今まで欠かさず食べてきたからだろう。

食べ終わるとセレーナから、レイヤとゼノンが朝食を終わったら行くと伝言を頼まれていたと告げる。

やはりそうだったんだ。

オリセントは別にいいと言ってくれていたけど、やはり少なくとも守護神を創るまではオリセントだけを見るようにしたい。

乱れた気持ちを整えるために大きく一度深呼吸をしてから、二人が来ることを了承する。

セレーナとノアは後片付けを終えて部屋から退出する。

部屋で待ってたらいいってことよね？

そう思っ部屋にある長いすに腰掛けて待つことにした。

「そつえば二人共に、あの恥ずかしいシーン見られちゃったのよね？」

記憶がない状態の私がオリセントにせまっていたシーンを思い出して、思わず顔を両手で覆う。

だから空間のゆがみが部屋に発生したけれど、それに気が付いたのは金色の髪 of 青年が扉の前に姿を現したときだった。

「おはよう、フウカ。体調はよくなったか？」

光神であるレイヤが、軽く手を上げながら近寄ってくる。

「うん。心配かけてごめんなさい。昨日の夜よりだいぶよくなったよ」

私がそう言いながら立ち上がろうとするのをレイヤは手で制す。

「座っている。で、記憶のほうはどうだ？」

ノアと同じく聞いてくる。

「うん。今までと同じよ」

その返事にほんの少しだけ口元に笑みを浮かべる。だが、その微笑み方はすこし寂しげでいままで見たことないような表情だった。

「そうか。それはよかったよ。まあその気を見るとそうだろうとは思っていたんだけどな」

気が違っていたのかな？そう思って聞くと意外な回答を貰った。

「お前の記憶がない状態のときは気はたしかに安定していたけど、

色が黄色いし7割ぐらいしか気の大きさがなかったんだよ。だから3割分は記憶を持ったフウカ自身に在るということだな」

そうなんだ。それは意外な事実だなと思う。

「やはりそのままのお前がこの世界では癒しの女神として、求められているということだな」

レイヤはわかったか？と言いながら手を私のほうに伸ばしてくる。しかしその手は私に触れることなく、ごまかすように自分自身の頭を乱暴に掻く。

「じ、じゃあ。フウカの元気な姿を見れたし、俺仕事あるから行くぞ。またな」

そうしてレイヤは慌しく手を振りながら私の部屋を退出していった。

いままでにないそっけない彼のその態度に、ひどく動揺を覚えてしまった。

49・諦めない宣言

「そうよね。守護神のことレイヤも聞いてたし・・・」

だからレイヤが私にそっけない態度を取るのは仕方ないと思い直した。

「あんな姿見せちゃったし、もう気持ち冷めちゃったのかもね」

その諦めを含んだ私のつぶやきに返事が返ってくる。

「それぐらいで冷めるなら私もレイヤも楽だったのしょうけどね」

そう言いながら空間のゆがみが発生し次は黒髪の青年が現れた。

先ほどの金色の青年と顔の造りは一緒である。

「ゼノン・・・」

閻神が少し顔にかかった肩ほどの長髪を片手で掬い上げながらこちらを見ている。

「ああ、よかった。身体はまだ万全ではないようですが、記憶は綺麗に戻ったようですね？」

しばらく黙って私を観察した後、安心したようにそう言う。

私は黙って頷く。

「レイヤは気持ちに決着がつかずに持て余しているだけですよ。私の片割れながら不甲斐ないですね」

そう同意を求められても私は返事することもできず、ただ黙っているしかなかった。レイヤの気持ちがいまひとつ分かっていないからだ。

ゼノンには黙っている私の頭に軽く手を置き、少し眼を細めながら笑みを浮かべる。

久しぶりにみる真つ黒オーラ微笑みにビクツと身構える。

「ああ。言っておきます。申し訳ないですが、私はこれしきのこと
でフウ力を諦めたりしませんので」

こ、これしきのことって、もしかしてオリセントにせまった姿のこと？それとも守護神のこと？

目の前の魅惑的だけどこかおそろしい笑顔を浮かべているお方は、その考えを読んだかのように話をつづける。

「今はオリセントと向き合いたい。貴女ならそう言うでしょう。それを妨害するつもりはありません。さすがに私も、守護神を産むという運命を否定するのはできませんからね」

やはりゼノンもそれが運命だと思ってくれているんだ。先ほどのレイヤの態度もそうだと思ってるということだろうか？

「でもね。私たちが住んでいるここは、一人しか愛してはいけないわけではないのです。現にビュアスは5人恋人いますからね」

そう言えば、ここは多夫多婦制だった。そう言っているのだろう。ただ、私としてはまだ受け入れがたい話だけど。
それでもここまで言ってくれるのは嬉しい。

「ゼノン、ありがとう。でもまだオリセントとも向き合っていない状態で、他もつていうのはさすがに無理だと思うの。たとえばゼノンと恋人になつてしまつたら、気持ち的にオリセントと向き合えなくなるかもしれないし・・・」

ゼノンにしてもレイヤにしてもこれ以上に惹かれて、恋人になりたいとまで私の気持ちが高ぶるとそれからオリセントと守護神を作るのは出来なくなるかもしれないし、出来ても時間を要することになるだろう。

だからこれ以上私の気持ちをかき乱さないでほしいと思う。

「そうなつてくれたら私としてはとてもうれしいことですが、フウ力は定めを感じてしまった以上そうならないでしょう。だから私は諦めたわけではないとだけフウ力には伝えたいのですよ」

本当に私の気持ちを読んでいる。それでも私を見てくれていると言うのか。

「レイヤも同じ気持ちです。だから私たちに罪悪感を覚えずにまずはオリセントと向かい合つてください。私はその後から口説くことにしますから」

そう言うときにはもうすでに黒いオーラは消え去つていた。優しい笑顔でこちらを見てくれている。その表情を見てなぜ彼があえて諦めないと宣言したのか悟つた。

私の心の迷いを断ち切るためだ。

普通ならその気がなくなつたと言う場面かもしれないけど、それなりに私の気持ちがレイヤやゼノンにいつているのを、ゼノンは分かっているのだ。

今、ゼノンに気持ちが悪くなったと言われたら逆に罪悪感も持つて気にしてしまう。気になってオリセントに向き合えないと思う。まだオリセントだけ見るといっほど気持ちが高まっていないのだ。それをここまで諦めないときっぱり宣言した上で、オリセントと向き合うことを前提に話されるとふしぎなもので多夫多婦制も本当に自然なことなのかなって思えてくる。

レイヤとゼノンに対する気持ちはすこし棚上げにして、まずはオリセントと向き合えばいいと言ってくれているのだ。

その優しさに対してありがとうと口にするのはおかしいと思って、心の中だけで感謝する。

「そうね。まずは、オリセントと向き合うわ」

そのように私が言うのに対してゼノンは軽く私の頭をなでると、すこしだけ気を送ってくれる。前にももらった安らぎの気だ。

「ですが今日はもうすこし養生して下さい。身体がもうすこし疲労を感じているようですので」

私がありがとうと言いながら軽く頷くと、ゼノンは手を振りながら姿を消していった。

しかし、彼の洞察力には本当に驚いてしまう。彼が言うように、しばらく起きていただけでやはりどこか気だるさを感じていたからだ。

私はもう一度ベットに戻り、もらった安らぎの気を感じながら眼を閉じることにした。

50・平穩をもたらす王として定められし子（前書き）

いきなり場面が変わって人間界の小さな国の王の話になっています。

50・平穩をもたらす王として定められし子

どうして俺はこんなところに立っているのだろう。

ターチェンはいまの自分の立場を振り返っていた。

この場で自分に頭を垂れない者はいない。みな、平伏している。

1年前より自分の頭の上には、大きな宝石のついた冠をかぶせられるようになった。

しがない一貴族の次男坊であつたのに、落胤であるという話が出てきて抵抗することも儘ならず王座につけられた。

こんなところより、気が知れた騎士団に戻りたいと思う。しかしそれは到底適わないことである。

このきんぴかの王冠を被った時から圧し掛かる国民の命と責務を自覚していた。

その障害は多く存在するのだが。

「陛下！今こそ開戦のご判断をお願いします！」

「陛下！戦をしてはなりません。このままでは犬死になってしまいますぞ」

「ではどうすると言うのだ？降伏してこの大地を明け渡すというのか？」

目の前で部下たちが激しい討論を繰り広げている。隣の大国が先日、ターチェン自身の血統を偽装で僭王であるという言いがかりをつけて宣戦布告してきたからだ。国力的に圧倒的にこちらが劣っているのに、もし正面衝突したら間違えなくこちらが負けるだろう。だから特に文官たちは怖気づいて降伏を薦めていた。それが王である自分の首を差し出すことになるかと解っていないが。

前王妃がその国から嫁いだ王女である。先王と彼女の間に生まれたのは王子であれば間違えなくその子がこの王座に座っているのだ

が、不幸にも王女一人しか生まれなかったのだ。それでも誰もいなければその王女が婿をとって飾りの女王となっていたはずなのに、どっからかわいて出てきたどこの馬かもわからない男がいきなり庶子の王子だということになり王位はそっちに流れてしまった。だから隣国はこんな手段にでたのだろう。

かと言って自分の首一つで収まるなら差し出すことに抵抗はない。しかし、彼らがその後約束を守るとは限らない。ターチェンの出生など、この開戦の口実に使っているだけなのだろうし。

だが開戦してしまえば、数万という尊き命が奪われる可能性があるのだ。

「みななもの。静かに」

ターチェンは努めて厳かに口を開く。決して大きな声ではなかったが、あれほど激しく激論を交わしていた部下たちが一斉に口を閉ざし自分の次の言葉を待っていた。

「一刻の時間がほしい。すこし、俺は席をはずさせてもらう」

そう言って、付いて来ようとする側近たちを無理やりその場に待機させて自分の居室に戻った。

ターチェンが部屋に入ると、そこで控えていた侍女や小姓たちが次々と寄ってくる。彼らに一刻だけこの部屋で長考するので、緊急時以外は何人も近寄らないようにと命令する。

出て行ったのを確認したのちに、ふうと息を吐きながらベットに

腰掛けた。

その時にはじめて部屋に一人の強面の男性がこちらを見ながら立っていることに気が付いた。思わずそばにあった剣を持つがその姿をみて緊張を解く。

まず眼にひくのが珍しいオッドアイの瞳である。右は深紅で左は濃い青色をしている。色違いの瞳が存在していることは知っていたが、この彼以外の者を見たこともない。

髪は黒く軽く刈り上げられている。体つきは軍人であろうと容易に想像できる大柄である。強面な顔立ちをしているが瞳には見透かされているような超越した輝きがあり、向き合っているだけでなんともいえない気分にならせていた。

彼が人間ではないからだろうか？ターチェンは彼が人間でないことは気が付いていた。なぜなら幼い頃から随所で姿を現す彼の姿が20年以上も経っているのに初めて会った時から一向に変化がないからだ。

精霊なのか？だから人一倍気配には敏感なターチェンが、姿を確認するまでいることに気が付かなかったのだと思う。とは言ってもターチェンには彼が何者でもよかった。なにかの節目には自分に姿を見せて話を聞き、アドバイスをしてくれる。それは決して彼の意見の押し付けではなく、自分の考えをまとめる手助けをしてくれているのだ。

「セント。あなたはほんとうに俺が悩み苦しんでいる時に姿を見せて下さります」

もう誰に対しても使わない敬語でそう言いながら、なぜココに自分が一刻だけ悩みにきたのか気付く。

名前しか知らないこの青年が現れてくれるのを、心のどこかで期待していたからだ。

「久しぶりだな。ターチエン。お前の心の揺れを強く感じたが、これから開戦することになるのか？」

セントと呼ばれた20代半ばの青年は、ターチエンが王であると知っているにも関わらず、その王が敬語で話していても、普段どおりの口調で話しかけていた。開戦と言われて彼が事情をよくわかっていることに気が付く。

いつもそうである。こちらが説明する必要もなく誰よりも事情を把握していた。時には自分が知らないことまで教えてくれる。

「俺が死んでどうこうなるなら降伏もありですが、そうはならないでしょう。ですが、民には犠牲者を出したくない。どうすればいいか検討もつかない状態ですよ」

「民に犠牲者はでないようにするのがお前の生まれながらの役目だ。俺がお前を見守り続ける理由もそこにある。今回の戦はお前だけでなくこの世界の今後に大きく関わることになるだろう」

いつも自分の前に現れるセントという精霊は、このように予言のようなものを自分に告げてくれる。そしていつもその通りになっていた。だから無条件で信じられる。

「思うように足掻けばいい。今まで数多くの戦略をお前に与えてきただろう。それを活用すればいい」

この精霊は、なぜか自分の前にだけ幼い頃より現れて、他の高尚な教師や武官などが持ち合わせないような戦略方法や武芸を指南してくれた。今の自分があるのもこの精霊のおかげであるとはつきり言える。

「感謝します。おかげで迷いが消えました」

ターチェンそう言うと、師匠と慕う精霊に今では誰に対しても下げることはない頭を、一振りだけ垂れてから颯爽と部屋から退出した。

「・・・大きくなったものだ。平穩をもたらす王として定められし子よ。此度の戦でその宿命が開かれていくだろう」

セントと呼ばれた青年はその場にしながら、王がさきほどの王座の前に立ち開戦の決断を部下一同に告げる様子を頭の中に映し出し、わが子を見るような優しい瞳で見ながらそう小さくつぶやいた。

50・平穩をもたらす王として定められし子（後書き）

とうとう50話目です。早いものですね。

次回もこのターチェン視点で話は進みます。

51・ターチェンの細道

もうここまでか。

ターチェンは迫り来る落石に混乱している部下たちに逃げる道を誘導しながらもそう感じていた。

開戦してから1ヶ月。なんとか色々な策を駆使して5倍以上の兵力差の中、同じ兵力になるまで奮闘した。

しかし、軍の核である自分の軍が通る細道に落石を仕掛けられて大打撃を受けていた。これがかなりの確率で、身内の裏切りであることは容易に推測できた。まだ敵が入り込んでもいない自国の中心部で落石が起こるのだ。ここまで大規模な落石にはそれなりの手がいる。さらに自分が通る道を正確に把握しなければいけない。

しばらく逃げ道をなんとか探して進んでいたが、ついにその歩みを止めなければいけなくなる。前の道に崖崩れのようにして石や木が倒れかけていて、通れなくなっているのだ。後ろからは落石が迫ってきている。もう袋のねずみ状態だ。

思わず唇を血が滲むまで噛み、心のたよりである師匠に問いかけてしまう。

セント！俺たちの命運はここまでなのですか！こんな裏切りで俺にここまで付いて来てくれている部下たちを失わなければいけないのですか！

その問いかけに答えるように一つの厳かな声が聞こえてくる。

『このような処でおまえを失うつもりはない』

次の瞬間、迫り来る落石がすぐそこにある軍の最後部に、思わず眼を閉じてしまいそうなほどの光が出現する。

よく見るとそれは青年の姿をしていた。ターチェンには背を向けた状態だったが、それが師匠であるオッドアイの精霊であることはわかっていた。

「セント！」

そう叫んだがその声は、落ちてくる石が木っ端微塵に打ち砕かれる激音に打ち消された。光の塊である青年に触れると同時に石が細かく崩れ落ちていくのだ。

崩れた岩だった土がその場に積み重ねられてやがて壁となる。

その光景をターチェンだけでなく周りの部下たちもただ息を飲みながら見ていることしかできなかった。

ゆっくりと光に包まれている青年がこちらを振り向く。

その表情はいつも現れてターチェンに話しかけるとときとまったく違っていた。何度も会っている自分すらも隠然たる力で畏怖させ、周りを威圧している。この表情をみて自分が今まで彼に対して大きな勘違いをしていることに気が付いた。

この御方は精霊ではない。精霊よりずっと崇高な存在であろう。思わず、馬上から飛び降りて膝を折り頭を下げる。回りもターチェンに習って同じようにしていた。

やがて光の中心の青年はターチェンに手をかざしながら声をかける。

『ターチェン。己の志をつらぬくがよい。そうすることで平穩をもたらず王となるだろう』

その言葉を聴いた瞬間、身体からみなぎる力が溢れてきた。同時に周りから大きな歓声が起こる。

「セント。今、分かりました。あなたは戦神オリセント様だったの

ですね？」

ターチェンがそう言うつと、その光の中の青年が肯定するように口元をあげて笑みを浮かべる。

『お前がその心性を汚さずに持ち合わせている限り、我は見守ることを誓おう』

目の前の戦神はそう言いながら空を見上げたかと思うつと、徐々にその姿を光ごと拡散することく消していく。

『フウカが祝福をしてくれるそうだ。ありがたく受け取るがよい』

消えてしまふ瞬間にその声が頭に鳴り響く。

それと同時にその場にいた者全てが一瞬暖かい光に包まれる。その後すぐに身体から痛みが消えさる。右腕の止血している大きかった傷すらも塞がっていた。周りの者も見渡す限り怪我が癒されているのか人に抱えられていた者まで立ち上がった喜んでいた。

フウカとは十数年前に誕生された癒しの女神の名前だったことを思い出す。

二人の神から僥倖な祝福をこの身に受けたことに、心から感謝を述べる。

部下たちもこの僥倖に立会い、興奮冷めやらぬ様子で目の前の障害物を除ける作業を続けていた。そのおかげで瞬く間に道は開通し絶体絶命であった場から脱出することができた。

これによりターチェンたちに勝利が確定し、やがて戦争を仕掛けたはずの大国すら飲み込んで大陸の中でも壮大な大地を彼が支配することとなるのはそれより二十数年後である。だが、その始皇帝となったターチェンは征服したはずの民や土地を蹂躪することもなく、自治をそれなりに認めて土地の開墾や治安に力をいれていった。そのため民には抵抗されることも少なく帝国の一部になることを受け入れていった。

どの歴史の書物にもターチェンの名前が大きく取り上げられており、一部には戦神オリセントの御子と書かれている書物まで存在している。

その始まりとして落石によって絶体絶命になり戦神オリセントの奇跡によって助かった一場面は、演劇や歌劇として数多く演じられることとなる。さらにその細道はターチェンの細道と名付けられ名所として、観光地に発展することになるのは約百年ほど先のことがある。

51・ターチェンの細道（後書き）

すこし短くてごめんなさい。

セント精霊Ⅱ戦神オリセントってみんな分かりましたか？次回はほとんど出なかったフウ力視点です。

52・守護神不在の代償（前書き）

前回の戦いのフウカ視点です。

あの時姿を現さないだけでその場にかけていました。

52・守護神不在の代償

あ、あれ？

私はいままで感じたことのない胸騒ぎを覚えてベッドから上体を起こした。

なんだろう？どこかで私を呼んでいる。だれ？

今すぐ行かないと。

そう思うと同時にあたりが一転する。

ほとんど無意識に跳んでしまったようだ。

頬に強い風を感じる。その風はひどく血の匂いを含んでいた。

「人間界？」

この周りの気は神の国ではなく人間界であることを知らせていた。まだ地上からだいぶ上のほうを飛んでいたので、ゆっくりと下降していく。

段々、見えていく地上。

その中で一際目立つ大きな光を感じていた。

あ、あの気は・・・。

「オリセント？」

馴染みある気を感じて思わず安堵するが、戦神である彼がそこにいるということは戦場であることを思い出して、気を引き締めた。近づいていくと、山と山とで囲まれた下り坂の細道に100人ほどの人間が、馬に騎乗しながら進んでいるのが見えた。そのすぐ先

で山のほうで50人ほどが大きな岩を積み上げて待ち構えている。さらにその先は木や岩を積み上げられて通れなくなっている。

空中から見るとどのような状況なのか一目瞭然だ。おそらくその道を通ろうとしている軍に落石を落とすつもりだろう。細道をわたる軍隊は警戒もすることなくそれなりのスピードで進んでいる。

「あ、だめ！」

止めようと下降していくが間に合わずに無情にも大きな岩は上から大量に落とされた。100人の軍隊は慌てながらも先頭で指示している者に従い、最小の被害でその場を切り抜けようとしていた。しかし、先の作られた行き止まりによりとうとう袋小路になってしまふ。

このままでは落石にやられるしかない状態になっていた。

私は癒ししかできないから、みんなが怪我する前にふせぐことができない！

それでも何かいい方法がないか頭の中で模索するが思い浮かばない。

そのとき、心によく知っている声が頭に響いてきた。

『俺がなんとかする』

それは戦神であるオリセントの声だった。落石が転がり落ちてくるすぐ側にオリセントは降り立つ。

光の中から現れた彼の姿は、人間たちにも見えているようだ。その証拠にいままで慌てふためいていたのがうそのようにその場に立ち竦んで彼の方向を見ている。

「このような処でおまえを失うつもりはない」

そう言いながらただ、その場で立っている。迫り来る落石はオリセントの身体に体当たりするとすぐに木っ端微塵に粉碎され、その岩だったものが積み重ねられて壁になった。

いくら他に手段がないからといって自分の身体を犠牲にして受け止めるなんて・・・。

私はただ静観することに耐えられず、オリセントに近づいた。だが、オリセントはこちらを向かずに人間たちを見つめていた。

人間の1人が先だって馬上から飛び降りて膝を折り頭を下げる。それに習って周りの者も我先に同じようにオリセントのほうに頭を下げていた。

「ターチェン。己の志をつらぬくがよい。そうすることで平穩をもたらす王となるだろう」

オリセントは一番に跪いた青年に温かい眼を向けてそう言った。私はその青年に眼を向ける。

30歳ほどの青年だが体つきも軍人らしく均整がとれており、顔つきもそれなりに端麗な容姿をしている。さらに一目で人をひきつけるような意志の強い瞳の輝きをしていた。

オリセントがそう宣言すると歓声が沸き起こる。

「オリセント。私、彼らに癒しを送るわ」

戦神であるオリセントがターチェンと呼ばれる青年に気をかけてるのがよく分かった。せつかく来たのだし、あと私ができることは癒しを与えることだけなのでそう提案する。もちろん、オリセント

にだけ聞こえる声でだ。

そうすると、戦神は少しでも私のほうを振り向いて笑みを浮かべてから、もう一度ターチェンに視線を戻してこう言った。

『フウカが祝福をしてくれるそうだ。ありがたく受け取るがよい』

そう言ってくれたので遠慮なくその場にいる者全てに癒しの気を送る。この前とちがって100人程度なのでそれほど疲れは感じない。

気を送り終わるころにはオリセントが私の側に飛んできていた。人間に姿をもう見せてないようであれもこちらを振り向いたりしていない。

「来てくれたんだな、フウカ。たすかったよ」

オリセントはそう言って私に腕をのばそうとする。私は無言でその腕を引っ張りあげて腕をめくる。

案の定、落石を受けた左腕はひどい内出血ができている。

身体の上の倍以上の迫りくる岩を身ひとつで受け止めて、粉碎したわけだからまったく大した事ないのかもしれないけど、こんな無駄な止め方なんてみたくない。

この体にこんな傷を残したくない一心でそつと撫でるように触って気を送ることにした。みるみるうちに腕から赤みがひいていく。

「ターチェンたちの傷を治してくれてありがとう」

オリセントは自分の傷が癒えたことよりも、さきほどの人間たちの傷を癒したことに感謝を述べる。

「ターチェンってさきほどの？」

「そうだ。俺はあいつがこの人間界に平穩をもたらす王になると思っているんだ」

たしかにあのカリスマ性と一見でわかる善良な魂は、すばらしいものだと分かる。

その上、戦神であるこの青年が身を挺してまで守っているのだ。

「でも、いくら身体が丈夫だからって身で受けるなんて・・・」

思わず私は本音をつぶやいてしまう。神の体は頑丈であるとは聞いたけれど、それでも傷が付かないわけではない。

オリセントを見上げると、すこし苦笑したような表情をしながら私の頭をなでた。

「守護の神がない以上、これしか方法がないからな」

この言葉にオリセントが今までずっとこの方法で人を守ったりしていたことに気が付いた。

早く守護神を産みたいと本心からつよくそう思う。同時にこの目の前の心優しい男性を身体だけでなく、心まで癒してあげたいという気持ちがわいてきた。

そつと自分から彼の大きな手を握る。いきなりの私の行動にすこし眼を見開くが、すぐに彼のほうからも手を握り返してくれた。そこから伝わる彼のぬくもりが私の心まで温めてくれているように感じる。

「フウカ。戻ろう」

オリセントは手を繋いだまま、もう片手を私の腰に回して抱きかかえて瞬間移動をした。あたりの景色が一転して、オリセントの部

屋に連れられていた。

53・気の交わり（前書き）

しよっぱなからR15です。ご注意ください。

53・気の交わり

オリセントの部屋についたが、オリセントは私の身体を放そうとせずに抱きしめたままだった。

不思議と私も彼に抱きしめられていることが心地よく、気が付いたら黙って彼の身体に軽く手を回していた。

「フウカ・・・」

私は耳元ですこしかすれた、それでいて艶っぽい声で呼ばれて身体が思わずビクンと身震いをしてしまう。

「もし、ダメなら遠慮なく言ってくれ。お前から拒否してくれないと俺は止めることができそうにない」

すこし眉間に皺を寄せながら、私の額やおでこに軽い口付けを何度もどこしてくる。すぐに唇を奪わないのは私の意思を確かめるためなのか。

いつも流されるばかりで、意思を言えなかった私。でも、今回は違う。

そういう意思をこめて、そつと彼の両頬を手のひらで包み込んでゆつくりと唇を彼の口元に近づけていった。

触れるだけの口付けをする。

離れようとした途端に、彼は私の頭を大きな手で抱え逃さないとばかりに私の唇を彼の唇で覆ってきた。

頭を固定されているために動くこともままならないままに、深く交じり合うような口付けをされる。

気が付いたら口付けをされたまま彼の大きなベッドに寝かせられていた。

長い口付けが外されて思わず熱い吐息が私の口から漏れる。

オリセントが優しい手つきで、服の上から身体をなでている。同時に顔を私の顔の下に沈めて、首筋から鎖骨にかけて何度も軽く口付けを施していった。

だがそのまま行動をエスカレートしていかにいったん、動きをとめて上から横たわっている私に顔を近づけて聞いてくる。

「フウカ。きちんと答えてくれ。このままお前を抱いてもいいか？」

そういうオリセントの表情はすこし切羽詰っているように険しい表情をしていた。

私は言葉に表すことができず、でもきちんと意思表示したくて肯定の意味で頭を上下に振る。

心まで癒してあげたいと思ったときに、オリセントに向き合うことができると感じたのだ。

オリセントは私の意思を汲み取って、小さくありがとうとつぶやきながら自分の上着を脱ぎ捨てる。

そこから出てきた均整のとれたすばらしい体つきに思わず息を飲む。

だが、その身体にはあちらこちらに傷あとが残っている。それが今まで彼が使命を果たすために身を削った痕なのだと思うと、早く彼のそばに来れなかった自分に対して、どうしようもなくジレンマを感じてしまう。

私がいっと彼の身体を凝視していることに気が付いた彼は、左のわき腹にある一番大きい傷跡に触れる。

「ああ。見苦しかったか？だが、もう別に痛くもないしわざわざ治さなくていいぞ」

オリセントは全て治したいと思っていた私に釘を刺すように忠告

する。

「この傷跡はいままでの人間界の戦場の激しさを現している。それなのに俺だけが今更傷一つない身体になるわけにはいかない」

なぜ彼がそう望むのか分かって、余計にその数々の傷跡が痛々しく感じてしまう。

治すことができない代わりに彼が触っていた一番大きな傷跡に、気を送ってしまったように注意しながらそっと口付けをした。

オリセントはそれをただ静かに受け止めた後、再び深い口付けをされる。私に触る手も徐々に大胆になりじかに身体に愛撫をほこしていった。

長い時間をかけて私の身体をほぐしていき、やがてゆっくりとオリセントと私は一つに結ばれた。

人間の時は数少ないなりに経験があつたのだが、身体が変貌を遂げたせいで初めての時とおなじような痛みがあり、その証拠として純潔の血がシートを汚す。

予期しなかった痛みに思わず自分の意思とは別に、目じりから涙があふれ出るがとめることができない。

「すまない。強引にしすぎたか？」

オリセントは動きを止めてその涙に口付けをしながらそう聞いくれる。

「大丈夫よ」

充分すぎるほど優しく気を使いながらしてくれたのは分かっているのに、頭を振って否定した。事実痛みがなくなったわけではないが、痛みよりのオリセントに抱かれ包まれることに、得もいえぬ心

地よさを感じてしまう。

「ゆっくり動くから」

オリセントは私の息が整うのを待ってから、ゆっくりと腰を動かし始める。それにより人間の時にはありえなかった身体だけでなく、神としてのお互いの心と気が混ざり合うような感覚に酔いしれながら、その至福の時間を過ごすことになった。

気が付いたときには部屋も彼の部屋から移動して、私のベッドに寝かされていた。隣ではオリセントが私の身体を抱きしめながら目を閉じて熟睡している。彼も私も身なりが整えられていて、私の身体はもうすでに清められていることに気が付いてすこし恥ずかしく感じてしまう。

オリセントがやってくれたのかしら・・・。

おそらくオリセントのベッドにはシートに血が付いてしまっていたので、それでこちらに移動したのだろう。抱かれている最中に意識を手放してしまうなんてね。

とうとう、オリセントと一線を越えてしまったわ。

彼の腕の中でその寝顔を見ながら、さきほどまで激しく愛し合った場面を思い出して1人顔を紅くする。

うん。こうなって後悔はない。今ならオリセントのことが好きだとはっきり言える。

使命と言われて自分でも受け入れようと、言いきかせた部分があったわけではないけど、この青年に今抱きしめられて嬉しいと感じているのだ。

もう一度寝顔をみようと言顔を上に上げると私の視線と、愛おしうにこちらを見ている赤と青の色違いの瞳とぶつかりあった。

「お、起きていたのね」

恥ずかしくて思わず眼をそらしながらそう聞くと、オリセントはくすつとかすかに聞こえるぐらいに笑う。

「ああ。身体は大丈夫か？」

彼はその状態のまま私に気遣ってそう質問してきた。気だるさはあるが、それほど深刻なものではない。

「うん。優しくしてくれたから・・・」

そう言つとオリセントはベッドの中で私を抱きしめる腕にすこし力を込めながら、意外なことをつぶやいた。

「まさか初めてで授かるとはな・・・」

え？授かる？

そう言われて初めて自分の気の違いを悟った。気の色が混ざっているのだ。クリーム色にうすい透明がかった黄色である。まだかすかにだが前に見たダリヤの気と同じようになっている。

もう妊娠したの？

使命といわれたことの達成に対する安堵より、早すぎるこの展開に戸惑いを感じてしまう。

「こうしてフウ力を抱きしめて寝れるだけで俺としては充分ありがたかったのだが」

オリセントはすこし照れくさそうにしながらも、表情は今まで見たことも無いほどうれしそうだ。

「やはりそれだけ守護の神がこの世界に求められていたってことだな。これほど嬉しく思うのは、お前が誕生して以来だ」

「ありがとう」

やはり、自分の誕生も今回の授かりもこの戦神は大いに喜んでくれていたのだと分かって、嬉しくて心からお礼を言う。

それに対して答えるように、オリセントは私の頭、額、頬と順番に口付けしたあと、唇にも触れるだけの優しい口付けを施していく。私はしばらくの間頭を撫でられ、オリセントの大きな身体に包まれながら、満たされる気持ちで再び眠りについた。

53・気の交わり（後書き）

R15ってこの程度はOKでしょうか？他の小説をみても様々なのでどれぐらいかわかりません。

54・恋人たちの初めての朝（前書き）

最初はゼノンの部屋での場面、後半はフウカ視点です。
ころころ変わってすみません。

54・恋人たちの初めての朝

！！

ゼノン は睡眠中であつたが、気の変化を感じて眼がさめた。

人一倍気の変化に敏感である彼は、微妙な気の変化であつても起こされることがたびたびあつた。

「この気は・・・」

1ヶ月前に感じたことのある気の変化だったので、それが何を意味しているのかすぐに分かる。

新しい神の誕生。いや、まだ生まれてないので正確には誕生の予兆と言うところか。つまりは自然に生まれる形ではなく女神の1人が妊娠した形だ。

「・・・フウカか」

気の種類を探ったことで正確にその女神がだれかわかつて、少し複雑そうな表情になる。

最高神と並ぶ地位にある閻神としてはあたらしい神、それも間違はなく守護神の誕生は一番望まれていただけに喜ばしいことだと思える。

しかし、ゼノン個人としてはやはり好意を寄せている彼女が、他の神との子を授かると言うことに対して嫉妬心を覚えずにはいられない。たとえ、それが必須であると知っていたとしてもだ。

少し考え込むように頭に手を当てていると、空間がゆがみ自分の片割れが姿を現す。

同じ顔をした金色の髪的青年が、眉間にしわを寄せて苦悩の表情

でこちらをみている。

「ゼノン・・・」

その表情をみて、彼も癒しの女神の妊娠を気で悟って自分と同じような心情になっているのがわかる。

「ええ。フウカとオリセントが結ばれて無事、妊娠したようですね。定めどおり守護の神の誕生でしょう」

ゼノンはレイヤが言いにくそうにしていることをはっきりと告げた。

「そ、そっか。俺はお前ほど鋭くないから確かめにきたんだ」

レイヤはそう言うとき大きくひとつ大きなため息を吐く。

「ああ。これが必要なことは分かるし、神の誕生、それも守護の神の誕生は喜ばしいことだ。自分がフウカの相手になれないのはものすごく悔しいがな」

レイヤは自分の金色の髪を右手で乱暴にぐちゃぐちゃにしながらつぶやくようにそう言う。それは目の前にいるゼノンに言うというより自分に言い聞かせている感じだ。

「ええ。正直、思っていたよりこの状態はきついですね」

ゼノンもレイヤに本心を言う。おそらく同じぐらいには彼女に心を奪われていただけに、彼の悔しさはよくわかるのだ。

だから、自分自身に言い聞かせていることを彼にもつげること

した。

「ですが無事守護神が誕生すれば、後は遠慮なく口説くことができると前向きに考えましょう」

いつまでも生まれなければ、やはり使命を受け持っているだけにフウカはこちらを見向きしようとはしないだろう。彼女の性格から言って逆に避けようとするはずだ。その分、オリセントとの繋がりがどんどん深くなってしまふのをただ見守っておくしかない。

だがこうして生まれてしまえば使命から解放されるので、オリセントに遠慮する必要がなくなる。まあ最初から複数の恋人を持つことを許されている神の国の常識ではなく、一夫一婦制の考えがあるようなので手ごわいだろうが。

「そうだな……。とりあえず、守護神が生まれることを待つしかないな」

レイヤはそう言いながら、手を振って姿を消した。

部屋に残されたゼノンはすぐに寝る気にもなれずに、気を紛らすために寝室の隣にある執務室の机に向かい、昨日中断していた仕事の書類を手にとった。

私は頬に柔らかい感触を感じて、ゆっくりと瞼をあげた。

目の前にすこし強面の戦神が機嫌よさそうにこちらを見ていた。その色違いの赤と青の瞳はやさしい輝きをしている。

「オリセント・・・」

さっき頬に感じたのは彼の唇だと悟って、思わず感觸の残る頬に手を持っていく。ずっと寝顔を見られていたのかと思うと恥ずかしくなったのだ。

私はとりあえずベッドから上体を起こしたがその瞬間、体中から気だるさを感じて思わず動きを停止した。

「おはよう、フウカ。身体は大丈夫か？」

オリセントも同じように上体を起こして顔を近づけてきた。

「す、すこし、気だるいけど大丈夫・・・」

私は今度は慎重にベッドから立ち上がった。

「あまり無理しないでいい。今日はゆっくり休んでもいいぞ」

そう言われて少し考えてから頭を左右に振る。レイヤたちに報告しなくてはいけないと思うからだ。

だが、そう言うオリセントはすこし考えるようになしぐさをしながら首を左右に振った。

「いや、俺が報告しておく。レイヤやゼノンも気持ちちが落ち着いてからお前の前に姿を現すだろう。フウカから姿を見せるよりそれを待っているほうがいい」

そう言われて頷くしかなかった。レイヤは告白してくれていた。ゼノンも口説くと言ってくれていた。そんな二人に自分からオリセントと恋人になって妊娠しましたとは確かに言いにくいし、彼らと

しても私からは言われたくないだろう。

たとえ、神として必要なことであると分かっているとしてもだ。オリセントと守護神を産むのが使命であると分かった時、レイヤが私に対してそっけない態度になっていたのを思い出して、彼らのほうから近づいてきてくれるのを待つのがたしかにいいかも思いなおした。

せめて守護神を無事産むまでは、私から会いに行くのはやめておこう。

「うん。おねがいします」

じゃあオリセントに報告はお願いすることにして、私はやはり休んでいたほうがいいのかと考えていたが、ふと行きたいところを思いついた。

「あのね。私、妊娠したと言われても神の妊娠の間のことなにもわからないの。だから、ダリヤ姉さんにいろいろ教えてもらいたいな」

この前、ウリュウの誕生に立ち会って私の常識とは大きくかけ離れていると思ったのだ。だって1週間でお腹も大きくなることもなく、突如気が分離して人の形になったのだ。妊娠中の過ごし方などまったく未知である。

「ああ。それがいいな。俺も一緒に行って話を聞きたいが生憎仕事が入ってしまったから、せめてダリヤの部屋まで送ろう」

「うん。お願い」

私は正直分らない状態で自分で瞬間移動する勇氣はないので、その好意に甘えることにした。

「フウカ。仕事がないときはできるだけ一緒にいてもいいか？できれば俺も誕生に立ち会いたいのだが・・・」

待ちに待った守護の神の誕生だから立ち会いたいという気持ちは十分わかるので、肯定の意味で頷く。

そうすると、本当につれしそくに瞳を細めながら軽く私に口づけをしてきた。

その自然な動きに今更ながら恋人になったんだなって自覚した。

「とりあえず朝の身支度もあるだろうし一端部屋に戻っておくから、終わったら声をかけてくれ」

オリセントはそう手を振りながら言い、部屋の扉から退出していった。

54・恋人たちの初めての朝（後書き）

甘い話書くの苦手ですが、それなりに甘くなっていますか？

55・神の妊娠は筒抜けです

朝の身支度と言われて、二人の侍女の存在を思い出す。

そう言えばいつも私が目覚めると同時にノックと共に入ってくるのに今日は来なかったのは、もしかしなくても今の私の状態を把握しているからだろう。

精霊たちは気の変化に鋭いと言う。つまり、今の私の妊娠のこととかは私が知らせるより前に精霊も精霊の上司である神たちも感じているってこと？ さつきオリセントはレイヤとゼノンに報告と言っていたけど、もう彼らも報告する前に気が付いているはずよね。そう考えだすと思わず顔を両手で覆ってしまう。

な、なんか恥ずかしい！

そう思っているところに、すこし遠慮がちに扉をノックする音が聞こえる。

おそらく、ノアとセレーナだろう。

普通に接すればいいのね。普通が一番！

覚悟を決めるように唾を飲み込んでから返事すると、思った通り二人がいつもより慎重に部屋に入ってきた。

「フウカ様。ご懐妊おめでとうございます」

二人は私の目の前で大きく頭をさげて声を揃えてそう言う。やはり、筒抜けのようだ。

「あ、ありがとう」

私はこれ以外の言葉が見つからずに簡潔にお礼を述べる。

「おそらく、守護の神様であろうとお話を聞きました。本当にお目出度いことです」

「今一番望まれている守護の神様ですもの。私もうれしいです！今、精霊たちも神様方もこの話題で持ち切りですわ」

セレーナもノアもそう言って笑顔で祝福してくれた。おそらく彼女たちは自分たちの上司であるゼノンやレイヤとそうなることを望んでいただろうに、そんな雰囲気をもったく見せずに心から喜んでくれている。

「二人がそう言うてくれるのは、本当にうれしいの。ありがとう」

私も心からの感謝を二人に述べる。そうすると、二人ももつとうれしそうな笑みをかえしてくれた。

本当にこのふたりがそばに付いててくれてよかったなと、改めて思うことができた。

それからいつも通り髪を整えてもらい、服を着替える。贈り物ではなく、この前作成してもらったワンピースを持ってきたので純粋によかったと思う。

さすがにオリセントとこういう関係になっていながら、他の人からの贈り物を着るような真似はしたくない。

食欲はあまり沸かないので、飲み物だけ済ます。妊娠してるからと言うわけではなく、気持的に食べるより早く行動したいのだ。

そう言えば、ダリヤ姉さんの都合も聞かないとダメよね。

みんなみたいに心の中でお話するのってどうすればいいのかな？

とりあえず、試しに心の中でダリヤを思い浮かべながら姉さんと小さくつぶやく。

『あら。フウカちゃん。心声できるようになったのね』

あ、つながった。いつもながら本当になんでも簡単にできちゃうな。言われたように制御はダメダメだけど。

『姉さん、おはようございます。できれば今日ちょっと相談したいことがあるんですけど・・・』

『フフ。そうくると思ったわ。朝一から時間あけてるわ。今からでもそちらに行ったらいいかしら？』

私が何を相談したいのか十分分かっているような言い方。いや、間違えなく分かっているのだろう。

『来ていただくのは申し訳ないですから、そちらに伺わしてください』

相談するのは私なので、やはり私が出向くのが礼儀だと思うのでそう言う。オリセントともそういう約束になっていたし。

『律儀ね。別にかまわないのに。でも、分かったわ。ラー茶用意して待っている』

お願いしますと私が言ったことで心声の通信は切られる。

本当に神になったら呼吸するのと同じぐらい、ごく自然にいろいろなことができるもんなんだなって、今更ながら感心した。

今度はオリセントに声をかける。連れて行ってもらう約束をしたからだ。待ってくれていたようにすぐに跳んできてくれてその後、ダリヤの居室まで運んでくれた。

「いらっしやい！フウカちゃんにオリセント」

扉をノックすると、勢いよく開けられたかと思うと部屋の主である大地の女神が、笑顔で迎え入れてくれた。今日は部屋にジューンもウリユウもいないようだ。

「まずはおめでとう！お二人さん」

ダリヤは案の定、妊娠を悟っていたようでお祝いを口にしてくれる。相手がオリセントであることにも顔色一つ変えることない。

「ありがとう、ダリヤ姉さん」

私がお祝いに対してお礼を述べると、笑みを深めながら私の背中を軽く押しながら部屋に誘導してくれた。続いてオリセントにも部屋へと促すような視線を送るが、彼はかるく頭を振る。

「ダリヤ。悪いが俺は仕事が入っていて一緒に話を聞くことができないにないんだ。だからここで失礼するよ」

「あら？それは残念ね。後から来るジューンが貴方とぜひ話をしたいって言っていたのに・・・」

ダリヤは口では残念と言葉にしていながらひどく楽しそうな口調でそう言う。それに対してオリセントは苦笑いでかわす。

「もし話より仕事のほうが早く終われば、顔を出すことにするから

許してくれ。フウカも迎えにこないといけないしな」

オリセントは私の名前を出したところから少し私の顔を見ながらそう言う。その表情は本当に珍しいほど優しげだ。

「あらら？ほんと、あの堅物の戦神がとろけそうなほど甘くなっているわね。ウフフ。ビュアスあたりがみたら本当に楽しそうにするでしょうね」

ダリヤもオリセントの表情に思わずからかわずにいられないように、愛の女神の名前を出しながらそう言う。一度会ったことがあるだけの妖艶な美女の顔を思い出す。愛の女神だけあってやはり恋愛のことにはだれよりも興味津々らしい。

「そういじめないでくれ」

戦神はさすがに慣れないからかいをされたせいか、その対応に困っているようで恥ずかしそうに顔に手を当てている。少し顔が赤くなっているようだ。大柄な彼のそういう姿が可愛らしくて思わず心の中で笑ってしまう。だが、それが表情に出てしまっていたようで二人が私に注目をしていた。

「フウカ……。なにがおかしいんだ」

すこし咎めるような口調でオリセントが私に問い詰める。あわてて私は謝ることにした。

「ごめんなさい。つい、照れてるオリセントが新鮮で・・・」

「あらら。ごちそうさま。本当にいい雰囲気になったみたいね。いきなりだったからびっくりしたけど、安心だわ」

ダリヤが私たち二人を見て、楽しそうに言う。

「じゃあ、俺は行くぞ。昼に戻れなければ悪いがダリヤ、フウカを部屋まで送ってやってくれ。まだ移動が不安定だから」

このままいたらからかわれるだけだと悟ったオリセントは、それだけを言いつ承の意味で頷くダリヤを確認すると手を振りながら姿を消した。

「いじめすぎちゃったかしら？・・・まあ大人気のフウカちゃんを手に入れたのだから、もっともっと色々言われるでしょうにね」
「え？」

ダリヤが小さな声でつぶやいたので、私はうまく聞き取れず聞き返してしまうが大輪のような笑顔でかわされてしまう。

「なんでもないわ。さあゝ座ってじっくりお話しましょ。なれそめとかもすっかり教えてほしいしね」

テーブルの椅子に腰かけるように促されて、私はそれに従った。その間に前と同じようにダリヤがお茶の準備をし始める。そのために一端話は中断された。

56・姉さんは興味津々

「あらゝ。そんなことがあったのね」

お茶の準備が整った途端に、ダリヤがどういう流れでオリセントと結ばれたのかもすごい迫力で聞いてくる。問われるがまま、今までの流れをざっと伝えると大地の女神はあからさまに驚いていた。

「でも、使命だからオリセントと無理して結ばれたってわけではないわよね？」

ダリヤはお互いの気持ちが結ばれないと神が妊娠することはあり得ないと分かっているながらも、思わず確認してしまう。

目の前の姉さんの信じられない気持はよくわかる。私自身、この早い展開にはとまどっているのだ。でも、彼に対しての気持ちだけははっきり断言できるので大きくうなづいた。

「うん。確かにきつかけは使命だって分かったからだけど、オリセントが好きだと自覚できたから・・・」

さすがにこうして告白するのは、恥ずかしくて私は言いながら顔を下に向けてしまう。

「フフ。よかったわ。さっきの二人の姿を見たら心配することないかなって思ったけど、事情聞いたら思わず確かめなくなっちゃって」
「いえ。心配してくれてありがとう。ダリヤ姉さん」

本当にお姉さんがいたらこんな感じかなって思う。自分が姉としての立場でしかなかったから、甘えられる存在であることが恥ずかし

いようなうれいような感じで、少しくすぐつたい。

「さて、思わず私の質問を思わず先にしてしまったけど、フウカが聞きたいことは妊娠のことについてかしら？」

ここでようやく私が彼女を訪ねた本当の目的を話すことができた。

「はい。私は人間の出産は知っているんだけど、神が妊娠したらどうなるのか、気をつけることがあるのか、まったくわからないので教えてください」

「お安い御用よ。どんどん質問してね」

こうして、先日産んだばかりのダリヤに神の妊娠についての講義をしてもらうことになった。

講義内容をまとめるところとなる。

神の妊娠期間は約1週間。

別に体型はかわらないが、気に違う色が混ざっていつてマールブル状に膨張していく。

その後、気が分離してその離れた気から新しい神が生まれる。別に身体に痛みはないが軽く倦怠感はある。

妊娠中に気をつけることは、あまり神氣を使わないようにしたほうがいいらしい。それ以外は特になし。走ろうが飛び跳ねようが、何を食べようが関係ないらしい。お酒すら別に構わない。

こんなところだ。

聞いてみてよかった。神気は使わないほうがいいのは知らなかった。だからオリセントが仕事もあるのにここまでわざわざ送ってくれたんだと気づく。

「人間みたいに何カ月もお腹に子供を入れてて、痛みを伴いながら産むのって想像しただけで凄いなって思うわ」

たしかに友達も妊娠中もつわりやら腰痛で大変そうだったし、産むときは約2日ぐらい苦しんでいたと言う話を聞くと、神の出産の楽しさにはちよつと拍子抜けしてしまう。

「でも、よく友達は産む前や産んだ時より産んだ後の世話のほうが大変だと言っていましたよ」

神はウリユウのようにほぼ成人した姿と知能で生まれてくるし、そう言う意味では育てる必要もないわけだ。

つくづく楽だと思うが、それだけ神としての役目が大切だからってことだろうと考え直す。

「そうね。人間のように幼児期はないからね。でも、その子を強くするのは親の役目ってことで今日もジューンがウリユウをひっぱって猛特訓しているわ」

ダリヤが母親らしい微笑みを浮かべながらそう言うのを聞いて、前に特訓していた洞窟を思い出す。

今日もやられているんだ。ジューンも大変かもしれないけど、ウ

リュウも服ぼろぼろになりながらがんばっていたので大変そうだったな。

「そういえば、特訓たいへんそうでしたね」

私がそう言うと、ダリヤは笑い方を母親のものからいたずらを思いついた時のような笑みに変えて、楽しそうにこう言う。

「まあリュウも失恋して落ち込んでいたから、いい気晴らしにはなっているでしょうね」

あら？いつの間に恋してたんだろう？生まれてそんなに立ってないのに早いなあ。

「え？誰にですか？」

思わずそう聞いてしまうと、ダリヤは噴きだすように笑い始める。爆笑って感じた。

聞かなかったほうがよかったかな？

しばらく笑いが続くが、じっと見つめてる私の視線に気がついて、口に手を当てながらダリヤは理由を教えてくれた。

「ごめん、ごめん。でも、本当に対象外だったのね。スタートダッシュが遅かったし、弟って言われたとか言ってたから難しいだろうなって思ってたけど、まさかここまで気がついてもらえてなかったとはね。我が息子ながら情けない」

一瞬なんのことが分からなかったけど、よくその内容をかみ砕い

てみると今更ながら理解することができた。

つまりは相手はわたしってこと？

弟とも言ったし、オリセントとこうなったわけだから失恋というのも当てはまる。

確かに恋愛対象としては見てなかった。

そのウリユウの母親に指摘されてどう言えばいいか、必死に言葉を探すが何も浮かんでこない。

「いいのよ。気にしないで。まあ何人も恋人作るって言うなら考えてあげて頂戴ぐらいは、言わせてもらっけどね」

ただでさえ、レイヤとゼノンのことを考えるとどうしたらいいか分からずにいるのに、これ以上は正直無理だ。できれば二人に対する気持ちを落着かせて、オリセントだけを見ていきたいと思っっているのだから。

そう考えているのも読まれたようですこし苦笑しながら、

「まあ。ここまで対象外ならそれも無理そうね」

「ご、ごめんなさい」

あまりにも残念そうに言われて、私は思わず謝ってしまう。

「いいのよ。だって私も……」

ダリヤはそう言いかけていきなり話を中断する。何があったのかな？そう思っただけ私は彼女の顔を伺うと、視線を天井に上げながら少し難しい表情をしていた。

「……ちよつとまって。聞いてみるわ」

小さくそうつぶやいたかと思うと、ダリヤは私に視線を移しながらこう訊ねてきた。

「ビュアスがここに来てフウカとお話がしたいって言っているんだけど、どうする？」

え？ビュアスさんが？

それほど交流のない愛の女神からの要望にびっくりするが、断る理由もないし逆に女性と親しくなるのは私も望むところなので了解の意味で頷く。

「フフ。なんでも詫びたいことがあるそうよ。まあそれよりもあなたの話を聞きたいんでしょうね」

愛の女神だから。

もしかしてまたオリセントのこととか妊娠のこととか聞かれるの？

思わず逃げたい気持ちになってしまったが、その前のダリヤの言葉に疑問がわく。

あれ？詫びってなに？

私がそう思っただけをひねっているうちに空間にゆがみが生じて、そこから妖艶な美女が現れた。

56・姉さんは興味津々（後書き）

こんなに出産が楽ならいいなあってつい思ってしまった。

書いた後に、服が『ぼろぼろ』って書くところを『ぶろぶろ』

となっているのを見て我ながら笑っちゃいました。見直して大切ですね。

57・女神たちの談話

「ダリヤ、フウカ。いきなりお邪魔しちゃってごめんなさいね」

そう言いながら現れたのは愛の女神である。

さすがにこの神の国一の美女と言っただけあって、一つ一つの動作が優雅で魅せられる。胸のあたりまである波打つような金色の髪がキラキラ光っている。まつ毛の長い大きな瞳は極上のエメラルドをふたつはめ込んだような輝きで、こちらを楽しそうに見つめていた。赤くグロスを塗ったような形の良い唇からこぼれる声も、高すぎず低すぎずで大変聞き心地のいいセクシーな音を奏でていた。妖艶な紺色のドレスからは豊満な白磁の胸の谷間がばっちり見えている。そのくせしつかりとくびれを強調しており、すらっと伸びた足が美しい湾曲を描いている。

愛の女神だけあって美を一身に集めたような容姿だ。

「まずは、フウカ。本当にごめんなさい。バカ息子のナーガが貴女にしたことは決して許されないことだわ」

そう言いながら私のほうに軽く頭をさげる。

ナーガってビュアスさんの子だったんだ。名前を思い出すだけで精いっぱいだったのでその繋がりまで知らなかった。

だから詫びってことね。

たしかにナーガに記憶を消されてしまったからいろいろあったわけだけど、そのおかげで弟にも会えたり使命も知ってオリセントとこういう関係になれたのだ。

「ビュアスさん。気にしないでください。結果論だけこうして元通りになれたし、そのおかげで色々と分かったこともあったので・

」

私は椅子から立ち上がってビュアスの近くに行き、開いている椅子に彼女を促す。彼女も素直にそれに従ってくれた。

「ありがとう。あの子にはきちんとお仕置きしたから、もうこんな真似はさせないと誓うわ」

椅子に座りながらこちらに男だと一発で見惚れて、恋に落ちてしまいそうな色気たつぷりの微笑みをみせてくれる。

「あと、おめでとう。まさか相手があのおりセントですぐに妊娠しちゃうとは、愛の女神である私でもびっくりしたわ」

そう言いながら、ダリヤ同様根掘り葉掘り聞いてきて、結局ダリヤと同じぐらい説明させられることになる。

ビュアスは使命と聞いてわずかに眉間にしわをよせるので、

「あ、でも。きちんとおりセントのこと好きですから・・・」

と、思わず赤面モノのフォローをすると隣に座っているダリヤ姉さんがいきなり私の頭を抱きかかえて頭に頬をすりすりしてくる。

「いやあゝ。やっぱりフウカちゃん可愛い」

姉さん、スキンシップが激しいです。

そう思いながらも黙ってされるがままになっていた。抵抗するほどでもないし、こういうのは彼女が満足するまで待つのがいいと思う。

案の定、すぐに放してくれて話を続ける。

最後まで説明を終わると、ビュアスはダリヤ特製のラー茶を一口飲んでから実に楽しそうに微笑みながら私に爆弾発言をしてくる。

「なるほどね。でも、フウカはオリセント一人つてのはまず無理じやあないかしら？」

「な、なんでですか？」

私は思わず反論もこめて質問してしまうが、まるでまだレイヤやゼノンにたいしての育ちつつあった気持ちを割り切っていないのを見透かされているような気がして居た堪れなくなる。

やはり愛の女神だけあってそのあたりは鋭いのかな。

「だってエダはまだそれほどではないかもしれないけど、あのレイヤとゼノンの執着を見ればね」

ビュアスはそう言いながら、ナーガに記憶を消されたあと二人がどれほど怒りをぶつけたのか教えてくれた。

そんなに怒ってくれていたんだ。私の記憶なんかいらないと思われても仕方ないのに・・・。

うれしいと感じてしまうのを止められない。

「だからあの二人は絶対諦めないだろうし、守護神が生まれちゃえば逆にオリセントに遠慮する必要もなくなるから、二人目の恋人の座を狙ってくるでしょうね」

たしかにゼノンにそう宣言されていた。

でも、やはり一夫一婦制が当たり前の世の中に住んでいたのだから、オリセントとこうなった以上はダリヤみたいに夫婦という形が当たり前だと思う。

「オリセントだけでいいです。ダリヤ姉さんみたいに一人で・・・」

今、オリセントとこういう関係になったばかりなのに二人目の恋人なんて到底考えられない。膨らまないにしてもお腹に子供がいるって言うならなおさらだ。

しかし否定したにも関わらず、目の前の愛の女神は少し目を細めて、隣の大地の女神に視線を軽く移しながら彼女のことをこう言う。

「ダリヤはめんどくさがりと、ジューンが嫉妬深いから一人でいいって話になっているだけよ」

それは聞いたことあるけど、二人は深く愛し合っていることは間違いない。しかし次の瞬間、当の本人から予想にもしなかったことにあつさりと認める発言をした。

「あらゝ。えらい言われようねゝ。まあ確かにその通りなんだけど・・・」

「え？もしジューンさんが許せば二人目の恋人もあり得るのですか？」

思わず本心から聞いてしまう。こんなことを聞くななんて失礼だと思っけど、それほどその発言は私にとって衝撃だったのだ。

ダリヤは不躰な私の質問にも関わらず、気を悪くすることなくまじめに答えてくれた。

「なしではないわ。まあゝビュアスが言うように私は恋愛に不向きだしジューンだけで十分だから夫婦ってことになっているけどねゝ」

結局はダリヤは二人目の恋人を作るつもりはないけど、別にそのことについて否定的でもないと言うわけだ。

そんなに普通のことなんだ。複数の恋人を作るって。そういえば目の前のビュアスさんには五人もの恋人がいるって言ってたっけ？

・・・やばい。

今はそんな恋愛話よりも妊娠しているのだからそれが一番優先するべきなのについて、流されてしまった。

「とりあえず、できればお二人に経験のある出産についてのお話のほうを聞きたいです」

このままだと延々と続きそうな話を打ち切るために、私は話題を変えるために質問をする。

これこそが今の一番優先すべき話なんだから。しかし愛の女神はそれに乗ってくれなかった。

「女神は数少ないのに、イザラは男嫌いだしダリヤはこんなだし、フウカには大いに期待しているんだから」

逃がさないわよ。

とまでは言葉にでてなかったけれど、愛の女神の表情が明らかにそう語っていた。

「そ、そんな期待いりません」

思わず逃げ腰で辞退を申し出るが、ビュアスはますます楽しそうな表情をしながら話を続けた。

「だって、レイヤにゼノンにオリセントにエダになってそれほど恋愛に積極的でもなかった面子が、こぞってフウカに興味持っているん

だもん。愛の女神としては少しでも神不足解消のためにも一肌脱がないとね」

・・・。

ここまで言われるとなんの言葉も浮かんでこなくて黙っていると、ビュアスはクスツと軽く笑ってからようやく私の話題転換に乗ってくれた。

「まあいいわ。この話は出産して落ち着いてからじっくりとやりましょう。今回の出産も大切なことだからまずはその話からね」

こうしてダリヤとビュアス、経験者二人から神の妊娠についても詳しく話を聞くことができた。

58・二つの想いの終焉（上）（前書き）

サブタイトル上下にしました。

58・一つの想いの終焉（上）

それからしばらく女性三人で話をしていた。主に神の出産についてだ。

お昼前になつてもオリセントは姿を見せなかったので、結局ダリヤに送ってもらうことになった。

あまり力を使わないほうがいいと話を聞いたので素直に甘えることにする。

ふう。いろいろ話できてよかった。恋愛話には参ったけど、ビュアスとも仲良くなれたし。

そう思いながら、部屋の長椅子に腰がける。そのとき脳裏の中でよく知っている声が聞こえてきた。

『フウカ。聞こえる？』

「え？エダ？」

最近あまり会うこともなかったけどその声は水の神のものに間違いなかった。

『そちらに伺ってもいい？少しでいいから』

そう言われてわずかに躊躇するが、了承の返事をした。するとすぐに空間がゆがみ透明がかった水色の長い波打つ髪を持つ少年が姿を現す。

だが、少年の表情は見るからに暗い。

「エダ？」

こちらを見てから落胆した感じなので、どうしたのか聞くこともできずに私は名前だけ呼ぶ。

「フウカ。やっぱりオリセントと結ばれちゃったんだね。おまけに子供まで出来ちゃっているし・・・」

やはりその件で彼はこの表情をしているのだと分かって、謝る以外何も言えない。

「う、ごめんなさい」

そう言うとは彼は余計に不機嫌そうな顔をする。こんな彼の表情をみるのは初めてでどうしたらいいか戸惑う。

「なんで謝るのさ。使命もあつたって聞いているし、フウカが決めたことなら僕に何も言う権利もないよ。僕はただ、自分勝手に相手が自分でないことにくやしがっているだけだから」

そこまで言うとはエダは視線を下に向けて自らの髪の毛を乱暴に掻いて、髪形をぐちゃぐちゃにする。その様子をただ見ていると、大きなため息をひとつついてからこちらに視線を戻す。

その表情はさっきとちがって眉を下げて苦笑といった感じになっている。

「ごめんごめん。いきなりつかかっちゃって。本当は純粋にお祝いを言おうと思ってきたんだ。ただ、フウカの顔を見るとどうしても悔しくなっちゃって、つい本音をぶちかましちゃった」

こちらが黙っているとエダは話を続ける。

「だってフウカ。僕がけっこう真剣に君と良い関係になりたいとおもっていたのに、気づきもしなかったでしょ？」

そう言われて思わず頷きそうになる。

冗談っぽく口説くとか言われた覚えはあるが、それを真剣に受け止めたりはしたことはない。言い訳になるが神の国に慣れることが第一優先だったし、レイヤやゼノンの気持ちもぶつけられてそれをどうするか考えるだけで精一杯だったからだ。

黙っていることで凶星だと悟られる。というよりも最初からエダは確信持って質問していたようだ。

「やっぱり。だから、フウカにとって僕は本当に対象外だったんだなって思うと悔しくてね」

そうだとも違うとも言えない。エダに湖で慰められた時に心がまったく動かなかったわけではない。あれでだいぶ癒されたのだから最初に彼が救ってくれたことも大きい。

でも、それは恋愛感情まで発展してはいないことは確かだ。

ましてやオリセントとこのような関係になったのだ。いくら複数恋人をもつのが一般的だと言われても、私自身まだそんな気持ちにはなれない。

だから、違うと否定して彼に期待を持たせるのは許されることではないだろう。私の気持ち的にきつかるうがここは黙っておくべきだ。

口を強く結んで何も言えないようにしながら、彼の次の言葉を待つことにした。私にできることはそれだけだから。

「遅くなっただけ、おめでとう。守護の神だろうと聞いたし、それが君の使命だったとも聞いているから純粋に祝福するよ」

エダは今までの表情を一転させて笑顔で私に手を差し出し握手を求めてくる。彼の気持ちに答えることもできずにいる私を祝福してくる彼の優しさに心がよけいに痛む。

おそろおそろ手を伸ばすと、エダは一気に私の手を引っ張って強引に握手する。

「そんな表情しないで。僕に悪いと思うならこれから僕好みの女神を産んでくれたらいいから。顔はフウ力似で性格はもったときつい感じが好みなんですよしく」

エダは私をからかう感じで明るくそう言う。私が動揺した表情を浮かべて彼を見ているから、わざと軽口をたたいてくれているのだろう。

「女神が産めるかわからないけどがんばるわ。本当にありがとう」

私からも握手する手に力を込めて彼の手を握る。それに対して彼のほうもすこし力を込めてから手を放し、そのままその手をふりながら姿を消していった。

本当にごめんなさい。でもありがとう。

心の中で先ほどまでいた水の神に対しての二つの思いをつぶやく。ずるいかもしれないけど、諦めると言う意味の言葉を聞いてかすかな喪失感がわき起こる。しかしそれをはるかに超える安堵感が漂っていた。

彼が無理してそう言ってくれているのは分かったけれど、それに甘んじるしか私にできることはない。彼の気持ちに応えることは少なくとも当分はできそうにないのだから。

いつか、彼の気持ちが落ち着いて今まで通り接してくれるように

なるのを待つしかないね。

私はそう思いながら、ベッドに横たわることにした。

58・一つの想いの終焉（上）（後書き）

短くなつてすみません。今回は一話に二つに視点をおきたくないのでゆるしてね。

つぎはエダ視点です。

59・二つの想いの終焉（下）（前書き）

エダ視点です。

59・一つの想いの終焉（下）

それなりに好意を持っていた彼女が妊娠したと分かってエダは愕然とした。

周りの精霊たちが騒がしく耳元でそれを告げてくる。

『癒しの女神さまが戦神さまと御子を作られたそうです。なんでも御子様は守護の神さまであられるとか・・・』

今まで誰に対しても恋愛感情を持っていなかったはずの彼女。というより女神であるということを自覚することで精いっぱい、恋愛まで気持ちが着いていない感じだった。

だから自分は好意を押し付けるのを遠慮していた。

それなのにしばらく目を離れた隙に急展開でオリセントとフウ力が結ばれていた。

確かめたくてレイヤとゼノンの様子を見に行く。

まずレイヤに会いに行く。しかし光神は心ここにあらずと言う感じで考え事をしていたかと思うと、それに気付いてあわてて書類を持ち上げて仕事に没頭としたりと挙動不審だ。これではなかなか聞き出せないだろう。

だからとなりの部屋の閻神に質問することにした。

部屋に入るとゼノンはレイヤと対照的に無表情で机に向かって仕事をしていた。自分が来ることを了承してくれたのでそのまま入ってきたのだが、こちらを向こうとせず書類と格闘している。

声をかけてフウカのことを聞くと、持っていた書類を置いてこちらを見る。口元は笑っているが目が笑っていない。

そこでひとつ衝撃の事実を告げられる。

彼女が記憶を無くした際に『守護神を産むために癒しの女神と戦神が結ばれる定めがある』と。

そんな事件が起こっていたことにも驚かされる。しかしそれなら納得できる。変に生真面目で一直線な彼女が、オリセントだけを見ようとするのは当然だ。堅物として知られる戦神のほうはもうすでに彼女に心を奪われている様子だったし、それを告げられると彼女の心が大きく動くのも安易に想像できる。

その相手が自分だったらよかったのにと、どうすることもできないことを望んでしまう自分の愚かさに失笑してしまう。

笑った理由を聞かれて正直にそう言うと、同じように苦笑いをしながらゼノンは同調してくれた。

「なにもエダだけではないですよ。私もそう思ってしまったかもしれません。でも、逆にこうして早めにその定めを終えてくれたことはよかったと開き直すことにしました」

ゼノンは話を続ける。

「生まれてしまえばオリセントだけという縛りがなくなりますから彼女の心に割り込むのは大変でしょうが、永遠と続く神としての生です。気長に口説こうと思っていますよ？」

そう言われてゼノンがフウ力をまったく諦める気がないことをエダは思い知る。となると、おそらくさっきの様子からいつて、レイヤも悩んではいるがそうなる可能性が高いだろう。

ここまで知ってエダはとりあえずフウ力に会いに行つて自分がどうするか決めようと決意した。諦めれるものなら諦めたほうが、自分にとっても彼女にとってもいいだろうと思いつながら。

フウ力が一人で部屋にしていると知って、決意を固めて会いに行く。彼女の気と表情を見た瞬間、何か重たいモノが頭の上に振つてきたような錯覚に陥った。

クリーム色のうつくしいフウ力の気に、金平糖のような透明の黄

色の気が混ざっている。今まで見ていた彼女の気も素晴らしいモノではあったけれど、これほどうつくしい色彩をした気を見たことがない。

そして彼女の表情。今までももちろん美しいと感じていたけど、今日見る彼女はまるで一皮むけたかのように艶が出ており色気のよくなものを感じる。少女が女性になった瞬間のようなものだ。その表情はとても幸せそうで、いやでもオリセントとの心の繋がりを感じさせられる。

だから思わず口から本音が出る。

「フウカ。やっぱりオリセントと結ばれちゃったんだね。おまけに子供まで出来ちゃっているし・・・」

それに対して彼女が謝ってくるが、こちらが愚痴をこぼしているだけなのだと思うとついつかかってしまった。

「なんで謝るのさ。使命もあつたって聞いているし、フウカが決めたことなら僕に何も言う権利もないよ。僕はただ、自分勝手に相手が自分でないことにくやしがっているだけだから」

言ってから後悔する。あーもう自分が嫌になる。

思った通り、彼女は自分が彼女に気持ちを持っていたことを分かっただけで済まなかった。押しきれなかった自分も悪いのだけど、ここまできると彼女にとって自分はそこまで対象外だったのだろう。

やはり諦める方向でがんばろう。自分のためにも彼女のためにも謝ってからなんとかその宣言も兼ねて、女神を産んでと要望する。これが、諦めるという意思表示だと彼女もわかってくれるだろう。それに対して言いたいこともあるだろうに我慢しながら感謝だけを口にする彼女に、手を振りながらその場を退出した。

何も言葉を発することなく消えたのは、それを撤回しそうになる

自分を抑制するためだ。

今は正直かなりきつい。

だが、自分自身これ以上彼女に魅かれて苦しい思いもしたくないし、ただでさえオリセントだけでなく、ゼノンとレイヤに気持ちをぶつけられて葛藤している彼女の負担にもなりたくなかった。

僕は彼女に言ったように彼女が産んでくれる娘の女神と、恋愛できたらそれでいいや。次は競争率高くてもひかずに最初からがんがん庄そう。今回みたいな過ちはもうごめんだからね。

沈みきつた心を少しでも浮上させるために、エダは自分の中でそう宣言していた。

59・一つの想いの終焉（下）（後書き）

諦めない者、諦める者それぞれという感じで書きたくてエダは諦める選択にしました。だってみんな諦めないのもどうかなって思うしね。少ない文章ですみません。

60・いまさらながらの告白

さて。どうしようかな・・・。

まだ夕食には時間あるし、でも今までのように教師してくれていた人のところに顔を出すこともできないし、ご飯作りする気にもなれないし・・・。

あ、そうだ。

一つ思いついたことがあって、ノアとセレーナに声をかけて要望を言うのと驚きはしたけれどすぐに用意してくれた。

それは色々な種類の糸と珠石である。

今は力を使わないほうがいいと言われたのですぐには作れないけれど、自分の身を犠牲にして人間界を守っているオリセントと、生まれてくる子のために癒しをこめた何かのお守りをあげたいと思ったのだ。

匂い袋にすると男性が持つにはどうかと思うし、どうせなら小さな珠のようなものに力をこめてそれをペンダントにしてもらえばいいかなって思う。出来合いのペンダントでもいいんだけどどうせ時間が有り余っているのだから、その珠を結ぶ紐ぐらいは作成しようと思ったのだ。

ねじり編みぐらいならできそうだ。

「何を作られるんですか？」

ノアが興味津々に聞いてくる。

「ペンダントだよ。せっかくだし、紐ぐらいは編もうかと思ってね」

私はセレーナがたくさんの種類の珠が入った箱を広げてくれているのを見ながらそう答えた。

本当に色々な種類があるんだな。すごくきれいだし。

まずは、小さめの透明がかった赤と青の珠石を選ぶ。せっかくだしオリセントの色違いの瞳に合わせて作ろうと思うのだ。

次に細長い金平糖色の物を選ぶ。これは子供にだ。気の色で選んだ。

様々なきれいな石があるので、思っていたようなものを選んで満足する。聞くとそれなりの価値のある石だけど、目が飛び出るほど高価なものと言っわけでもないようだ。

「あのう……。もしお邪魔でなければ一緒に作らせて頂いてもいいですか？」

ノアがおそろおそろと言う感じで聞いてくる。勇気を振り絞って言ったようだ。どうやら紐作りに興味があるようだ。

了承するとセレーナもということになり、急遽紐作り教室を開催することになった。

私はかなり昔に作った記憶をなんとか思い出しながら、黒色の糸を選んで編む。最初を教えてあげるとあとは繰り返しなので3人とも黙々と作業をする。

二人のようすを見ると、器用に編んでいるノアに対して意外にもセレーナは苦戦しているようだ。それでもそれなりに形になってきた。

しばらくしてそれなりの長さを編めたので、私の分は珠石を二つをさくらんぼのような形で付けた。穴があいている形なので簡単にできる。どんどん編んでいくと腕ぐらいの長さまで編むことができた。最後のしあげにできた紐の端を結びながらその出来ばえを見つめる。

出来上がりをみせると二人とも口々に褒めてくれた。

うん。これならなんとか渡せるレベルになったかな？

あとは気を送るだけだ。送ってしまいたいけれど、今は力を使わないほうがいいと言われているので完成は生まれてからになる。

子供の分として同じく黒色の色を編む。男か女かわからないし、無難な色がいいので同じ色にした。

私が二つ目を半分ぐらい作成している間に2人もできたようだ。初めての割には二人ともきれいに編めている。特にノアのは均一な網目で何度も編んだことのある私と同レベルなのは感心させられた。

「二人とも良い感じにできたね。あ、そうだ。しばらくの間それを預からせてもらってもいいかな？10日ぐらいで返すことができるとおもうから」

せっかくだし、日ごろのお礼もこめて癒しの気を込めてあげたいと思ったのだ。そう言うのと遠慮するかもしれないのであえて口にださない。サプライズにするつもりだ。

二人は素直に了承してくれて、自分が作ったものとあわせて3つを小さな箱にいれて引き出しにしまった。

私は二人が退出した後も子供の分の紐をせっせと編む。

橘風香の時は仕事が忙しくなって出来なくなっていたけれど、こういう細かい作業は好きだったのでまったく苦痛に感じられない。

うん。たまにはこういう時間もいいな。

しばらく紐作りに没頭していると心声が頭に響く。

『今からそっちに向かってもいいか？』

オリセントだ。仕事が終わったのかな？

とりあえず、道具を隠しながら了承する。せつかくだし、彼にもサプライズであげたいからだ。返事するとしばらくして彼が姿を現した。

「おかえりなさい。今日は大丈夫だった？」

私は彼の姿を注意深く観察しながらそう聞いた。彼の仕事は大部分が人間界の戦場に行くことだし、昨日の一件もあるので怪我してないか気になるのだ。

力が使えるなら一緒に行きたい。行けば癒すことができるのに・・。

つい無理だと分かっていたながらそう思ってしまう。

「ああ。今日はレイヤが手助けしてくれたから特に問題ないぞ」

そう言われて安心して胸をなでおろした。

「よかった！早く産んで手助けしたいな。力使わないほうがいいと言われると、すぐもどかしいって感じてしまうわ」

私がそう言うときオリセントはそっと包み込むように手を私の腰にまわす。彼の表情を見ようと顔をあげると本当にうれしそうにこちらを見ていた。

「やはり力使わないほうがいいのか。今日ダリヤのところで話聞け

てよかったな。だが、無理はしないでくれ。いままで長い間お前と守護神を待っていたことを考えると、1週間など一瞬でしかない」

たしかに100年以上も癒しと守護の神を待望していた彼にはそう感じるのだろう。でも、だからこそ今後はそんな目にあわせたくないのだ。戦神という名を持つには優しすぎる彼が身を犠牲にしながら、なんとか人間界の争いを食い止めようとしていたのを私はつい先ほど知ったから。

そんな私の気持ちを軽くするために、彼はそつと触れるだけの優しい口づけをしてきた。

「それに不謹慎だがフウ力をこうして独り占めにできるのは、俺として役得だと思っているから悪いけど付き合ってくれ。たとえフウ力の気持ちがあれば俺に向いてなくてもな」

オリセントの思いがけない言葉に一瞬、頭が真っ白になる。

え？私の気持ちが向いていない？
なんでそんなふうに思っているの？

私はショックを受けて思わず、彼の腕の中から抜け出る。

「フウカ？どうしたのだ？」

いきなり態度を変えた私を心配そうに彼が見下ろしてくる。

もしかして、オリセントは同情とか使命のためだけで抱かれたと思っているのだろうか？

ひどい！

と彼を責める言葉が頭に浮かぶが、同時に私が彼に対して何一つ言葉にしていないことを今更ながら思いだした。

彼が悪いわけじゃない。私が何も口に出してないからだ。誤解しても仕方ない。

私は意を決して気持ちを伝えることにした。

「あのね・・・。私、きちんとオリセントのこと好きだから。今まで言えてなくてごめんなさい」

自分から告白するのは初めてなので恥ずかしいが、言葉に出すことが大切だと思って勇気をふりしぼってそう言う。その言葉にオリセントはまったく予想してなかったようで、見たこともないほど目を見開いてこちらを凝視しながら固まっていた。

「えっと、オリセント？」

なんの反応も返してくれない戦神の態度に不安になりながらも彼の腕をつかむ。それと同時に、オリセントは一気に私の身体を自分に引き寄せる。さらにさきほどと比べ物にならないほど強く抱きしめて、むさぼるような深く長い口づけを私に施してきた。

「ありがとう。まさかフウカからそういう言葉をもらえると思わなかった。分かっていると思うが、俺もフウカのことをきちんと思っているぞ」

そう言うつと再び、唇とふさがれた。

その後二人は抱き合ったまま甘い恋人としての時間をしばらくの間、過ごしていった。

60・いまさらながらの告白（後書き）

最初ミサガにしようと半分ぐらい書いていたのですが、うちのチビがかけのぼってきてPCをぶちつと消してきました。さっきまで寝てたくせに・・・。

悔しいのでペンダントに格上げです。こうして小説は変化しますw
フウカの気持ち伝えてなかったのでここに入れました。

オリセントが自ら「好きだ」というのはキャラクター的にどうか
と思ったので、思っているという程度になりました。

恋愛モードって見るのは楽しいけど書くのは恥ずかしいです。

61・関係の修復

「こ、告白しちゃったな」

私は昨日の自分の告白を思い出して一人で赤面する。オリセントも言葉を返してくれて抱き合ってキスを繰り返したが、妊娠中ということもあってそれ以上は遠慮してもらった。いくら大丈夫と言われても私の常識としては、生まれるまではそういう行為は避けたいからだ。

結局、オリセントには部屋に帰ってもらうことになった。さすがに何もしないで一緒に寝てほしいとは言えないからだ。一人悶々していると、いつもどおり侍女のふたりが入ってきてくれて朝の身支度を手伝ってくれる。

「フウカ様。レイヤ様から伝言がございます」

ノアがそう教えてくれる。

どうやら朝の身支度がすんで時間があけば呼んでくれたところらしい。

とうとう、レイヤと話をする機会が訪れた。

ありがととお礼を言う。そして二人に悟られないように唾を飲み込みながら、自分の気を注意深く見る。クリーム色と金平糖のような透明の黄色の気が、昨日よりより一層マーブル状になっていた。これは成長している証拠なのかな？

つまりは一目瞭然で私の今の状態をレイヤは知ることになると言うことだ。

どんな反応されても私は私だ。がんばるしかないよね。

二人が部屋から退出したのを見届けてから、心声でレイヤを呼ぶ。するとすぐに空間がゆがみ金色の髪 of 青年が姿を現した。

その無表情の顔は今まで私に見せていた表情が豊かすぎる彼とはかけ離れていて、覚悟と決めていたにも関わらず動揺してしまう。

「レイヤ・・・」

思わず彼の名前を呼んでしまった。だが、レイヤはその表情を変えることなく淡々と言葉を発す。

「フウカ。よく守護神をその身に授かってくれた。この世の責任者としてお礼を言おう。戦神、癒しの神、守護神がそろうことで乱世に満ちた人間界も平穏を取り戻せるようになるだろう」

彼の言葉は最高神として威厳に満ちた言葉であり、私はそれに対しては一人の神としてありがたくその言葉を受け取る必要があると感じて頭を下げながらお礼を口にする。

「ありがとうございます」

こういう立場を彼は選択したのだろうかと私は考える。言ってみればただの上司と部下のような関係だ。正直さびしい辛いと思うてしまう。でもそう思う権利が私にはないことも分かっているので、頭を下げたまま彼の次の行動を待つことにした。

「つと。ここまでは神としての役目だ。次は俺個人の感情を言うぞ」

一転していつもの口調に戻ったレイヤの表情を窺うと、整った顔に少しだけ眉に皺をよせて真剣な表情になっている。

どうやらさきほどの私の推測は杞憂だったようだ。

「フウカ。正直に答えてくれ。俺に少しでも気持ちがあったか？」

そう言われて思わず頷きそうになる。そもそも恋愛に前向きになるうとしていたのは、初めて告白してくれたレイヤの真摯な気持ちがうれしかったからだ。オリセントとの使命がなければ少しずつではあるが、レイヤの気持ちを受け入れようとしてた。

でも、ここであえて頷くことが私に許されるのかと躊躇してしまう。

レイヤは黙っている私に対してたたみ掛けるように質問していく。

「まったく心を動かされなかったのか？俺と恋愛するつもりは微塵にもなかったか？」

「それはちがうよ！」

皆無であるわけがないと言う気持ちが抑えられずに、思わず否定してしまった。言ってしまったてから口を抑える。

言わないでおこうと思っていたのに……。

「フウカ？」

次の言葉を促がすようにレイヤはこちらを覗きこんでくる。嘘偽りは許さないとその表情は語っている。

言ってしまったことは撤回できない。私は仕方ないので正直に気持ち伝えることにした。

「あんな告白されて心が動かないわけがないよ。正直、前向きに考えようとまで思っていたし。でも、今はオリセントが好き。いくら複数恋人持てると言われても今はそんな気になれないわ。ごめんなさい」

私はきちんと断るべきだと思って必死に言葉を考えてそう言うど、

レイヤは分かっているとばかりに頷いた。

「お前がそんなにポンポン恋人を作れる性格ではないことは分かっている。だからオリセントと結ばれる宿命だと聞いてから、色々考えて諦めれるもんなら諦めようとしたんだ」

それであのそっけない態度だったのかと納得した。

「でもな。フウカには悪いけど無理だわ」

自分の首に手を回しながらレイヤは話を続ける。その口調はどうか苦笑まじりだ。

「まったく俺が眼中にないってのなら諦めもつくが、過去であつてもそうではなかったと聞いた以上諦めれないぜ」

そう言われて思わず本音を言ってしまった先ほどのことを後悔する。

だが、彼にしたらある程度確信はあったようだ。たしかにこれまでの私の態度から感じるところは十分あったと思う。口づけされても抵抗できなかったし。さすがに今それうになっても全力で拒むが。

「いきなりこつちを向けとは言わない。だが、俺はまだ諦めたわけではないと言うことだけ知っておいてくれ」

私は何と言ったらいいいのか見当もつかずにただ、無言に頷くことにした。それしかできない。

諦めないと言われても私にはどうすることもできない。

しばらく二人の間に沈黙が漂ったが、これだけは言うべきだと私は口を開く。

「今は守護神を産むことに専念したいの」

「ああ、分かっている。悪いな。産まれてから言うべきだったかもしれないが、そうなるとそれまでフウカと顔を合わせて、何もなかったかのように普通に接することなんか俺にはできない。かといって、フウカはまだまだ分らないことが多いだろうから講義を中断するわけにはいかないしな」

今まで通り授業をしてくれるということだ。本当にありがたく思う。

「ううん。ありがとう。ぎくしゃくした関係のままレイヤと接するのはいやだから、きちんと話しようとしてくれてうれしいよ」

きちんと向き合ってくれていることに喜びを感じる。ずるいかもしれないけれど、いままでどおり接したい。

「オリセントがいれば任せるんだけど、あいつは人間界に行くことが頻繁にあるからなかなか時間とれないんだ」

確かに戦神はほとんどの時間は人間界に跳んでいる。再び、傷だらけの彼の身体を思い出して一緒にいけないことを悔やむ。私の表情が一転して暗くなったのをレイヤは感じてあわててフオローしてくる。

「最近のほかの神が手助けすることが多くなっているから大丈夫だ。今日はジューンと一緒にいるしな」

私が何を心配しているのか的確に読み取ったようで、一番ほしい情報を教えてくれる。そう言えば昨日はレイヤが付いて行ってくれ

たと聞いたつけ。

「昨日はレイヤが付いて行ってくれたんだよね？大丈夫だった？」

「ああ。相変わらず最悪な争いだったけど、なんとか被害を減らすことはできたはずだ」

そう聞いて安堵する。今日もジューンが手助けしてくれているのならオリセント一人で苦しむことはないだろう。

「あいつの苦しみを根本から癒して救えるのは、フウカとその生まれてくる神しかないだろう。だからこそこういう使命があるんだと俺は頭では納得しているぞ」

レイヤはますます苦笑しながらそう話を続けてくれる。レイヤには悪いけれど、もしオリセントを癒すことも使命としてあるのなら私はうれしい。私は自分が司るのが癒しでよかったと改めて思った。それからしばらくはレイヤにこの神の国の成り立ちや、お披露目で会うことのできなかった神についてなど、いろいろな話をしてもらった。

62・生命の草原

それから3日ほどゼノンやレイヤ、オリセントとダリヤも加わって代わる代わるいろいろな事を教わり何事もなく過ぎ去った。

ゼノンにしてもレイヤにしても今まで通り普通に接してくれている。

オリセントはやはり忙しいようでそれほど時間を取れないが、一日一度は顔を見せてくれていた。

私の気は一段とマールブル状になり、金平糖のような色が強くなっていく。

もう6日目だ。1週間ぐらいってことはそろそろ産まれてもおかしくないんだよね。

今日はだれが来てくれるのかな？

そう思っていると脳裏に声がひびく。オリセントのものだ。その声のあと、すぐに部屋の空間がゆがんで大柄な戦神が姿を現す。

「おはよう」

私はそう声かけしながら、注意深く彼の姿を見る。いつもよりずいぶんラフな服装だ。

「おはよう今日は仕事が入ってないから俺がフウカと一緒にいれるぞ」

そう聞いて私は思わず顔が綻ぶ。忙しい彼だからこそ一緒にいられるのはうれしい。

たぶんにやけてしまっているだろう私の顔を見ながら、彼も楽し

そうに私の頭をなでながら聞いてくれる。

「ずっと部屋に閉じこもるのもいやだろう？どこか行きたいところはあるか？」

そう言われて少し考える。考えてみれば私はあまりこの神殿から出たこともなく、知っているとしたらエダの湖ぐらいだ。そう言われてあることを思い出す。

たしか、それぞれの神に聖地があるって言ってたっけ？だったらオリセントもあるのかな？

そのことを聞くと頷きながら教えてくれた。

「ああ。しばらくは行っていないが、あることはあるな。だが、草原だから行っても何も無いぞ？俺の武器などの保管と訓練場代わりにしているだけだから」

戦神だけあって、すばらしい景色とかではないようだ。でも武器と言われてちょっと気になることがある。

「もしかして弓矢とかもあるの？」

私自身が昔弓道をしていただけに、そういうのには興味があるのだ。アーチェリーもかじった程度だができる。

私もしたいけれどやはり今は控えたほうがいいだろう。それでも興味は消え去らない。せめて戦神であるオリセントの弓矢の引き方を見学したい。

「へんなものに興味示すな。ないわけがないだろう？」

そう言われていつにもない熱意を示して、そこに連れて行ってもらうことを懇願する。

「お願い！連れて行って、弓矢の引き方を見せてほしいな」

人間界で誰かを殺めるためでなく精神統一や礼儀を学ぶために弓の練習をしていたと告げると、戦神はびっくりしたような顔を一瞬見せる。こうして本日は戦神の聖地である『生命の草原』に連れて行ってもらうことになった。

草原というだけあって確かに何も無いが、地を埋め尽くしている草は青々と茂っていて寝ころんだら気持ちよさそうだ。草原のそばには石の小屋があり中に入れてもらうと、所狭しと数え切れないほどの武器や装具などが並べられていた。

さすがに戦神の聖地だけあるなと感心してしまう。弓矢も数多くの種類が置かれている。

その中で一番和弓に近い形のものを選んでその引く姿を見せてもらうことにした。

すごい。

想像以上に彼の美しい弓矢の引き方に思わず見とれてしまう。

さすがに戦神であるだけに、私では開くこともできないであろう強弓をいとも簡単に引いている。その姿が縦にも横にも一本の直線が身体に通っている。これほど美しい射法は初めて見る。それでい

て弓道の倍以上はありそうな距離に置かれている小さな木の的に的確に当てている。

オリセントは10本ほど引いてからこちらに近づいてくる。汗ひとつかかないどころか、息ひとつ乱していない。私は彼にとっては本当に容易いことなのだと感じた。

「どうだ？満足したか？」

私が興奮冷めやらぬ顔で彼を見ているのを感じたようで、オリセントはおかしそうに笑いながらそう聞いてくる。

「すごくきれいな引き方だった！」

大きく頷きながら感じたまま言つと、彼の笑いはすこし苦笑いになる。

「引き方を褒めるんだな。本当にフウカの場合はおどろかされるぞ」

え？

彼の思いがけない反応に私こそ戸惑つてしまう。彼の顔をじっと見上げると、より一層苦笑いを深めながら説明してくれた。

「フウカのところではそうではなかったのだろうが、この世界ではこれは生命を殺めるための武器なんだ。だから上手に引くということは的確に的に当てることだ。さらに的に当てると言つことはそれだけ誰かの命をうばっていることになるのだ」

そう言われて私がいかに不謹慎だったか悟る。たしかに弓は私の感覚ではただのスポーツだった。しかし、この世界では身を守ったり人を殺めたり、狩りをするためのものだ。

「じ、ごめんなさい」

彼に諭されて自分自身を恥じる。私は彼の顔を見つめることもできず、じつと顔を下に向けていた。すると、大きな暖かい腕が私の身体をやさしく包み込む。オリセントがまるで綿を抱くように力を込めずに私の身体に腕をまわしてくれたのだ。

「いや。責めているわけではない。フウ力が本当に平和なところで生まれ育ったのだなって思ったただけだ」

オリセントはそう言いながら私の長い髪を何往復もゆっくりと撫でる。そう優しくされるとより一層自分が情けなくなってくる。

「すまなかった。弓が精神統一や礼儀を学ぶためのものという考えが俺にはなかったから、お前を責めるような口調になってしまったな」

「うっん。私が不謹慎だっただけ」

あれほどの戦場を毎日毎日見続けて、それを制止しようと必死になっっている彼に対してなんて残酷なことをしてしまったのだろう。あまりにも考え足らずだった自分が嫌になる。

「そういうことではないぞ。前も言ったと思うが、そういう考えのフウ力だからこそ、癒しの女神としてこの世界に一番必要な癒しを与えることができるのだと俺は思う」

オリセントは私の両方の目じりにそつと口づけをする。それで初めて私が目に涙をためていたことに気がついた。

「武器がそのような目的で使用されるようになったら俺としては本当にうれしいな。これから守護神も産まれて、3人で力を合わせて人間界の乱世を終わらすことができたならそうなってほしいものだ」

本当にそう思う。

私は彼の腕の中で何度も何度も頷いた。

「泣かせた詫びにこれをやろう」

そう言う私の身体にまわしていた右腕をまっすぐ横にのばす。その瞬間に彼の右の手の平の上に膨大な神気が集まったかと思うとそれがひとつの形になる。

「弓・・・」

それは本当に美しい細身の弓矢だった。和弓と比べると小さめである。

「これならフウカでも扱えるだろう」

そう言って戸惑っている私の身体を離し、右手にその弓矢を渡してきた。

軽い！

作りは頑丈そうなのにほとんど重みを感じない。どれほどの絃の強さなのか指でつまんで引っ張ってみる。それも十分私が引けるぐ

らの強さだった。

でも、先ほどの話があったので私がこれをもらっていたのか戸惑ってしまふ。

「今は神気を乗せるわけにはいかないだろうが癒しの神であるフウ力が扱えば、殺めるための物ではなく生かすために使うことも可能だろう。だからフウ力のその考え方はなにも間違っていない」

私はそう言われて高ぶる感情を止めることもできずにもらった弓矢を抱きしながら、両方の頬をぬらしてしまう。

弓矢がもらえたこともうれしいけれど、そういう彼の心遣いが何よりもうれしい。

戦神はもつと泣き出してしまった私に対してすこしうるたえる様なそぶりをみせたが、私が悲しくて泣いているのではなくうれしいからだと分かったからか、結局黙ったまま私の頭を包み込んでそつと自分の身体に寄せてくれた。濡れている頬に彼の暖かい体温を感じる。

私は改めて、彼と結ばれた上に守護神を授かることができてよかったと思った。

62・生命の草原（後書き）

最初『生の草原^{せい}』にしていたのですが、『なまのそうげん』ってよばれることに気がついて生命に変えました。
こういう名前つけるの苦手です。

63・待望の守護神誕生！・・・あれ？

しばらくオリセントと草原で他愛もない話をしていた。そのときにそれは突如起こる。

私の気の変化だ。

クリーム色と金平糖のような透明の黄色のマーブル状だった気が徐々に膨れ上がる。

前に見た気の変化だったので、私は何が起こったのかすぐにわかった。

ダリヤがウリユウを産んだ時と一緒にだ。とうとう私の番になったようだ。

教えてもらったように軽い脱力感が体中から沸き起こる。

「とうとう来たか」

隣にいたオリセントもなにが起こっているのか察知しているようで、どこか興奮冷めやらぬ口調で私の身体を横抱きに支えてくれている。私は彼に身体を預けたままその気の変化を見ていた。

膨れ上がった気がやがて二色に分離していく。金平糖のような気が徐々に人の形を形成していった。

あ、女の子なんだ。

そこに現れたのは、肩ぐらいまである黒髪の少女である。外見15歳の私より年上に見える。18歳ぐらいというところだ。顔立ちとは私と同じくスミレ色の瞳をしているせいか、今の私と似通ったところがある。垂れ目がちな私と違って彼女は切れ長でも垂れ目でもないが、大きな瞳をしている。まつ毛もながくくりんと、形よく力ムールされている。唇はグロスを塗ったようにピンク色だが、ふつく

らとした形である私と違って大きいけれど太くない。そのせいか少し中性的に感じる。

あれ？この顔って私というより……。

ここですこし違和感を覚える。この顔に私より似ている人物を私は知っていたからだ。それに、少女が来ている服にも疑問がわく。ウリュウの場合、赤茶の布をまとっていた。だが、彼女はどうか見ても彼女の大きさに合わないパジャマのような物を着ているのだ。いや、訂正しよう。パジャマそのものだ。おまけにその柄には見覚えがある。

まさか……。

オリセントに支えられたまま、私は固まってしまった。あまりにもありえない事実に思考が真っ白になる。

そんな私たちを少女は不思議そうに凝視していたが、あることに気がついておそろおそろといった感じでちいさくつぶやく。

「もしかして……あねき？」

少女から出た言葉は私の推測が正解であると告げていた。だがまだ思考がダメージから立ち直っていない。

「姉貴だよね？」

「は……隼人？」

私が無意識に発した言葉に、少女はなにを分かり切ったことを聞いてくるんだろうと不思議そうな顔しながらこっちに近づいてくる。これですべてがかみ合う。なぜ、弟である彼だけが記憶を失わずに

私の魂のような状態をみれたのか。

目の前の少女の顔は私と言うよりも、中学や高校のとき女に間違えられるほど中性的だった隼人を元にもっと女性らしく派手になった感じだ。今着ているパジャマはどうみても弟が愛用していた柄だ。寝ようとしているときにこちらに飛ばされてしまったのだろう。

私はなんとかオリセントに支えてもらっていた身体を起こして、少女の腕に手をのばす。

「なんとか、神の国とやらに戻れたんだな。よかったよかった。心配してたんだよ。あれ？姉貴触れることができるようになったんだ。なんで？」

少女はのんきそうに私が掴んだ手を触り返してきた。まったく自分の変化に気が付いていないようだ。

「あの・・・隼人・・・」

なんとか状態を把握させようと声をかけるが、目の前の少女は興奮したようにどんどん私に聞いてくる。

「もしかしてここは夢？わざわざ姉貴、俺の夢の中に会いにきてくれたのか？律儀だな」

楽しそうに笑うその表情はよく知った隼人そのものである。このままではなかなか彼を説得できそうにない。ここには鏡も水たまりもないのだ。自分の身体の変化を把握するには、今までなかったものの感触に気が付くことが大切だろう。私は意を決して、少し大きめに弟の名を呼ぶ。

「隼人！ごめん！」

そう言ってパジャマの上からそれなりにある胸のふくらみに触る。

「な！いきなりなにすんだよ！姉貴・・・ってあれ？」

目の前の少女はいきなりの私の行動に、びつくりして慌てふためいたように私の手を払いのけるが、いまままでにない自分の身体の感触に違和感を覚えてゆっくりと視線を下げていく。

少女はあり得ない自分の胸のふくらみに、無言のままゆっくりと両手を持つていく。

それからしばらくして草原に大きな叫び声が響き渡る。

「なんじゃこらー！！」

かの有名な名セリフと一緒にしたのは、おそらく弟が世代は全然ちがうのにDVDを全巻持っているほど、その俳優の大ファンだったからだろうか。

それだけ言っと、自分の胸に手を当てたまま少女は気を失ってしまった。

崩れ落ちる前にずっと黙って様子を見ていたオリセントが、とっさに少女の身体を支えてくれる。

オリセントはしばらくの間、腕の中にいる少女を見ながら何かを考えていた。この状態を把握しようとしているのだろう。私もだまって少女とオリセントを見つめる。

「よくわからないが、もしかしてフウカの妹だったのか？」

しばらくしてからオリセントは少女の身体を持ってきていた布の上に寝かせる。その作業が終わってから聞いてくる。

「弟だったの……。なんで女性の身体なのかわからないけど……」

私は正直に答える。

オリセントもそう聞いてなんとも言えない表情になる。男が女として転生するなど、おなじ男として同情してしまうのだろうか。

「ともかく、隼人が目を覚ましたから事情を説明するわ。到底受け入れがたい事実でしょうけど……」

どう説明すればいいか迷うが、その役目は私しかないだろう。

「ああ。レイヤやゼノンには俺から説明しとく。目覚めてフウカが話して落ち着いてから、俺やレイヤたちと話したほうがいいだろう」
「ありがとう。そうしてくれるとうれしい」

彼のいつもながらの気遣いに感謝を口にした。

「何はともあれ、この気は間違いなく守護の神だな。しばらくはこの事実を受け入れるので精一杯だろうから、フウカはできるだけ彼女に付いてやってくれ」

オリセントの彼女発言につい違和感を覚えてしまうが、この外見では当たり前なことだと思いなおす。隼人もだけど私もこの事実を受け入れるのにしばらく時間がかかってしまいそうだ。

「ああ。言い遅れてしまった。産んでくれてありがとう」

本当に優しい顔でそう言われてうれしくて思わず微笑み返す。私の顔をみてオリセントはごく自然に私の唇にそっと触れる程度の口

づけをしてきた。

これからが大変だけど私にはオリセントがそばで支えてくれるし、隼人は私が支えてなんとか立ち直ってもらうしかない心の中で決意を固めることにした。

63・待望の守護神誕生！・・・あれ？（後書き）

とうとう生まれました。隼人を守護神にしようとは出てきたときから考えていたのですが、男にするか女にするか迷いました。でも、男だと読んでいる人には予想通りかなって思ったので、女に性転換させたらという考えが浮かんできました。そして、どんどん話が膨らんできちゃって・・・予想外だ！と思ってもらえたらわたしはニヤリと笑っているでしょう。

同時進行で、隼人視線での話を書いてみました。『勘弁してくれ！』です。これは『女神の憂鬱』の番外編という感じがかな？話が膨らんでいったら『女神の憂鬱2』となるかもしれませんが・・・。

64・守護神の名前

私が普段寝ているベッドで産まれたばかりの少女が寝ている。それを私はみつめながら少女が目を覚ましたらどう説明したらいいか必死に考える。

草原で気を失ってからオリセントが私も少女も担いでこの部屋に移動してくれた。そしてそのまま、このベッドに寝かすとオリセントはすぐにレイヤの部屋に跳んでいった。説明するためだろう。

「はーくん……。どう言ってもショックだよな」

変わり果てた姿の弟をみながら私はつぶやく。

こちらの世界に着てしまったのもショックだろうが、私が見れた段階でこうなる運命だったのになって思う。隼人の性格からいってそこは受け入れやすいだろう。だが、問題はそれだけではない。なぜかこちらでは女になっているのだ。

彼はたしか女の恋人もいたはず。ということはそういう性癖はなから本当にショックをうけるだろう。さきほど胸を押さえたまま気を失ったことから、並々ならぬ衝撃を受けたことは間違いない。さらにもう一つある。

「私の子として生まれちゃったこともショックだよな」

姉と思ってた私の子供として生まれるなんて、なんとも言えない気分になるだろう。私自身、弟が自分の子供……。それも娘だなんてどうすればいいのか迷ってしまう。

「姉貴の子？」

「うん……。隼人にはきついよね……。って、えっ？」

思わぬ返事が返ってきて下を見下ろすと、ベッドの上の少女のすみれ色の瞳がバッチリと開いてこちらを見ていた。眼を覚ましたんだ。

「ああー。やっぱり夢おちってわけではなかったか」

私がどう声かけしようか迷ってる間に、少女は掛布の中でこそそそしながらそう言う。自分の胸の感触を再び確かめているようだ。

「勘弁してくれー。こんな奇想天外なことってあるか」

それだけ言うと少女は、ベッドの上で掛布を頭から被って身体を丸めている。

「は・・・隼人」

そりゃあ混乱するわよね。

思わず呼びかけてしまいが落ち着くまで声を掛けないようにする。この状態で色々説明しても余計に混乱するだけだ。

かわりに掛布に包まっている少女の頭のあたりを軽くなでるようにした。

少しの間そのままで沈黙が続いていたが、やがて掛布を顔の部分だけ開けてこちらに顔を近寄せてくる。相変わらず顔意外は掛布をかぶってる状態だ。

「姉貴！事情説明頼む！」

こうして簡潔に説明することにした。

守護の神として隼人までこの神の国に転生してきたこと。
なぜか女神となっっていること。

私と戦神との子供として誕生したこと。
説明していくとどんどん少女の顔色が悪くなる。

「女になつてたのもショックだけど、姉貴の子だと!？」

私と一緒にかなり気まずく思っているようだ。

「だつていなくなつてから一ヶ月ぐらいしか経ってないだろう?それなのになんで生まれるんだよ?ありえないだろう」

信じたくなくてすごい剣幕で聞いてくる。

「残念ながら、ここでは一週間もあれば産めちゃうのよ・・・」

私は可哀そうだと思いつながらも可能であることを教える。そうすると少女は余計に絶望という感じで顔を真っ青にする。

少女は私の後ろに見える姿鏡に気が付くと、がばりと掛布を取って自分の姿をじっと見ている。

鏡の中でベッドの上にかいパジャマを着ている少女が、思いつきり不機嫌そうに眉をひそめている。

「姉貴を責めるのはだめかもしれないけど、せめて男に産んでくれよ」

「う、ごめん」

思わず謝ってしまう。でもそんなの私が決めれるわけがない。隼人も分かっているようにすぐに謝ってくれる。

「分かっているよ。ただのやつあたりだ、ごめん。で？相手の戦神とやらはさつき姉貴を抱いてた大男か？」

大男……。たしかにオリセントは大柄だけど、なかなかひどい言いようだ。

「うん。オリセントって言うの。今、隼人が落ち着くまで2人のほうがいいだろうって自分の部屋にもどってると思うわ」

そう言うところ以上自分の姿を見られないとばかりに鏡から私に視線を戻す。

「色々納得できないこともあるし、この状態を受け入れることはできないけど、姉貴が消えることなく幸せになっているって分かったことだけは救いだよ」

仕方ないとばかりにため息を吐いてそう言ってくれる。

「ありがとう。隼人には悪いけど、隼人がここに居てくれることは本当にうれしいの。自分勝手だよ、ごめんね。せめて男神に産んであげればよかったんだけど……」

弟の隼人と話していて、如何に自分が知らないうちに孤独を感じていたのか思い知る。ずるいし利己的だけど、隼人までこうなってくれて嬉しいと思うってしまうのだ。私だけではないから。

そもそもなぜ守護神を産む使命があったのか。それは守護神が隼

人だったからではないだろうか。だから私が産まなければいけないかったんだ。ただ、なぜ男神でなく女神なのかと思ってしまうが。そう言う少女は苦笑いをしながらこちらを覗きこんだ。

「オカマの親みたいなこと言うなよ、まったく。姉貴がどうこうできる話ではないんだろ？時間はかかるだろうけど、この状態を受け入れるしかないなら仕方ないだろ」

その言葉に私はようやく隼人らしさが出てきたのでほっと安堵する。そういえばこの弟は立ち直りがものすごくはやく楽天的で、前向きなところがあつた。こんなところは我が弟ながらすごく尊敬できるところだ。

「はーくん。私ができることはなんでもするから。おねえちゃんを頼ってね」

思わず私は少女になってしまった隼人を抱きしめる。分かっていたはずだけどその身体の柔らかさにすこしびつくりしてしまう。少女はそつと私の身体に手を回しながら大きなため息をつく。

「はぁ。おねえちゃんって言うてもここではかあちゃんになるんだろ？ほんと、カオスだぜ」

そう言われて、そう言えば関係が母になってしまったことを思い出す。姉貴って呼び名もおかしくなるし、そもそも隼人って名はどうなるんだらう？私はそう考えて抱きしめたまま質問する。

「ねえ。隼人。名前どうするの？私はフウカってままでいつているんだけど、違う名前をレイヤかゼノンに決めてもらう？男の名前だけどそのままハヤトでいく？」

そう言つと少女は私から勢いよく身体を離して回答してきた。

「ハヤトでいく！名前まで変えられてたまるか。変つて言われてもハヤト以外呼ばれても返事しねえよ」

ここではフウカもハヤトも普通ではないので男の名前、女の名前の区別も付かないから別に大丈夫だろう。

こうして守護の女神の名前はハヤトとなった。

64・守護神の名前（後書き）

まだ、フウカも隼人も少女「守護神」「はやと」という認識がありませんので、隼人、少女って名前で表しています。

次回からはハヤトで統一します。

最初っからハヤトでいくのはどうかと思ったので……。わかりにくいかな？

隼人視点の『勘弁してくれ！』も同時に更新しています。よかったら見てね。

65・着替え

「とりあえず、服どうにかしないとね・・・」

私はハヤトの姿を見てどうしたらいいか考える。スカートなんか履かせるわけにもいくまい。男性の物を着せるべきだろう。

セレーナなら用意してくれるかな？

そう思って心声でセレーナに声をかける。ノアに声かけずにセレーナにしたのは、ハヤトにとって落ち着きのある彼女のほうがいいだろうと判断したからだ。ノアだといきなりハヤトに質問責めしてしまうかもしれないし。

『セレーナ。すこしお願いがあるんだけど、手があいてたら来てくれないかな？』

すると返事することもなくすぐに空間がゆがみ、闇の精霊であるセレーナが姿を現す。となりでハヤトがびっくりしている。確かにこんな美女がいきなり姿を現したらびっくりするよね。

「フウ力様。もしかしてそちらの御方は・・・」

セレーナもハヤトの存在がやはり気になるようで、二人ともお互いを見つめあっている。

「うん。守護の神よ。とりあえず説明は後にして、ゼノンたちに会わせるのにこのかつこだとどうかと思うので、服を用意してもらえないかしら？」

やはり今か今かと待っているであろうオリセントとレイヤ、ゼノンにできるだけ早く会わせないとだめだろう。だからセレーナには説明を省いてさきをお願いする。

「おめでとうございます！フウカ様、守護の女神様。分かりました。さっそくご用意させてもらいますわ」

セレーナも状況が分からないなりにお祝いを軽く言うだけにとどまって、私のお願いを聞いてくる。さすがに優秀な侍女だ。

セレーナにして正解ね。

と、私はここで重要な注文を言う必要があることを思い出して、さらに注文をつける。

「あのね。難しいかもしれないけど、男性の服にしてもらえるかな？なければせめてズボンのものでお願い」

それに対して、セレーナは一瞬とまどいを見せたけれどすぐに分かりましたと手を空に振る。

それと同時に彼女の手の中に白と黒の布のような物が舞い降りる。

「すげえ。魔法のランプだ」

隣でハヤトがそうつぶやいている。やはり姉弟だ。思いつくことが一緒である。

セレーナが私にいきなり現れた服を差し出してくれる。

すこし丈の長い詰襟の白の上着と黒いズボンだ。これならハヤトも着る気になるだろう。

「このようなものでいかがでしょうか？もし丈など長ければ調整いたしますので、着替えて頂けますか？」

セレーナが今度はハヤトに向かってそう言う。

「う、うん。わかったから君も姉・・・フウカも出て行ってくれろ？着替えたら呼ぶから」

そう言われてセレーナは驚きを隠せない表情で私のほうを見る。ハヤトの気持ちもよくわかる。いくら女の身体になったからといって、こんな美女の前で着替えたくないだろう。それに、着替えるためには自分の身体をみなければいけない。一人で落ち着いてやるつもりなんだと思う。

「わかったわ。廊下に出ておくから。時間かかってもいいからね。わからないことあったら呼んでちょうだい」

私はハヤトに服を渡すと、どうすべきか迷っているセレーナの背中を押しながら扉の向こうに行くことにした。

「セレーナ。あの子、私の弟なんだ」

ハヤトが服を着ている間時間ができてしまったので、セレーナに軽く説明することにした。セレーナはあえて疑問を口にしなかったけれど、頭の中ではわからないことだらけだろう。さすがにこのま

ま放置は可哀そうだ。

私がそう言うにより一層驚きを顔中に出す。こんなに表情豊かなセレーナは初めて見る。それほど衝撃があったのだろう。

「フウカ様のお・・・おとうときみですか？ですが・・・あのお姿はどうみても・・・」

おそろおそろという感じで私に聞いてくる。たしかにあの姿だと女にしか見えないだろう。事実女の身体なんだし。

「うん。なぜか身体が女として誕生しちゃったみたい」

「そ・・・それは・・・」

私が事実を告げるとセレーナは困惑した表情のまま、どう返事したらいいか言葉を必死にさがしているようだ。

「とりあえず、オリセントとレイヤとゼノンには会わせるわ。でねもしセレーナさえよければ、あの子を私にしてくれたみたいに支えてくれないかな？私はだいぶ慣れてきたから。あ、もちろん、セレーナがいつて言ってくれたらゼノンには私から頼むから」

ここで思いついたことをお願いする。だいぶ一人で色々とできるようになったと思うし、すぐにセレーナもノアもいなくなったら困るけれどノア一人でも大丈夫だろう。まだまだ色々戸惑っているだろうハヤトには、彼女のように落ち着きがあってしっかりとした人が付いていてくれたら私もうれしい。

レイヤたちならほかの精霊たちを付けてくれたりするんだろうけど、どうせならよく知っているセレーナに任せたい。

「もちろん、それは光栄です。守護の神様もしばらくはフウカさま

と一緒に過ごされるでしょうし」

セレーナはすぐに了承してくれる。あとはゼノンにお願いするだけだ。

彼女が言うようにしばらくはハヤトとできるだけ一緒にいたほうがいいだろう。

幸い、この部屋の続きに小さな部屋があるがほとんど使っていない。20畳ぐらいあるこの部屋でも十分ベッドを置けるのだが、さすがに元姉といっしょに寝たくはないだろう。だから、しばらくは隣の小部屋に簡易ベッドを運んでもらって、私がそちらに寝るようになるよう。

セレーナにそう告げるとそのことも了承してくれた。ほんとうに助けられているなと思う。彼女なら自分がない間ハヤトを任せていても大丈夫だろう。

「あ、ハヤトって言うのよ。名前変更する気がないって言ってたから、そのままになると思うからそう呼んであげてね」

「ハヤト様ですね。わかりました。できるかぎりハヤト様のお力になれるように努めます」

私がセレーナに名前も告げてなかったことを思い出してそう言うのと、セレーナは力強く頷きながら頼もしい返事をくれた。

ここで、待っていた扉の内側から少女の声が聞こえる。

「あね・・・フウカ。ちょっと入ってきて」

今までは外見ばかり気にしてたけれど声だけを聞くと、声もすっかりと少女の声になってしまったんだって感じてしまう。話口調は男のモノだけ。

セレーナにはそこで待機してもらってそっと扉の中に入ると、ハ

ヤトはきちんと服を着替えていた。大きさはちょうどよかったみたいだ。男性の服装をして中性的な顔立ちだからボーイッシュな感じになっていた。

ハヤトの表情は一仕事したみたいに疲れ切っていた。自分の身体を向き合うのに気力を使い果たしたのであろう。

「うん。いい感じになったね。ハヤト大丈夫？」

大丈夫ならオリセントやレイヤ、ゼノンに会わせなければいけないと思うが、気が乗らないのであれば強制しないほうがいいだろうと思って私は聞く。するとハヤトは目の前で大きく深呼吸をひとつしてから答えてくれる。

「ああ。着替えるだけで本当に疲れたぜ。でも一番上の神とかに会わないといけないんだろ？それぐらいはやるよ」

覚悟を決めてくれたようだ。我が弟ながら本当に潔いなあ。昔から私より優秀で意外と氣くばりのできる弟の変わらないところに、私はうれしく感じていた。

「その前にオリセント呼んでもいい？やっぱ彼が一番あなたと会って話するのを楽しみにしているから」

やはり一番守護の神を欲していた彼にきちんと会わせてあげたい。オリセントは気を使って遠慮してくれたけれど、本音と一緒にハヤトと接したいと思っているのは分かっていた。それにレイヤたちのところに行くのに彼もいたほうがいいだろう。

「ああ。でも、あの人を父親として接しろって無茶な注文はやめてくれよ」

ハヤトは自分の頭を無造作に掻く。しかし、いつもと違って髪が長いので指に絡まってしまつて、それをすーと腕をのびしながら自分の髪をひっぱっていた。その表情はお世辞にも楽しそうではない。自分の髪に八つ当たりをしている感じがした。

「オリセントはそんなこと要求しないと思つた。詳しくは後でちゃんと話するけれど彼は、ハヤトが生まれてくるのを100年以上待ち望んでいたからね」

私はオリセントがハヤトに父と呼ぶことを強制することはないだろうと、確信持つて言える。事情を知っている以上、守護神として接するはずだ。だからこそ二人を会わせたい。

「なんで？」

隼人は当然の質問をしてくる。親だから子供に会いたいという話ではないことは100年と言われてすぐわかつたのだろう。

「あなたが守護の神だから。自覚はまだないだろうけどね」
「な〜るほどね。と言つてもよくわからないけど」

ハヤトが乾いた笑いをしながら頷くのを見て、まずはセレーナに心声中、服の直しが不必要なことにオリセントを今から呼ぶことを伝える。いつまでも扉の向こうで待機してもらっているのは悪いからだ。とりあえずベッドの手配に動いてもらうことにした。

それからオリセントを心声中で呼ぶ。

ほとんど待つこともなく部屋の空間がゆがみ、黒髪の大柄な戦神が姿を現わした。

66・三人の神との初対面

オリセントは神妙な顔つきで彼を見ているハヤトに、小さく笑いかけながら片手を差し出した。

「戦を司っているオリセントだ。いろいろと思うこともあるだろうが、まずは歓迎させてくれ」

それに対してハヤトは慎重に手を伸ばしてオリセントと握手する。

「えっと・・・ハヤトです。正直どう言ったらいいか分からないですけど、よろしくおねがいします」

ハヤトはかなり戸惑いを見せていた。どう接すればいいのか迷っているようだ。

「あ、あと。あね・・・じゃあなかったフウカがお世話になってます」

ハヤトはそう言って日本人らしく軽く頭を下げた。それに対して手を握ったままオリセントは優しい笑みを口元に浮かべる。

「いや。お世話になっているのはこちらだよ」

そう言ってお互いに握手を解く。オリセントは続けて笑みを浮かべながらハヤトに提案する。

「オリセントと呼んでくれ。ハヤトにしてみればいきなり俺を父と呼ぶことに抵抗があるだろう。だから、同じ神の仲間として接して

くれたらいい」

さすがにオリセントもハヤトのとまどいがわかったようで、彼のほうからそう言ってくれる。

「すみません。氣を使わせてしまつて。そう言ってもらえると助かります。フウカも姉だったので今更、母と思うことはできないんですよ」

ハヤトもオリセントからそう言ってもらつて安心したようだ。本音を伝えてくる。

「仲間なんだからできれば敬語は止めてくれるとうれしいが？これから俺たち3人は接することも多くなるだろうしな」

緊張の趣でオリセントのほうをみているハヤトに対して、オリセントは片手をそのハヤトの頭にぽんと手を置いて、すこし前かがみになりながら視線を合わせる。そんな戦神の行動に対してハヤトはどうしたらいいか、こつちに振り向きながら目で助けを求めている。

「それはそうね。ハヤト。そんなに緊張しないで普通にしゃべって大丈夫よ？」

気にしなくてもいいといっても、オリセントにしたらハヤトは自分の娘なのだ。敬語使われていたら悲しいだろう。それに守護神として戦神とは深い関わりを持つようになるのだから、普通に接したほうがいい。

「そ、そうは言うけど、姉貴。いきなり会ったばかりの人に敬語な

しでしゃべれるかよ」

オリセントは大柄だし、軍人のような威圧感もあるのでハヤトが戸惑うのはよくわかる。

「ん〜。気の持ちよう？私も最初は敬語なしにするのに、意識しないためだったけど今はまったく普通にしゃべれているよ？」

自分もそうだったことを思い出した。同志と言ってくれてうれしかったから出来るだけ意識して普通に話すようにしたものだ。

そう言えば出会いは庭園の噴水に跳んだところを助けてもらったのよね。

と、思わずオリセントとの最初に出会った時のことを思い出した。

「フウカも最初は敬語だったな。それより前にいきなり空から飛んできてびっくりしたが・・・」

どうやらオリセントも同じだったようでおかしそうに口元を上げながら、それを言ってくる。

「そ、それは言わないで。あの時は恥ずかしかったんだから」

服が濡れてしまつて肌がみえてしまつぐらいになったことを思い出して恥ずかしくなる。思い出したことを消すように私は手をおおげさに振った。

と、ここでハヤトを話の置いてきぼりにしてしまつていたことに気が付く。案の定、ハヤトはすこし呆れた表情でこちらを見ている。

「あー。オリセント。フウカみたいにノートンキでないんですぐには無理だけど、徐々に普通に話できるようにします・・・じゃあな

かった。普通にはなすよ」

ハヤトはあえて突っ込まずに、オリセントになんとか敬語なしで話すようにしてくれた。

私がノーテンキってえらい言われようだ。でも、頭のなかに一つの声が響いてきたために、反論しようと口を開いたが言葉として出ることはなかった。

『フウカ。生まれたと聞いたが、どんな感じだ？もし会うことができるようになれば、俺とゼノンがそちらに行くようにするからいつでも声をかけてくれ』

それは光神のレイヤの声だ。ハヤトが目を覚ましたことも感じ取ったのだろう。でもオリセントから事情を聞いているためにこちらの様子を聞いてから会うようにしようと思ってくれているようだ。

「ねえ。ハヤト。ここの責任者であるレイヤとゼノンがハヤトの気持ちが落ち着いたら、ここに来たいと連絡があっただけどう？」

とりあえず、ハヤトに聞いてみる。いきなり絶世の美男子の双子が現れたらびっくりするだろうと思ったからだ。それに対してハヤトはため息交じりに言いながらうなずいた。

「どうせいつかは会わないといけないんだろ？だったら会っよ」

ハヤトは私に分かる程度にわずかに顔を強張らせる。責任者と聞いて緊張したのだろう。

「それほど緊張しなくてもいい人たちだから安心して。じゃあ呼ぶよ？」

ハヤトがしっかりとうなずくのを確認してから私はレイヤとゼノン両方に声をかけた。

すぐさまに部屋の空間が歪んで、金と黒の色違いの青年二人が姿を現す。

「これはこれは……。俺はレイヤだ。光を司っている。で、こっちが闇の神のゼノンだ。一応ここで一番古株ってことで責任者のようなもんだ」

レイヤはハヤトの姿を見てながら簡単に挨拶をする。そのすぐそばでゼノンも黙ってハヤトを見つめていた。

「ハヤトです。よろしくおねがいます」

ハヤトは日本人らしく軽く頭を下げながら二人にそれだけを言う。それぐらいしか言う言葉が見つからないのだろう。

「やはりフウカと一緒に名前あるんだな。そのままの名前でいいのか？」

「あ、はい。変えないください」

レイヤが名前について聞いてくるのに対してハヤトは即答した。さっきも言っていたけれどやはり変えられたくないのだろう。

「うーん。フウカよりは安定している神気だな。だが、まだまだ不安定ではあるようだ。守護の神であることは自覚あるか？」

そう言われてハヤトは考えるというより、伝える言葉を選ぶためにしばらく考え込んでいるようだ。

「すいませんが、さっきも言われたけれど守護の神とか言われてもまったくわかりません」

やがてレイヤにはつきりとそう告げる。それはそうだろう。私も同じ状態だった。癒しの力とかいろいろなことができて初めて人外になったと自覚したのだから。まだまだ神としては自覚が足りないぐらいだ。

「それについては私と同じで、いろいろと力の勉強とかしていけば自然に分かってくると思う。と言っても私もまだまだ自覚少ないんだけど」

私はレイヤとゼノンにそう言うと、二人とも大きくうなずいてくれた。

「そうですね。しばらくはフウカと一緒に力やこの世界について学んでいけばなんとかなるでしょう」

ゼノンが私とハヤトを二人とも見ながらそう言ってくれたことにほっと息を吐く。私もそれができればと願っていたからだ。

レイヤは居心地わるそうに突っ立っているハヤトにずっと手を差し出して、握手を求めながらこう言った。

「ハヤト。いきなりこんなことになってとまどいはあると思う。だ

が、俺たちは君がこうしてきてくれたのを心から喜んでいてることをわかってくれ。守護の神としてよく誕生してくれた」

続いてゼノンも歓迎を口にしながら同じように手を伸ばしてくる。

「私としては守護の神としてももちろんとても嬉しいですけど、人間の記憶を持ったまま神として過ごしているフウカのためにも、あなたがそばに来てくれたことを心強く思っています」

ハヤトは二人から手を伸ばされて順番に軽く握手していった。すこし戸惑いも見せているが歓迎されていることは充分わかったようだ。

「ありがとうございます。フウカは俺としても大切な姉だし、ここで幸せに暮らしているのはあなたの方のおかげでしょう。俺はまだ正直実味ないし、守護の神と言われてもなにもできないですけど、別に日本に未練はないですし、こちらでお世話になるのもありかなって思っています」

ハヤトはゆつくりとそう言うのを、私は嬉しい気持ちとせつない気持ちで聞いていた。

嬉しいのは私のことを大切だと気にかけてくれたこと。そしてせつないのは日本に未練がないと言うこと。おそらく、私がいなくなったときに周りの人の記憶や痕跡が無くなったことを、ハヤトは一番実感しているから、今更戻れないことを分かっているのだろう。だから前向きにここでの生活を考えるしかない、思おうとしているのだ。

「ただ、この姿は正直勘弁してほしいんですけど」

じつと見つめていた私に気が付いたようで、ハヤトは苦笑いを私に返しながらあえて軽い口調でそう言う。それに対してゼノンが魅惑的な微笑みを浮かべながらハヤトに返答した。

「あなたにはその姿は不本意でしょうが、そうなった理由も必ずあるのだと思いますよ。フウカとあなたが人間の記憶を持ったままこの神に転生したのにもね」

言葉よりも目の前の美形な青年の微笑みに、ハヤトはしどろもどろになってしまっている。よく見るとわずかに頬が赤い。最近ではだいぶ耐久力がついてきたけれど、私も最初はゼノンのこの笑みには固まっていた記憶がある。

しかし、やはりゼノンの微笑みって女男問わずに絶大な効力があるのだなって、しみじみと思ってしまった。

「悪いな。さすがに性別とか外見は俺たちにもどうすることもできないんだ。ゼノンのいうようにそういう運命だったと思って諦めてくれ」

ゼノンの隣でレイヤがわずかに片方の口元を上げ、苦笑しながらハヤトに慰めになっているか微妙な慰めの言葉をかけた。同じ顔なのに笑い方が本当にちがう双子である。

「分かってますよ。受け入れたくないですけど、受け入れるしかないでしょ?」

ハヤトは本当に不本意という口調でぶつぶつぶやく。

「そうですね。とりあえずはフウカと一緒にここの事などを学んでいってください」

ゼノンの言葉でこの場はお開きになり、レイヤとゼノンはすぐに来たときとおなじように姿を消していった。

「じゃあしばらくは二人で色々と話したいだろうし、俺も部屋にもどるぞ。今日はずっと神殿内にいるから用があればいつでも呼んでくれ」

オリセントもそう言い残して部屋からいなくなり、ようやくハヤトと二人つきりになった。

その途端に目の前の少女は緊張の糸が切れたかのようにベッドに倒れこむ。

よほど、気を張っていたようだ。

私は少女が寝そべっている身体の横に腰掛けてしばらくの間、ハヤトを労うように頭を撫でていた。

6 6 三人の神との初対面（後書き）

67・忠告

ハヤトはよほど疲れていたのかそのまま熟睡してしまった。だから隣の小部屋にベッドを用意してもらってそちらで私は寝ることにした。

広いので別に同じ部屋でも十分ベッドを入れることができたのだが、やはりハヤトにしたら別の部屋のほうがいいだろう。

次の朝に私はハヤトにセレーナとノアを紹介する。セレーナにハヤトのサポートをお願いしたことを伝えたとハヤトはすぐに了承する。私がハヤトが知的美女が好みであることを知っていた。それで言うならセレーナは彼の好みのタイプだろう。

ハヤトは昨日風呂入らずに寝てしまったので朝から風呂に入り、出てきてすぐに髪を切ってくれと強く要求してきた。それに対してセレーナもノアも必死にそのままにいるよう懇願するが、ハヤトの意志は強く私に頼んだり、拳句の果てに自分で切るからハサミくれとまで言うので、二人も折れて大層落胆した表情でハヤトの髪を切っていた。

いいなあ。ついでに私のも切ってくれないかしら・・・。

重い髪を切りたいと前に言っただけで断固拒否された身としてはついでにお願いしたいところだが、彼女たちの悲痛な表情にさすがに言いだせない。

結局ハヤトの髪はショートボブぐらいになった。ハヤトとしたらもつとばつさり切りたかったようだが、セレーナとノアの表情に根負けしそれぐらいに収まった。

そうして改めてハヤトを見ると、ズボンははいていることもあつてますます中性的な感じになっていた。中学生のころのハヤトを見ている感じでどこか懐かしい。

その後、二人で朝ごはんを取りながらご飯のこととここの男女比について話する。

「あまり驚かしたくないけど、今後のこともあるから言うね。ここの多夫多婦制なんだって。たとえば愛の女神のビュアスさんは5人の男神の恋人がいるらしいの。で、女神が貴重だからってけつこう男神に言い寄られたりするらしいから気をつけてね」

私は聞きたくないだろうなあと思いつつそう言うと、案の定目の前の少女は顔を思いつきり^{しか}顰める。ここの国と自分の性別について受け止めるだけで精一杯だろうけど、忠告なしでいきなり男からアプローチされたらさすがのハヤトも頭が真っ白になってしまっただろう。

そう言うとはヤトは逃げる方法としてテレポートのことを聞いてきた。確かにテレポートははやく取得したいだろう。

しかし、それよりもやはり気を感じることができの必要があると思うだ。私もレイヤに一番に教えてもらったのだから。

そこで、前に作ったペンダントのことを思い出す。

そうだ。ペンダントに気を込めながら説明しよう。

しまっていたベッドサイドの引き出しを開いてそれを取り出す。

4つのペンダントから自分の子用に作成した金平糖色の石のついた物を取り出す。

まさかこれをあげる相手がハヤトになるとはね・・・。

そう思いながら気を丹念に込めると石の輝きが変化した。透明の石の中央に輝く光が入っている感じがした。

へえ。宝石に気をこめたらこうなるんだ。

そう思いながらハヤトに渡すとありがとつと言いながらすぐに付けてくれた。

シンプルなデザインだし、気の色と一緒になのでよく似合っていて私を自己満足させてくれる。

だが、ハヤトには気がまだ見えてないようだ。

レイヤが教えてくれたように目を閉じて精神を研ぎ澄ますようにとアドバイスして、今度はオリセント当てのモノに気を込める。

そうすると、ハヤトの表情が一転した。

やはり私と一緒にすぐに気を感じ取ることを習得したようだ。

ハヤトは目を開けたあともしばらく放心したように私や自分の身の回りを見まわしていた。

私は黙ってその様子を見守る。

その時に頭の中に心声が聞こえてきた。

『フウカ。おはよう。守護の女神ももう起きている？』

それは久々に聞く水神の声だ。

『おはよう、エダ。起きているよ。もしかして今日はエダの番なの？』

『そうそう。で、お願いだけよかったら今日の授業は彼女と二人でさせてもらえないかな？』

その時、前に私の子が女だったらという話を思い出した。さっそく接触を求めているのか……。これはきちんと忠告しないと。

『エダはハヤトの事情聞いているの？』

そう聞くとエダは私と一緒に人間の記憶があつて、それももともと男だったことは分かっていると言つ。

『そうなの。もともと私の弟だったの。だからハヤトは気持ちちは男なんだからそれをふまえて接してね。まだまだあの子も気持ち的に不安で一杯だと思うし』

そう言いながらも私はこの時点で彼と二人つきりにさせるつもりはなかった。

『わかってるよ。僕はただ、彼女にとってフウカの次に相談しやすい相手になりたいだけ。今はそれぐらいにしとくよ』

そう言われて彼が真摯にそれを望んでいるのがよく分かった。ハヤトとしてもエダとなら他の知っている神より仲良くなれるだろうと思う。性格的に似ているところがあるからだ。

すこし考えこんでいると、今度は違う声が頭に入ってきた。

『フウカ。悪いが急に仕事が入った。ハヤトとフウカに挨拶したかったが、時間がないのでそのままいくぞ』

戦神であるオリセントの声である。彼にしてはだいぶあせりを含んだ声だ。それほど余裕がないのだろう。

『待つて！私も行く！』

彼が仕事と言うのだから人間界の戦のことだろう。と言うことは自分の仕事もあるはずだ。彼1人がもう重荷を背負う必要はない。出産も無事にすんだのだから。

『ハヤトはどうするんだ？』

『エダが相手してくれると言っているの。だから頼むわ』

オリセントが聞いてくるのに対してすぐに返事を送り、それと同時にエダにもメッセージを頭の中で送る。

『エダ。仕事が入ったからハヤトをお願いしてもいい？』

『任せといて。僕としては役得だから安心していいよ』

そういうエダの声は今まで以上に嬉しそうで、思わず頼んでしまつてよかったのか心配になる。

『さつきも言つたけど、ハヤトに余計なちよっかいとかしないでよ。私はエダを信用して任せるんだからね！』

私にしては少しきつい口調で釘をさすことにした。さらに簡単にハヤトに教えたことと気を感じることができるようになったことを説明する。

『大丈夫だよ。それよりも仕事大変そうだけど、がんばってね。僕はフウカが傷つくのは嫌だからね』

エダはここで口調を変えて真剣にそう言ってくる。本当に私のことを思つて言ってくれているのが分かつてうれしくなる。

ハヤトのことを思つてつい忠告してしまったけれど、エダなら大丈夫だろうと思ひなおすことにした。

『ありがとう。でもこれが私の役目だから』

こうして私はハヤトにもエダが来ているいろいろ教えてくれることだけ告げて、さきほど完成したペンダントを手にオリセントがいるところへ跳ぶことにした。

67・忠告（後書き）

久しぶりの更新です。

内容は『勘弁してくれ』のフウカ視点です。

これからオリセントと人間界に行きます。

本当に同時進行はむずかしい・・・。

68・再び戦場へ

「本当によかったのか？」

オリセントを目指して跳ぶとまだ部屋にいた。私が着た途端に心配そうに聞いてくる。おそらくハヤトのことと私が戦場にいくこと両方を気にしているのだろう。

「うん。ハヤトはエダが喜んで引き受けてくれたよ。ハヤトもここに慣れるためにも、いつまでも私というより色々な神と話とかしたほうがいいと思うから」

「そうか。だが、それだけでなく今から行くのは、お前が2回みた戦場以上に激戦区になるが大丈夫か？」

やはりそうなのか。オリセントが急いで行こうとするのだから、そうなんだろうと予想がついた。

「ねえ。オリセント」

私は名前を呼んで大きく深呼吸をひとつついでから、気持ちを伝える。

「だからこそ、私は来たの。いつまでもみんなのお荷物になるつもりはないから。それに、守護神が生まれたらオリセントが行く全ての戦場に、私も一緒に行くって決めていたのよ」

それが私の使命だから。いや、それだけが理由ではない。オリセントが1人で傷ついているの知らない顔していられないからだ。

「そうか。ありがとう。だが無理はしてくれるなよ？」

「うん。大丈夫。あ、そうだ。これもらってくれる？」

手に持っていたペンダントの存在を思い出してオリセントに差し出す。無言で受け取り石をじっくりと見ている。

「わざわざ癒しの神気をこめてくれたのか？」

「うん。赤の石のほうだけだね」

実は両方の石に込めることも可能なんだけど、一つだけにしておいた。内緒だがハヤトが力を身につけたら、もう一方に守護をこめてもらおうとひそかに思っているからだ。やはり戦に一番に出ている彼には癒しと守護両方あったほうがいいだろう。

彼は紐を首にまわしてさっそく身につけてくれる。

「ありがとう。じゃあ時間ないから行くぞ！」

オリセントがそう言いながら私の手を取ると周りの景色が一転した。

「ひい！」

目の前の壮絶な状況に思わず息を飲み込む。

もうすでに多くの者が屍と化し大地は赤く染まっている。

ここはもうすでに戦場後だった。

その様子を見て自分の甘さを痛感してしまった。

どこが大丈夫なのか。2回ほど経験しただけで知っているつもりになっていた。こんなの慣れる日が来るのだろうか。

ここから逃げ出したい気持ちを消し去ることはできない。無意識にその地獄に近づこうとするオリセントの腕から、逃げ出そうとして手を突っ張っていた。

「フウカ。大丈夫か？」

頭の上から心配そうにオリセントから声をかけられて、自分の身体がひどく震えているのに気がつく。

だめだ。こんな情けないことだったら人間界の乱世を終わらすことも、目の前の大切な人の助けをすることもできない。

目を閉じて大きく一呼吸する。自分の気持ちを落ち着かせてからゆっくりと目をあける。

当たり前だが、現状は変わらず見渡す限りの大地は血と屍で埋め尽くされている。だが、今度は冷静にそれを見ることができた。

「もう大丈夫よ。この戦いはなぜ起こったの？」

「民族間の小さな小競り合いから、大国間の大きな戦争まで発展してしまっただ」

もともと2つの国が合併したために2つの民族が一つの国に住んでいた。だがその民族間の溝は埋まらずに常に小競り合いが続いていた。その隙をねらって隣国が攻めてきたのだ。小競り合いをする一方の民族とルートが一緒だから手助けという名目を付けてだ。

「もうすこし早く来たらよかったのに……。ごめん、私が引き止めちゃったから」

神の国では僅かな時間だったが人間界では数日は経っていたら

う。それならオリセントはもうすこし早くここに来ることができたはずだ。

後悔で一杯になるが、オリセントは大きく頭を振る。

「ちがうぞ、フウカ。俺が一人でやってきてもこの戦争については静観するしかないんだ」

オリセントをみると苦しそう眉間に皺を寄せている。

「これは魔法によるものだ。おそらくレイヤが加護を与えている者だろう」

そう言われて周りをみるとどう見ても武器による傷でなく、焼かれた跡が目立つ屍が多いことに気がつく。

「それに、この戦いは必然なんだよ。止めるわけにはいかない。戦いには無意味なものと意味のあるものがある」

人と人が殺しあうのが必然？どう言うことなんだろう？私には到底理解しがたい。

「人間には生きていくためにどうしても必要なものがある。何か分かるか？」

今までは考えも付かなかったが、実際にこうして生々しい戦場を見ることでそれが何か思いつくことができた。

「食べ物？」

愛情や財宝でもない。強いて言うなら食べ物を耕すための土地だ。

「そうだ。国を治めるものは飢饉などで、国の者すべてに与える食糧が足らなくならないようする義務がある。だが、それを怠っていた国の統治者が一方の民族のみを優遇したために、もう一方が家族に食べ物を与えるために立ち上がったのが発端だ。ここまで大事にならないようしたかったが、それでもこれが無ければここで命を無くした何倍もの人が餓死していただろう」

犠牲をまったくなしで生きていくことは限りなく不可能である。オリセントの言葉は私にはひどく重く感じた。

「・・・ねえ。せめてまだ息のある者だけでも癒しを与えてもいいかな？」

わずかにしかないだろうけど、できることはしたい。

「ああ。俺からも頼む」

その返事を聞いて私は息を吐きながら神気を身体を中心に集めてようとする。だが、すこし集中力が足りないのか上手くいかない。

「前に渡した弓を使うがいい」

そう言われてもらった弓の存在を思い出す。たしかに集中力を高めるには一番いいかもしれない。

その姿を思いおこすとすぐに手のひらの中にそれは現れる。

私はこれをどう扱えばいいかすぐに理解していた。神としての本能のようなものだ。

集めた気は光の矢に変貌をとげる。

それを弓にかけてゆっくりと引く。不思議なものでほとんど重み

を感じない。放つ前の姿でしばらく矢先に神気を集める。

よし！今だ。

私は両腕をのばして壮絶な状態の大地に向かってそれを放った。
真っ赤に染まった大地をそれ以上の大きさを光が広がる。

癒しの力を送れたことを感じ取っていた。

しかし、前に与えたほど脱力感はない。最初など気を失ってしま
ったぐらいに大変だったし、2回目は人数が少なかったがそれなり
に疲労感が漂っていた。今回は初回より広範囲の力を要したはずな
のにそれほどしんどくない。

この弓のおかげかな？

力が安定してきたのもあるだろうけど、やはり集中できたとい
う点では弓に乗せることができたことも大きいだろう。

「さすがだな。すぐに扱えるようになるとは」

オリセントが頭を撫でながら褒めてくれる。自分でもここまでで
きると思わなかった。

礼を言いながら大地を見る。

やはり大半の者はもうすでに息絶えていたが、4人に1人ぐら
いの割合でおそろおそろ立ち上がる。

え？どうして？

起き上がった者たちは一瞬何が起ったか分からないようにその
場に立ちすくんでいたが、目の前の敵を見るとふたたび武器を構え
始めた。

『やめなさい！！！！』

気が付いたら私は大きな声で叫んでいた。それもみんなに聞こえる声で。

再び争うために癒したわけではない。だが、そんな彼らにどう説得すればいいか戸惑ってしまう。オリセントも必要な戦いであったと言っていたではないか。やはり安易に癒しを施してはいけなかったのだらうか？

困惑している私の頭を一回軽く撫でてからオリセントが任せるとばかりに前に進み出た。

『我が名はオリセント。もうすでに勝敗はついたのにお前たちはまだ戦うと言うのか？癒しの女神からの施しによって永らえた命を、そのようなことの為に使っていないものではない』

オリセントの声が天空からその場に居る全ての者に届く。姿は見せずに声だけだ。姿を見せると彼らの闘争心に火が付いてしまうからだろう。

地上に居る兵士たちはその言葉で戦意を完全に失ったようで、次々と武器を地に落としていった。数多くの者が涙を流している。

『自分の地に戻り、武器を鍬に変えて大地を耕せ。それがここで命拾いした者の使命である』

オリセントはそれだけ言う私のほうに向きなおす。その表情はひどく優しいげだ。

「フウカ。そんなに一々、自分がした行動に後悔しなくてもいい。お前は十分やってくれている」

そう言われて私がその言葉を一番欲していたことに気が付いた。どうしてオリセントはここまで私に対して優しくできるのだろう。嬉しくてあふれそうな涙を抑えながらオリセントに抱きついた。オリセントも私の身体に優しく腕をまわしてくれる。

今までは私がなぜ癒しの女神なのだろうと言う気持ちでいっぱいだったが、彼が戦神であり私が癒しを司ることができたことに心の中で感謝した。

69・神に芝居は必要みたいです

オリセントの声を聞いて戦場にいた者はしばらく呆然と立ちすくんでいたが、やがて帰り支度を始める。

よかった。

その様子を遠くから見守りながら、私は疑問に思ったことを色々
とオリセントに聞くことにした。

「ねえ。勝敗ってどうなったの？」

「ああ。先ほど言ったようにレイヤの加護を受けた者の力で、全体的には圧倒的に劣勢で虐げられていた民族が勝ったぞ」

なるほど。だから必要な戦いだと言うのか。でも1人の力で戦いを左右する力があるってある意味こわすぎる。

「レイヤだけでなく他の神たちも人間たちに色々な加護を与えているの？」

「ああ。その加護の大きさに違いはあるけどな。俺自身、この前のターチェンなどを加護しているな。そういうフウカも忘れているだろうが、1人加護を与えているだろう？」

そう言われて最初の戦いで力を与えた者がいたことを思い出す。一番最初に戦いに終止符を打とうとした者だ。自分の事で精一杯で彼に気をかける暇もなかった。せっかくだし会いに行こうかな。

「レイヤが与えた人ってそんなに力があるの？」

「やはり最高神の力だし、光と闇の力は特別に強いと言えるな。だからこそ早くにこの戦地に来たかった。レイヤが与えた者が必要以上に力を出してないか見守るためにも」

あれ？レイヤが与えたのならレイヤも見に来ないのはなんでだろう？そう思っていると、オリセントはすぐにその疑問を解いてくれた。

「見守るのはレイヤが来る予定だったんだが、急きよ他の仕事が入ったようで元々後から来る予定だった俺が先にここに来ることになったってわけだ」

なるほど。だから急いでたんだ。

しかし、神が加護を与えるってそういうものなんだ。そう考えると一つどうしても聞かずにはいられない疑問がわく。

「私のような癒しはともかく、人を傷つけてしまうような力をたった一人に与えることは危険でないの？」

力を持つと人は野望を抱き、力で支配しようとしたりはしないだろうか？本人がその気でなくても周りがそのように利用したりしないだろうか？

「レイヤもそれなりに人物を見て与えているだろう。実際レイヤが彼に与えてなければ何万人と言う民が餓死で苦しんでいたはずだな。フウカもこれからは定期的に加護を与えた者を見守ったほうがいい。人間は特に心が弱い。もし、力を自分のエゴの為に使うようなら取り上げなければいけない」

そう言われて与えた者の名前すら知らない事実、私は気が付いた。いくら癒しであっても他の人にならない力を有するのだ。気にかけておくべきだろう。本当にうっかりしていたな。

「ねえ。とっても恥ずかしいんだけど、私与えた者の名前すら知らないの。今からでも会いに行ってもいいかしら？」

いくら自分の恥ずかしい過ちであってもここで正さないとダメだと思う。だからオリセントに恥を忍んでそう訊ねた。それに対して戦神は笑うことなく真剣に頷きながら同意してくれる。

「ああ。行つてやるがいい。どこにいるかは気を探ればすぐにわかるだろう」

こうして、もうしばらくここを見守ると言うオリセントと別れて初めて戦場に立った草原に移動することにした。

「あ、あれ？」

草原で何一つ建物のなかった大地は、すっかり様変わりをしていて大きな町になっていた。一瞬場所違いかと思つてしまつが、所々残る自分の力のかけらがここだと告げていた。

町の中央には大きな建物がそびえたつ。まだ新しい建物だ。

何かな？

近づいて見てみる。お城にしては城壁が薄いし、どちらかと言えば寺院のように見える。

気はそこの中に感じていたので入ってみた。私の姿はだれにも見えていない状態だし、建物の中も簡単に入れる。

あれは？

その建物の中に入ると一番大きい部屋の壁一面に美しい絵が描かれていた。

戦場の絵だ。数々の兵士たちが倒れている。だが彼らはみんな同じ方向をみていた。右上の天空にいる少女の方だ。少女は白い髪をしていて目は金と紫の色違いである。慈悲深い笑みを浮かべながら右手をかざしている。その右手は光り輝くように描かれている。

もしかしくてもあれは前の戦いのシーン？

でもってあれは私かしら？

自分が描かれているので恥ずかしくなる。なぜか服装が布一枚なので胸のふくらみがよく見えている。

私、顔しかみせなかったはずなのに……。

その壁のある大部屋の真ん中で1人の男性が跪いて手を組み、目を閉じているのに気が付いた。瞑想をしているようだ。

彼の姿をみた瞬間に、自分が加護を与えたあの青年であることに気が付いた。

いや、もうすでに青年と呼ぶより年配の男性と行った方がいいか。戦場で見たときは30代半ばぐらいだったのに、今の彼は50代ぐらいになっているだろう。顔に大きな皺が何本も出来ている。

私は人間界と神の国の時間の流れの差をここでも強く実感する。おそらく10数年は経っているだろう。

彼と話するなら今しかないだろう。扉の向こうで数人が立っている。だがこの部屋には今は彼しかない。

私は彼に姿を現す覚悟を決めた。瞑想している彼の目の前に立つ

てから姿を見えるように心で祈った。

彼はいきなり気配を感じて勢いよく構えながら目をあける。だが、次の瞬間、信じられないという表情を顔中に現してこちらを凝視していた。

「あ……ふ……」

なにかを言おうと音を発するが、それは言葉になっていない。

「陛下！何かありましたか！」

扉の外から騒々しい声が聞こえてくる。

こちらの音を聞いて警備の者が慌てているのだろう。

それに対して年配の男性は一気にきつい表情になって大きな声を張り上げた。

「だれも入ってくるな！私が許可するまでその扉を開けることを禁ずる！」

そう言うとき大きく深呼吸してから膝をついて、頭をさげた状態になる。

「癒しの女神さまのフウカ様でございますね」

いきなり平伏されてびっくりする。陛下というだけあって立派な身なりをした男性がである。

「頭を下げないでください」

そう言うとき彼は顔だけをこちらに向ける。その表情は興奮を隠し

きれない感じで顔中を赤く染まらせている。よくみると目まで潤ませている。

「貴女様に救われてから１７年間。まさかこうして再びお目にかかれるとは思いませんでした」

そう言われて１７年も経ってしまったのかと思ってしまう。

「本当はもっと早くに会いにくるべきだったのに、こんなに遅くなつてしまいましたね」

できるだけ優しく話しかける。やはり神として崇められている以上、馴れ馴れしい口調はだめだろう。

「救っていただいたばかりか身に余る加護を私に与えて下さり、本当に光栄でございます」

「貴方はあの時一番最初に戦いに終止符を打とうとしていました。そんな貴方だからこそ、その力を授かることができたのだと思います」

そう。彼には悪いが、正直癒しの力をみんなに与えたあと気を失ったために、私自身の意志で彼に力を授けたのではないのだ。

目が覚めてそういう事実を感じ取り、彼なら大丈夫だと思うことができたのでそのままにしていたに過ぎない。

本当に私は癒しの女神として自覚と責任がたらなかったなと反省する。

「事実貴方は民のことを一番に思い、その力を乱用することもなくこの国を治めていますね。力を与えたことを誇りに思います」

私ができるだけ重々しくそう告げると目の前に男性は、今まで溜めていた涙を両方の瞳から流す。やはり会いに来てよかったみたいだ。あまり話するとぼろが出てしまいそうだけど。

とここでまだ彼の名前を知らない事実に気づく。今さらあえて聞くのもどうかと思うし、教えてくださいと言うのも彼に対して失礼だと思う。仕方ないので、一芝居をすることになった。

「貴方はこれからその力を民の為に活用する事を誓ってくださいませんか？」

「はい！もちろんです。私、バーンデイン・オルギーナ・キュリエ・ディーガは生涯を民と貴方に捧げます」

バーンって言うのか。名前を知れてよかった。少しずるいかもしれないけど、これからはきちんと気にかけるから許してね。

「ありがとう。貴方は私が初めて力を授けた者なので、そう言ってくれてうれしいですよ。これからこの乱世を終わらせるように力を注いでくださいね」

私は彼に微笑みを見せながらすっと姿を消していった。

泣いたまま目を閉じて手を握り締め身体を震わせている彼の姿を残しながら、その場を立ち去ることにした。それほど感動してる姿を見続けると、なんか騙しているつもりになってしまっただけだ。いや、私は一応きちんとした女神なんだから騙しているわけではない。神の仕事って威厳を見せるために、はったりとか芝居も必要なんだなってつい思ってしまった。まあそう感じるのは人間だった私とかハヤトぐらいかもしれないけど。

とりあえずふた仕事終えて、ハヤトを思い起こしながら瞬間移動することにした。

69・神に芝居は必要みたいです（後書き）

名前出すつもりはないと言ってたけど、ここで必要になったので書きました。

70・闇神とのお茶会

あら？

景色が変わると8つもの眼がこちらを見ていた。

移動の対象物であったハヤトに加えてエダにゼノンにその部下であるワトンだ。

周りで見渡してみるとそこはゼノンの執務室だった。てっきり私たちの部屋にいるだろうと思っていたからハヤトにしたんだけど検討が外れてしまったようだ。

「えーと、ただいま。ごめんなさい、ハヤト目指して跳んだらここに来ちゃった」

私はとりあえずなんで来てしまったのか理由を告げる。すると事情をいち早く把握したようで、ゼノンの顔に笑みが浮かぶ。

「あいかわらず瞬間移動が苦手らしいですね、フウカ。レイヤも言っていましたし、やっぱりこの階に引っ越ししてきますか？」

すると隣のゼノンの精霊であるワトンが真剣に真面目な顔をしてその提案に乗ってくる。

「いいですね。ゼノン様。ちょうどハヤト様も誕生されたのでフウカ様の部屋をそのままハヤト様に譲られて、こちらの階に部屋を設けられてはいかがですか？」

最上階は嫌です。

部屋なんかどこでも構わないといえば構わないのだけれど、この

最上階はレイヤとゼノンしかないわけだしなんだかやばい感じがする。

その申し出は丁重にお断りさせてもらった。

「えーと、しばらくはハヤトと同じ部屋でお願いします」

「それは残念。ではハヤトがここに慣れてきたら考えておいってくださいね」

ゼノンは私の近くまで歩み寄ってその整いすぎの顔を近づけてそう言ってくる。

久々に真正面から見るその魅惑的な表情に顔が熱くなるのを止められない。

だいぶ、慣れてきたと思ってたのに……。

「あー……。とりあえず俺はまだ神殿内を案内してもらう予定なので失礼します」

余裕が無くなった私に、ハヤトの間の延びた声が聞こえてくる。その方向を見ると、すこし呆れたような表情をした中性的な少女がこちらを見ている。

「そうですか。ハヤト。いつでも歓迎なので遊びに来てくださいね」

ゼノンはハヤトに笑顔で手を振っている。ハヤトとエダは出ていくために私たちに背を向けて扉のほうに歩いて行く。

「あ、じゃあ私も……」

もともとハヤトを目指して来たのだから、ハヤトが行くなら私も一緒に行こうと後に続こうとしたのだが、がしっとゼノンに腕を掴

まれたために動くことができなかった。

「え？ゼノン？」

「せっかく来てくれたのにすぐにいなくなってしまうなんて薄情ですよ。せめて一緒にお茶でもしてくれませんか？」

言葉は優しいけど、掴んでいる腕からは絶対離さないという強い意志を感じる。

「ゼノン。じゃあ僕らは行くね。・・・ほどほどにね」

「フウカ。俺のことは気にしないでいいから。いまテレポート教えてもらっている最中だし。じゃあ失礼します」

扉から出ていく直前にエダとハヤトがそう言い残して、結局私を置いてきぼりにして部屋からいなくなってしまった。

これでも心配していたのだけれど、ハヤトとエダは予想以上に仲良くなれているようだ。恋愛感情でないことは確かだけど。言うか、正直ハヤトが誰であれ男と恋愛関係になることはまだ私にも想像つかないし、見たくもない。

かといって私とだけ親密になるわけにもいかないし、それなりに色々な神と仲良くなる必要があるだろう。そういう意味ではエダと一番最初に接点を持つことはよかったんだなと思う。

「よかった。エダとそれなりに仲良くなれてそうで・・・」

「そうですね。ハヤトは中々前向きな考えをしているようですし、エダとは気が合っているようです」

思わず考えが口に出たことに横から返事が返ってきた。その間も私の腕を掴んだままだ。もうすでに二人はこの場から姿を消している。

私は小さくため息をつきながら諦めることにした。

「ゼノン……もうしばらくこちらにいるから腕を離しても大丈夫よ？」

私がそう言うのと本当にうれしそうに微笑みながら腕を外してくれた。

や、やられた！

その笑顔を見て先ほどの比でないほどの衝撃を覚えて、思わず顔に手を当ててしまう。

今までは楽しんでいる感じの微笑みで本人も分かっているように作られた表情だったが、おそらくこの笑顔は彼にとつて感情のまま出た無防備なものである。どちらかといえばレイヤの笑みに似ている。しかし、今まで見たこともないゼノンのものであるからこそ数倍の威力があった。

「ワトンもいなくなりましたし、しばらくは休憩時間となりますのでゆっくりして行ってくださいね」

そう言われて、ゼノンの側近であったワトンがこの部屋からいなくなっていることに初めて気が付いた。

いつのまに……。

「……ゼノンにしたら強引ね。お茶だけは一緒に頂くわ」

心のどこかでゼノンが強引に引き止めてくれたことを嬉しいと喜んでいる自分がある。

だが、お茶だけだからと強く言い訳しながら結局ゼノンと時間を

過ごすことにした。

「そう言えば、ゼノンも人間に加護を与えたりしているの？」

せっかくなのでお茶をしながら質問してみる。オリセントの口調からいって闇の加護もだれかが授かっていそうな様子だったからだ。

「ええ。2人ほどいますよ。どうしてですか？」

逆に聞かれて先ほどの出来事をかいつまんで説明すると、納得したようにうなづきながら彼の考えを教えてくれた。

「そうですね。たしかに人を傷つけてしまうほどの力を与えるのは私としてもどうかと思います。だがそれが必要な場合もあります。私の場合、1人は攻撃的な闇の力を与えていますが、もう一人は本人も気が付いてないですが安らぎの力を与えていますよ」

なるほど。与えるにしてもそういう分け方もあるんだ。

「たとえ攻撃的なモノでなくても本人が気が付くと周りもそれを知り、その者の人生を大きく狂わせる場合がありますからね。フウカもこれは気を付けてください。特に癒しの力は誰もが欲する物です。その者の力を求めて多くの人が群がります。だから授ける場合は、その背景も考慮した上ですることをお勧めしますよ」

たしかにその通りだ。

だれだつて身内に病人やけが人がいて、それを治すことができるという話を聞けば治してもらいたいと思うだろう。そう考えると癒しの女神としても力を授けるならほとんど授けないか、人生を狂わせない程度の小さい力をそれなりの人数に与えるかだ。

大変そうだけど数多くの人に癒しの加護が必要ね。

先ほど会ったバーンはその国の王であることもあつてたとえ治癒の力を持っていたても人が群がることはなかったし、バーン自身も力を受け取ったことを大っぴらにしてない様子だった。やはり彼女だけつてというのは拙かるう。

「たしかにそうね。私は癒しの加護を数多くの人に持つてもらったほうがいいのかなんて思っているわ。それほど強力なモノでなくすこし癒す程度ならいいと思うの」

私がつっているような瀕死の状態から一発で健康に治してしまうほどのモノを人間が持つべきではない。だが、戦や事故で傷ついた身体の治癒の能力を少し高める程度のモノであれば数多くの者にもつてもらいたい。

「そうになると、フウ力が大変ですよ？力を授けるってことはすなわち自分自身の神気を分け与えるに等しいのですから」

ゼノンが心配そうにこちらを窺うように見てくれていた。

そういう仕組みなんだ。たしかにそうすると無数の人に力を与えることは難しそうだ。

いいアイデアだと思ったんだけどな。

もうすこし私は人間界のことやこの神の仕組みについて知る必要があるなと改めて実感した。

「そういえば、レイヤが諦めない宣言をしたそうですね」

いろいろと思考を巡らしていると隣からゼノンが聞いてきた。
私は真面目な事を考えていただけに一瞬反応に戸惑う。

「もちろんですけど、私も諦めてませんよ。というより、無事ハヤトも誕生したことですしこれからは本腰入れて貴女を口説こうと思っています」

そういうゼノンの背後には真っ黒のオーラが漂っている。

口説きモードにスイッチが入っている・・・。

「もう充分わかっていてしょうけどオリセントがいるとかハヤトがいるとかいうことでは、一切歯止めになりませんのであしからず」

そう言って私を見る眼は嫌味なほど輝いている。獲物を狙う獣のようだ。

ひ、人妻口説くの反対！

思わずそう言いたくなる。だがさっきのゼノンのセリフではないけど、そう言ったところでこの常識的には通用しないだろう。

「貴方のその可愛らしい口から直接に『嫌い』だとか『寄るな』とかいう言葉を頂かないと私は貴女を諦めることができそうにありません」

ゼノンはそう言いながら固まっている私の頭をすつと撫でたかと思うと、そのまま私の髪を一筋掬い取って座ったまま髪の端に唇を寄せる。

「そ、そんなこと言えるわけないじゃないの・・・」

あれほど世話になっていてそれなりに好意を持っている人にたとえ嘘でも言えない。

「それなら私に口説かれるのは諦めてください。なに、これから長い時と一緒に過ごすのです。オリセントだけにフウ力を独占させておくわけにはいきませんからね。できれば次は私の子を産んでくださいね」

ゼノンはそれだけ言うとうやうやく私の髪を離してくれた。

オリセントと結ばれてからしばらくはレイヤにしてもゼノンにしても口説こうとしなかっただけに、今回の攻撃はいつも以上に威力があつた。

守護神が生むという使命を終えたからという考えなのを理解した。

つまりはこれからは2人ともそのつもりでことよね・・・。

正直気持ちが全くないわけでないだけに、このことについて考えることを避けたいというのが私の中の本音だった。あまり深く考えすぎると私にとってはとんでもない結論を出してしまいそうだからだ。

こうなったら癒しの女神としての仕事とハヤトだけに気持ちを集中しよう。

二人には悪いけど、私的にはすくなくてもしばらくはこのままでいたいの中から。

ゼノンがこちらをじっと見ているのを分かっているながら、私は視線を下に向けたままお茶を飲むこと集中した。

だからゼノンが少しいつもと違うさびしそうな笑みを浮かべたことを、私はまったく気付かなかつた。

70・闇神とのお茶会（後書き）

久々にゼノンさん、口説きモードです。

71・守護神のバリア

ゼノンとお茶会を無事終えて、今度こそ部屋に戻ることにする。もちろん瞬間移動でだが、さすがにもう一度ハヤトを目掛けていて、変なところに跳ぶことは避けたいものだ。ここから自分の部屋ぐらいならなんとか跳べるだろう。

なんとか跳ぶ事はできた。跳んだ先の自室では、黒髪の少女と水色の髪の少年が楽しそうに話をしていた。

さきほど闇の神の部屋にいたハヤトとエダである。

「お、帰ってきたね。思ったよりゼノンに捕まらなかったみたいだね」

水の神が私の姿を見て、愉快そうに笑いかけてくる。

「お、おかえり。フウカ」

少女となってしまったハヤトがそれだけ言っていると、あと何を言ったらいいかわからないという表情でこちらをみていた。ハヤトの気持ちにはよくわかる。姉である私が口説かれている姿をみるのは、何ともいえない気持ちになってしまうものだろう。

「ただいま、ハヤト、エダ。えっと、ハヤトは瞬間移動の練習してたんだよね？上手くできた？」

私はゼノンとの話題から逃れたくて違う話を強引に出してきた。

「フウカには悪いけど、一発でほとんどの場所いけるようになったよ。ね？ハヤト」

エダがハヤトを振り返りながらそう言うと、ハヤトは無言で一度頭を上下に振る。

そ・・・そつか。たしかにハヤトは私みたいに方向音痴ではないものね。うらやましい・・・。

「じゃあ、今日の授業はこのあたりでおしまいだね」

エダはハヤトに向かいながら笑いかける。その笑い方がひどく優しげである。それに対してハヤトも口元に笑みをうかべながらエダに礼を言っている。思った以上にずいぶん一日で仲良くなったものだ。もちろん、恋愛感情ではまったくないみたいだが。

私の娘を口説くとか言っていたから心配だったけど、さすがにエダも事情を話したから、ハヤトが警戒してしまうような言動は止めてくれたみたいだ。

よかった！

「じゃあフウカ、ハヤト。またね」

エダはそういいながら楽しそうに手を振り姿を消す。そしてその場はハヤトと私と二人っきりになった。

「ハヤト。ずいぶんエダと仲良くなったみたいね。安心したわ」

「隙を見せたら口説くとか言われたけどな・・・」

守護の女神となった少女は苦虫をつぶしたようにかなり眉間にしわを寄せ、スミレ色の瞳はこちらを恨みがましく睨んでいる。

や、やはり言っちゃったんだ。

釘を刺したんだけどなあ。」

しかし、元々弟だったしほとんどその容姿は若返っただけで変化してないのだけど、思っていた以上に私としては違和感がある。本人に言うと思いつきり否定されるだろうが、ちょっとしたしぐさや表情などが、男のときとちがってきちんと女の子のものになっているのだ。

口調は男のものだけど、口を開かなければ中性的な魅力があるこの少女に言い寄る男性は後を絶たないだろう。

その少女は私がそう思っているとはわかってないようで、苦笑しながら話を続けた。

「フウ力を諦めるためにその娘にってのは俺はどうかと思う。まあそれが俺だから相手にはしないけどな」

そう聞いてエダがハヤトにそこまで事情を説明してしまっていることに、頭を抱えなくなった。

まあ、ハヤトが相手にしないって言うならいいか。

すくなくともハヤトも男性神との恋愛など、しばらくは考えようもないだろうし。

「そこんとこさえなければ、エダはいい奴っぽいし気が合うから俺は仲良くできるから心配はしなくていいぜ」

ハヤトは私の考えがすぐにわかったようだ。たしかにさっきの雰囲気を見ていると仲良くはできているようだ。とりあえずは口説かないとエダも言っているようだしそれを信用するしかない。

「そうね。確かにエダはいい人よ。ちょっとハヤトに似ているなあって思っていたんだ。だからハヤトとエダが気が合うと思うわ」

「ああ。で？急ぎの用事は終わったのか？」

ここでハヤトは話題を変えてくる。そう言えばオリセントからの言葉を聞いて、説明をする暇もなく跳んでしまったんだった。

ハヤトも今後加護する相手が出てくるだろうし、説明しておくべきね。

そう思っ、今日の出来事をハヤトに説明する。特に加護を人間に与えることについては詳しく説明することにした。

「へえ。加護ねえ。そう言うのがあるんだ」

ハヤトもこの話には興味を示してくる。

「と言っても、守護の神がなにするべきなのかさっぱりだからよくわからないなあ。ってかそもそも守護の力ってどんなものかもわからないけど……。フウカは癒しの力ってどうやって出したの？」

「えっと……。オリセントが傷ついてたからそれに手を当てて治れ。って念じたら勝手に治ったよ。それが一番最初かな」

私は聞かれるがまま答える。噴水で怪我させてしまった時のことだ。たしかあれが一番最初にその力を意識した瞬間だった。

「ふん。念じるねえ。じゃあおれも守護ってことは守りだからバリアをイメージしたらいいのか？」

ハヤトはそう言うとき小さく深呼吸してから眼を閉じて、手を私にかざしてくる。

次の瞬間。

部屋中に金平糖色の気が充満する。

ハヤトの気である。

私とハヤトだけでなく、この部屋全体に小さな気の膜が張られている。

これが守護の力なんだ。すごく温かく本当に守られていると感じることが出来る。

「すごい！ハヤト。バリアできたね」

心地よいその守りの膜に私は興奮してハヤトに声をかける。するとまるでシャボン玉のように一瞬でその気の膜が消滅する。

「あっちゃ。破れてしまった。バリアって気をずっと集中しないと張り続けないのか。なかなか神経を使うもんだな。でも出来るってわかってよかった」

ハヤトは閉じてた眼を開いて大きく息を吐いている。どうやら私が話しかけたことで集中が途切れてしまって、バリアが消えてしまったようだ。

「声かけちゃってごめん。でも、やっぱりハヤトもすぐにできるようになるんだね。こうなると守護の神がハヤトであることは間違いないよね。大丈夫？」

私ときは自分が神であると自覚した瞬間、泣いてしまっただけにハヤトの気持ちになる。しかし、ハヤトはそれほど辛そうな表情を見せずに私に笑いながら考えを口にしてきた。

「ん。まあなっちゃったものは仕方ないって奴だな。フウカも同じ目に合っているわけだし、こういう運命だったって言う割り切りが今の俺には必要なんだって思うぞ」

昔から前向きだったが、いきなり異世界に飛ばされて女に性転換されて神だと言われたのに、わずか数日で割り切ってその神としての能力や仕事に興味を示せるハヤトに思わず感心してしまった。

「そういうところは相変わらずね。オリセントが帰ってきたらもつとその力とか仕事について色々聞くことにしよう。まあハヤトが実践に出るのはもう少し先だろうけどね」

こうして私とハヤトは軽く食事をとりながら、オリセントが帰ってくるのを待つことにした。

71 守護神のバリア（後書き）

72・三神での初陣を終えて（前書き）

本当に大したことないけれど、もしかしたらR15かもしれない
ん。

72・三神での初陣を終えて

ハヤトがこちらに来てから3週間があつと言う間に経った。

部屋も結局、私の部屋の近くで空いていたところをハヤトの部屋として充てられることになった。本当に私自身が例の最上階に引越させられなくてよかった。

ハヤト自身もだいぶこの環境になじんできたようで、空を飛ぶこと、瞬間移動に心声、そして守護の神としての力も簡単に取得していた。もともと器用なので、もうすでに私以上に力の制御を習得しているのかもしれない。

お披露目もウリユウと一緒に近々する予定とレイヤから教えてもらった。このごろは別行動することも増えて、ハヤトのほうはエダやウリユウなどと一緒にいるところを見かけるようになった。そして私のほうは、あれから何度か人間界に降りている。

徐々に自分を求める声と言うものがきこえるようになってきた。半数はオリセントと一緒に戦場にたつことになるのだが、もう半分はその声と呼ばれて降り立つようにしている。

ようやく癒しの女神としての役割がどういうものなのか把握できてきた。

正直まだまだ戦場は怖い。夢で何度も戦場の悪夢を見てしまう。だが、私が降り立つことで少しでも傷を癒すことができるのであれば、勇気をふりしぼって行くしかないと思えるものだ。

でも……。それをハヤトにも経験させるのはちょっととまどってしまう。たとえそれが私と同じで宿命であつたとしても。

そう。とうとうハヤトにも戦場を体験させるということになったのだ。オリセントとハヤトと私で話し合ってそろそろ3人で一緒に行こうと言う話になった。

そのときのハヤトはすこし緊張した感じではあったが、表情に強い決意が見られていた。

「フウカもがんばって行っているんだろ？元々俺は男だった訳だし、俺も覚悟決めないといけないだろう。ようやくバリアも簡単に張れるようになったしな」

心配そうに見る私に対して、ハヤトはすこし苦笑するように口元を軽く吊り上げながらそう言った。

「見慣れている俺ですら、時々寒気が走る戦場もある。だから強がらなくていい。もし、見るに耐えられないのであればすぐに言ってくれ。これはフウカにも言っていることだ」

大柄な戦神であるオリセントが、外見は高校生ぐらいの少女であるハヤトの頭を軽く撫でながら忠告をした。

オリセントは私の頭もよく頭を撫でるが、ハヤトも会う度に一回は撫でている。やはり内面はどうであれ娘なのだから可愛くて仕方がないのだろう。ハヤトを見る表情も本当に優しげだ。

それに対してやられるハヤトはいつもくすぐったいような居たたまれないような感じで恥ずかしそうにうつむいていながらも、されるがままになっている。

言つと嫌がるだろうけど、その姿は本当に可愛らしい。写真に収めたいほどだ。

しばらくしてハヤトが無言で頷く。

「じゃあ行くぞ」

オリセントは私とハヤトにその声を掛けながら二人の腕をつかんでくる。するともう慣れた現象がおこった。つまりは瞬間移動のと

きに起こる周辺の景色が一転したのである。

ハヤトは初めての戦場で顔を青ざめながらも気丈に振る舞い、必要な者に守護を与え立派に守護の神として務めた。私も必要な癒しを与えることができたし、オリセントも戦の行く末を導くことができた。戦・守護・癒しの神が初めて揃って立つことのできた戦場は、今までに比べて格段に被害を減らすことができたのを感じる。

オリセントが待ち望んでいたというのをここでより強く実感することとなった。戦乱の人間社会をもっとも秩序のある社会に変えていくことが、私たち3人の当分の役目である。

ハヤトの初陣を終えてまずハヤトの部屋に跳んだ。ハヤトは部屋に戻るとすぐに安堵のため息をつきながらベッドに腰掛けた。やはりかなり緊張しただろうし疲れたのだろう。私とオリセントはハヤトに労いとゆっくり休むようにと声をかけてから、ハヤトの部屋を後にした。

オリセントは次に私を部屋に送ってくれる。部屋でふたりっきりになってから私はオリセントに呟いた。

「オリセント。私、うれしいの。ハヤトにとっては過酷かもしれないけれど、こうして3人で使命を果たすことができることが本当にうれしい」

私の言葉を聞いてオリセントは強面の顔に優しい笑みを浮かべながら、私の背中に腕を回してきた。

軽く抱きしめられて私の頬に触れる広い胸板から温かい熱が伝わってくる。

「それを一番噛み締めているのは俺のほうだ。予想以上にハヤトはよくやってくれたな。やはりフウカと同じで、守護の神になるべく誕生したんだと実感させてくれたぞ」

私の耳元で低いオリセントの声が聞えてくる。その声は本当に嬉しそうだ。

「ありがとう。ハヤトも私もそんな風に認めてくれて。これからも3人で力合わせて人間界の戦争を減らそうね」

私がそういうとごく自然にオリセントの顔が近づいてきて、そつと触れるだけの口付けをしてきた。

いったん近づいた彼の顔が少し離れる。熱に浮かされたような眼の輝きをみせている。

「フウカ。このまま抱いてもいいか？」

オリセントは私の顔を大きな手で包み込み、彼の視線と私の視線を交差させるように顔を近づけながら聞いてきた。床を共にするのはこれで4回目だがその度に私の気持ちを確認してくれる。

私は無言で頷く。すると本当にうれしそうで、彼にしたらめずらしく無邪気な笑みを浮かべながら、私の身体をそつと抱き上げてベッドに下ろしてきた。続けて、私に重みを感じさせないようにしながらも、ゆっくりと身体を私に覆いかぶせる。

私も近づいてくる大柄な恋人の背中にそつと腕を回して抱きついた。

72・三神での初陣を終えて（後書き）

次回はオリセント視点です。

73・戦神の苦悩（前書き）

R15です。ご注意ください。
ちなみにオリセント視点です。

73・戦神の苦悩

オリセントは隣でやすらかに眠っている、最愛の少女のあどけない寝顔をじっと見つめる。

先ほどまで自分の胸の中で、可愛らしい鳴き声を聞かせてくれていた。

絹糸のような彼女の流れる銀色の髪を大きな手で優しく撫でる。

つい欲望のままに激しく抱いてしまったので、彼女は終わるとともに気を失うように深い眠りについた。だからさわっても身動き一つしない。

オリセントは彼女を知るまではどちらかといえば淡泊だったのだが、小さな彼女を自分の大柄な身体の下に組み敷くと、貪欲な欲がどんどん膨れ上がり自制を失いかける。そしてつい、彼女に無理をさせてしまうのだ。

未だに自分以外が彼女のこのすばらしい体と声を知らないのかと思うと、知れずに優越感が胸のうちにわきあがってくる。

「まあ、それも今だけだがな・・・」

まだ片手ほどしか床を共にしていないのは、彼女に無理をさせたくない気持ちと、これ以上に彼女に溺れのめりこむ事に躊躇しているからだ。

彼女が自分一人のものにならないことはこういう関係になる前から分かっていた。

彼女はきちんと自分に好意を持っていると告げてくれた。

それは本当に嬉しく、幸せと言うものを誕生して初めて味わうことができた瞬間だった。

だが、たまたま使命があったから彼女は自分と向き合ってくれたのも事実だ。

もしそれがなければ、おそらく最高神であるレイヤかゼノンと初めてこういう関係になっていただろう。

この愛おしい癒しの女神の気持ちこそちらのほうに向かおうとしていたことを、オリセントは知っていた。

そして今はそれを無理やり封印していることも。

それでも律儀な彼女はもし自分が他に眼を向けないでほしいと言えば、その封印を解くことはないであろう。

もし、彼女が癒しもしくは守護の女神でなければ、もしくは自分たち神が永遠に近い生命がなければ、間違えなく自分の欲のままそう言っていた。

いや、彼女に人間としての記憶がなければ思わず言っていたかもしれない。

それは彼女の精神の危うさを意味していた。

自分はフウカやハヤトと一緒にいることで肉体的というより精神的に癒しを貰っている。二人の誕生がこれほどまでに自分にとって支えと安らぎになるとは想像もできなかった。

だが、フウカにとってはどうだろう。戦神である自分と一緒にいることは、どうしても人間界の血みどろな戦乱を思い起こしてしまうはずだ。

「それでも、俺はお前の恋人であることをやめることはできない」

ハヤトが産まれた以上使命は果たしたので、恋人同士である必要はなくなっていたのだが、オリセントは彼女を手放すつもりはなかった。たとえ自分の姿が彼女にとって悪夢を思い起こしてしまう要因になってしまっても。

優しすぎる彼女が未だに悪夢を見続けていることを知っている。いまは長い時間抱いてしまったので身動き一つしないほど熟睡しているが。

もしかすると仕事以外は戦神である自分の姿を見せずに、ゼノン

やレイヤと恋人が夫婦となればこの悪夢から少しは開放されるのかもしれない。

彼女が初めて戦場を眼にして、悪夢を見るほど精神的にダメージを受けたのを癒すことができたのは、自分ではなくゼノンやレイヤだった。

だが、オリセントはもはや自分から身を引くことはできないほどフウカに執着していた。

もし人間ほどの寿命しかなければ、彼女の精神はもつかもしいない。

だが、我々神の生命はほぼ永遠に近いのだ。数えることもできないほどの年月を、眼を背けたくなるような戦場を見守り続けなければいけない。

このままだといつか人間としての彼女の心が病んでしまつて、彼女自身が人間の記憶の封印を願つてくることがオリセントには予測できた。そしてそれは彼女にとって最悪のシナリオであつた。

それぐらいなら、たとえ自分の中で嫉妬心が沸き起ころうともそれを封印して、彼女の心の支えや安らぎになるレイヤやゼノンも同列で彼女の恋人になることを容認するほうを選ぶ。

「二人とも諦めてないしな」

わざわざ二人とも自分に宣言してきた。ハヤトが産まれた以上、二人は容赦なくフウカに迫っているだろう。あの二人に言い寄られていながら、未だに頑なにそれを拒んでいるフウカの律儀さに思わず口元に笑みが浮かんでしまう。

だが、それも時間の問題だろう。

オリセントとしては少しでも長くこのまま自分だけのものでいてほしい気持ちもある。しかし、彼らが見逃してくれるはずもないし彼女自身、彼らに惹かれているのはわかる。どうせそうなるのなら意固地にならずにさっさとなくなつてくれたほうが自分としては諦めも

つくのにと、ついそう思ってしまったのだ。

オリセントはしばらく彼女の滑らかな髪感触を楽しんでいたが、彼女の眼に涙の跡があるのに気が付いてそこにそっと口付けをする。激しく抱いてしまったせいで、涙が少し溢れてしまったようだ。涙を溜めながらも自分に縋りつく彼女の、普段では考えられないような艶を帯びた表情を思い出して、身体が再び熱を帯びてくるのを感じる。

自分の止まる事のない欲望にあきれて小さくため息を吐いた。

「しかたない。すこし部屋に戻るとするか」

自分に言い聞かせるようにオリセントはそう言っと、寝ている彼女にきちんと寝布をかける。そしておもむろに彼女の顔に近づいてそっと触れるだけの口付けをその唇に施した。それだけでは満足できなかつたようで、名残惜しそうに頬やら髪にも数回口付けをしてから瞬間移動でその場から姿を消した。

73・戦神の苦悩（後書き）

久々の更新です。おそくなつてすみません。

久々に書く文章が浮かんでこなくて悪戦苦闘しています。
書きたいことを文章にする難しさにいま直面しています。

74・奇跡妃（前書き）

久々の更新ですみません。

74・奇跡妃

「あれ・・・？」

私の頭の中になにかが響く。それがなにかと説明することは難しいが、しいて言えば直感のようなものだ。女神として1年近く生活していくようになってから、時々そのようなものを感じるようになっていた。

この前にレイヤに指導してもらったので、それが何かわかる。

地上界の人間が癒しのちからを強く望んでいるのだ。

その呼び声に意識を強く向けると、一人の女性が泣き叫びながら私の名前を呼んでいた。

『慈悲深き癒しの女神フウカ様！！どうか！どうか！このわたくしの顔の傷を治してください！』

誰なのだろう。もっとその呼び声の女性を知りたくて意識を向ける。

すると、いきなり頭の中に映像が浮かんできた。

豪華な屋敷の中の部屋。そこに一人の女性がベッドで苦しみながら泣き叫んでいる。長い金色の髪を振り乱している。そしてその隙間から見える彼女の顔を見てはつと息を呑んだ。

美しい切れ長のブルーの左の瞳。しかし、右の眼の輝きは皆無だった。

右眼の上はかなりひどい痣があった。

いや、痣ではない。

「やけど・・・」

熱々の熱湯をかけたようなひどいやけどの跡。やけどを負って間がないのか、まだその皮膚は乾燥もしていない。見るからに痛そうである。

「可哀想に」

よくみるとまだ若い少女である。18歳前後と言った所か。それにそのやけどの跡がなければ、かなり容姿の整った令嬢であったのは容易に想像できた。

声が聞えるってことはそれだけの意思があつたわけだから、治してしまつていいのかしら。

私はすこし思案する。しかし次の瞬間、目の前の空間がゆがみ訪問者を報せていた。

「やつぱり、あの愚かな女はフウカちゃんに縋っていたのね」

「え？ビュアスさん？」

意外な訪問者の声に思わずびつくりして名前を呼ぶ。

そこには妖艶な金髪の美女が立っていた。しかし、この前とちがつて美しい顔の眉間にしわを寄せていてかなり不機嫌そうだ。

「フウカちゃん。その馬鹿な女に癒しは必要ないからね」

愛の女神はかなり辛らつな口調でそういい捨てる。

「え？彼女を知っているのですか？」

「その顔の傷は私からの天罰だからね。傲慢な容姿自慢の彼女にはお似合いだわ」

「で、でも。さすがにこの傷は可愛そうですよ……」

思わず目の前の美女に反論してしまった。ビュアスは私のその言葉聞いてより一層険しい表情を向けてくる。

「さすがに癒しの女神だけあって優しいこと。でもね。そんな女のやけどをフウカちゃんがいくら治しても、私は必ず同じように天罰をくだすわ。これは愛の女神として譲れないところなの」

ビュアスは形の整った口元を少し吊り上げながら、私に向かって皮肉を言う。この前あったときの楽しげで優しい口調とはまったく異なっていた。

「フウカちゃん。すべての者に力の恩恵を与えるのが神の使命ではないのよ。私が口出すことではないけど、こんな女に施しを与える前に、もっともつと与えるべき者はいるでしょう。声が聞えたら全ての者に恩恵をに与えるの？その者の性質もわからずに？」
「……」

そう言われて私は口ごもる。確かに私のは偽善だ。もっとひどい怪我をしている人は一杯いるのだから。彼女は自業自得なのだから確かに今治してしまうのはいけないと思う。

「それでも与えるって言うの？」

黙っている私にビュアスはそう言うと、彼女のこれまでの行動をかいつまんで見せてくれた。

彼女を一言で言うとき聞知らずな貴族のお嬢様である。

その身体つきから18ぐらいかと思っただが、16歳であった。

それなりに地位のある両親の元に生まれた一人娘。両親も兄もひたすら可愛がり甘やかし放題。

容姿もかなり整っていた為に親族だけでなく異性も彼女をちやほ

やしていた。

そしてかなり我がままで傲慢な性格になる。

社交界でも中心的な存在になり、自分に従わないような令嬢を自分の周りの者に制裁を加えさせていた。

その手段はひどく幼稚で残酷なものである。

見ていて私は思わず気分が悪くなってしまった。

根も葉もないうわさを広めて社交界に出れないようにするのは序の口である。

ある者は服に傷をつけて大勢の前で肌を見せられた。さらには仲妻じい婚約関係にある二人の間に、遊び半分で入って仲をこじれさせたりもした。

たまたまその様子をビュアスが見ていた。それは愛の女神であるビュアスには到底許しがたい行為だったのだ。

そしてビュアスが力を使ってやけどを負わせたのだ。

婚約者もいたが、それで一変に白紙に戻る。

なるほど。そう言う事情なのか。

ビュアスが怒るのも無理ないと思う。もし自分が彼女の身の回りにいる一人だったら絶対に近寄りたくない人種である。

だが、彼女の行いを通して見ていて、本質は良くも悪くも透明なのだと感じた。あまりにも無知すぎる。頭はかなり切れそうなのに周りの者全てが彼女を甘やかし、何一つ思い通りにならないことがない環境を作り出している。

彼女が無邪気にやっている悪戯がその後、どのような後遺症を残しているのかまったく知ろうともしない。

服を切られた令嬢はそのために良縁を結ぶことができずに、40歳も歳の離れた貴族の後家として嫁入りすることとなった。

婚約関係にあった二人は見捨てられた令嬢が自害してしまい、それを知った男性も後を追う形となった。

それすら彼女の耳に入っていない。

無知は罪だと思うけど、ここまでの状況だと逆に彼女に同情を覚

えた。

自分がどれほど世間知らずなのかわかっていないのだわ。そんなことを考えていると、愛の女神は呆れたように私を見ながら提案をしてきた。

「納得いかないようね。いいわ。一つ賭けをしましょう。今から彼女に声をかけるわ。一番遠い私の神殿まで彼女自身の足で訪れることができれば天罰を解いてあげる。で、フウカちゃんが治してあげて。どう？これならいいでしょ」

そう言うエメラルドの瞳は先ほど違ってひどく楽しそうである。おもしろい玩具をみつけた子供のようだ。

たしかに彼女にはそう言う試練が必要なのかもしれない。

その試練によって自分の罪になるほどの無知を自覚できるだろう。こうして私は彼女の人生を見守ることになった。

彼女はビュアスの言葉を聞いて喜びながら旅を決意する。

そして、数人の騎士を連れて自分は裕福な馬車に乗って旅立った。その馬車に施しを受けようと町の浮浪者たちが近寄る。しかし、彼女は旅の邪魔をする目障りな者として騎士に棒で追い払うよう命じた。

しかし、その裕福な旅は1週間も持たなかった。

山越えの時に盗賊に襲われたのだ。

騎士は見る見るうちに倒されて、付けていた貴金属だけでなく身ぐるみも剥がされて彼女は放り出される。

助けたかったが私はビュアスとの約束で手出しを禁じられていた。

それでも、貞操だけはあまりにも可哀想なのでハヤトにお願いして守ってもらった。

そんな自分の境遇を彼女は恨んだ。
ビュアスのせいで自分の人生を狂わされたと愛の女神を呪う言葉も吐く。

しかし、吐いてもどうにもならないことをここで悟った彼女はついに行動を起す。そばで亡くなった騎士のマントを身にまとい壊された馬車やその場に落ちているものをかき集めて、自分の足で歩き始めた。

歩きなれないために足には数多くの靴擦れができる。それでも歩き続けた。

そして3日不眠不休で山道を歩き続けて、その場に崩れ落ちた。そこに一人の男性が通りかかる。

倒れて意識のない彼女を自分の馬に乗せ自分の家に連れて帰った。彼女は眼を覚まして、男性にこれまでの事情を思いのままに話続ける。

すべての話を終えたとき、男性はこう言った。

「それはすべてそなたの咎であるな」

てつきり同情してくれるであろうと思っていたのに、彼の言葉は今まで聞いたこともないほど辛らつなものであった。

ひどいと泣きながら睨みつけると、男性はもつと鋭い言葉をぶつけてくる。

「そなたの行動が女神を怒らせたのに、そんなそなたを守って死ななければいけなかった騎士たちにそなたが叱咤するなど、人として許せるものではない。身体が回復するまではここで療養すればいいが、さつさと出て行くがよい」

あまりにも冷たい態度に彼女は何も言葉が浮かばない。そんな彼女に興味をなくしたかのように男性は背を向ける。

「そなたは醜い。姿形ではなく、心がな」

その言葉を残して彼女の前から姿を消した。

彼女は最初は男性の言葉をただの暴言と受け止めて、彼のことをひどく罵った。

しかし、この家から出て行くことはできない。自分を守る騎士も馬車もない状態で旅を続けることは不可能だからだ。それにここは家と言うよりかなり大きなお屋敷である。数日住んでいて、ここがそれなりに身分のある者が住む別荘であるとわかった。

自分の家督を告げて迎えにきてもらうようお願いしたが、迎えはこなかった。

仕方がないので心を殺して男性にお願いをして、家まで送ってもらうことにした。

しかし、その道中で悲惨な光景を眼にする。

そこで見たものは崩れ落ちた村である。たくさんあったはずの家が焼かれて見るも無残な有様。そこら中に血溜まりができている。

それをただただ見ることも出来ない彼女に代わって、同行していた男性が生き残りの者に話を聞く。

隣接する山から盗賊がやって来て領地中を荒らしていったと。

半数以上の村人が命を奪われ、残りも大勢が怪我を負わされている。連れ去られた歳若い女性も数多くいた。

男は彼女に怪我人の手当てを命じる。

そんなことできるわけがない。した事もないし、自分がするべきことでもない。

そう彼女は反論するが、男は威圧的な態度でそれを封じた。

彼女がしぶしぶ医者に従うようになったのを見届けてから、男は連れ去られた者を救うためにその村から出て行った。

彼女は嫌々ながらも医者の指示に従う。

心の中で貴族である自分がなぜこんなつらいことをしなければいけないのかと思ひながら。

それは今まで、ほとんど重いものを持ったりしたことない彼女にはあまりにもきつい仕事である。だが、目の前で亡くなつて逝こうとしている者、大怪我を負つて呻いている者、痛みに泣き叫んでいる者の前で弱音を吐いて仕事を投げ出すことはできない。

できないなりに医者に一から十まで聞きながら一つ一つ雑用をこなしていった。水を汲んできたり、人の身体を拭いたり、包帯を巻いたり、男性の服を着替えさせたりもさせられた。

そんな中、彼女の心の中で小さな革命が起こり始めていた。何かをするたびに、自分の顔を真正面から向き合つてお礼を言われるのだ。顔にやけどを負つてから自分のこの醜い顔をきちんと見てくれる者はいなかった。

最初は嫌々させられていたが、徐々に自らの意思で看護に努める。思えば、自分から何かをしようと思つたことは何もなかった。

看ている者が腰が痛いと言えば、さすつてあげたりもした。

関わつていた者がありがとうと言ひながら息を引き取つた瞬間、我も忘れたように大泣きをした。

そんな彼女を見て、私は彼女が変わつた事を感じ取つた。

その後も彼女の様子を時間がある限り見守り続ける。

懸命に医師の助手を務めてると男性が戻ってくる。

戻つてきた男性は彼女の行いを知り、自分の身の上を話す。

彼は隣の国に留学中の王子で、国に帰る前に別荘に寄つていただけであつた。

それを知つた彼女は彼に懇願した。

一人でも多くこの人が助かるように医師を手配してほしいと。

自分のことしか考えることが出来なかつた彼女が、自分のことを後回しにして目の前の人たちを救うため力を尽くしていた。

このとき、私は彼女に力を授けたいと言ひ思ひが強くなつた。

たしかに今までは愚かな行動ばかりしていた。でもそれを自覚した彼女は身を削るような献身さで、名もない村人に接している。そしてその彼女の表情は醜い傷があっても美しかった。

私は愛の女神のビュアスに彼女の状況を報せた。すると、ビュアスは彼女の目の前に姿を現す。

『そなたの顔を治すのと、そこにいる者の傷を治すのとどちらか選ばせてあげよう。どうする？』

彼女は即答した。

『みんなを癒して！』

それは旅をする前の彼女ではありえない回答であった。

こうして私はビュアスに許可を貰って彼女に癒しの力を与えることにした。

そして、彼女はそこで奇跡を起す。

王子は彼女に求愛をするが、彼女はこれまでの自分の愚かさから彼を受け入れることはしなかった。

彼女はそれから自分の親元に帰るのではなく、見聞を広げるために数人の村人を連れて旅に出る。

王子は彼女を諦めることなく、長い間二人の追いかけつこが続いた。

やがて熱心な王子に絆されるようにして彼女は求婚を受け入れた。

やがて二人は結婚することとなる。

しかし彼女は生涯やけどを負った自分の顔を治すことはなかった。だが、そんな彼女を王となった彼は深く愛していた。さらに彼以上に民衆たちが彼女を受け入れていた。

この村での出来事は『奇跡妃』または『癒しの王妃』として、後

々に名を残すこととなる彼女の最初の行いである。

74・奇跡妃（後書き）

フウカの話と言う感じではないですね。久々なのにごめんなさい。でも、今後のフウカに関わってくる予定ですので。私にしたら長い話になりましたw

75・リラクゼーション？（前書き）

相変わらずサブタイトルと内容が一致しないですが、ご勘弁ください。

75・リラクゼーション？

「人間って本当に生まれ変わることができるのね」

愛の女神が私の2人目の加護者のことを知って、わざわざ私に謝りに来てくれた。

「フウカちゃん、ごめんね。この前は嫌味なことを言っちゃったわ。言い訳をさせてもらえるなら、彼女がこんなに変わるなんて考えもつかなかったの」

「いえ。私のほうこそ、ビュアスさんのお仕事に口を挟む形になってしまつてすいません」

目の前の美女に頭を下げながら、私は自分の中で起こった不思議な感覚を思い出す。彼女の奔放でやりたい放題な生活を教えてもらったにも関わらず、どうしても彼女を見捨てることができなかった。私がそう言つとビュアスは少し口元に笑みを浮かべてその理由を教えてくれた。

「それは仕方ないわ。彼女はもともと神に好かれる性質を持っているもの。極々たまにそういう人間が生まれるのよ。だからフウカちゃんも彼女の声が聞こえたのよ。でもね、私はだからこそ、彼女を許せなかったの」

気になるほど魂は澄んでいるのに愚かなことばかりする彼女に嫌気が差して罰したのだと言う。

私が彼女を見て感じたのと同じように彼女の本質をビュアスも感じていたのだろう。

そこでふと気が付いたことがあつて私は訊ねてみる。

「もしかして、その国の王太子と会わせたのってビュアスさん？」

そう言うと、ビュアスは色っぽい表情を浮かべながら柔らかい笑みを口元に浮かべて頷いた。

うわぁ。なんというか色気全快だ。さすがに愛の女神。でも私相手にこのフェロモンはいらないのでは？

「それなら、ビュアスさんのおかげで彼女は眼を覚ますことができたのだと思いますよ。私はただ見ておくことしかできなかったのだから」

「ありがとう。そう言ってもらえると気が楽になるわ」

ビュアスは私の言葉にお礼を言ってくれた。でもお礼を言うべきなのは自分のほうだ。

「こちらこそありがとうございました。今回のことは私にとってすごく為になりました」

聞こえるがまま癒しを与えるのではなく、与えず見守ることの大切さ。もし気が付いたときにすぐに癒していたら、彼女の成長を見ることができなかっただろう。

どちらからとなく私とビュアスは微笑みあふ。

この時、私はこれが最善の方法であったと疑うこともなかった。しかし、すぐ後で後悔する羽目になる。

「へえ」。そんなことがあったのですね。人間は本当に色々な可能性を秘めていて興味深いですね」

ここは闇の神の部屋。

なぜか私は部屋の主であるゼノンと二人でお茶を飲んでいる。

ハヤトが生まれてから400日以上が経った。

宣言通りゼノンもレイヤも頻繁に私をお茶やお食事、遠出に誘って口説いてくる。

それでも私が彼らとそう言う間柄になることはなかった。

気持ち的にはどちらにも惹かれているし、ここまで熱心に自分を求めてくれる彼らに応じたい気持ちが、日に日に強くなっていた。それに唯一の恋人であるオリセントも許可してくれている。

だからと言って彼らとそういう関係になることに、どうしても踏み込めない自分がいた。やはり今まで過ごしてきた習慣から、恋人はオリセント1人で十分であると言う気持ちと後ろめたさがあるからだ。通りに反する行為だと感じずにはいられない。

だからと言って彼らを避けることもできない。一度、仕事以外ではあまり接しないようにしてみただけ、彼らはそれを鋭く察知してより頻繁に会いにきたからだ。

その時に言われた言葉が未だに忘れられない。

『おい！なにを避けているんだ。いくら避けようともお前が俺を嫌いと言わない限り諦めないぞ？』

『ただでさえオリセントが独り占めしてて歯がゆい思いをしているのに、フウカに避けられてしまうと思えば余って理性を失ってしまうかもしれませんね・・・』

レイヤはともかく、ゼノンにあの真つ黒な笑顔全開でそう言われて、絶対避けるのは止そうと決心した。

だって本当に実行されそうで怖いもの・・・。

だからこうしてゼノンとお茶をしているのだが、今日の話題は私の二人目の加護者のことだった。与えることになった経過などを話すると、ゼノンは興味深そうに話を聞いていた。

「フウカも女神が板についてきたようですね。何度も瞬間移動を失敗していたところが懐かしいです」

「もうさすがにゼノンの部屋にいきなり跳んだりはしないわよ」

過去の失敗をあげられて、思わず慌てて言い返してしまった。それに対して、闇の神は誘いかけるとような微笑みをこちらに向けてくる。

「おや。私はいつでも大歓迎なのですけどね」

うわぁ。だからその顔は反則だってば。

私はゼノンの視線から逃れるように出してもらったカップの中を見る。珈琲のような色をしているが飲んでみるとほどよく甘い。

ガナーと言う真っ黒な果実の汁と教えてもらった。

あからさまに視線を外した私の耳に小さな笑い声が聞こえる。ゼノンはそれに突っ込むことはせずに話を続けてくれた。

「神に好かれる人間ってのは珍しいですが極々たまに生まれますからね。私も昔に一度だけ加護を与えたことがありますよ」

「どんな感じだったの？」

純粹な好奇心で聞くとゼノンは懐かしそうに思い出しながら教えてくれた。

「別になにか偉業を成し遂げたりしたわけではないですよ。男性でしたね。孤児院を作って生涯、恵まれない子供たちに夜な夜な本を読んだり、抱きしめたりして安らぎを与えていましたね。自分が闇の加護者であることは死ぬまで知らなかったでしょう」

「知らないまま力を使っていたの？」

「そうですね。安らぎは目に見えた力ではありませんしね」

たしかにそうかもしれない。と、ここで気が付き聞いてみる。

「もしかして癒しの力もそういう与え方もできるの？一気に目に見えて治すのではなくて、そばにいただけで元気になるみたいな弱いモノとか・・・」

そう私は訊ねるとゼノンはあっさりと、

「出来るでしょう」

と、こたえてきた。

なるほど。これから与えたりするときにそういう方法も一つの選択肢になるわ。

私がそんなことを考えていると、いきなり目の前の視界がぐらつとゆがむ。

気が付いたらゼノンに私の頬に両手を当てられていて、ぐっと彼の顔に近づけられていた。

「えっ？な、なに？」

「仕事熱心なのは感心しますけど、あまり意気込みないほうがいいですよ。フウ力がつぶれてしまわないか私は心配です」

そう言つと軽く頬に口づけをしてくる。その瞬間体中に暖かいモノが広がる。エステで経験したリラクゼーションとは、比べ物にならないほど心地がいい。何度か経験しているので、これはゼノンが安らぎの気を私に与えてくれたのだとすぐに分かった。だからいきなりの彼の行動に動転するわけでもなく、素直にお礼を言うことにした。するとゼノンは先ほどと同じような魅惑的な笑みを浮かべながら、

「いえいえ。役得なのでフウカの為でしたらいつでもどこでも何回でもやりますよ」

と言いながら、もっと顔を近づけてきた。

美しい顔を近づけられて、私は慌てて彼のそばから逃げる。

うっ！だから照れてしまっつてば！

逃れながらも私の顔に熱が溜まってくるのを止めることはできない。鏡で見なくても顔が赤くなってしまうているのが分かる。

本当、確信犯でしているのだからたちが悪いわ！

これ以上ダメージを受けるわけにもいかないのです、私は早々にお茶を飲み終えて闇の神の部屋から退出することにした。

75・リラクゼーション？（後書き）

神に愛される人間とありますが、『笑う子も泣く公爵令嬢』のサラサもその一人です。

久しぶりにゼノンとフウカの会話を書いて、楽しかったです。もっともつと甘々にしたかったですけど恥ずかしくて難しいですね。

76・加護の代償（前書き）

永らくお待ちせしました、お久しぶりです。公爵令嬢が一段落したのでこちらに帰ってきました。しばらくはこちらメインにします。

76・加護の代償

私はレイヤに呼ばれてたので光の執務室に来た。しかし生憎レイヤはまだ仕事であつた。出直そうか聞くと、じきに終わるからと執務室にある長椅子に座つて待つこととなつた。そしてじつくりと彼の仕事ぶりを拝見することとなつた。

「フウカ様。せっかく来て下さつたのにお待たせしてすみませんね」

そう私に話かけてきたのは金色の髪、朱金の眼の身体つきの大きな男の精霊。レイヤの側近であるライだ。

執務室に座つて書類に目を通してゐるレイヤ。その傍でライが書類の仕分けをしながらいろいろな説明をしていた。

「こら、ライ。俺が話しかけるのを我慢してとつと仕事を終わらそうとしているのに、お前が抜け駆けするのはずるいぞ」

「そんなことを言われましても。レイヤ様は仕事を終わつたらフウカ様と過ごされるわけだし、すこしぐらい俺が話かけてもいいでしょう。心の狭い男は嫌われますよ」

「大丈夫よ。こうやってレイヤが仕事をしているところを見るのも楽しいから」

つまらない言い争いをしている二人に小さく微笑みながらそう応える。実際、他の神の仕事ぶりをあまり知らないのでもいい勉強になる。特にレイヤのもとには光の領域以外の仕事も多く入ってきているようだ。

真剣な表情で書類に向かつてゐるレイヤの姿は私に向ける表情とまったく違つてゐるのでひどく新鮮だ。

あれから数々の魅力的な神と交流を深めていったが、その中でも

レイヤとゼノンの容姿は随一の秀麗さだ。

絶妙に計算されたような顔のパーツ。だれがみても彼らの顔を美しいと思わずにいられないだろう。だが、その美しさはけっして女性的なものではない。身体付きも均整のとれた筋肉質なものだ。

同じ顔なのに、レイヤとゼノンって本当に雰囲気がちがうのよね。ゼノンはいつもこし意地悪そうな笑みを浮かべているけど、レイヤはその時の感情を隠すことなく顔に出しているのよね。

笑い方もちがうし。ゼノンの誘惑されそうな妖しげな笑みに比べて、レイヤは本当に無邪気な心からの笑み。

どっちにしても威力がすごいので、向けられると心臓がバクバクしてしまうんだけどね。

私は真剣なレイヤの横顔をぼんやりと眺めながら、そんなことを考えていた。

こうやってみるとやはりこの神の国の最高神として君臨しているのだなと、改めて実感してしまった。

それにしても・・・と眼の前のレイヤを見ながらふと昔に言われたことを思い出す。

『俺はお前の夫かせめて恋人になりたいと思っている』

あれから一年半。といってもここは1年が500日なので私の感覚的には約2年が経った。

オリセントとの使命がなければ、レイヤのあの言葉を受け入れようとしてたんだよね。

それを思い出すと頬に熱がたまってくるのを感じて、思わずレイヤから視線を外してしまった。

幸い、二人ともが眼の前の書類に夢中だったのでこちらの様子が

ばれることはなかった。

そうしているうちにレイヤが持っていた書類をライに渡すと勢いよく立ちあがった。

「よし。これで大丈夫だ。ライ、後は頼んだ。ダリヤとカーディーにこれらを配つといてくれ。フウカ。おまたせ」

そう言いながらレイヤが私に近づいてきた。

「分かりましたよ。どうぞ、どうぞ。デートでもどこでも行つてきてください」

ライは受け取った書類を整理しながら、そう茶化してくる。

あれ？この誘いはデートだったの？てっきり新しく加護者になった娘についての話だと思っていた。

かといって断る必要もないので、あえてそんな疑問を口に出したりしないけど。

「うるさい奴はほつといて、さつさと行こう」

レイヤがそう言つて私を手を差し伸べてきた時、突如頭に小さな声が聞こえてくる。

『フ・・・フ・・・カ・・・さ・・・ま・・・』

え！なに？

聞きおぼえがある女性の声。

「キャシー？」

最近、癒しの加護者になった女性の名前を呟く。

最近では『癒しの王妃』とまで言われるほど賢明ですばらしい王妃になった女性。

『あ……りがとう……ご……』

その声はいつもと違って途切れ途切れで絞るような息苦しい声だった。

何かがあった？行かないと！

「ごめん！レイヤ。私行かないと。加護者が呼んでいるの！」

私は早口でそう言うと、彼の返事を聞くこともなくその場から瞬間移動をした。

！！

私は移動した瞬間に一足おそかったことを悟った。

豪華な一室の中、絶えることのない小さな嗚咽が聞こえてくる。

小さな男の子がベッドに縋りつきながら泣いている。その周りにも数人の女性が目にハンカチを当てている。

その部屋一体に悲しみが充満していた。

「おかあさま・・・」

男の子が目を真つ赤にして、ベッドに横たわる女性の顔を覗き込む。

その女性の顔にはやけどの跡が広範囲に残っている。私がいくら治してもいいと言っても頑なに彼女はそれを拒んでいた。

『これはわたくしの咎でございます。傷を癒さないからこそ自分を律する事ができると思っておりますので、見苦しいかぎりではございますがこのままでもいいさしてください』

ここまで生まれ変わった彼女。私は彼女に加護を与えたことを誇りに思っていた。

そんな彼女が今、もうすでに事切れている。

いつかはそうなる運命であることはわかっていたが、それにしても突如で短すぎる別れ。

どうして？何があったの？

私が強く疑問を頭に浮かべると、いきなり映像がフィルムのように脳裏に浮かんできた。

『あの王妃がいるから、いくら攻めても無駄になる』

『癒しの力を持っているからな』

『こうなったら暗殺するしかあるまい』

『だが、相手も警戒して万全の警備をしているだろう』

『なに、王妃を敵視するものはいくらでもいる。そやつらを味方に引き入れれば・・・』

『昔はわがままで傲慢な女性だったくせに、今だと率先して質素な生活を送っているからな。それにいろいろな貴族の不正をあばいたりもしているし、少しでも叩けばほりが出る者にとっては脅威だろう』

『癒しの力を使われないように、速攻性の毒がいいだろう』

『レイムなら無味無臭で死に至るまでの苦痛が少なく、証跡が残りにくい』

『1人、侍女を捕まえた。彼女にさせるんだ』

『お・・・王妃様。食前酒をお持ちしました』

『ありがとう。あれ？あなた、顔色が悪いわね。体調がすぐれないのではなくて？』

『い・・・いえ。大丈夫です』

『そう。無理しないでね』

『きゃー！！王妃様！』

『王妃様が！はやく侍医を！』

『しっかりしてください！』

『残念ながら・・・。ご臨終でございます』

『・・・何が原因だ？』

『おそらく、速攻性の毒でございます。レイムあたりが怪しいのですが、解毒する暇もないので手のつけようがありませんでした』

「キャシー……」

私は全てを知って、彼女の顔にそつと手をあてる。

だれも私の姿を見ていないしそのつぶやきも聞こえていないため、それを咎める者はいない。

こんなに早く失ってしまうの？

私は自分の加護者の死を受け止めることができない。

いやだ。私のキャシーの命を奪った者を許せない。

そう思った瞬間、その場にいた侍女の1人がいきなり大きなうめき声をあげた。

「ぎゃあああ！いたい！いたい！」

映像で出ていた侍女である。顔を両手で押さえて蹲っている。手の隙間から見える顔にはくつきりと赤紫の痣が浮かんでいた。

無意識にそれが私の力によって起こったものであることを悟った。同時に遠く離れた場所で何人もの人が同じように悲鳴をあげているのが脳裏に浮かぶ。

「我が加護者の命を奪ったことを悔いるがいい」

私は気がつけば、その場だけでなく城中に聞こえる声でそう高々と宣告していた。

77・神であるということ

許せない！許せない！許せない！

怒りで頭が一杯になる。

その私の感情の高まりと共鳴するように、呻き声がより緊迫したものになっていった。

「いやあ！お許してください！」

その声にはつと我に返って彼女を見る。

もう顔全体が真っ赤に染まっている。

痣だったものは破れてやけどの跡のように盛り上がっている。

だめだ。これ以上する必要はない。

そう思うのに、力を制御することができない。

「とまってっ！」

だが、そう願ったにもかかわらず彼女の傷はひどくなる一方だ。

このままではむごいやり方で命まで奪ってしまう！

自分のしたことを今さら自覚して身体が大きく震えだす。

そんな身体を暖かいぬくもりが包み込んできた。

「おちつけ。大きく深呼吸して……。そう」

耳元に囁かれた男性の声。それが誰なのか考えるより先に分かった。

「れ……レイヤ」

抱きしめられ、彼の吐息を感じたことで一気に身体のこわばりが解ける。

それにより、部屋中に響いていた悲鳴が止む。

ゆつくりと彼女のほうを見ると、キャシーの顔についていたものと同じ程度のやけどが顔中に広がっている。

抱きしめられたまま、私は自分が起こしてしまったことの残酷さに、体中の血の気が引くのを実感していた。

な・・・なんてことを・・・。

「フウカ。とりあえず、神殿に戻ろう」

背後から抱きしめてくれているレイヤが、頭を撫でながらそう言うってくれる。

「で、でも」

私は否定をしたが、有無を言わずにレイヤが抱きかかえたまま瞬間移動をし、あっという間に私の居室に連れられる。

「彼女の傷を治さないと。私が傷つけた・・・。私は戻るわ」

そう言っただけ瞬間移動しようとするが、レイヤはより一層私を強く抱きしめる。

それは行かせないとつよく主張しているように。事実、気持ちを込めるがいつもと違ってまったく景色が変わらない。レイヤによっ

て力さえも封じられているのだ。

「レイヤ、放して！」

「落ち着け、フウカ。人間としての感情に惑わされるな」

私が彼を振りほどこうとしても、放してくれない。そして彼にしたら初めて聞くほど冷静な声で私に忠告してきた。

「なぜ傷を治さないといけないんだ？」

そう訊ねられて彼の腕の中で抵抗するのをやめて、必死に答えを考える。

「だって・・・私は怒りのまま人を傷つけてしまった。いくらなんでもあれほどの傷を残す必要もなかったのに。だから治すの」

「フウカは人を傷つけるのが嫌か？」

当たり前のことを聞いてくるレイヤに、逆に正直に応えられず言葉に詰まった。

な、なんで、そんなことを聞いてくるの？

「お前は女神だぜ？時として天罰を人間に与える必要もある。女やその他の者が犯したことに對しての天罰として、あの程度のやけどを負うのは生易すぎるぐらいだ。俺が同じ状況になれば、少なくともその場で命を奪っているか、延々と続く苦しみを与えているね」

そう言われて初めて、自分のしようとしていることをなぜ、レイヤが止めるのかを理解した。

ああ。私は自分の身のかわいさのあまり傷を癒そうとしたのだ。人を傷つけないという自己満足のために。レイヤが人間としての感情と言うのは本当に的確だ。

そのことについては冷静に考えるようになったが、それと反して自分の加護者の死のことが頭によみがえってくる。

どうして、キャシーが殺されなくてはいけないのか？

私が癒しの力を与えたから？

そもそもキャシーに加護を与えたことは本当によかったのか？

加護さえ与えなければこんなに若くして死ぬ必要はなかったはずだ。

もっともつと平穏な人生をおくれていただろう。

キャシーが生まれ変わったきつかけを作ったのはビュアスだ。ビュアスに加護を任せていれば……。

私の頭の中は疑問と後悔で一杯になる。

「フウカ。泣きたかったら泣いたらいいぜ」

私を後ろから抱きしめていたレイヤが、前に回って私の顔を覗き込む。

美しく輝かしい顔が私を心配して僅かに眉を顰めている。

「癒しの神のくせに、唇が切れるまで噛みしめて我慢するな」

そう言つとレイヤはゆつくりと顔を近づけていき、私の唇に彼のそれを触れさせていく。

濡れた感触が唇に触れる。その時にわずかに痛みを覚えて初めて彼が言うように唇が切れていることを知った。

労わるようにひどくゆつくりと唇を舐められる。

優しいその感触に、みるみるうちに私の眼頭が熱くなる。

「キャシーが……。キャシーが……」

何度も同じことを言う私に、レイヤは根気よく何度もうんうんと頷いてくれる。

「私が加護したから。だから、殺されてしまった……」

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい……」

私は小さくそう繰り返す。もうその言葉しか出ないのだ。

「加護者には常にそうした危険があるんだ。俺の加護者でも同じさ。彼女は癒しの加護を望んでなかったのか？」

レイヤにそう聞かれて、頭を左右に振る。彼女は会ったびに加護したことのお礼を言っていた。この力があるから今の自分が在ると。

「でも、こうなると分かっているそれでも加護を望んだかわからない……」

「おいおい。何を馬鹿な事言つんだ。未来が予知できるわけがねえだろう。時の神のトキであってもできないことだぜ？」

レイヤがちょっと呆れたようにそう言ってくる。

たしかに、私が言っていることは無茶苦茶かもしれない。だれも未来がわかったらそれを回避するようにするだろうし、神の世界であっても未来がわかるような道具も存在しない。だからキャシーが加護を受けたことで殺される運命だったなんて誰も分かっていなかった。

「ごめん。なんでも自分のせいにしてた」

少しずつ気持ちが落ち着いてくる。レイヤの胸に顔をあてる。どくどくとリズムよい鼓動が聞こえてくる。

人間も神も一緒なんだと、レイヤの体温を感じながらそう思ったところで、遅まきながら自分がレイヤに抱きついている状態であることを自覚した。

「あ、ごめん」

慌てて離れようとしたが、腰にまわされたレイヤの腕に阻まれる。

「せっかくの役得なんだ。もうしばらくこのままにいさせろ」

そう言うにより一層抱きしめる力をこめてくる。それによってレイヤのぬくもりを感じる羽目になった。

そのぬくもりを嬉しいと感じてしまう。特に今は。

私は彼がおちゃらけたことを言いながらも、それが私を慰めるためにしているのだと分かって素直にその好意を受け止めることにした。

しばらくの間、抱きしめられた状態でレイヤの服を濡らし続けた。

77・神であるといつこと（後書き）

ひさびさに早い更新

78・意外な化学反応（上）（前書き）

話が長くなりそうなので分けます。だから短いです

78・意外な化学反応（上）

瞼が重く感じるほど泣いて、ようやく私は落ち着いた。その間中、レイヤは私を優しく包み込んでくれていた。

私はゆっくりと身体を起こして、レイヤから離れつつお礼を言う。

「ご……ごめんなさい。それに、ありがとう。追ってきてくれたのね」

「別に謝る必要なんかないぜ。俺はしたいようにしているだけだ」

レイヤは口元をすこしあげて楽しそうな表情を私に見せてくれる。彼の優しさに触れて幸せを感じてしまう。だが、それはすぐに悲しみに上書きされる。

私はこうしてレイヤやゼノン、オリセントに支えられて幸せを感じている。でも、キャシーはもう感じることもできない。あれほど波乱の満ちた人生を送り、ようやく幸せを掴んだところなのに……。

もう枯れたはずの涙が再び込み上げてくる。

レイヤは小さくため息をついて私に向かって手を伸ばしてくれる。

「泣きたいだけ泣け」

もう一度抱きしめてくれようとしているのだ。

それにすがろうとしたとき、すぐそばの空間がゆがむ。

あれ？

気が付いたら再び力強い腕に抱きしめられていた。先ほどと違う腕に。

「おや。フウカ。レイヤに虐められましたか？」
「ゼノン！」

私の背後に現れてゼノンが、私を包み込むように抱きしめている。さきほどのレイヤより若干低いぬくもりが、触れあった肌から伝わってくる。

目の前にはレイヤが小さく舌打ちをして、伸ばした手をひっこめて手を組んだ。

「んなわけあるか。お前のように加虐趣味はない」
「失礼な。私にもありませんよ」

レイヤとゼノンが言い合っているが、二人ともお互いの顔を見ずに私の顔を覗き込んでいた。

「何があつたか見てもいいですか？」

ゼノンが優しくそう問いかけてきてくれて無言で頷く。
レイヤとゼノンだけが出来る記憶を読み取る力を使うと言っている。

説明するより速いし、私の口から出来事を伝えるのはつらいので了解した。泣き出してしまったので言葉にならないのも理由だ。

しばらく私の頭に手を当てる。

それは本当に一瞬だった。

何があつたか悟つたであろうゼノンが、レイヤとよく似た優しい眼差しをこちらに向けてくれる。

「よくがんばりましたね。フウカ」

そう言つと、徐に私の顎に手を当ててくる。

え？なに？

気が付いたらゼノンの顔が見えないほど接近しており、ぺろりと舌で唇を舐められた。

「お、おい！」

「まだ傷が残っていますので。血も滲んでいますしね」

レイヤが慌てて抗議の声をあげるのに、ゼノンは私を抱きかかえたまま平然と答える。

私は思わず泣くのをやめてゼノンを見上げた。

その加減で目じりに溜まっていた涙が私の頬をつたる。

その涙が唇まで到達したとき、信じられない奇跡が起こった。

「え！」

私の唇から小さな輝きが出てくる。

その光の珠は私のオーラと同色である。私のオーラが分離したようだ。

それが何かと探る間もなく輝きがみるうちに大きくなり人形ひとなりになっていく。

そうして私がよく知っている女性の外見を形成していった。

「・・・キャシー？」

眼の前の現象が信じられなくて手を口元にあて、おそろおそろ名前をよびかける。

すると、もうすでに光の珠から人形となっている彼女は今まで閉

じていた瞳をゆっくりと開ける。

そうして私のほうを見て目を僅かに見開く。

「フウカさま？あれ？わたくしは死んだはずでは？」

彼女が私に向かって訊ねてくるがこちらでも分かっていないので返答しようがない。

そんな私の耳にゼノンのつぶやきが入ってくる。

「おどろきましたね、精霊に転生しましたか」

精霊に転生？

そう言われて改めて彼女を見直す。

容姿は亡くなった時より数年ほど若返っており20歳ほどである。生前はほとんどの時間を縛っていた金色の長い髪がいまは波打っている。さらに頑なに治すのを拒んでいたやけどの跡は完全に消滅して、本来の美しい肌となっている。当然つぶされていた切れ長の右目もブルーダイヤのように輝きを見せている。

そして何よりそのオーラは私のオーラと同じ色をしていて、セレーナやノアと同じ輝き方をしていた。

「あいかわらずフウカは異例づくしだな、おい。癒しの精霊に転生させるか？ふつつ」

「おそらく、フウカの血と涙に私たちの力が反応してこうなったようですね。本当に興味深い出来事です」

レイヤの軽口にゼノンが分析を述べる。

そういえば私の唇が切れて血が出ていたのを、レイヤとゼノンが

キスしてその上に涙が落ちてこうなっただけ？

「あ・・・あのぉ・・・」

私以上に困惑している彼女に気がついて、私は気を取り戻して優しく声をかけることにした。

79・意外な化学反応（下）

「キャシー。貴女は癒しの精霊になったみたいね」

「え？まことですか？」

私が彼女に今の状況を伝えると、信じられないとばかりに目を見開いて自分の姿を見まわしている。

私としてもこんな事態になるなんて見当もつかなかっただけに、本当かと聞かれても答えにくい。

「ゼノンが言うように色々な偶然が重なって、力が凝縮されて誕生したようだな」

「そうですね。わずかですが私とレイヤの気も感じますしね」

私の唇に二人が舐めただけでそうなるなんて。

今さらながらその感触を思い出して私は思わず顔に手を当てる。

見えないけど間違いなく頬は赤くなっているだろう。

幸いそんな私に気づくこともなく、キャシーは慌てて頭を大きく下げるばかりか、土下座をする。そして興奮気味に少し上ずった声をあげた。

「し、失礼いたしました。光神レイヤさまと闇神ゼノンさま」

あゝそう言えばキャシーにとってはまさしく顔を見ることもできないほどの神か。私はもともとこの世界の者ではなかったのだから、それほどレイヤやゼノンの存在を崇高のモノとは認識できなかったけど、ギリシャ神話で言えばゼウスとかみたいなものだからいきなり会ったら土下座しちゃうわね。

「堅苦しいことはいらねーよ。まあフウカ、よかったな。これでも泣かなくても済むだろう」

レイヤの言葉でたとえ精霊となったとしても、キャシーが復活してくれたことがじわじわと実感できてきた。

もつと確かめたくてゼノンの傍から離れて、未だに土下座をしている精霊の許に近づく。

地に付けている両手を包み込むように握って、ゆっくりと彼女を引き上げた。

「キャシー。ごめんなさいね。私が加護をしたせいであなたはこんなに早く命を落としてしまった」

生まれたばかりの精霊はおそろおそろという様子で私の顔を見上げてくる。その眼はかすかに潤んでいる。

「フウカさま。謝らないでくださいまし。今のわたくしがあるのはほかでもない、貴女さまに癒しの加護を頂いたおかげです。それに短くても十分に幸せでした」

微笑みながらそう言う精霊が愛おしくて思わず私は抱きつく。

「ありがとう、キャシー。本当にうれしい」

抱きつかれたキャシーはすこし虚をつかれたように身体を硬直させていたが、すぐに力をぬく。

「こら、フウカ。神の威厳もあつたもんじゃーないだろ?」

レイヤが私にそう突っ込んでくる。しかし、そんなレイヤに対し

てゼノンが反撃をしてくれた。

「レイヤがそれを言いますか？最高神でそんなに口悪いのはいかなものでしょうね」

それ、同感だわ。最初、どこかのヤンキーかと思った。

「いつでもどこでも、その座を譲るぞ、ゼノン。俺はなりたくてやっているわけじゃあねーよ」

レイヤがえらく真剣にゼノンにそう詰め寄ると、ゼノンは呆れた口調で言い返す。

「闇が最高神になれるわけないでしょう」

闇神が最高神ってなんだか暗黒の時代みたいになるわね。それは確かにまずい。

「えっと・・・」

完全に存在を無視された腕の中の精霊がとまどいの呟きをあげる。そうなっても無理ないだろう。何といっても神の？1と2が軽口をたたき合っているのだから。

「これからいろいろな神と会うことになるけど、たぶんイメージが崩れる神も多いと思うから覚悟しておいてね」

私はキャシーにフォローの言葉をかける。

「いや、フウカも十分イメージとちがうとおもっぜ？」

「そうですね。料理までしている女神などフウカぐらいですからね。まあおいしいですけどね」

後ろでいままで言いあいしていたくせに、双子がそろって私をけなしている。

「キャシーと言ったか？人間から精霊になったことで不安も多いだろうが、ここにもっと規格外なやつがいるから安心しろよな」

異例つてもしかしなくても私のこと？

レイヤがそう言うときキャシーは驚いたように私の顔を見上げてくる。

「あのね。私も人間から女神になったんだ。それもまったく違う世界の人間だったんだよね」

「まあ・・・！」

理由を告げるとキャシーはますます眼を大きくし、口に手を当てたままこちらを見てくる。顔に傷があった時より表情が豊かになっている。

「そんなわけで、イメージと違うだろうけどこれからよろしくね」
「わたくしのほうこそ、こうして絶えるはずだった命を救ってくださりありがとうございます。フウカさまのお傍で仕えさせていただけなんて、僥倖（きやういつ）の極みでございます」

キャシーはそう言うとき改めて深々と頭を下げる。

そんなに畏まらなくてもいいんだけどなあ。まあ付き合っていく

うちになんとかなるでしょ。

こうして私は癒しの精霊を手に入れた。
羨ましがったハヤトと記憶の神のビルパケに、その手段をあれこれ詮索される羽目になる。

「キャシー。ちょっといい？」

転生してから癒しの精霊として、常にそばにいてくれようとしてる彼女に声をかけた。

その表情は時々切なく儚いものになるのを私は気が付いていた。
と同時にその理由も悟る。

自分の子供や主人である王や国のことだ。

志半ばで引き離されたのだ。心残りがないわけがない。

私だつていきなりこちらに連れてこられて隼人や両親のことを思いだすことは多かった。必死に考えないようにしていたし、私の存在があちらで消滅していたことで踏ん切りがついた。さらにはハヤトが来たのでこれが定めだったんだと割り切れるようになった。

だが、キャシーの場合すぐそばに彼らがいる。だが精霊になった以上会うことも自分の無事を知らせることすらできない。それに精霊になったと言うことは寿命がなくなったに等しい。愛おしい主人である王はおるか、息子やまだ生まれていないが孫が亡くなっても存在しつづけなくてはいけなくなったのだ。

蘇ったのは決して良いことばかりではない。

そう思った私は、一代決心をして彼女に提案をした。

「あなたは癒しの加護者としてやり残したことがたくさんあるわ。だから今から人間界に降りてある王国の助けをしてほしいの」

そう言うときゃシーは驚愕し慌てて辞退してくる。ある王国が自分の国であることを理解しているようだ。

「で、ですがフウカ様のおそばに・・・」

「私は大丈夫よ。あなたが満足するまで見守ってあげて。あまり姿を見せたりしたらだめだけど、王族の一部ぐらいならたまに見せてもいいから。力はあなたを信用しているから自分の判断で使ったらいいよ」

「・・・お心遣いありがとうございます。ですが、わたくしの私情だけでそのようなことするのは・・・」

私の提案に対して喜びを隠しきれない表情をしながら、それでも断ろうとする彼女にすこしきつめに命令することにした。

「きゃシー。これは私からの指示よ。あなたの私情ではない」

そう言うときゃシーの眼から一筋の涙がこぼれた。

「これからね。おそらくほとんど永遠に近い時間を私たちは過ごさなくてはいけないの。今、彼らのそばにいないと絶対後悔すると思う。本当は人間に戻してあげたらいいのかもしれないけど、やり方もわからないできれば精霊としてそばにいてほしいし。だから何年どころか何百年でもいいから気が済むまでいつてらっしゃい。あ、声かけた時はもちろん、月に何回かは帰ってきてね。そして人間界の様子とか教えて頂戴」

私の言葉を聞いて、今まで見た中で一番美しい笑顔を私に見せた

かと思うと、ゆっくりと頭をさげてこう言う。

「はい。その使命ありがたくお受けいたします」

キャシーはその姿のまま私の目の前から姿を消した。

79・意外な化学反応（下）（後書き）

次回は人間側です

80・奇跡妃の終焉（上）（前書き）

奇跡妃の相手役である王視点です。

ものすごく長くなったので3部に分けます。

フウカがほとんど出ずに糖度は皆無ですが、それを期待の方、しばらく待つてください（笑）

本当は『癒しの女神の怒り』というサブタイトルにしたかったのですが、思ったより奇跡妃よりの話になってしまったので、こういうタイトルになっちゃいました。

80・奇跡妃の終焉（上）

「キャシー」

妻である女性がベッドの上で眼を閉じている。まるで寝ているかのような様子であったが、その瞼が二度と開かないことを理解していた。

そつと彼女の頬に手を当てる。

まだ温かい体温があると感じるのは自分の望みからか？

「俺がお前を強引に欲しがったからこんなことになってしまったのか？」

ダイアルが彼女と会ってお話した時の第一印象は『選民意識全開の傲慢な貴族の娘』であり、あまり近寄りたくない人種であった。だから自分の素性は誤魔化した。ばれると自分に対して色目を使ってくる可能性が十分にあったからだ。

彼女の事情を突っ込みたいところ満載であったが一通り聞いて、

「それはすべてそなたの咎であるな」

とだけ切り捨てた。

いままで彼女にそれほど冷たい言葉を投げかける者はいなかったのだろ。何を聞いたか信じられないとばかりに目を見開いてこちらを凝視している。

その表情があまりにも滑稽だった。甘ったるい考えを恥ずかしくもなく口にする彼女に嫌悪感があふれる。

「そなたは醜い。姿形ではなく、心がな」

その言葉を残して彼女の前から姿を消した。この時、まさか自分がそんな彼女に心を奪われることになるなど、微塵にも思うことができなかった。

彼女を連れて王宮に戻る事になった。どうせ同じ方向に行くのだ。べつに送るのは手間ではない。

あれほど冷たいことを言った自分に頼むのが心底から嫌なのか、くやしそうな表情でお願いしてきたが、ダイヤルはもととその予定だったことはあえて言わなかった。

だが、道中で予定外のこと起きる。

立ち寄るはずだった村が崩れ落ちているのだ。

小さな村であったが、ほとんどの家が焼かれてただの廃墟と化している。そこら中に村人の死体が転がっている。

生き残りの者に事情をきくと盗賊が領地を荒らしたと言う。さらに数多くの若い女性たちが連れ去られたと。

見過ごすことなどできないので、盗賊を討伐することにした。

連れてきた彼女には村に残って医者に従うように指示をする。最初は拒否していたが強く言い聞かすとしつぶという感じで従うようになった。

どうせ、自分が見ている時だけだろうがな。

ダイアルは確信に近い予想をしていながらも、時間が惜しいので彼女は放置して討伐に出向いた。

部下を呼び、指示をだして討伐する。

さすがに人数も多くて容易ではなかったがこちらは厳しい訓練を乗り越えた精鋭部隊であり、数日の間に頭首に縄をかけられた。

連れられた女性たちも大半を救い出すことができた。

その者たちを連れて帰って、そう言えばここに彼女を置き去りにしたことを思い出す。そのことを村人に聞くとすこし興奮したように手を結んで身に覚えのないことを感謝される。

「殿下は、本当にすばらしい方を私たちに寄こしてくださいました。本当にありがとうございます」

なんのことが分からない。くわしく彼女の様子を聞き、別人ではないかと思わず疑ってしまった。

あんな自分の身の上しか憐れることのできない頭がからっぽな女が、寝る暇も惜しんでみんなの看護に努める？

1人1人に励ましの声をかけて痛いといえそこをさすったりしている？

ありえない。

思わず小さくそうつぶやいて彼女の姿を探した。

すぐに見つかる。小さな小部屋だった。

1人の男性がベッドに寝かされており、その前で彼女が腰をおって布で顔を拭いている。

邪魔にならないように質素な服のそでを布で縛っていた。同様に

今は髪を後ろにきつく縛ってやけどの跡をさらけ出している。今までやけどの跡をはずかしがって顔を髪で隠すようにしていたのである。

「おい」

声をかけると、彼女はびくつと身体を震わせてからこちらを振り返った。

その表情にまた驚いてしまう。

一つになったブルーの瞳が真っ赤に染まり、涙がこぼれおちているのだ。

だが、その眼の輝きは見たこともないほど強いものになっていた。

「その者は亡くなったのか？」

「はい。さきほど息を引き取りました」

その声も本人であることを疑うほど悲しみがあふれたものであった。

「辛い目に合わせたな」

「いえ。わたくしなどよりこの村の者たちのほうが、よほど辛い目にあっております」

その言葉を聞いて、彼女が生まれ変わったことを実感した。だからこそ自分の素性を話してもいいと思った。

「そうか。今まで御苦労だった。これより王宮に帰って事態を父上に説明するつもりだ。ついでにお前も送ってやるから準備しなさい」
「まさか、ダイアル殿下でございますか？」

思った以上に彼女の頭の回転は速く、父上と言っただけでダイアルの身分を感知してきた。

肯定という意味で頷くと、彼女の態度は思ってもいなかった方向に豹変した。

「お願いでございます。わたくしはこのままここで1人でも多く救いたいのです。救うことはできなくても救う手助けをしたいのです。だから、ここに捨て置きください。僭越なことをもうしますが、殿下は一刻も早く王都にお戻りになり、1人でも多く医師を派遣してください。お願いでございます」

ダイアルは信じられなくて彼女の顔を凝視した。

美しい輝きをしたブルーの瞳に吸い込まれそうになる。別荘にいたときは濁ったような輝きしか見せてなかった。それが今は混じり気のないものに変化している。

ダイアルにはそれが彼女の魂の色に見えた。

顔のやけどの跡の醜さなどその輝きを前にまったく気にならない。結局彼女の言葉を受け入れて、彼女を残して王都に向かった。

王である父に許可をもらい医師団を率いて村を目指す。

その道中でまた信じられないいうわさ話を聞く羽目になる。

癒しの女神フウカに加護者が現れる。

その加護者の力によって盗賊に荒らされた村が癒されたと。

ここまで聞いて、それが彼女であるとまったくもって思わなかった。

医師団には無駄足になるかもしれないと忠告しながら村へと向かう。

そして、近づくにつれて加護者が彼女であることを耳にした。

顔にやけどの跡がある女性で、懸命にけが人たちの看病に携わっているらしいと。

ダイアルはいてもたってもいられなくなり、部下に指示した後一足さきに村へと馬を走らせた。

そして、そのうわさが現実であることを目にする。

あれほど教会中に広がったけが人、病人の絨毯が広いホールから消えている。

その代わりに明るい声がそこら中から聞こえてきていた。

「フウカ様の加護者様のおかげだ」

「ありがたい、ありがたい」

「自分の顔の傷より我らの傷を選んでくださったのだ」

村人に彼女の居場所を聞くが、数人の村人を連れてどこかに行ってしまったと言う。さらに一通の手紙を差し出してきた。

美しい教養豊かな令嬢の字が並んでいる。

ここに連れてきたダイアルへの感謝とここでの出来事、そして親元に戻らずに旅に出ると淡々と書き綴られていた。

貴族の女性が旅に出るなど、あり得ない話だ。それに癒しの加護者だ。他の国に誘拐される危険は十分にある。

ダイアルは連れ戻すために公務の合間に彼女を探すことにした。精鋭の内偵を使って彼女を内密に護衛させる。

ダイアルはその報告書に眼を通した。

81・奇跡妃の終焉（中）（前書き）

ダイアル視点です。

最初は報告書をダイアルが読んでいるという形です。判りにくいかな？

81・奇跡妃の終焉（中）

彼女はまず自分のせいで不幸になった者たちの身内の者に懺悔を
しに行く。

まずは自殺してしまった恋人たちの家へ。

最初は門前払いであったが、門の前で雨の日も風の日も雪の日ま
で立っている彼女に折れる。

そして彼女は娘、息子を亡くした夫婦に土下座をする。

最初は自分の子供たちの死の原因である彼女を糾弾した。それを
彼女は何一つ反論をせずに頭を下げる。

彼女がしたことは婚約していた男性にすこし気をもたす発言をし
ただけなのだ。その咎で愛の女神ビュアスから天罰を受けている。

それを癒しの力を持つているにも関わらず治そうとしない。

だから娘を亡くした父親は彼女に最後にこう告げた。

「貴女は本当に些細ないたずらをしたただけなのは分かっている。で
も娘は戻らない。だから、我らだけは許すことはできない」

さらにこう続ける。

「貴女は反省していることは十分わかった。だからこれからはその
罪を背負いながら生きてほしい。癒しの加護を持っているなら、1
人でも多くの者の命を救いなさい」

その言葉を受けて深く頭をさげて家を後にした。

次に服を切られて、40歳も歳の離れた貴族の後家として嫁入した女性の許へ向かう。

女性は2歳ぐらいの女の子を抱きかかえて彼女を出迎えた。彼女が謝罪の言葉を述べようとする前に女性が口を開く。

「その醜い傷を残しているのであれば、わたくしがあれこれ言う権利はございませんわね」

それに・・・と話を続ける。

「人から見たら不幸な結婚だと言われるでしょうけど、そのおかげでこの子を産むことができました。幸い、亡くなった主人も年は父より上でしたが、愛情を持って接してくださいました。身楽な未亡人の生活を送っているのもう恨んでいませんわ。だから詫びは必要ありません」

そう言う彼女に家の中へと誘う。だが、彼女は屋敷入ろうとしなかった。深く頭を下げていらないと言われた謝罪をする。女性は彼女の真摯な言葉聞いて、その謝罪を受け入れた。さらに会うまでいい気味だとすら思っていた傷を治すように助言する。

だが、彼女は小さく頭を振りその好意を断った。

「フウカさまの癒しの力を自分の為に使用しないことをわたくしは誓ったのです。この傷はわたくしへの戒めでございます」

これだけを言うと彼女は頭を下げながら門から出ていった。

過去の自分の過ちを理解しそれに向き合ったか。

ダイアルはこの時、初めて彼女ともう一度会いたいと強く切望した。

そしてようやく会うことが叶った時、一目で自分の横に座らせるのは彼女以外あり得ないと感じる。

直感に素直に従って求婚をする。

だが、彼女の返答はいつも同じような内容である。

「ありがとうございます。このような分不相応な申し出を頂きました、身に余る光栄でございます。ですが、わたくしはこのような顔でございますし、なにより罪状がないとはいえただの罪深いものでございます。どうぞお見捨ててくださいまし」

そう言うては眼の前から消える。だから卑怯にも癒しの加護者なのだから、国が管理しなければいけないことと告げた。だが、彼女の反応は思い通りにいかなかった。

「わかりました。王都に帰りましょう。ですが、何も妃とならなくても臣下の1人としてお仕えすると示せばよろしいかと思われます」

その言葉通り、呼ばないかぎり王宮に近寄ろうとしない。

どうしようかと思案しているうちに父が亡くなりダイアルが王冠を引き継ぐことになった。その時も今まで以上に熱心に求婚するが、妃であることすら拒んだ彼女が王妃になることに素直に頷かない。

頑なな彼女を外堀から埋めてなんとか口説き落とし、彼女の頭に王妃の冠を載せることができるまで2年の年月を要した。

彼女自身が、王都に戻ってから癒しの力を分け隔てもなく民に与え、自分の実家のお金や寄付などで様々な救護所や孤児院を作ったために、『癒しさま』の名称で絶大な人気を誇っていたことも王妃に据えることができた一因だ。

王妃になつてからは今まで以上に忙しく勉強にも励み、貴族の不正を暴くことすら始めた。

だが、彼女は目立ちすぎた。

少しでも後ろめたいところがある貴族にとっては脅威でしかなかった。

民に絶大な人気のある王妃を自分たちの手で消すことはもちろん、降ろすことはできない。非難と言う刃がブーメランのように返ってくるのが分かりきっている。

ではどうすればいいか？

そして狡猾な貴族どもは他国と手を組んで王妃暗殺を企てたのだ。

ダイアルが王妃の訃報を聞いたのは、王都から辺境の地へ慰問の旅の最中だった。

報せの者を蹴飛ばす勢いで馬をひるがえ翻し、力強く鞭で馬の尻をたたき、幸い、ここからなら最速で数刻で帰ることができるはずだ。

ダイアルは後ろから慌てて追いかけてくる側近の者たちにかまわずに、必死になつて馬を走らせた。

休憩もせずに走らせたおかげで、その日のうちに王宮に帰ることができた。

馬を放置し、一目散に王妃の部屋がある最上階を目指す。

すれ違った者たちがいきなりの王の帰還に、慌てふためいている。だが、ダイアルが階段を上っている最中に頭に響いてきた美しく、厳かな声が鳴り響く。

『我が加護者の命を奪ったことを悔いるがいい』

ダイアルは思わず身震いをしてしまう。

今まで幾度となく戦場に足を運び、命のやり取りをしてきた。そんな彼ですらその声に畏怖を感じてしまう。

その不思議な声が誰のモノなのか、口にするまでもなくわかっていた。

ダイアルは自分が出せる最速の早さで走って、目的の部屋の扉をぶち破る勢いで開く。部下が開閉するのを待つ暇も惜しいからだ。

そして信じられないモノを目にする。

侍女の1人が大きな声をあげて泣き叫んでいるのだ。

「いやあ！お許してください！」

侍女は蹲りながら顔を両手で押さえている。

その手のひらの隙間からは、まるで生きているかのような勢いで痣が広がっている。

だが、すぐに悲鳴は止み、荒い呼吸にかわる。

ここでダイアルはハツと思いだし、王妃を探す。

ベッドの上でまるで眠っているように横たわっていた。その傍でダイアルとキャシーの息子がベッドに縋りついたままこちらを見ている。

「おとうさま・・・」

手を伸ばして息子を抱きかかえる。ひどく怯えて身体中が震えていた。

息子になんと声をかけていいかわからずに、ただ震えを止まらせるべく抱きしめる。

そうしているうちに、痣が広がった侍女が気を失ってその場に倒

れこんだ。

「その者を牢にいれる。それから、この国であざが浮き出た者を徹底的に調査するんだ。今日中に報告書をあげる」

ついできた部下たちにそう命令した。

「数分でいい。この場から離れてくれ」

息子の乳母に息子を預けて、その場にいる侍女たちを下がらす。

ダイヤルは閉じられた美しい形の唇にそっと自分のそれを触れさす。

いつもと違って触れた唇はひどく渴いていた。
硬く閉じられた左の脛の上にも口付けを残す。

もうこの脛が開くことはない。あのブルーの生き生きとした輝きを見ることはできないのだ。

「せめて俺が全面に立っていればこうならなかった」

彼女がそれを拒んだのだが、なぜもっと強くそれを主張しなかったのか、悔やんでも悔やみきれない。

『王が自ら嫌われ役を買って出ることはございません。わたくしには癒しの加護がございますから大丈夫ですわ。お任せください』

そう言われるがまま、その言葉に甘えていた。

「お前の敵にはフウカさまが目印を付けてくださった。必ず罪を明らかにして裁いて見せる。お前の死を無駄にしない」

ダイヤルは齒を食いしばりすぎて唇から血が流れるのも構わず、彼女の身体を抱きしめて声を殺して泣いた。

82・奇跡妃の終焉（下）（前書き）

82・奇跡妃の終焉（下）

国内で顔にあざが浮き出た者は4名。実行犯である侍女に最近急に力を付けてきた伯爵とその腰ぎんちやくの子爵、さらに伯爵とは無関係にあつたはずの公爵である。

王妃の部屋から伯爵と子爵の不正の調査書が次から次へと出てくる。かなりの額の着服を示していた。もしこれが事実であればこれらの領民は、かなりの額の税金を強いられていることとなる。

まだ調査段階であつたが、癒しの加護者である彼女ですら消そうとするのだから黒だと言っているようなものだろう。

侍女は子爵の推薦であがつた者だ。詳しく調査していくと子爵と愛人関係にあつたのだと言うことが判明した。

ここまでは数日の間に調査が終わる。

もしあざが浮き出なければ、ここで調査は終了していただろう。

だが、王族と縁続きの公爵までにあざが浮き出ていた。必死に隠しているが間違いなく侍女と同じようになっていく。

伯爵と子爵の勢力とは、どちらかと言えば相反する勢力にある公爵。王であるダイアルにとっては大叔父にあたる。

『癒しの女神の怒り』を口実に徹底的に調査をした。

そして、信じられない事実が浮き彫りに出てきた。

それは大叔父である公爵による人身売買。この国では禁止されていたために、隣の国に密輸していたのだ。

さらに同盟を結んでいたはずの隣の国が、公爵と密通していた。

もともと王族でありながら配下に下ることが公爵には屈辱だったようだ。そんな彼の耳元で隣の国の王族の1人が甘言を吐く。

『あなたが王にならないのはおかしい。私どもが協力します。ですがあの王妃によって、あなたの知られるわけにはいかないことま

で暴かれてしまいかもしれません』

それなりに聡明であつたが、もともと王妃が目障りで仕方なかつた公爵は、欲にかられて乗せられるまま王妃暗殺を企てたのだ。

公爵とすれば捨て駒のごとく伯爵や子爵を使つたのだが、『女神の怒り』が公爵を見逃してくれなかつたために罪が明るみに出る。

ダイアルが書面に署名をしたことで、侍女を含めて4名とも毒を服用し自害することとなつた。

人気絶頂だつた王妃の暗殺に対して、民衆の怒りは凄まじいものであつた。

瞬く間に義勇兵が集まり、隣国との開戦を望む声が王宮にまで聞こえてきた。

最愛の妃を失つたダイアルとしても、隣国を許せるはずもない。気持ち是一緒だつた。

だが、当の王妃の過去の言葉が遮る。

『もし、あなたが侵略のためにこの癒しの加護を利用されるのであれば、わたくしは離縁させていただきます。フウカ様から授かつたこの力を自分の利の為には使わないと、わたくしは誓いました。たとえ命を落とす羽目になつても、それは覆すつもりはございません』

そう言われたときにダイアルは自分の代で、他国に攻め入ることはいないと彼女に誓つたのだ。

「誓いを破ることを許してくれ。キャシー」

ダイアルは悩みながらも、宣戦布告をする書面にサインするために筆をとる。

その時、ダイアルは気配を感じてゆっくりと息をのんだ。

侵入者か。

筆をゆっくりと下ろしながら、机の下にある逆の手で懐の短剣の鞘を握る。

逸る呼吸を意識して整え気配を探る。

その気配が動いた瞬間、短剣を窓の方向に投げる。

バリン！

窓が割れるとともに、大きな影が下の方向へ落ちる。

「うわぁー！」

呻き声が響いたのちに、ドスンと鈍く大きい音が聞こえた。

「最初からキャシーでなく俺を狙っていればいいものを」

ダイアルは割れた窓から地上を見る。息絶えた男の死体の周りに兵たちが集まってきているのを見届けながら、淡々とそうつぶやく。

「ちっ。まだいるのか」

気配を再び感じて、腰の剣の柄に手をかける。だが、こちらが気配のありかを見つける前に、小さな珠が飛び込んでくる。

それを悠々とよけたのだが転がったそれを見て、自分の失態に気

がついた。

珠であったものが机にぶつかり、形をぐしゃりと崩している。そして一気に甘ったるい匂いを放出させた。

「！！」

それを嗅いだ瞬間に身体にしびれが走る。

しびれ弾か。しまった！油断した。

腕で口と鼻を押さえて吸わないよう努める。だが、末端の指先から力が入らなくなってきたのが自分でも分かった。

廊下からは激しい足音が近づいてくる。臣下の者たちがこちらに向かっているのだろう。

だが、彼らが到着する前に破れた窓から1人の青年が飛び込んでくる。

しびれ弾の匂いを吸わないように大きな布を顔に巻いているので、彼の容姿はよくわからない。

「御命、頂戴いたします」

侵入者は静かにそう言いながら、こちらに刃を向けてきた。

しびれのある身体で必死によける。

こんなところで倒れるわけにいかない。王妃の……キャシーの敵を討つまでは！

ダイアルは自分の左手で自分の剣を握り、勢いよくひこうとした。痛みでしびれを忘れさすためだ。

だが、次の瞬間、いきなり部屋の空間にまばゆいばかりの輝きが

広がった。

その光がダイアルを包み込んだ瞬間に、身体中からしびれが消滅する。

光の正体は何なのか、ダイアルには不思議なことにすぐに分かった。

「お前にくれてやる命はない！」

剣を大きく一振りして眼の前の侵入者を切り払う。返り血を一身で浴びながらダイアルは光の中心に目をやった。

「キャシー？」

光の中心は人間の形をなしていなかったが、ダイアルはそれが自分の最愛の人であると確信していた。

『いいえ。わたくしはあなたの王妃であるキャシーではございません。癒しの女神フウカさまにお仕えする精霊でございます』

光から頭に直接響く声。その声はたしかにキャシーよりすこし高めの声であった。しかし、その口調は彼女のもの。

いくら顔の傷を治すように言っても頑なに拒んだ彼女。望みを聞くといつでも自分のドレスや宝石より孤児院や救護院への施しだった彼女。

たとえ否定する言葉であっても、再びそんな彼女の声を聞けただけで涙があふれてくる。

「精霊としてでもいい。姿を見せなくてもいい。どうかそばにいてくれ」

ダイアルは血と涙で顔をぐちゃぐちゃにさせながら、光に向かって頭を下げた。

キャシー・ハレ・ラインコヴァ享年25歳

第4代ラインコヴァ王ダイアル・セレデカ・ラインコヴァの王妃。癒しの加護者であり、『癒しの王妃』、『奇跡妃』と一般的に伝えられている。

自分の美貌を鼻にかけた彼女に愛の女神ビュアスから天罰が下ったことで改心する。改心後の行動が認められて、癒しの女神フウカから加護を授かることとなる。ダイアル王と結婚し、後世まで称えられる偉業を残すほど聡慧な王妃となる。

だが貴族社会の革命を図ったために、隣国のアランダ王国の策略で貴族に毒殺される。

その際に癒しの女神フウカより数名に天罰が下ったと伝えられている。そのときの様子を鮮明に描かれた絵画『癒しの女神の怒り』は作者不明であるが、国宝の一つとなっている。

女神の怒りを恐れたアランダ王国から、異例の陳謝の表明とともに多額の賠償金をラインコヴァ国に差し出すことになる。

それでも開戦を望む声が広がったが、王自ら民に向かって演説を行い戦争に発展することはなかった。

王でなく王妃が精霊に転生しその場で演説をしたという逸話もながれているが、真偽のところはわかっていない。

ただ、ラインコヴァ王国が独立中立国となったのはこの時代からであり、のちに一番最古の王朝となる。そして、独立中立国という立場にいながら他の国に制圧されずに済んだのには、癒しの加護がその国に長年にわたって残されていた為だと言う見方が一番強い。

82・奇跡妃の終焉（下）（後書き）

ようやく人間側おわりです。長かった。難産だった^^; ;
人間側を期待してくれた方、期待にお答えできたかすごく不安で
すが・・・。

次からフウカに戻ります。ようやく糖度たっぷり話に・・・でき
たらいいな（笑）

83・自意識過剰でした（前書き）

ようやく、フウカ視点です。

83・自意識過剰でした

「で？そろそろ教えてくれよ」

私の右前で腕を組んだまま黒髪の少女が口を開いた。逃がさない
とばかりにスミレ色の瞳を光らせて私を睨んでいる。

服装が首の詰まった白い上着と黒いズボンなので中性的に感じる。

「そうじゃ、そうじゃ。観念して教えるのじゃ」

私の左前・・・つまり少女の隣のいる小さな老人がそれに同調す
る。その老人は彼女の胸あたりまでしか背がない。

「ハヤト・・・ビルパケさん・・・」

私は詰め寄る二人の名前を呼ぶ。

少女は元弟で現娘である守護の女神ハヤトである。神に転生して
性別が男から女になったために、かなりの戸惑いとショックを受け
ていた。それに追い打ちをかけるように求愛者が次から次へと現れ
た為に、一時期文字通り私の部屋に引きこもりになっていた。それ
も私と数人以外侵入できないように鉄壁のバリアを張ってだ。

2年経った今では引きこもりから脱出しているものの、求愛者に
対してはかなり冷たい態度で切り捨てている。

まあ無理もないけど。

元々男だったのだ。男の求愛など冗談ではないという心情だろう。
キャシーが癒しの精霊となった事を知ったハヤトは、ここ数日会
うたびにこんな調子である。

そして、もう一人。

「ほれ、ちゃっちゃと吐いてしまふのじゃ。癒しの精霊の誕生の流れをな」

この世界ではめずらしいと言うか、神で唯一だろっ年老いた姿の記憶の神、ビルパケ。その皺だらけの顔にもつと皺を作りながら聞いてくる。初めて会ったときからこんな調子だった。

『おもしろい。異世界の人間がこの世界の神になるなど。ふむふむ。記憶の神としてその事実の解明をしなくてはな。何事も正確に記憶せねばならんのじゃからな』

そして人間界に飛ばされてから再び帰ってきた時も、ハヤトを産んだ時も興味津々に説明を求められた。

『フウカは本当に異例尽くしで面白いな。記憶を残しているがいつもいつも驚かされることばかりじゃ』

そんな事を言う研究オタクな彼が、こんな初めての現象を見逃せてくれるはずもない。

しかし……。

私は詰問者を眼の前に、思わず言葉を詰まらせてしまふ。

い、言えるわけないじゃない！レイヤとゼノンにキスをされた上に、私が泣いたからだなんて……。

ビルパケはともかくさすがにハヤトに、こんなことを言うのは恥ずかしすぎる。

聞いてもハヤトには無理なんだから聞かないでよ。

ついそんなことを思ってしまう。

「た、ただの偶然よ。いろんな現象が重なり合ってそうだったみたいなの」

嘘は言っていない。それがどういう内容なのか言っていないだけだ。

「そうか。そうか。じゃあ一からその時の行動、状態を隈なく教えるのじゃ」

なんとなく子泣き爺を思い起こさせるような容姿のビルパケが、逃がさないとばかりに私から視線を外さずに近寄ってくる。思わず私は後ずさってしまうが、下げた足が壁にぶつかってしまい追いつめられたことに気がついた。

「フウカ。往生際わるいぞ。そんなに変なことをしたのか？フウカがどうしても言えないってならその場にいたレイヤかゼノンに聞かないかな？」

ハヤトが前に進み出たビルパケの後ろで、腕を組んだまま楽しそうな表情を浮かべてそう言う。

どっちにしても知られてしまうのか……。

私は観念して端的にその時のことを伝える羽目になった。

「なんじゃ、それだけか。つまんないの。口付けだけとは……。だが、その組み合わせで精霊ができたってことはもしかすると、研究によっては自然以外の精霊も、神と精霊の子以外でもできるやもしれん。こうしてはおれん。わしはこれで失礼する」

そう言うだけ言うと、子泣き爺もとい、オタク気質な記憶の神はとつと姿を消した。

「えつ。ちよつ」

私は思わず消えてしまった空間に手をのばしてしまった。

こら、まってよ。自分勝手なじいちゃん。ハヤトとこの場に残されるなんて気まずすぎるー！

同じく日本人の考え方を持っているハヤトである。私がオリセント以外の者、それも二人も口付けされるなんて軽蔑されてもおかしい。

「えつと・・・ハヤト？」

私から話を聞いて眼の前の少女は固まったように考え込んでいる。

や、やっぱり軽蔑されちゃった？

私はそう思っただけで、言い訳を口にすることはなかった。

あれはただのスキンシップであるとか、行き過ぎた慰めだとか言

い訳はいくらでもできる。

だが、私はこれ以上彼らへの気持ちを誤魔化しなくなかった。
ゆっくりと息を吐いて、意を決してハヤトに慎重に言葉を選びながら今の心情を話した。

「聞いて。ハヤト。私はやっぱりレイヤとゼノンのことも好きなのだからこういう結果になったんだと思う。ハヤトは軽蔑するかもしれないけど」

「は？軽蔑？なんで？」

ものすごく勇気を出して言った言葉なのに、ハヤトは虚を突かれたような表情でこちらを見ていた。

「だってオリセントだけでなく、レイヤとゼノンのこともって言うているんだよ。日本ではありえない話でしょ？」

「あー。もしかしてそれで教えようとしなかったのかよ。フウカは気にしすぎ。俺は別に気にしないぜ？だってここ、そういうところじゃん。ビュアスにしてもそうだし」

思いもしなかった反応に、私が逆にびっくりしてハヤトを見つめてしまった。呆れたとばかりに小さなため息をこちらに吐いているが、嫌悪感など微塵にもない表情。

「え？」

「それにフウカがあの子のこと好きなのなんか、見てりやあ分かるし。なんで頑なに拒んでいるのかなって不思議に思っていたけど、もしかして俺のことと思ってとか？」

凶星を刺されて、うっと言葉が詰まってしまう。

意識はしてなかったが、確かにハヤトに軽蔑されたくなくて気持ち

ちに歯止めを効かせていたところは確かにある。

「ばっかだなあ。俺にしたら、逆にありがたいんだけど。1人でも多く女神を産んで、この男女比をどうにかしてほしいし。そしたら少しでも寄ってくる奴へるし」

「そうなの？」

思わず聞き返してしまう。それに対して、ハヤトは腕を組んだまま何度も頷いてきた。

「ああ。もう遠慮せずにボンボン女神を作ってくれ。あ、男の神はだめだぞ？これ以上男はいらん。郷に入らば郷に従えっていうのあったじゃん？だから恋人が増えても気にすることないとおもう。オリセントも許してるんだし」

そう言えば、はーくんっていつもこんな性格だった？

人間であつたときからこちらが爽快に思ってしまうほど前向きな弟だった。ここに来た時も女であること以外はすんなり受け入れていたっけ。

私は今まで悩んでいたことがあほらしいとすら感じてしまった。

こんなことならハヤトに素直に気持ち話を話すなり相談すればよかった。

そう思っていると、ハヤトは自分の頭をぐちゃぐちゃにかき混ぜながら少し眉間に皺を寄せる。

「あゝそれより、んなミックス現象なら俺にはぜったい無理じゃあねえか！ちつくしょう。俺も守護の精霊とかほしいのによゝ」

どうやら、さきほど考え込んでいたのは精霊の作り方についてだった。

私は思わず吹き出してしまった。

これは自意識過剰だった自分に対してだ。

だが、ハヤトは勘違いしてむっとしたようにこちらを一睨みし、昔と同じように私を呼ぶ。

「んだよ。アネキ」

「ごめん、ごめん。たしかにハヤトには難しそうね。でも、ビルパケさんが調べてくれるみたいだし諦めることはないんじゃない？」

「ビルじいを当てにしても意味ないっての。あのじいさん、いろんな事に興味がありすぎて一つのことをじっくり研究するタイプでないし。『神は寿命ないからあせる必要ないのじゃ』とか豪語してたんだ」

そうなんだ。たしかに寿命はない。

「あーこうなったら俺が研究しよう。うんうん。それがいい」
「がんばってね」

私が、いつになくやる気になっているハヤトに言うことはそれだけだった。

「フウカこそがんばって、レイヤとゼノンに気持ち伝えるよな。元男としていつまでもお預け食らわされているのは、不憫だっと思ってたんよ」

ハヤトはいたずらっぽくそう言つと軽く手を振って部屋から姿を消した。

お、お預けって・・・。

ハヤトの言葉を聞いて、私は誰もいない自室で頭を抱えこんでしまった。

83・自意識過剰でした（後書き）

84・けじめ（前書き）

軽くですがR15です。たぶん

84・けじめ

ハヤトと会話して、私はある決意を固めていた。

レイヤとゼノンに対しての気持ちをきちんとオリセントに伝えよう。

今までの私の常識とは大きくかけ離れたことだけに本当にいいのかと悩んでしまうが、二人があればほど誠実になってくれているのだ。いつまでもこのまま宙ぶらりんな状態はいけないだろう。

時々、彼のほうから二人を受け入れないのかと聞かれたこともあるし、別に構わないと言ってくれていた。

それが私に対しての優しさからの言葉であることも分かっている。だからこそ、この決意を一番に彼に聞いてもらいたいのだ。

聞いてもう私から離れると言うのなら、それは受け入れるしかないと思う。オリセントよりレイヤやゼノンを選ぶとか言う気持ちはない。もし、オリセントが二人と私がそう言う関係になることを許さないと言うのであれば、この気持ちを硬く封印する覚悟はある。そして彼だけを見ると誓える。そして二人にきっぱりと話をしよう。どれほど辛くてもだ。

それに、レイヤとゼノンへの気持ちを告げて恋人を解消するとオリセントが言うのであれば、それを受け入れようと思う。

私は覚悟をきめてオリセントの居室へと転移することにした。

部屋を移動すると、オリセントはベッドに足を伸ばし上半身を起

こしている状態だった。おそらく、寝ていたところに私の移動を感じて上体を起こしたのだろう。

「フウ力？」

いきなり、何も言わずに現れた私にオリセントは珍しく驚いた顔をしてこちらを見ていた。

いつもはきちんと心声で伝えてから現れるようにしていたからだ。

「いきなりでごめんなさい。伝えたいことがあったもので」

「ん？なんだ？あまりうれしい内容ではなさそうだが……。とりあえず、ここに座ると良い」

そう言って彼の身体の横のベッドに腰掛けるよう手招きしてくれる。だが、これから話す内容が内容なのであえてベッド横の椅子に腰かけさせてもらうことにした。

通常と違う行動を取る私を、オリセントは訝しげに眉をひそめながら覗いてくる。

「なんだ？なにか嫌われることをしてしまったか？」

「ち、ちがうの。少し話が長くなるけど聞いて」

私はまず、キャシーが精霊になった話を聞かせた。レイヤとゼノンにキスされたことも。それが原因で精霊が誕生したことも。

「ごめんなさい。今まで、レイヤやゼノンへの気持ちを誤魔化していました。でも、キャシーが精霊になってそこに気持ちがまっただけでなかったって言えなくなっただけ」

ここまで一気に話をして、私は彼の言葉を待つ。

オリセントは腕を組みながら黙って私の話を聞いていた。

しばらく何とも言えない沈黙が漂う。

そして徐にオリセントが低い声で問う。

「で？フウカは俺への気持ちが無くなっただっていいいたいのか？」

「ち！ちがう！」

私はオリセントの見当違いの問いに考える間もなく否定するが、オリセントは淡々と問い続けた。

「レイヤとゼノンへの気持ちのほうが強いのではないのか？俺とは所詮使命だったわけだし」

「違うの！私はオリセントのことが好き。使命とか関係なく惹かれている。だからオリセントがまだ私の恋人としていてくれる上に、二人への気持ちを許さないって言うなら私は貴方だけの恋人になるわ。もうきちんとけじめを付けようと思うの」

私はずるい。

もう自分では抑えきれない気持ちを、オリセントにも抑えてもらおうとしているのだ。

同時にそうでもないといけないほど、レイヤやゼノンへの気持ち膨らんでしまっているのだと自覚もしてしまう。

「それは俺が俺だけを見ろと言え、そうなるって言うのか？」

オリセントは真紅と青の瞳をこちらに向けてゆつくりとそう聞いてくる。その瞳はいつもとちがって優しさもなく冷静で、誤魔化しは許さないとばかりに凝視している。

「今、レイヤとゼノンに惹かれていないなんて嘘は言えない。正直、二人とも大好き。でも、オリセントがそう言ってくれるならその気持ち硬く封印します」

真剣なオリセントの視線に耐えられずに反らしたい気持ちになるが、そんなことではだめだと心を奮い立たしてじつかりと彼の視線を受けとめた。

しばらく見つめ合っていると、ふと彼の視線にいつもの優しさが戻ってくる。

そしてゆつくりと私の身体に手をのばしてきて、気が付いたら分厚く大きな彼の身体に包み込まれていた。

「ほんとうに生真面目だな、フウカ。俺は何度も彼らを受け入れたらいいと言ったはずだが？」

「で・・・でも、恋人が三人もいるなんて・・・」

「俺よりあいつらの方がいいって捨てるつもりはないんだろ？なら俺は別に構わないぞ。正直、フウカを独り占めにはできないって分かっていたしな」

「そんな。捨てられるのは私の方だよ」

私がそう言うのと頭の上の方からくすりつと小さな笑いが聞こえてくる。そして、小さくため息をつき私の頭をなでてきた。優しい手つきに涙がにじんでくる。

「正直なところ言っていていいか？」

そう言われて私は無言で一回だけ頷いた。オリセントは頭から肩背中へと流れる長い髪を私の身体ごと撫でながら、ゆつくりと話を続ける。

「もし、お前が元々人間でなければ俺は独り占めさせると言っていたかもしれない。もしくは癒しの女神でなければな。あゝ俺が戦なんぞを司ってなくても言うかもしれない。俺ではお前を支えることはできても、希望や安らぎを与えることはできない。永遠に近い時をすごさなければいけないんだ。フウカのように人間としての魂を持つていたら辛い時も多はずだ。特に癒しは戦争にどうしても赴かなければいけないからな。戦神の俺だけを心の支えにしていたらいつかは人間としての魂を封印してほしいと思ってしまうだろう。いくらハヤトがいたとしてもな。かといって、俺が望んでいるのはあんな冷めた目をしたフウカではなく、元々人間だったお前なんだよ。だから、すこし嫉妬心が起きたとしても、だれかと共有することになっても俺は許すことができる。ああ、でもできればレイヤとゼノンだけにしてもらいたいぞ。この二人なら俺は認めることができるからな」

彼がそう言い終えたとき、私は涙があふれて彼の顔がぼやけて見えていた。

言葉の端々に私への優しさがにじみ出ている。何度もお礼を口にしながら彼の肩に顔を鎮めていた。

すこし落ち着いてから改めて彼の顔を見上げてしっかりと視線をあわす。強面な顔なのに、眼が優しく穏やかな光を放っていた。

「ありがとう。オリセントがまだ恋人でいてくれると言ってくれて本当にうれしい」

「ああ、そうだ。俺を捨てないと言ってくれるならその証拠を貰おうか」

オリセントはすこしふざけた口調で、私の唇に触れるだけのキスを何度もしてくる。

彼への愛情が自分の中で高ぶって自分からも彼の唇をうばってい

た。

お互いに求め合いいつしか深い口付けになる。

「で？返事はまだなんだが？レイヤとゼノン以外と恋人にならないと誓えるか？」

口付けの後でオリセントが私の身体をしっかりと抱きよせながら耳元でそう聞いてくる。

「あ・・当り前よ。あの二人ですら本当に恋人となっていていいのかまだ迷っているんだから・・・」

「敵に塩を送るのは不本意だが、本当に蛇の生殺し状態だからもう覚悟を決める。俺の為にもな」

「え？なんでオリセントの為になるの？」

「思ったより長くフウ力を独り占めできてうれしかったが、お前の気持ちがいやとゼノンに向いていることくらい分かっていたからな。だから蛇の生殺しするのはあの二人に対してだけでなく俺にとってもそうなんだよ」

そう言われて、思わず顔を覆いたくなる。必死に隠していたのにハヤトやオリセントには自分の気持ちなどお見通しだったわけだ。

「わかったわ。私、二人にきちんと気持ちを伝えることにするね」
「ああ。だが、その前に。さきほど言ったが俺を捨てないっていう証拠がキスだけってのは物足りないでな。きちんと俺のモノでもあると実感させてくれ」

オリセントはそう言う私の身体を抱きしめたまま、ゆっくりとベッドに倒れこんできた。

私は彼からの愛情をいつも以上に受け止めることになり、私も

きる限りの気持ちを彼に与えるようにした。

84・はじめ（後書き）

読者の一人が『女神の憂鬱』の『奇跡妃』の話については意見や感想に加えて、話を書いてくださりました。

本当にうれしく見事な話だったので、ぜひこの話を皆さんにも見てもらいたい！

そんな気持ちでその方にお願いと、私の活動報告に載せてもいいと言ってくれたのでさせていただきます。

とてもいい話です。私の話をこんなにもすばらしく膨らませて頂けるなんて・・・と感激しちゃいました。

どうぞ一緒にそれを味わってください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4408m/>

女神の憂鬱

2011年6月23日17時27分発行